
この結婚は政治的策略

薄明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この結婚は政治的策略

【Zコード】

Z2401P

【作者名】

薄明

【あらすじ】

休戦を条件に敵国の第一王子との政略結婚が決まった王女は人質覚悟でヴェルセシユ力にやつてきた。

生きていくのに必要なのは絶対的な地位と権力。しかしそれ手に入れるために必要な手段とは……どうして仲のいいフリをするために人前でいちやつかなくてはならないのでしょうか。

そんな二人が陰謀に巻き込まれながらも、ゆっくりと愛情を育んでいく物語。

1・政略結婚（見た目だけで判断しないで）

虚飾に塗り固められた舞台。

今、幕は上がる。

長い戦争は民を、そして国をも疲弊させる。

西大陸と東大陸が最も接する地に、その二国はあった。
西のパルミディアと東のヴェルセシュカ。

それぞれの背後、パルミディアには西の大國ルーヴェルフェルト、
ヴェルセシュカには東の大國コードヴェルクが控え、長い間、二大
国は小国二国間に起こった戦争を見て見ぬふりを続けてきた。

だが一年前、その沈黙は突然破られる。二大國がパルミディアと
ヴェルセシュカの休戦を提案したのだ。すでにどちらの国も疲れ切
っていた。このまま二大國に逆らってまで戦争を続ける意義もなく、
両国は休戦を受け入れた。

両国間で交わされた条件は表面的な取りついでに過ぎない。だ
が両国とも国力が回復するまで数年はかかる。その間、どうしても
お互いを牽制する必要があった。当然、その牽制は過去幾度も繰り
返されてきた方法が取られることとなる。

いわゆる人質の交換。

またの名を政略結婚ともいつ。

* * * * *

一年前、ヴェルセシュカの王子と婚約をした。

一週間前、ヴェルセシュカにやつてきた。

一月後の結婚式の為に。

晩春の夜。ヴェルセシュカの王宮では隣国からやつてきたパルミディアの王女の歓迎の夜会が催されていた。

煌々と灯された明かりは広間を昼間のように明るくし、音楽が溢れ、煌びやかに装った男女が中央で円を描くように踊っている。かつての敵国、招かれたパルミディアの貴賓に、まるでその復興を見せつけるかのようだ。

そして今、リューネリアは歓迎の夜会に出ていた。この夜会の主役の一人である。

本来なら婚約者が側にいるはずなのだが、リューネリアは一人である。周囲にはヴェルセシュカの貴族たちに囲まれて、表面上には顔に笑みを浮かべて談話している。

一年前までは敵だった者たちである。全くしこりが無いとは言えない。でもそれはお互いままである。

たとえ隣に婚約者がいなくてもリューネリアはパルミディアの第

一王女としての誇りと、やるべきことは分かつてはいるつもりだった。

「姫のような美しい方とご結婚される殿下が羨ましいかぎりだ」「ありがとうございます（見た目だけで判断して欲しくないわ）」「バルミニティアは縁の美しい国だそうですね。ですが、このヴェルセシユカもいい所ですよ。早くここで生活にも慣れて下さいね」「はい。見るもの聞くものすべて珍しく興味は尽きませんわ（でも、慣れる前に命を狙うのはどちら様かしら？）」

というような形ばかりの褒め言葉の羅列に辟易する。裏を返せば所詮、人質。いつでも命を取ることが出来るのだという意味が見えだ。しかし、顔だけは笑みを浮かべ続けなければならない。折角の休戦を台なしにしないために。そして、この休戦を取り持つた二大国の顔に泥を塗らないためにも。

いい加減、頬の筋肉が強張つて来た頃、やつと婚約者がバルコニーにいるというのを聞きかじった。

リューネリアは周囲に出来ていた人垣に謝罪をし、会場から抜け出した。

なぜ婚約者が側にいないのか。

リューネリアはため息をつく。この婚姻にケチをつけるつもりはない。これは国の為であつて、そしてそれは民のため、引いては自分のためにもある。

婚約が決まつた頃、よく耳にした噂があつた。

ヴェルセシユカの第一王子は無類の女好きである、と。

リューネリアの感想は、それはそれで都合がいいかも、程度だつた。

政略結婚である。

そこに愛情はない。

国のためになればこそ、相手にたくさん恋人がいようがいまいが関係はない。むしろ自分に興味をもたれない方が都合がよい。しかも、婚約者の身分は第二王子だ。その権力は中枢に近い。リューネリアの目的を果たすにはちょうど良かつた。

2・博愛主義（協力はできるでしょうか？）

バルコニーに行くと、目的の人物はすぐに見つかった。夜でも目立つ金髪が室内から漏れ出了た明かりのおかげで余計にでも目を引く。思つた通り、隣には必要以上に身体を密着させた女性がいた。

「ウイルフレッド様、こちらでしたか」

この夜会にとつて主役一人の間に立つ本来のお邪魔虫は彼女の方なのだが、どう考へても現状はリュー・ネリアの方がお邪魔虫にしか見えない。

婚約者に対してのこの無礼な扱いに、むしろ込み上げてくる笑いをどうにか我慢すると、リュー・ネリアは一人に近づき、作法に則つて優雅に一礼する。

白地に金糸で刺繡がされているドレスは室内の明かりを受け、すぐくにウイルフレッドは誰だか気づいたようだった。

「これはリュー・ネリア姫」

その言葉に、彼の腕の中にいた女性は慌てたように身を離し、うつむきながらすり抜けるように室内に戻つていいく。王子はそれを別段気にした様子も見せず、視線をリュー・ネリアに向けた。

「お邪魔をして申し訳ありませんでしたわ」

社交辞令を口上に乗せても、この王子には上滑りするだけだと分かつっていた。逃げていった女性はすでに王子の意識にも残つていないだろう。お互いに遊びだと割り切つてゐるのならリュー・ネリアが口を出すことではないし、気にすることでもなかつた。

王子は広間に戻つていつた女性へと視線を向けることなく、リューネリアから視線を外さない。

意外といい根性をしているのかもしれない。一応、この婚約は休戦の条件の上に成り立つてゐるのだ。もしも王子の悪癖のせいで婚

約破棄などという事態にならうものなら、どうするつもりなのだろう。それとも、破棄できないとでも思っている?

リューネリアは片手を取られると、挨拶代わりにその指先に口づけられる。

「かまいませんよ。代わりに美しい小鳥が来てくれたからね」

上辺だけの態度と言葉に、それならばとリューネリアも上辺だけの微笑で応える。

「生憎、^{さうすく}轉る^{まわる}のは得意ではありませんけど」

思わず本音が出てしまつ。

「小鳥を愛るのはその轉りを楽しむだけではないよ。見た目も大事だと思つけどね」

「では、褒め言葉として受け取つておきますわ」

差し出された腕を取ると、当然のようにエスコートされる。歩調もリューネリアに合わせてくれて、どこまでも手慣れている。

二人の為の夜会なのだ。いつまでも一緒にのとこりを見せないのはおかしいだろ?」

広間に戻ると、やつと揃つた主役二人に自然と視線が集中する。見られるのは慣れている。

その視線に含まれる意味も。祝福などされていないことも。

「踊りますか?」

「ええ」

どうせ注目されるなら、好きだけ見ればいい。

リューネリアとウイルフレッドは広間に流れる音楽に乗つて、上手くダンスの波に入る。

好奇心の視線にさらされながら、じばらく無言で踊り続ける。だが、人々も次第に飽きてきたのか、一曲目を踊り始めるころには、視線はそれほど気にならなくなっていた。

そこでリューネリアはやつと目の前の王子を見上げる。

「嫌そう、つて訳ではなさそうですね」

「何が、とは王子は尋ねなかつた。

それは結婚のことを指すのか、それともその相手がリューネリアであることを指すのか、はたまたこのダンスのことを指しているのか、実は尋ねた方も理由があざでざれに当てはまるのか分からなかつたのだが。

ウイルフレッドは不思議そつに首を傾げてから、微笑する。

「それは、あなたに対しても言えることだらう」

「ええ。わたくしはそれが仕事だと思つています」

「私はそうではないとでも?」

「いいえ、と答えすぐに、でも、と続けた。

田の前にいるのは完璧な『王子』だ。嫌ならばとつぐに逃げ出しか、リューネリアに対してもつと酷い仕打ちをしているだろ。

「……正直に話しても?」

「どうぞ」

促され、リューネリアは慎重に言葉を選ぶ。

「あなたは女性に対して、かなりの博愛主義だとお聞きしました。そのような方が結婚に縛られるのは不本意なのでは、と思つただけです」

「博愛主義とは……。これはまた……ものは言つようですね。そんないふ言葉を選んでくれたことにお礼を申し上げるべきかな」感心したよつに言われ、やはりこの王子は油断ならないと氣を引き締める。話を逸らされではならないと、確認を込めて聞いて返す。

「違いましたか?」

じつとその青い瞳を覗きこんだが、反らされることはなかつた。

「まあ、悪くはない見解だね。だけど、私もあなたと同じだと思つてもうつて構わないよ」

「つまり?」

「私の仕事だと思っている」

どうやらこの王子は、リューネリアが義務でこの国に嫁いでくる

のだと思つてゐるらしい。確かに、義務だとは思つてゐる。王族の仕事だとも思つてゐる。でも。

「ですが、あなたは……言葉は悪いんですけど……諦めているようになります」

先ほどのバルコニーでも感じたことだが、この王子からはどこか厭世的なものを感じてしまう。決してリューネリアに酷いことをしている訳ではない。自分の務めも果たしている。必要最低限、という言葉が付くが。リューネリアがバルコニーに呼びに行かなくても、多分、戻つて来ていただろう。そんな気はする。ただ、必要以上に王子の務めを果たそうとしてない。その原因が、この婚姻に因るもののかリューネリアは気になつていていたのだ。

「これは失礼を。決してあなたが気に食わないとか、結婚が嫌だと思つてゐるわけではありません」

はつきり告げられ、やはり頭の回転は悪くないのではないかと思う。「では、何に対して諦めているのかしら？ わたくしは別にあなたの主義に口を出すつもりはないのですけど」

「こちらもはつきりと口にすると、王子は軽く目を見開いた。そんなに驚くようなことを口にしたつもりはなかつたのだが。

「姫は心が広いのか、それとも冷酷なのか……」

「どちらかというと後者かもしだせませんね」

王子に對して固執するつもりはない。ただ、リューネリアがヴュルセシユカで動く為には敵にならないでいてくれればいい。かすかに愛想を含んだ笑みを向けながら答えると、王子は納得したようだつた。

「なるほど。私たちの間に愛情は必要ないと考へてゐるのか

「必要性を感じないだけです。そのようなものが無くとも、協力は出来るでしよう？」

政略結婚が必ずしも上手くいかないと思つてゐるわけではない。まして、この婚姻が人質としての役割しかなさないのだとしても、殺されるとは限らない。ならば、生きる可能性を探つて悪いことでは

はないだろう。その為には、この王子の協力が必要になってくる。最悪、協力してくれなくても、敵にならない保証が欲しいところだ。だが、王子は首を傾げて考える素振りを見せる。そして、否定した。

「それは、なかなか難しいと思つただが

「なぜ？」

すでに敵だと考えるべきなのだろうか。踊る為に繋いだ手に、じわりと汗が滲む。手袋をしていて良かつたと頭の片隅で思った。だが、返ってきたのは予想外の返答だった。

「通常、同性ならば仲の良い者が数名集まれば友情というものが生まれる。だが、異性となるとただ仲が良いからと集まつたところで友情にはならない。必ず独占欲というものがどこかに生まれる」「それはあなたの主義上のことではなくて？」

「経験上、異性間の友情を阻んだことはないね」

つまり。

「わたくしがあなたの主義を認める場合、……わたくしに独占欲がわくと問題なのね？」

周囲の視線にさらされている為、眉間に皺を寄せるわけにはいかない。多少、引きつった笑みはこの際仕方がない。

「取りあいは嬉しいけどね」

本心なのかどうなのか、王子は整つたその顔に魅惑的な笑みを浮かべる。

「あまりいい趣味とは言えないわね」

思わず、声をひそめて呟いた。

呟きはどちら聞こえなかつたようで、王子は興味深そうに聞いてきた。

「で？やはり愛情は必要ないと？」

「ええ。それより、話を戻しても？」

気づけば、話が逸れていく。迂闊だった。

「諦めているとか言つていた話？」

「そう、この婚姻を嫌がっているわけではないのだとすると、何に對して諦めているのかしら」

傍から見れば、ウイルフレッドという王子は、女性に対して博愛主義で王子としての最低限の仕事しかしていないように見える。王族として国の責任を負う立場の一人としては心もとない。

「……諦めている、という言葉が適切かどうかは別として、それでもあえて当てはめるとすれば、私はあなたに對して何も出来ない、ということかな」

少しだけ沈んだ聲音に、そこに彼なりの本意と謝罪が混じつてゐるようになに聞こえた。

だが、リュー・ネリアは首をかしげた。意味の取り方が難しい。命を狙っていることを知つていながら止める力がないのか、夫としての務めをするつもりがないのか、それともわざわざ敵国より嫁いできた王女を本当に人質として監禁するとでも？

取りあえず言葉の裏を取らずに正面から疑問を投げかけてみる。「……たとえあなたと結婚しても身の保証はないと言いたいのかしら？ それなら、守つてもらおうなど最初から思つていないことだわ」ヴェルセシュカに輿入れすることが決まった時から一年、覚悟は決めていた。

「それは大した覚悟だ。だが、そう思つのならあなた自身が問題なのではなく、こちらの事情だと言つた方がいい」

「事情とは、何？」

「これは、知つてゐるかもしれないが、今この場に來ていらない兄上第一王子は、身體が弱く床に伏せていることが多い、ということに關係する」

多くを言ひはしなかつたが、リュー・ネリアはウイルフレッドの言わんとしていることを察した。

確かに、知つてゐる。第一王子のカール王太子はあまり身體が丈夫ではない。それがどれほどのものなのか、實際のところはわからなかつたが、今現在も王太子の身分でいるのは、それほど酷い状

態ではないのだろうと対外的には言われている。

だが、ウイルフレッドの言わんとしていることから察するに、もしかしたら想像以上に悪いのかもしれない。

「では……」

その可能性にリューネリアは口を閉ざす。代わりに王子が口を開いた。

「その場合、人質であるあなたの存在が、この国にとって邪魔になるのは目に見えている」

3・1 触即発（自分の身は自分で）

現在、ヴェルセシュカの第一王子が第一王位継承者だ。ちなみに、
ウィルフレッドが第一継承者ということになつていて。それは今、
リュー・ネリアの左手に添えられた王子の右手の指に嵌められた指輪
からも窺うことが出来る。ヴェルセシュカの内情についてはこの一
年、婚約が成立してから勉強してきたことであるし、その程度のこ
となら誰もが知つていてことだ。

どれほど第一王子の身体が弱つていてるのか分からぬが、
ウィルフレッドの様子からすると王位に就くのはかなり難しいようだ。
その場合、目の前の王子に玉座が転がり込んでくるといつことになる
のか。

それにはそれで一抹の不安があるが、もしもヴェルセシュカがパ
ルミディアと戦争を再び始めるつもりなら、人質として来た姫が王
妃になるのは邪魔でしかないだろう。

そしてウィルフレッドがリュー・ネリアに対して何も出来ないとい
う理由。それは必ずしも彼に権力がないというわけではなさそうな
(それほど馬鹿そには見えない)のだが、それについてはもう少
し見極める必要があるかもしね。

「なるほど、ね」

「だから私は守るとは言えない」

自分の國の為なら、切り捨てなければならないかもしね」と言
つてゐるのだ。

「……結構よ。自分の身は自分でどうにかするわ」

それなら余計にでも早くに動かなければならぬ。少なく
とも、ウィルフレッドはリュー・ネリアのことを邪険にしてないし、
むしろ警告も口にしてる。信用するかは別としても、やはり利用

できるところは徹底的に利用しなければ……。

「……？」

視線を感じて見上げると、王子の青い瞳と田があつた。こちらが何を考えているのか窺つているのが分かる。

リューネリアも自分がどんなに強かな思考をしているか分かつているつもりだ。だからあえて微笑みかける。

「意外でしたわ。思つていたよりもあなたは誠実なのね」

博愛主義者に誠実はないだろうが、そちらの主義に対する言葉ではない。王子も肩を竦めた。

「一応、可能性の話しであつて、目下あなたは私の婚約者だ」

その言葉に、リューネリアは軽く眉をひそめて見せる。

「その割には放つておかれた気がしますけど？」

「私の主義を黙認するのでは？」

もちろん、と肯定する。

その点に関しては一言はない。だが、それとこれとは別問題だ。口を出すつもりはないわ。でも婚約者だと言つのなら、それなりの扱いをして欲しいわね」

パルミティアの王女を婚約者である王子自らが軽んじるのは、ヴエルセシュカ側がパルミティアを軽視しているとも言える。それが再び、戦争を始める一因にもなりかねないのだ。

「では、何をお望みで？」

表面上は軽口を叩きながら、彼の瞳の奥には笑みなど一切含まれていなかつた。ウィルフレッドもこちらのことを見極めようとしているのかもしねりない。だから、敢えて先に延ばす。焦つて結論を出すのは得策ではない。

「……そうね。取りあえず明日の午後、あなたの執務室を訪ねてもいいかしら？」

本来なら、お茶会でもと言いたいところだが、お茶会を開くとなると毒殺の危険性が高まる。今現在、微妙な立場のリューネリアは口にするものもすべて細心の注意を払つてゐるのだ。

それにこれ以上の腹の探り合いは、この場では危険だった。だが、もう少しこの王子とは話してみたいと思つた。どこまで利用できるか。他に利用できる伝手つてはあるか、探らなければならぬ。

「執務室には滅多に足を運ばないんだが、……」

やはり王族としての仕事は必要最低限しかしていないかもしない。

「仕事は嫌い？」

しかし、どこまでが本気なのか分からぬ。仕事をしない王族など本来いなはずなのだから。

「博愛主義者の私としては、ね」

言い訳がましくウイルフレッドは撫然とした返答を寄こした。だが、リューネリアはその返答に満足し、安心して心から笑つた。

「ならば、執務室で逢引現場に行きあう可能性はないのね。安心して訪ねさせてもらうわ」

実はそのことだけが心配だつた。逢引現場にうつかり出くわした時の対応など、経験不足のリューネリアには対処のしようがない。無様にも逃げ出すかもしれない。先ほどのバルコニーでの現場も、あやうく硬直しけたぐらいだったのだから。

「分かりました。お待ちしておりますよ」

今度はどんな女性も騙されてしまつような笑みをウイルフレッドは浮かべ、ちょうどビダンスの曲も終わつたところだったので、ダンスの為に取られていた片手をそのまま彼の口元に引き寄せられる。手袋てぶくろ」しだが、手の甲に約束の口づけをされ、周囲のざわめきが一瞬大きくなる。

慣れない。

非常に慣れないのだが、ここは敵地だからパルミーディアの王女として堂々と振る舞わなければならぬ場所だ。

動搖を悟られないように、何事もなかつたかのよつた顔をしたまま、ダンスの輪から連れ出され、広間でもあまり人の密集している場所に休憩をする為に案内される。人目を気にしなければならぬ

いのは存外疲れるのだ。

ふと、隣に立つ王子を見上げる。

確かに、ヴェルセシュカ特有の金の髪は昔絵本で見て憧れた王子様そのものだ。青い瞳もパルミテイアに多くある湖を思わせる深い青。顔立ちも端正で美しい。極上の部類に入るのではないだろうか。これで本人が自覚して博愛主義を發揮しているなら、籠絡される女性は少なくないだろう。

ぼんやり眺めていると、ウィルフレッドの手が伸びてきてハッとする。

「疲れましたか？」

ほつれかけていた髪を横に撫でつけられ、慌てて自分で簡単に手直しする。

「姫の髪は見事に黒いですね。瞳も夜明けの空のよつた色とまことに珍しい」

「……ええ。亡くなつた母が同じような色をしていました。……でも、夜明けの空だなんて言われたのは初めてです」

確かに薄い紫にオレンジが混ざつたような色をしている。絵で見たことはある。夜明けの空の地平線は確かにオレンジに染まり、夜の深い青との境目はそのような色になる。

「いつもはどのように言われているのですか？」

「パルミディアは緑の多い国ですから……。通常、花の色に例えられることが多いのですね」

董とか、と一般的に知られているよつた花の名を上げる。

貴族社会では男性が女性を褒めるのは社交辞令としては当然である。まして褒められるのに、花にたとえられて嫌な女性はいないだろ。」

「……姫は砂漠を見たことは？」

王子は何を思ったのか、唐突に話を変えた。

残念ながら首を横に振る。

「ありません。そう言えば、ヴォルセシュカは隣国との境に砂漠がありましたね」

地図を頭の中で思い浮かべながら尋ねると、王子は遠い目をして頷いた。

「ええ。砂漠で見る夜明けは格別です」

「その……、夜明けの空とわたくしの瞳が同じ色?」

「見て 思い出しましたから」

懐かしむような笑みを向けられ、何か今までの王子と身にまとつ雰囲気が違うような気がした。

王子の遠くを見ていた瞳が、わずかに彷徨つた後、リューネリアの瞳にたどり着く。というより見入つている。その眼差しはどこまでも優しく、何かを思い出しているようだった。

「……わたくしも、あなたの瞳を見てパルミテイアの湖を思い出しました」

気づくと、最初に感じた事を口走つていた。

「特別な思い出でも?」

それはあなたでしょ?と思いつながらも、リューネリアは逡巡したのち口にする。

「まだ、戦争が激しくなる前までは、夏に避暑を兼ねて家族で湖の畔にある離宮へ行つっていました。幼いころの思い出です」

あれから十年以上が経つ。その頃、まだ弟のライオネルは生まれたばかりで母も健在だった。まだ、戦争もくすぶりはじめたばかりで、リューネリアは戦争がどのようなものかさえも理解していなかった。

「特別 といふほどではありませんね

誰にでもある思い出だろ?」

「しかし、姫にとっては最も平和であった頃なのでは?」
今まで考えもしなかったことを言われ、目を瞬いた。

確かに、戦争が激化してからというもの、家族で週刊号とは無

くなつた。その間に、母がなくなり、戦争を休戦する条件の一つとしてこの婚姻が決まつてしまつた。そして今は、ヴェルセシュカにて、ある意味、人質としての生活が始まつてゐる。

その事に気づかされ、リューネリアは苦笑した。

「確かに……、そうですわね」

認めてしまうと、王子はほんのわずかだが眉間に皺を寄せた。

戦争相手はヴェルセシュカである。その国の王子を相手に話す内容ではなかつたかと気づき、不快にさせてしまつたことを詫びようと口を開きかけた。が、その王子の口から零れた言葉は思いもがけず、劳わりの言葉だった。

「婚儀までというわざかな間なら、愚かな考えをもつた者でも無謀なことはしないだろう。出来るだけ不便のないよう取り計らうつもりだから、しばらくはゆっくり過ごしてほしい」

この休戦には、両国の背後に控える二大国がいる。今日の夜会にも貴賓として出席しているはずだ。完全な休戦は二人の結婚にかかっているのだ。婚儀が執り行われるまでにどちらかの身に何かあれば、二大国を敵に回すことになるのだ。そうなれば、パルミディアもヴェルセシュカも、国の名が地図上から消えてしまふことになりかねない。

リューネリアにとつて、婚儀が行われるまでの期間が、確実とは言えないが安心できる期間と言える。

「ありがとうございます。ウィルフレッド様のお心づかい、感謝いたします」

ドレスをつまみ、パルミディアでの形式で最上礼の感謝を伝える。

「では、行きますか？」

「ええ」

これから貴族たちへの挨拶だ。やつと一人揃つての登場に、一人はあつという間に人垣へと埋もれてしまつた。

4・因果関係（その判断基準は……）（前書き）

ワイルフレッシュ視点です。

4・因果関係（その判断基準は……）

最初、休戦の条件にパルミティアの王女との婚姻の話が出た時、第一王子であるカールがその相手だと誰もが思った。しかし、ヴェルセシュカの国王が指名したのは、第一王子であるウィルフレッドだった。

「何故兄上ではないのですか？」

今現在、第一王位継承権は第一王子のカールにある。しかし第一王子は昔から身体があまり丈夫ではない。これは周知の事実だ。このままでは王位に就くのは難しいと、影で口にするものがいるぐらいいだ。だから再び戦争を開始するのであれば、王位の継げない可能性の高い第一王子と婚約させた方が都合がいいと誰もが思っていたはずである。

執務室に呼び出され、噂の事実をヴェルセシュカ王の口から聞かされたウィルフレッドは、平静を装っていたがわずかだが声が尖つてしまつた。

王は、ちらりと視線だけをウィルフレッドに向けると、にんまりと笑つた。

「結婚は嫌だと顔に書いてあるぞ」

「……そんなことは言つていないのでしょう」

図星を指され、頬が上気するのが分かる。

だが王は、書類にサインをしながらニヤニヤと笑つている。

「アレには婚約者がいるだらう。それに、おまえはいつまでたつてもフラフラと落ち着きがない。まあ、はつきり言えばおまえを落着かす為に一度良かつたからだな」

「父上」

口の中から唸り声が出そうになる。

だが、王は今しがたサインした書類を脇に放ると、筆を脇に置いて椅子に深く寄りかかる。視線はウイルフレッドに向いているが、視界には入っていないようだ。

口から衝いて出そうになつた悪言を、王の顔になつた父親を前にかろうじて飲み込む。

「実のところ、今回の戦争ははつきり言って、お互終結の時期を見誤つたとしかいいようがない。あのまま一大国が動かなかつたら、いつまでもズルズルと続いて、さらに被害は広がつていただろうし、国庫は空になつていただろうな」

それに休戦とはいえ、このまま終結したいことも暗に仄めかしている。

そもそも戦争のきっかけは、パルミテイアとヴェルセシュカの間を通る運河の通航権をめぐつて始まつたものだつた。

それというのもパルミテイアとヴェルセシュカ他、数多の国家を有するエリシュカ大陸の地形にも一因がある。東西を分けるセレン¹¹アデリーナ運河と、南北に分けるヤドヴィガ山脈。大陸の南、運河を挟んで西にパルミテイア、東にヴェルセシュカ。北はヤドヴィガ山脈である。大陸北方の国との貿易は、どうしても運河を通らなければ成り立たないのである。

ヴェルセシュカは小国ながら商業国家として成り立つてゐる。大陸を東西に分けるこの運河の通航権は、百年以上前からパルミテイアが保有している。つまり、通航料を払わなければ北への入り口は開かないのだ。パルミテイアにしてもこの通航権は国の重量な財源だ。法外な通航料を請求しているわけではなかつたが、商人にしてみれば、少しでも諸費用は浮く方がいい。そういう不満から、運河沿いの街で小競り合いが始まり、次第にそれが国家間のものへと拡大していったのだ。

深々と溜息をついた王に、ウイルフレッドはハツとする。

「だが、愚かな輩もいるからな。カールは頭はいいが、結婚したところでパルミティアの王女を守つてやる」とは出来ないだろ？

「それは俺だつて」

言いかけた言葉を、王は手を上げて止めた。

「ああ、別におまえには期待していないぞ。王女は才女だという噂だからな。自分の身ぐらじ守るすべは持つているだろ？ おまえは王女の手伝いをすればいい」

「は？」

ウイルフレッドは聞き間違いかと、首を傾げた。

今、おかしな言葉を聞かなかつただろ？

どこに、敵国の王女を懐に入れ、自國の王子がその王女に手を貸さねばならないのだろう。そんな危ない真似をしろといふのだろうか。

「つまり、カールは身体が弱い。もしも何かあった時、王女の味方は誰もいなくなるところだ。そこを馬鹿どもに狙われてみる。再び戦争が始まる」

「どうやら早合点してしまつたらしい。

「つまり、俺の方が健康だから？」

「はつきり言えばそうなるな」

あつれつと認める王に、やはりどこか腑に落ちないものを感じる。

「なんなんだ、その判断基準は……」

「そう言つな。王女は才女であるが、大層麗しいとも評判だぞ。良かつたな」

何故良いのだ、と心の中で呟く。

「まあ、あと一年は自由だ。せいぜい遊ぶなり、清算するなりやることはやつておくんだな」

それが父親の言葉なのだと、愕然としながらウイルフレッドはパ

ルミディアの王女との婚姻を受け入れたのだった。

一年も経てばそれなりに覚悟も出来る。

ウイルフレッドの婚姻の噂は、あつという間に広がり、今まで関係のあつた女性も離れていくものもいれば、遊びと割り切つてただ単に、王子という肩書に魅了されているだけかもしれないが変わらない女性もいた。それで充分だと思っていた。

実際、パルミディアの王女を最初に見た時、ある程度仕入れていた噂の通りの女性だとしか思わなかつた。

ヴェルセシュカでは珍しい黒髪。瞳も珍しい紫。だが決して冷たい印象を与えないのはその紫の中にオレンジの炎を宿しているからだ。肌の色は白く、それでいて健康的。知的なまなざし。顔は確かに美しい。だが、彼女よりも美しい女性は沢山知つている。

形式的な挨拶をし、一週間後に開かれる夜会まで会おうともしなかつたし、向こうも会いに来るこつもなかつた。

だから夜会の日はいつもどおり、適当に遊んでいるつもりだつた。パルミディアの王女も所詮は政略結婚だと思つてゐるのだと思つたからだ。

だが、バルコニーに呼びに現れた時は正直驚いた。

最初は誰かに何かを言われて逃げてきたのかと思った。だがそうではなく、すぐにウイルフレッドを夜会に呼び戻すためだと気づいた。

ダンスに誘つたものの引き結んだ唇は固く、笑顔を無理に浮かべているその表情は冴えない。決してダンスも下手ではなく、彼女ほどの腕前ならもつと楽しんで踊つてもいいほどなのだ。それほどこの結婚が嫌だつたのだろうかとも思った。王族に生まれたのだから政略結婚は当たり前だ。この結婚が決まってから一年もあつたのだ。

「うの音にウイルフレッドだって受け入れている。

一曲田の田のダンスで止めようかと迷つたが、思いのほか彼女と踊るのが苦痛ではないことに気づき、迷つてゐる間に次の曲が始まる。すると、自分を見上げる瞳と田があつた。

「嫌そう、つて訳ではなさそうですね」

観察をしているつもりが、いつの間にか観察されていたらしい。彼女の言葉が一体何を指しているのか分からず、少しの間考える。そして同じ立場にいる彼女ならばと笑みを向ける。

「それはあなたに対しても言えることだろ？」

「ええ。それがわたくしの仕事だと想つててます」

「なるほど、と思つ。

彼女もこの結婚を諦めたのか。

多少、意地悪な気分になつて問う。

「私はそうではないとでも？」

「いいえ。でも」

視線を彷徨わせて、彼女はためらいがちに口を開やす。だが、すぐ決心したように口を開く。

「……正直に話しても？」

「どうぞ」

軽い気持ちで促すと、彼女は慎重に口を開いた。

「あなたは女性に對して、かなりの博愛主義だとお聞きしました。そのような方が結婚に縛られるのは不本意なのでは、と思つただけです」

噂をどう取つたとしても、それは一般論だった。

だが、なかなか上手い言葉選んでくれたよつて、少なくともウイルフレッドを傷つける意図はそこには感じられなかつた。そこは素直に感心した。

「博愛主義とは、これはまた……ものは言つよつですね。いい言葉を選んでくれたことにお礼を言つべきかな

「違いましたか？」

じつと正面から覗きこまれ、照れも見せず、反らすこともない。

「まあ、悪くはない見解だね。だけど、私もあなたと同じだと思つてもうつて構わないよ」

「つまり？」

「それが私の仕事だと思っている」

諦めはついているのです、と心の中で呟く。正直、彼女には悪いと思つてゐる。

5・背後関係（何をお望みですか？）（前書き）

今回もワタルフレッシュ視点です。

5・背後関係（何をお望みで？）

「ですが、あなたは……言葉が悪いのですけど……諦めているようにしか見えません」

思わず、ステップを踏んでいる足が止まるかと思つた。

だが、彼女に動搖を氣づかれるとはなかつたようだ。本音のところを彼女は知るはずはないのだと自らに言い聞かせる。

「これは失礼を。決してあなたが気に食わないと、結婚が嫌だと思つてはいるわけではありません」

紫の瞳が、ウイルフレッドの言葉を一言でも聞きもらすまいと見つめてくる。

この状況でなければ、完全に口説く体勢に入つていいのだが。「では、何に対して諦めているのかしら？ わたくしは別にあなたの主義に口を出すつもりはないのですけど」

彼女から婚約者としては有り得ない台詞を聞き、ウイルフレッドは目を見開いた。

つまり、浮気はいいのか？ パルミニティアは一夫多妻制だつただろうかと記憶を手繰り寄せる。それならば、そういう環境で育つてゐるなら耐性はあるうが、引き出してきた知識は一夫一妻制のはずだった。

思わずまじまじと王女の顔を見つめてしまった。

「姫は心が広いのか、それとも冷酷なのか……」

「どちらかというと後者かもしれませんね」

うつすらと浮かんだ微笑に、彼女が今までどのよつた環境の中で生活していたのかを垣間見たような気がした。

決して彼女は姫だからと、蝶よ花よと育てられたわけではないのだ。彼女のそのオレンジの明かりを宿す紫の瞳が、何を見てきたのか、ウイルフレッドは興味を覚えた。

だが、まだ彼女が何を考えているのかは分からぬ。才女と言わ
れているし、この夜会での堂々とした態度を見ても、並みの姫では
ないのは見てとれる。警戒をして悪いことはない。

「なるほど。私たちの間に愛情は必要ないと考えているのか
少し話しを逸らしてみる。

「必要に感じないだけです。そのようなもの無くとも協力は出来る
でしよう?」

協力という言葉に首を傾げる。

悪くはない、が彼女のいう協力の意味が分からぬ。

取りあえず、一般論を持ち出してみる。

「それは、なかなか難しいと思うのだが
「なぜ?」

彼女の瞳が少し揺れる。なにか考えているのだろうか。

「通常、同性ならば仲の良いものが数名集まれば友情というものが
生まれる。だが、異性となるとただ仲が良いからと集まつたところ
で友情にはならない。必ず独占欲というものがどこかに生まれる」

「それはあなたの主義のことではなくて?」

「経験上、異性間の友情を目にしたことはないね」

彼女はその言葉に考え込んでしまった。どうやら彼女の中にその
答えはなかつたらしい。

どういう答えが返つてくるのかしばらく待つ。

「わたくしがあなたの主義を認める場合、……わたくしに独占欲が
わくと問題なのね?」

予想外の言葉に、思わず笑みが浮かぶ。彼女が、自身で導き出しだ
た答えはどうやら不本意だつたらしい。

ぎこちない笑みを浮かべている。

「取りあいは嬉しいけどね」

つい本音が出てしまった。

「あまりいい趣味とは言えないわね」

空耳とも取れる小さな声が反論する。

聞こえなかつたことにして、結論を尋ねた。

「で？ やはり愛情は必要ないと？」

「ええ。それより、話しあわしても？」

断言され、しかも冷静に話しあわされた。

何気なく違う話に持つてこひつとしていたのに、どうやらいつまくへ騙されてくれる気はないらしい。

「諦めているとかいつていた話？」

「そう、この婚姻を嫌がつてこいるわけではないのだとすると、何に對して諦めているのかしら？」

「……諦めている、という言葉が適切かどうかは別として、それでも敢えて当てはめるとすれば、私はあなたに對して何も出来ない、ということかな」

正直、力不足だ。

一年前、彼女との婚約が決まつて、父である王より休戦をこのまま終戦に持つていく意向を聞いた。だがヴェルセシュカでは意外と議会の力が強い。決して王族を蔑ないがしるにしてこいるわけではないが、もしも議会によつて王が不適格と認められてしまえば退位しなければならない。それは色々な制限があり、滅多にあることではないが、長い歴史の中で無かつたわけではない。そして、終結の時期を見誤つたと言つたのも、議会が終戦を認めなかつたからだ。

だから議会は、二大国の手前表立つて言いはしないが、休戦の条件であるパルミディアの王女との婚姻は本心では反対であり、彼女の存在は邪魔でしかないのだ。

その議会から彼女を守ることが出来る自信は、今のウイルフレッドにはなかつた。

リューネリアは首を傾げた。

「……たとえあなたと結婚しても身の保証はないと言いたいのかしら？ 守つてもらおうなど最初から思つていないことだわ」

可愛らしく首を傾げてこいる様は、本当にまだ十七歳に見える。し

かしその可愛らしき唇から紡がれる言葉はかなり現実的だ。

出来ることならもつと魅力的な言葉を囁いて欲しいものだと心の

片隅で思つ。

「それは大した覚悟だ。だが、そう思つのならあなた自身が問題なのではなく、こちらの事情だと言つた方がいい」

「事情とは、何？」

「これは、知つてゐるかもしないが、今この場には来ていない兄上 第一王子は、身体が弱く床に伏せていることが多い、ということに関係する」

背後関係以外に、もう一つ問題があつた。多くを言えなかつたが彼女は察したようだつた。

「では……」

その可能性に、彼女は口を閉ざす。代わりにウィルフレッドが口を開いた。

「その場合、人質であるあなたの存在が、この国にとつて邪魔にされるのは目に見えている」

「一つの意味で、彼女はこの国にとつて存在自体が邪魔なのだ。だが、そこまで言つてしまつては無駄に彼女を恐れさせることになりかねない。それはウィルフレッドとしては不本意だつた。

「なるほど、ね」

「だから私は守るとは言えない」

口にしながら不甲斐ないと思つた。ヴェルセシュカの王や一大国はこの婚姻に望みをかけているというのに。

だから出来るだけ、彼女には自分に出来る限りのことをしようと思つていた。

「……結構よ。自分の身は自分でどうにかするわ

「……」

何も答えられなかつた。

絶句していると、彼女は気丈にも笑いかけてきた。

「意外でしたわ。思つていたよりもあなたは誠実なのね」

誠実ではない。でも薄情者にはなりたくないなかつただけだ。だが口から出でたのは、单なる気休めでしかなかつたが。

「一応、可能性の話であつて、且下あなたは私の婚約者だ」
「いつもの調子で軽く言つと、彼女は軽く眉をひそめた。

「その割には放つておかれた気がしますけど？」

「おや、と思つ。どうやら淡白な関係を望んでいても彼女なりに不満はあるらしい。

ついからかいたくなつて口を開く。

「私の主義を黙認するのでは？」

「もちろん口を出すつもりはないわ。でも婚約者だと言つのなら、それなりの扱いをして欲しいわね」

「ウイルフレッドは氣づくと、彼女との会話を楽しんでいた。

彼女の本音を聞くのは今しかないと思つた。

「では何をお望みで？」

軽口を叩きながらも、彼女の瞳を覗きこむ。

しかし返事はなかなかつれないものだつた。

「……そうね。取りあえず明日の午後、あなたの執務室を尋ねてもいいかしら？」

どうやら彼女はまだ自分と話すことを望んでいるらしい。焦らされた答えには、それ相応の返答をしなければならないだろう。

「執務室には滅多に足を運ばないんだが？」

嘘である。補佐官にいつも押し込まれている。

「仕事は嫌い？」

好きではない。それならば女性と遊んでいた方がもうろん楽しいのだが、遊んでばかりいると補佐官に怒られ、しばらく執務室での生活を強いられる。

「博愛主義者の私としては、ね」

補佐官の今までの仕打ちを思い出し、思わず憮然とした返答になつてしまつた。

だが、彼女は花が開くような笑みを見せた。

「ならば、執務室で逢引現場にいきあつ可能性はないのね。安心して訪ねさせてもらつわ」

「分かりました。お待ちしておりますよ」

今度はどんな女性をも魅了してきた笑みを浮かべると、ちょうどダンスの曲も終わつたところで、踊りの為に取つていした彼女の片手を口元に引き寄せる。手袋^レしだが、手の甲に約束の口づけを落とす。

周囲のざわめきが一層大きくなる。

微かに王女の頬に赤みが差しているよう見えたのは氣のせいだったのだろうか。

6・暗中模索（そちらの本心を教えて）

パルミティアから連れてきた侍女の二ーナを伴つて、執務室の前で警備についていた衛兵に名を告げると、連絡はいつていたようですが、すんなりと通された。

部屋は落ち着いた色合いの絨毯に、重厚な執務机が窓を背にするよう置かれている。執務机の前には接客用のソファとテーブルが配置されていた。二階に位置するこの部屋からは、窓の外の美しく整えられた中庭が見おろせ、執務室にして上出来な空間だ。

二ーナを部屋の隅で控えさせ、リュー・ネリアは執務机について書類を睨んでいるウイルフレッドを見やる。

金の髪をぐしゃぐしゃにしながら眉間に皺をよせ、一人百面相をしている王子にリュー・ネリアは思わず笑みが浮かぶ。

「お邪魔いたします。 ウィルフレッド様」

「あ、ああ……って、もうそんな時間ですか！」

どうやら時間も忘れて仕事に没頭していたらしい。 というよりも、先ほどの百面相を見る限り、無理やり仕事をさせられているようにしか見えなかつたが。 山のような書類を前に、素の顔で立ち上がつた王子は、慌てて顔を作ると机をまわつて出迎えようとした。

リュー・ネリアはそれを手で制して、自らが歩み寄る。

「お時間を取つていただき、ありがとうございます」

「いや、私もあなたとゆつくり話をしてみたかつたので、私の方こそ礼を言つべきではないかな」

もとより顔立ちの綺麗な人だ。 笑みも気障つたらしくなくなかなか好感はもてる。 が、生憎リュー・ネリアにとつて顔の美貌は、元より気にならない性質たちだつたので、ウイルフレッドの会心の笑みもさらりとかわす。

だが、先ほどの声をかけた時にウイルフレッドが発した言葉に、リ

リューネリアは頭を傾げてみせた。

「あの……、お皿は召し上がりになりましたか？」

「え……、ああ、いや」

言葉を濁す言い方に、リューネリアは控えていた二ーナに田くばせをする。

彼女はわずかに頭を下げるが、部屋から出でていった。

それを見届け、リューネリアは王子に向き直る。

「お一人で仕事を？」

「いや、先ほどまでエリ亞ス 補佐官がいたのですが、書類の処理をしに行つてます」

「そうですか……」

リューネリアは視線をまわし、田町でのものを見つけると歩み寄つた。

「茶器を使わせていただいても？」

手を伸ばそうとして、ふとウィルフレッドを振り返つた。

「それなら誰か呼びましょう」

執務机の脇に置かれた呼び鈴に手を伸ばしかけたこの部屋の主に、

リューネリアは慌てて首を横に振つた。

「大丈夫です。お茶ぐらい入れられますし……、よろしかつたらウィルフレッド様もいかがですか？」

「では是非に」

その返事にリューネリアは笑顔で頷き、茶器を手に取つた。

背中に王子の視線を感じながら、茶葉の入った缶を開ける。その香りに満足し、ポットに適量の茶葉を落とす。

「生活に何か不自由はないですか？」

「皆良くしてくれています。今のところ、これと云つて不便は感じておりませんわ」

湯を注いで茶葉を蒸らしながら、ウィルフレッドの質問に返事をしていく。

本当に今のところ不自由はない。最悪、人質として監禁生活を強

いられることも想像していたのだ。だが実際には、出入りを禁止されていいるところはないし、礼をもつて遇されていると思う。だから、むしろ拍子抜けしたぐらいだ。だが、これがこちらの虚をつく作戦かもしれないし、油断は出来ないのだが。

湯で温めておいたカップに出来あがつたお茶を入れて、執務机の前にある応接用のテーブルに運ぶ。カップを置くとウィルフレッドも執務机を離れてソファに腰かける。

二人同時にカップに口をつけて、ホッと息をついた。

「美味しいですね」

普通、女性ならここで謙遜でもして見せるのだろう。リューネリアも一応にこりと笑つてみせた。そして口を開く。

「毒が入つているとかは、考えていらっしゃらない？」

ためらいもなくカップに口をつけたウィルフレッドに多少の驚きをもつて尋ねると、ウィルフレッドは軽く咳き込んでカップを皿に戻した。

少し涙目になつて咳き込む王子に、リューネリアは思わず口をついて出たこととは言え申し訳なく思つ。

だが、少しぐらい警戒心を持つてもらいたいとも思う。自国だからだと警戒しないのは楽観的すぎだ。まして婚約者とは言え、かつての敵国の人間が入れたお茶を口にするなど、今現在かつて敵国だつた場所で生活しているリューネリアには考えられない。

ウィルフレッドは咳が治ると、大きく一つ息を吐き出した。こちらを見る表情が、昨夜の人当たりのいい作り物の顔とは違う。

「……腹の探り合いはやめよう。あなたの目的は？」

どうやら敬語もやめるらしい。確かに、時間の無駄だ。

ウィルフレッドの湖面のようなまなざしが、今は夏の海のよつて力強い光を帶びてゐる。リューネリアも手に持つていたカップをテーブルに置くと背筋を伸ばした。

折角、邪魔者が誰もいないのだ。さつさと本題に入つた方が良さそうだ。

すっと息を吸い込み、口を開いた。

「一時的なヴェルセシュカとの休戦ではなく 終戦です」

相手の本意を確かめもせず、こちらの目的を話すのは愚かしいことかもしれない。しかし、ここはヴェルセシュカの国で、しかもその国の中核でもある王宮だ。敵の本拠地のただ中、味方はパルミニアから連れてきた二ーナと数人の侍女で、二ーナ以外の侍女は結婚式が終わるとパルミニアへと戻ることになつていて。そんな味方がいないも同然の状況では、いつ殺されてもおかしくないのだ。昨夜の夜会でのウイルフレッドとの会話から、この王子が少なくともリューネリアにとつて味方ではなくとも、敵でもなさそうだと思えたその直感を信じるしかなかつたのだ。まして、こちらの手の内を見せないとウイルフレッドも本心を見せないような気がした。じつと田の前の瞳を見つめると、反らされることもないまましばらく時間は経過した。

何を考えているのか。何を計算しているのか。

リューネリアもウイルフレッドも、まるで相手の瞳の中に答えが隠れているのではないかと窺う。

が、ノックの音と共に扉が開き、二人ともハッとしたように振り返つた。

「失礼し……」

言葉と共に、田金の髪をした二十代後半ぐらいの青年が入ってきた。だが、リューネリアとウイルフレッドの間に漂う異様な雰囲気を察したのか、一瞬言葉を切る。

だがすぐに、ウイルフレッドの座つているソファの横にやつてくると、リューネリアに向かつて頭を下げる。

「失礼しました。私はウイルフレッド王子の執務補佐官をしておりますエリアス・グイルトと申します。以後お見知りおきを」

リューネリアもソファから立ち上がり、ドレスをつまむと膝を折る。

「リューネリアと申します」

ゆつたりと微笑を浮かべて挨拶をすると、Hリアスは再び深く頭を下げる。当然だが、きちんとリューネリアのことを知っていたようで、その態度からはヴェルセシュカ側にリューネリアを見下げるような態度は見えない。他国と外交する時、相手が自分たちのことをどのように思っているのかは、直接対話をする相手よりも、臣下の態度を見れば分かりやすい。それも下に行けば行くほど、態度が本心を表しているのだ。それでいくと、今のところヴェルセシユカはリューネリアを軽んじてはいないようと思える。

エリアスは、手に持っていた書類をウィルフレッドの執務机に置いてからすぐに部屋から下がろうとした。

だが、ウィルフレッドが止めた。

「待て。おまえも話を聞いていけ」

「お邪魔をする気はありませんよ」

振り返って、それでも部屋から出でていこうとしているHリアスに、ウィルフレッドは首を横に振った。

「そんなんじゃない。いいから座れ」

有無を言わせず、ウィルフレッドはエリアスを自分の隣に座らせ、やつとリューネリアに向き直った。

二人のやり取りを黙つて見ていたリューネリアは、エリアスに視線を向ける。

白に近い金髪に、濃い青い瞳。顔立ちも秀麗だが、きつこまなざしが近寄りがたい雰囲気を出している。ウィルフレッドよりも瘦身で、確かに文官らしい雰囲気を持つている。

「すまなかつた。話しの途中で」

ウィルフレッドの謝罪の言葉に、いいえ、と返し、リューネリアは視線を補佐官へと向けた。

「グウィルト様」

「エリアスで結構です。敬称もいりません」

決して畏まるところなく、昨夜の夜会の貴族たちのように美辞麗句を連ねないエリアスのきつぱりとした口調に好感を持つ。その態度

からも頭の固い貴族ではなく、柔軟な態度を取れる頭の回転の速い人だと窺える。

リューネリアはその申し出に頷くと、では、と口を開く。

「では……、エリアス。 ウィルフレッド様があなたの同席を許すと、いうことは、この話をあなたに聞いていただきたいということだと判断し、もう一度お話します」

視線をウィルフレッドに向けると、ウィルフレッドは頷いた。

「私の目的は休戦ではなく、終戦です」

ゆつくりと言い切ると、エリアスはちらりとウィルフレッドを見て、苦笑した。

「なるほど。 いつも直接的にこられては殿下が困るのも分かります」「あら、直接的過ぎました？ 腹の採り合ひはやめよ」とウィルフレッド様に言われたものですから」

同意を求めてウィルフレッドを見やると、仕方なさそうに頷いた。

「……殿下、日頃から手に負えない事は、一人で突っ走るなど言つてゐるでしょ」「う」

「ああ、だからおまえを呼びとめただろ」「う」

「……取りあえずこの人のことは放つておきましょ」

ひどい言い方だが、思わず笑つてしまつ。

その見た目から冷淡な印象を受けたエリアスだったが、先ほどのリューネリアとウィルフレッドの間に流れていた雰囲気を一気に和やかにしてくれた。 ウィルフレッドは苦虫を噛み潰したような顔をしていたが、黙つているところをみると、ひどいことを言われながらも、どうやらエリアスのことを本当に信頼しているようだつた。

「姫。 確かに、この度の『』婚約は休戦の条件でした。 無期限の休戦といつものです。 しかし、なぜ終戦と？」

言葉的には無期限の休戦と終戦とでは変わりないようなものだ。 だが、実際のところそうでないことがくらい、エリアスも承知しているだらうに。

リューネリアは膝の上で両手を握りしめた。

まださらに、手の内をさらさなければならないかも知れない。それはリューネリアの弱みにも繋がっていく。だが、完全に敵ではないなら、味方に引き込めばいい。

意を決して口を開く。

「これはパルミティアの意思ではなく、私個人の意思であつて公での終戦を欲しているわけではありません」

「では、その真意は？」

「それをお答えする前に、そちらの本心を教えていただければ、と思ひます」

そう言って、リューネリアはウィルフレッドとエリアスの二人を見据えた。

7・相互扶助（協力してほしにの）

「……だそうですよ、殿下」

「そうだな」

ウィルフレッドは、やれやれとソファの背にもたれかかり、天井を見つめる。

その瞳が態度とは裏腹に真剣で、リューネリアは黙つて言葉を待つた。

「ヴェルセシュカは王と議会で国が動くのは知つていいだろ？？」

「はい」

こちらを見ていないのであえて声に出して返事をする。

リューネリアの育つたバルミニティアでも王の一存で政治がなされただわけではない。大まかにいえば、各専門の機関があり、それぞれに長がいて、その彼らが議会に意見を提出して、議会と王が承認することによって国が動いていた。それはこのヴェルセシュカでも、そう大した違いはなかつたはず。

ウィルフレッドはちらりとこちらを見て、ソファから身を起こした。

「開戦をしたのが議会で、休戦を受け入れたのが王だと言えば分かるか？」

良く考えなくても分かる。王と議会の意見が分裂しているのだ。では、王子であるウィルフレッドの立場は、今までの態度から鑑みても王と同じと考へてもいいのかも知れない。

ウィルフレッドは自分の立場を明確にしたが、それだと再び議会が開戦することを決めれば戦争が始まつてしまふのではないだろうか。不安に思つて顔を上げると、ウィルフレッドはリューネリアの言いたいことを察したのだろう。首を横に振つた。

「まだ国庫は回復していないし、傷ついた兵士たちも回復しきっていない。肉体的にも精神的にもだ。だから、十年は無理だろう」

「十年？」

ヴェルセシュカの弾き出した國の回復には十年かかるというのか。だが、それはパルミディアも似たようなものだ。

リューネリアの呴きに近い疑問に、ウィルフレッドは律儀にも肯定を返してくれた。

「そう、十年」

それ以上かもしれないし、それ以下かもしれない。

しかし、それだけの時間があれば何が出来るはずだ。

今までウィルフレッドの説明を黙つて聞いていたエリアスが、それで、と口を開いた。

「姫の本心は？」

尋ねられ、リューネリアは無意識にドレスを握りしめていた。言わなければならないだろう。ウィルフレッドは自分の立場を教えてくれた。誠意には誠意で応えなければ。意を決して、二人を見つめる。

「……協力をしてほしいの。私の目的は、ヴェルセシュカでの『絶対的な地位と権力』」

王子妃にその地位と権力がないわけではない。王族の一員として一際敬意は払われる。表面的には。だが、リューネリアが欲しているのは肩書だけではない。その実を伴つたものだ。ただ王子の隣に座つているだけの地位が欲しいのではない。

「これはまた、大きく出たな」

「なかなか豪胆な姫のようですね」

一つ意味の取り方を間違えれば、玉座を狙つてゐるようと思われたかもしれない。だが、呆れたようなその口調からは一人がリューネリアの本意を汲み取つてくれたことがわかりホッすると同時に、どこまでも本気であることを伝えたかった。

たつた一人で出来ることではない。誰かの　ヴェルセシュカ側の誰かの協力がないと無理なのだ。

「分かつてゐるのか？あなたの欲するものが、どれほど危険なもの

か

ただでさえ命を狙われる可能性が高いのに、そんなものを手に入れば、どれほどその危険性が増すのか。しかし、ずっと考えていたことだ。だが、リュー・ネリアの命と最終的な目的を秤にかけた時、目的の方に傾いてしまった気持ちは今更変えられない。

だから、リュー・ネリアはウイルフレッドに頷いて見せた。

「あなたは私を守らないと言つたわ。だとしたら、自分の身を守るだけの権力を手に入れなければならない。この国に必要だと認められなければ、自分の身は守れないわ」

きつぱりと言い切ると、エリアスが隣に座っている王子に氷のよう眼差しを向けた。

「殿下……。あなたは仮にも婚約者になんてことをおっしゃるんですけどか？」

「い、いや、守らないとは言つてない！ おるとは言えないと言つたんだ」

慌てて弁解を始めようとするとウイルフレッドに、補佐官は容赦ない言葉で切り捨てた。

「こりあなたの腑抜け具合を血漫してもしょうがないでしょうー。『血漫はしない！』

つかさず言い返すが、勢いでは完全に負けている。

「馬鹿ですか、あなたは！ 不安を取り除いてあげるのが婚約者の役目でしようが！ 不安にさせてどうするって言つてているんですよ！」

と、言い争つていてる一人を尻目に、扉がノックされた。その音にも気づこうとしない彼らを見て、リュー・ネリアは取りあえず今日のところの話は終わりだと判断し、扉を開けるために腰を上げた。扉を開けると、そこには二ーナを先頭に、ヴェルセシュカの数名の侍女がワゴンをついて待つていた。

ふわりと温かな料理の香りに、心が落ち着く。部屋の中からいまだ言い争っている声に訝しげな顔をしている侍女に、リュー・ネリアは苦笑してみせた。

侍女たちに入室を促し、食事の準備をしてもらつた。

時間が時間なだけに軽めの食事だ。温められたスープとパンに肉や野菜を挟んであるもので、どうみても軽食だ。昼食を食べていな話はどうやら上手く通じなかつたようだ。

それにして、王子の食事管理ぐらいたきちゃんとしていそな補佐官に見えたのだが。

「これは姫が？」

視線を向けた先にいたエリアスに、逆に驚きの眼差しを向けられた。

「ええ、お昼がまだだとおっしゃつてましたので……」

勝手をしてしまいましたと告げると、エリアスが丁寧に頭を下げた。

「お気づかい感謝します」

きつと真面目な人なのだろう。そして先ほど言い合つていた言葉は酷いものではあつたが、あんなにも言いたいことを言えるのはウイルフレッドのことを、彼も本当に信頼しているからに違いない。

二一人と侍女たちには部屋から下がつてもらつた。取りあえず、ヴェルセシユカにも休戦を支持する人間がいることが分かつただけでも上出来だし、ましてこの二人がそちら側の人間なら、なおのこと目的に一步近づいたともいえる。それに、彼らにとつてもパルミディアの王女は、ヴェルセシユカの戦争反対を掲げる者にとつての駒になるのだ。手を組むことは出来るだろう。

エリアスは執務机に近づくと、決裁の箱を覗きため息をこぼす。どうやら彼が思つていたほど仕事は渉つていなかつたらしい。わずか数枚の書類を手に取ると、再び退室していった。

リューネリアは執務机の窓の向こうに視線を向けた。

中庭は格別に美しかつた。

中央に噴水がつくられ、左右上下対称に作られた庭は丁寧に計算され、いつの時期でも花を楽しめるようになつていて。

パルミディアでは見たこともない花が咲いていて、リューネリア

の興味を引いた。

「さつきの話しさ……」

ソファに腰かけたまま食事をしていたウィルフレッドが、遠慮がちに声をかけてきた。

振り返ると、彼は食事の手を止めたままこちらを見ていた。

「なぜ、そんなものが欲しいのか聞いても？」

まっすぐに見つめるその瞳に、リューネリアは思わず苦笑した。先ほど、その理由を口にしたはずだが、ウィルフレッドはどうやらリューネリアがあえて言わなかつたことを何となくだが気づいているようだ。

「自分の身を守るため、とは信じてくれないの？」

それでも嘘を吐いてしまう自分は、いつからこんなに荒んでしまつたのだろうか。そしてそれに慣れて、嫌悪しなくなつた自分はいつからいるのだろう。

「いや、昨日はすまないことを言つたと思つ」

先ほどのエリアスの台詞が引っかかっていたのか、ウィルフレッドは素直に頭を下げた。それにはリューネリアも素直に応えた。「いいえ。このことは前々から考えていたことだから。それに、夫となる方が協力してくれるなら、そのほうがいいでしよう？」

違いますかと首を傾げると、ウィルフレッドは逆に言い淀んだ。

「……俺がもし協力しないと言つていたら？」

「……その時は、協力してくれそうな人を見つけるまでよ」

あくまでも淡々と答えると、ウィルフレッドは少し落ち込んだようを見えた。

彼は正直者だ。昨夜とは別人のように見える。ここが他人のいな空間だからなのか、それとも昨夜は他人がいる空間だったから仮面を被つていたのだろうか。

昨夜とは違い、現在のウィルフレッドの身にまとう雰囲気はどこか人を油断させる。昨夜も一瞬だったがリューネリアに本音を話させていた。そして今も氣づくと、別に話す必要のないことを口にし

ていた。

「私には目的、 いえ、 願いがあるの」

「私が頭の隅を過る。

リューネリアの手に入れたいものと願いは直結している。手に入れたいもの、それが自分の身を守ると同時に願いも叶えられることになる。

「あなたも知っているでしょうけど、私には年の離れた弟がいてね。母が早くに亡くなつたものだから、私が母親の代わりになつてよく面倒を見ていたの。ライオネル レオは次のパルミティアの王になることが約束されているわ。大切な たつた一人の弟よ。生まれた時から戦争で、やつと休戦で国内が安定に向かうところでしょう。もう、戦争なんて起こつて欲しくない。弟には平和に国を治めてほしいだけ」

戦争になれば国が乱れる。長くなれば長くなるほどその乱れは酷くなる。リューネリアはその乱れを直接この目で見てきたのだ。権力を持つたものの身勝手さで、泣くのは力の弱い者たちだ。王族とはいえ、まだ子供であるライオネルに権力はない。パルミティアの国王である父が健在であるためまだ守られているが、もしも今、父に何かがあればライオネルは大人達に玩具のように扱われてしまうだろう。それだけはさせたくはなかつた。

目を閉じて失笑する。

「口では国のためにとか、王族の務めだとか言つてるけど、本当は……とても個人的な願いだつてことは分かつてゐるわ。でも、それでも私に絶対的な権力があれば、このヴォルセシュカからの戦争を止められると思ったの」

身を守るのはついでなの、と付け加える。

黙つて聞いていたウィルフレッドは、それを聞いて何を思ったのか。

再び食事を始めた王子からは返事はなかつた。

返事が欲しかったわけではなかつたので、リューネリアもそのまま黙つていた。

だが、しばらくしてウイルフレッドが再び食事の手を止めていることに気づいた。

「……以前も話したが、兄は身体が弱く、今ではほとんど自室から出ることはないが、昔は今よりはもう少し丈夫だつたんだ。兄は頭が良くて、人当たりもよくて、誰からも好かれていて、次の国を担うものとして皆から期待されていた。俺も兄を尊敬していて、兄のようになりたいと思つていたよ。だが、戦争が激しくなるにつれ議会との軋轢も酷くなる一方で……、兄が倒れるまで兄の身体に限界がきていることを誰も気づかなかつた」

遠くを見つめるその瞳は壁に向かはれていて、ウイルフレッドは無表情に近い。だがどこか悔恨が見えるような気がした。

「だが兄は体調が落ち着くと自ら率先して戦場に行つた」

まるで生き急ぐように見えたとウイルフレッドは続けた。王太子が何を思つてそうしたのか、ウイルフレッドは何度も問うたが教えてはもらえなかつた。そういうするうちに結局、王太子が命を落とすことなく休戦することとなつたが、ウイルフレッドの中には戦争に対する疑問が残つたと告げられた。

「戦争をする必要が本当にあつたのだろうか」

言われた言葉に、リューネリアは首を軽く横に振つた。

「それは……今更言つても仕方のないことだわ」

仕方がなくとも言いたくなることはある。それは十分に分かつていた。

そのカール王太子から、ヴェルセシュカに来てすぐ手紙と花束を貰つたことを思い出す。体調が優れずに出迎えも出来ず申し訳ない

いという謝意と、心のこもつた歓迎の言葉が丁寧に綴られていた。形式的なものであろうとは思っていたが、ウィルフレッドの王太子を慕う言葉を聞いたからだろうか。それだけで王太子に対する見方が変わつていく。

ふと、視線を執務机の上に向け、何気に書類を手に取つた。

戦時中、休戦を迎える一年ぐらい前まではバルミニティアの国王に代わつて内政のことに関する決裁を任せていた。だからリュネリアはほとんど無意識に書類を分け始めていた。

執務についた頃、リュネリアも書類を山のようにして、幾日も徹夜をした頃があった。しかし、やり方一つで書類の山が早く減ることに気づいたのだ。それが無意識に身につき、ほとんどカンと言つても良いほどのもので以て三つの山に分けていくのだ。

一つは即決裁。

一つは参考。

最後の一つは確認事項を含む書類。

いつもすることで、即決裁の書類は素早く処理され、参考書類も返却される。確認事項を含む書類に関しては、相談しながら決めていけばいいだけで、それだけで時間の無駄が省かれる。

「何をしているんだ？」

ふと気づくと、側にウィルフレッドが立つていて、リュネリアの手元を覗いていた。どうやら食事は済んだらしい。しまつた、と思ったがあとの祭りだった。

他国の決裁書類を勝手に見てしまつていいものではないことぐらい、リュネリアにも分かる。つい癖で分けてしまいましたという言いわけが通るものではない。

ウィルフレッドを見上げ、頭の中が真っ白になってしまった。

「なぜ三つに分けるんだ？」

だがその声は責めを問うものではなく、単なる疑問だった。瞬き、取りあえず説明をする。

自分がやつていた時はこの方法が早かつたし、つい癖で書類を手

に取つてしまつた、と。

「ごめんなさい」

謝つて書類をウィルフレッドに渡そとしたら、続けてくれと言われた。いいのだろうかと書類を分け始めるど、ウィルフレッドは机について、決裁書類に手を伸ばした。

何枚かめくつて、筆を取る。そしてサインをしていく。

それを横目に見ながら、リューネリアは三つの山を作つていく。手元の書類がなくなり、決裁書類のみをウィルフレッドに渡し、再考書類を脇に置く。確認事項のある書類を手に取ると、一枚一枚確認していく。まだ、ヴェルセシュカの国政がどのようなもののか把握しきつていないため、決裁書類より確認書類の方がはるかに多い。しかし、もう少し慣れてくれば決裁に回せそつなものが増えるに違いない。

それに、良く見るとこれらの書類は地方から上がつてきたものが多いうふに思える。ウィルフレッドが国の中枢に直接携わっている部分は少ないようだ。

しばらくして決裁書類にサインを終えたウィルフレッドは、筆を置くと今度は再考書類を手に取つた。取りあえず目を通しながら、リューネリアに疑問点を聞いてそれを再考するものと確認するものに分けていく。

リューネリアが次に確認書類をウィルフレッドに渡すと、疑問に思つたことを一点一点口にした。

それに答えてもらひながら、それを再び決裁と再考書類へと分けていく。

こんなことをしていいのだろうかと、疑問に思ひながらもそれでも書類は時間と共に片付いていく。

残りもわずかとなつた頃、エリアスが戻ってきた。

「失礼、お邪魔でしたか？」

気づくと、リューネリアもウィルフレッドもかなり密着して書類を見ていた。

どうしても同じ書類を覗きこむのだから、その点は仕方がない。意図的ではないにしても、意識していない分には何とも思っていないかつたリューネリアだったが、意識してしまつと途端、恥ずかしくなる。

スッと身を引き、距離を取るとエリアスに見抜かれ、かすかに笑われた。

一方、ウィルフレッドは視線をエリアスに投げると、皿慢げに口を開いた。

「優秀な補佐官殿が邪魔しなければ、もう少しでこちらも終了していただところだ」

「何が終了なんですか？遊んでばかりおられないで
言つて近づいてくるなり、机の上の書類の山の変化に気づいたようだ。」

すでに決裁はほとんど終わり、再考書類も脇にのけてある。ウィルフレッドの手元には、あと二、三枚しか書類は残っていない。「ちょっと待つて。もう少しで終わる」

言つなりリューネリアは呼ばれ、先ほど疑問に思つていた説明を促され、気まずいながらも書類を再び覗きこむ。そして、説明しながらその書類の不備や疑問点を指摘する。

茫然としているエリアスは、ウィルフレッドの終了の声にハッと身を震わせ、皿を吊り上げた。

「まさかあなたという人は、姫に手伝わせたのですか！」
ぎょっとして、リューネリアはエリアスに声をかけた。
「すみません。つい癖で手を出してしまつたのです」

「癖？」

さきほどは軽く流したウィルフレッドだったが、仕事の終わりが見えて余裕が出たのだろうか。怪訝な顔をする一人に、リューネリアは説明をした。

「はい。こちらに来るまでパルミティアでは国内の決裁は全て私に任されていましたから」

「姫が！？」

「ウイルフレッドとエリアスの声が見事に重なり、その聲音に思わず首を竦める。

しばらく補佐官に見下ろされていたリューネリアはいたたまれなくなつて、そつとウイルフレッドの側を離れる。が、当の本人に腕をつかまれてそれも叶わなかつた。

「もし良かつたら、明日からも手伝ってくれないか？」

「は？」

「え？」

今度はリューネリアとエリアスの声が重なつた。

何を言い出すのだこの王子は。無理に決まつているではないか。だが、悪戯を思いついたような顔をした王子を見て、目を瞬く。「良い案だと思うけど？ まさに協力には協力で返す？ つて感じで、これは姫の地位を築く第一段階になるんじゃないか？」

一理ある。だが横から飛んだ補佐官の冷ややかな声は当然却下だつた。

「実は姫が決裁していました、つて？」

イライラとした声がエリアスの口から出でてくるのを聞きながら、ウイルフレッドの言葉を一考する。

確かに、ウイルフレッドの手伝いをしながら、ヴォルセシュカの国政を勉強するのは良い手段だろう。だが、リューネリアが決裁したなどと噂が立てば、地位どころの話ではなくなるのではないだろうか。むしろ、王子であるウイルフレッドの地位が落ちて話しにはならないような気もしなくはないが……。

「ちがうちがう。そんな俺の馬鹿っぷりを披露するんじゃなくて、姫が手伝うことによつて得る俺の利益を考えれば間接的にも姫の地位向上には役に立つだろう？」

そう言つ考え方もあるかもしれない。

多少、勢いの落ちたエリアスが唸り声を上げる。

「それはそうですが……。あなたは仕事をしたくないからそんなこ

とで煙に巻こうとしているのではないでしょうね？」

「いや。姫が手伝ってくれれば、なかなか仕事も楽しいかもしけないね？」

本心なのかどうなのか。あまりに軽々しい口調にリューネリアは眉根を寄せた。

「ウィルフレッドの言う考えは悪くはない。確かに、第一段階としては情報さえ操作できれば良い方だと思つ。しかし……。

エリアスを見上げると彼も同じことを思つていたのか、リューネリアが口を開かないのを見てると、深々とため息を吐きながら口を開いた。

「それにはやはり問題があります」

エリアスのこめかみが、わずかに引きつっているように見えるのは気のせいだらうか。

「なんだ？」

「せめて、婚儀が済んでからこして下さー」

「は？」

「まだ、姫はパルミティアの人間です。ヴェルセシュカの国政に携わるのはそれ以降になさるべきです」

正しい忠告だとも言える。

リューネリアもウィルフレッドを見て頷く。

しかしウィルフレッドは何を思ったのか、握んでいたままのリューネリアの腕から手を滑らせ、指先を掬い上げると、そこに口づけを落とした。

突然の事に、リューネリアは息を止めた。昨夜のように今日は手袋をしていない。指先に触れた、温かく柔らかな感触に、思わず体中に力が入る。

「では、明日は昼食と一緒に取ろう」

「……はい」

何とか声を絞り出し、手を取り戻すと距離を取つて礼をする。

何か言わなければならぬのかもしけなかつたが、頭の中が真つ白で言葉が出てこなかつた。

「ひやつて白室に帰つてきたかも思ひ出せないほど、リュー・アは混乱していた。

9・華燭之典（遊ばないで下れ）

「……二ーナ。ねえ、二ーナつてば」

寝台の上でうつ伏せになり、足をバタバタさせながら、リューネリアは明日の準備と確認をしている侍女を呼ぶ。

彼女はリューネリアが五歳になつた時から仕えてくれている侍女だ。この度、ヴェルセシュカに嫁ぐ身となつたリューネリアの為に、国を捨ててまで付いてくれた彼女は、姉のような存在で家族のようなものだ。

そんな彼女の前では、気心が知れている分だけ、王女でいる必要がなくなる。

今は他の侍女はない。明日にはこの一ヶ月を過ごした部屋を引き払う為、そして彼女たちはパルミディアへと戻ってしまう為、荷物の片付けもあるだろうからと今日は早めに引き揚げさせたのだ。だから、こんな恰好をしていられるのだが。

「なんですか、リューネリア様。子供みたいですよ」

呆れた眼差しを向けられ、バタリと足を下ろす。

明日、ついに婚姻の儀を迎える。

なんとか無事にこの日を迎えることが出来た事を喜ぶべきなのかどうか、悩むところだ。今まで無事だったのは、二大国のおかげと言えるが、果たして無事に成婚となつたからには刺客がいつ舞い込むとも限らない。

「私、いつまで生きていられるのかしら……」

決して悲観しての言葉ではない。先の見えない未来は、本来なら花嫁が思い描くだろう幸せを、ただ他人事のように感じてしまうのだ。

「大丈夫ですよ。いくら不甲斐ないといつてもウイルフレッド様はこの国的第一王子です。リューネリアさまの目的を達成する踏み台

ぐらいにはなつて下さるでしょつ

慰めにもならないような、王子を王子とも思つていな慰め方に、リューネリアはため息交じりの苦笑を零した。

侍女にまで不甲斐ないと思われてしまつとは。

可哀想だとは思つが、果たして本当にただのお馬鹿さんなのか、まだリューネリアは見極め切れていなかつた。あれから何度か食事をしたり、お茶をしたりと話す機会を何度か設けた。その時の会話の端々からも感じたが、決して頭の回転は悪くないと思う。面倒くさがりなところもあるが、やり始めた事はやり遂げる種類の人間だと思う。

多分、補佐官が切れ者なのだと思つ。その影に隠れているため、目立つていなかつただけなのではないかと思うのだが、言いきれないところが痛いところだ。

「結婚……か」

リューネリアにとつてはまさに命をかけた結婚だ。聞こえはいいが、そこに本来あるべき愛情は無い。

ウイルフレッドの博愛主義は健在だ。それを兎角いつもりはリューネリアにはない。ただ、協力関係であることが肝心であり、それ以上を望むことはない。

「さ、もうお休み下さい。明日は大変な一日になりますので」

「一ーナの言葉に素直に頷く気にはならなかつたが、確かに寝不足で目の下にクマがある花嫁など無様である。ましてそれがバルミニディアの姫として民衆の前に立たなければならぬのだ。みつともなくては祖国に申し訳ない。

しぶしぶ布団の中にもぐりこむと、一ーナが明かりを落としてくれた。

「おやすみなさい、一ーナ」

「おやすみなさいませ、リューネリア様」

寝室の扉が閉まる音とともに、一ーナの気配が部屋から消えた。

眠れそうにないと思つていたリューネリアだつたが、ここ最近の疲れが出たのか、ほどなく眠りの中に引き込まれていつた。

神前での誓約後、リューネリアは命を狙われることなく無事、成婚の祝宴へと出席することが出来た。

かなりの緊張を強いられてはいるが、主役であるため氣は抜けない。しかし、今回はずつとウィルフレッドが側にいるため、命を狙うこと自体、難しいことであろう。邪魔なのはリューネリアであつて、ウィルフレッドが邪魔なのではないのだから。もちろん、その点も踏まえて警備も万全に期しているらしいが……。

隣に立つ今では夫となつたウィルフレッドを見上げる。

手は常に彼の左腕に添えられている。しかもなぜかその手の上に、彼の右手が乗つていて離れない。ちょっととした用で離れなければならぬことがあつても、側に戻るとすぐに手を取られ、同じ位置に添えられる。

これは仲が良いフリをしているのだろうか。

疑問に思つてじつとウィルフレッドの腕に添えていた自分の手を見ていると、頭上から声を掛けられた。

「疲れましたか？」

「……ええ、少し」

必要以上に近いような距離に、わずかに及び腰になりながら答えると、断りを入れながら人の輪から抜け出してくれた。

人もまばらなバルコニーに連れて来られ、ほつと一息つく。

歓迎の夜会から一ヶ月ほど経つたが、夜風は温かくなつてきたようだ。あの夜は、晩春だというのに風が冷たいと思つた記憶がある。しかも、今夜はどこかで花が咲いているのか、甘い香りがただよつてている。

眼下に警備の者が人目につかないようそつと佇んでいるのを尻目に、リューネリアは遠慮がちにウィルフレッドを見上げる。

「あの……」

「なに？」

視線を、彼の腕に絡めたままの白らの手に向ける。

「……手を離してもらえないかしり」

「離して欲しいの？」

手袋の上からそっと撫でられて、一気にその場に熱が集中する。

「離して欲しかつたら、振り払つてもいいよ」

この場で、博愛主義者の手法を發揮しないで欲しい。

いたまれない。

もし今、振り払うような暴挙に出ると、あまり喜ばしいことにはならない噂が立ちそうだ。人は少ないとは言え、視線は今日の主役たちに常に注がれている。少なくとも、ウイルフレッドやエリアスはリューネリアに出来る限りの協力を約束してくれた。地位と権力を望むなら、やはりウイフルレッドと仲がいいところを周囲に見せれば、迂闊にリューネリアをさげずむようなことを言つ者はいないだろう。これは一種の牽制だ。結婚したからには、リューネリアはすでにヴェルセシュカの王族なのだ。ウイルフレッドがリューネリアを大切にすることとは、ヴェルセシュカの王族から受け入れられたということになる。これは大切な第一歩とも言えるだろう。このことは、彼らとも話しあつた結果、リューネリアも承諾したことだった。

だが、何なのだろう。この豹変したようなウイルフレッドの態度は。

じつやつて女性を陥落させるのか。

妙に冷めた目で見ている自分と、打算で振り払えないリューネリアの目の前で、ウイルフレッドは自らの腕に乗せていた手をいつものように唇へと運ぶ。貴族間では淑女への挨拶でもある行動なのだが、彼の口づけはいつもより長い。

そう、普通の淑女ならば目の前で、この見た目だけはいい王子の挨拶を受けようものならうつとりとでもするのだろうが、リューネ

リアにとつてこれは苦行でしかない。

パルミティアでもこの挨拶は主流だが、戦争で夜会などのパーティは控えられていた。しかも、いつも執務室で内政を仕切っていたリューネリアは、公務でそこまで対外的な活動をしていたわけではなかつた。つまり、慣れていないのだ。

あまりのいたたまれなさに、手に思わず力を込めた。いつそのこと、このまま手を振り払つてしまいたい。

だが、一瞬のためらいを見破られ、ウイルフレッドに手を握られる。そしてそのまま腕を引かれて、彼の腕の中に閉じ込められてしまつた。

思わず叫びそうになつて、慌てて口を押さえる。

「この人は心臓に悪い。仲が良いところを見せるといつても、ここまでしなければならないのだろうか。

「ウイルフレッド様！」

小さな声で非難する。

「仲のいいフリだよ」

耳元に小声で返され、思わず言葉に詰まる。

だが、笑いを含んだその声に、リューネリアは気づいてしまつた。

「わたくしで遊ばないで下さいー！」

「役得だよ」

キッと見上げると、綺麗な笑みを浮かべていた。しかも、とても楽しそうに。

これを周囲から見たら、どのように見えるだろうか。されど、王子は幸せそうに見えるのではないか。そして実際、恥ずかしがつている姫は恥じらつているように見えるのか。

あまりの事に愕然とする。

「この際、キスでもしとく？」

調子に乗つて頬を撫でてくる王子に、リューネリアは低い声で応えた。

「張り倒さないといつ自信がありませんわ」

「それは残念」

台詞の中身とは逆に別段、残念そうに見えないウイルフレッドの顔から笑みは消えない。

ああ、そうなのかと気づく。

最初の夜会の時も思ったことだ。この人は、人前に出ると完璧な王子の仮面をつける。執務室にいる時や昼食を一緒に取った時などは、もつと碎けた感じで、はつきり言つてしまえば不甲斐なく感じてしまうことが多い。だが今は完全に『王子』だ。普通に考へるなら執務室にいる時の方が本来の彼なのだろうと思えるのだが、違うと思った。ここまで完璧な仮面をつけられるものではない。

じつとウイルフレッドを見上げていると、微笑を浮かべたままの彼に頬を撫でられた。

ハツとする。

「隙を見せたら駄目だよ」

そうだった。ここには見えない敵が沢山いるのだった。

「ごめんなさい」

「いや、分かつてないみたいだけどね」

最後の方は小声で、室内から流れてくる音楽によつて、リューネリアの耳までは届かなかつた。

その後、しばらくして再び会場へと一人は戻つた。

結局、バルコニーに出ている間も手を離されることはなかつた。

成婚の宴も、日付が変わる頃にはお開きとなり、つまるところ、リューネリアにとつてはあまり喜ばしくない事態を迎えていた。いや、覚悟はしていたというか、当然と言えば当然の流れのだが、正式に王子妃となつて新しく移つた部屋の寝室は夫婦共同。寝室は、寝室からそれぞれの部屋へと出られるようになつてゐるらしい。

新しくリューネリアに付くことになつたヴェルセシュカの侍女たちとの挨拶もほどほどに、寝支度を整えられて寝室へと押し込められたリューネリアは、その場に当然のよつにいたウイルフレッドを見て凍りつく。

いつもよりぐつと碎けた格好のウイルフレッドは、ガウンを羽織つて寝台の隅に腰かけていた。

「覚悟はできる？」

その言葉に、勢いよく首を横に振る。

「無理です。ところが、子供を作ることは当分控えさせて欲しいです」

真剣に訴えると、ウイルフレッドは面白そつに笑い、首を傾げた。

「なぜ？」

「もし子供が出来ても、地位と権力がないと守る自信がないから」
「いつかは子供を産まなければならないことは、知つてゐる。今は逃げているだけだということも、分かっている。

「まずは、あなたの欲しているものを手に入れてから？」

「はい。勝手を言つて申し訳ないのですが」

「いっぱいいっぺいな自分の心を情けなく思いながら、頭を下げる。でも、逆も言えるよね。子供が出来れば狙われなくなる可能性も

ある。ヴェルセシュカの王族の血を引いているのだから」

確かに、そういう考え方もある。それも考えなかつたわけではない。

だが、子供を産みさえすればまたに用なしになるのではないだろうか。むしろその方が怖い。子供を人質に取られてしまえば、多分というか絶対にリューネリアは身動きが出来なくなる。子供を持ったことがないリューネリアではあつたが、子供を弟に置き換えて考えれば、身がすくむような恐怖に胃が痛くなりそうだつた。

それを素直に口にすると、ウイルフレッドは笑いながら頷いてくれた。

「それでは、決めよつ。一応、夫婦となつたからにはどこまで触れてもいいか

「触れる？」

不可解な言葉に頭を傾げる。

「そう。人前で出来るだけ仲良く見せる方がいいだろ？」

そう言つことかと納得する。

確かに、夫婦らしく見せることは必要だ。それは側にウイルフレッドがいて、必要以上にリューネリアが警戒していては仮面夫婦だということがばれてしまいかねない。宴の間中、ずっと腕を気にしていたぐらいだ。多分、それぐらい慣れなければいけないという意味なのだろう。しかし、どこまで、とは？

眉間に皺を寄せたまま、再び頭を傾げる。

「どこまで、とは？」

真剣に尋ねると、ウイルフレッドは途端、吹き出した。悪いと思つたのか顔を背けたが、堪えよつとしているのだろう。逆に肩が震えて、笑っていること自体が隠せていない。

「……あの？」

真剣に尋ねているのに、この態度は何なのだろう。おかしなことを聞いただろうか。だが、いつまでも震えている背中に、次第に腹が立つてくる。

宴の時も、ウイルフレッドは余裕をもつてリューネリアで遊んでいるように見えた。確かに、こちらの方面に関しては、博愛主義者のウイルフレッドにとつてどうていうこともない遊びでしかないのだろう。だが、リューネリアにとつて不得手なのだ。こちらは真剣なのに、それをからかつて遊ばれるのは釈然としない。

ムツとして余所を向く。

肝心のウイルフレッドが笑つていては話しにもならない。と、しばらく無言でいると脣間に軽く押され、すぐ側にウイルフレッドが来ていることに気づく。

その目元はまだ笑つている。

「私で遊ばないで」

「遊んでいないよ」

「でも

文句を言いかけたところで、ウイルフレッドの人差し指がリューネリアの唇を軽く押された。

「試してみよう。あなたがどこまで許してくれるのか」

「？？？」

唇を離れた手が、リューネリアの手をすくい上げた。

いつもの挨拶と同じように手の甲に唇が押し当てられる。その時間は長くもなく離れたと思ったら、今度は手のひらを返され、手首に口づけられる。

ぎょっとして手を引つ込めようとしたが、バルコニーに出た時と同じように引き寄せられて、ウイルフレッドの腕の中に閉じ込められた。勢い余つて胸にぶつかる。

今はドレスも着ていないのでコルセットも当然していない。とういうことは、背中に回された腕の感覚がより肌に近い。やわらかい柑橘系の香りがふわりと鼻をかすめ、頬にあたる固い胸板も、体温もすぐ近くに感じ、思わず身を引き剥がそうとした。

「もう無理？」

笑みを含んだ台詞にどこか挑発的なものを感じ、リューネリアは頭上を見上げ、キッと睨んだ。

だがそこには、静かな湖面のような瞳で、決してリューネリアを挑発するようなものではなかつた。

確かに、眼福という言葉はある。こんな身近でここまで整つた顔を見る機会はなかなかないだろ。金色の髪は無造作に梳かれているが、それでもウイルフレッドの美貌を損なうことはない。

じつと眺めていると、ウイルフレッドはリューネリアの髪を一房すくい上げ、まるで手の甲への挨拶のように口づける。だが髪はリューネリアの意識に従うかのように、手の中から滑り落ちて逃げていく。が、それは逃げたのではなく意図的なもので、リューネリアが意識をそちらに取られていると、額に温かい感触を感じ、次は瞼へ、頬へと移動する。

なされるがまま、頬を撫でられ、そのまま顎を持ち上げられて、瞳を覗きこまれた。

ゆつくりと近づいてくる顔と、睫毛の長さに内心感嘆しながら、現状に我に返る。非常にまずいのではないだろうか。

顎を引きたくても、持ち上げられた手と背中にまわつた腕によつて固定され動けない。

唇が軽く触れた感触に、思わず身体中に力を入れ、ウイルフレッドのガウンを握りしめていた。

確かに、神前誓約をした時も同じような口づけを交わしたが、今は状況が状況である。場所も悪いような気がする。

唇が離れた一瞬の隙をついて、リューネリアは持てる矜持を捨てて白旗を上げた。

「これ以上は無理」

多分、顔は真っ赤になっているだろう。

フイフと顔をそらして、思わず不機嫌になつてしまつ。心臓は全力疾走した時のように、鳴つていた。

「取りあえず、十分かな」

やつと腕から解放され、ある程度の距離を取ると、よつやくウイ
ルフレッドの方を振り返る。だが、顔は直視できない。

だが、今耳に飛び込んできた言葉は、聞き捨てならないものでは
なかつたか。

「取りあえず？」

「そう、人前でも出来るかどうか、明日試そつ

「人前！？」

思わず叫んでいた。今したことを人前でするのか。

一瞬、ヴェルセシュカに輿入れしたことを後悔しそうになつた。

この国は、そういうことを人前でする習慣があつたのだろうか。

「一応、夫婦だからね。……地位と権力を手に入れる為には、それ
ぐらいの壁は乗り越えられるだろ？」

痛いところをついてくる。ぐつと我慢して頷くしかなかつた。

「じゃあ、もう寝よう。今日は疲れただろう？」

「……はい」

どこか納得がいかないまま返事をしたはいいが、しかしこの寝室
には寝台が一つしかないことを思い出す。

首を傾げると、先に寝台に横になりかけていたウイルフレッドが
隣を叩いた。

それは、どう見ても呼ばれているようにしか見えない。

「何もしないよ

しばらくジッと見つめていたが、確かに、先ほどもリューネリア
が嫌がると止めてくれた。信用してもいいのだろうか。

いつまでも突つ立つてゐるわけにはいかず、示された場所に入る
と、身体に腕を回された。

「ちよつと！」

非難を込めて見上げると、瞼に口づけを落とされた。

「おやすみ」

どうやらそれ以上は何もするつもりはないらしく、疲れたと言つ

たのは嘘ではなかつたようですが、すぐに寝息が聞こえてきた。リュー・ネリアも妙に緊張していたが、その寝息を聞いていると、同じく疲れもあってすぐに眠りに落ちていった。

11・情報収集（取つて食おつとこうわけでは）

リューネリアの一日は、午前中は王子妃としての教育 主にヴエルセシュカ形式の礼儀作法、歴史や法令の授業などを受け、昼食後はウィルフレッドの執務を手伝いながら、エリアスに国政を学ぶ。仕事は夕方までしか手伝わせてもらえないの夕食後からがリューネリアの自由時間だ。

大抵、その時間は侍女たちとの歓談になってしまうのだが。

パルミディアから連れてきた侍女たちと婚姻の儀の後に入れ替わりとして新たに付いた侍女は、二ーナを含め七人だ。身元はエリアスによつて確認されているので大丈夫だ。それに、二ーナも目を配つてくれているので、それほど心配はない。それに、彼女たちから知る王宮内の噂話もなかなか侮れない。

「殿下には現在、三人の恋人がいらっしゃるという噂ですよ」

左手の指を三本立て声を落としながら、いかにも真剣な顔をしてみせているのは侍女たちの中でも、王宮勤めが最長のダーラだ。年齢は二十代後半だが、勤めが長いだけあって、ヴエルセシュカの王宮でのしきたりには詳しく、新しい生活に戸惑いを見せるリューネリアにさり気なく教えてくれたりする。しかも侍女の中ではリューネリアに一番近い位置にいる二ーナを立てつつ、やはり国が違えば侍女としての礼儀も違うらしく、その辺りの面倒もそれとなく見てくれ、侍女のなかでは頼りになる存在だ。

もちろん、勤めが長いだけ王宮内の事情にも詳しい。

博愛主義を認めている妻というのも彼女たちからしてみれば奇妙なものにみえるようだが、そこは身分の高い人たちの考えることだ。

侍女ごときの常識には当てはまらないという現実を幾度も見てきて、いるらしく、意外とすんなりとリュー・ネリアの持論は受け入れられた。だが、一方で彼女たちの想像力の逞しさに、リュー・ネリアは舌をまかずにはいられない。

一応、彼女達の前でもリュー・ネリアとウィルフレッドは仲が良く見えているようだが、リュー・ネリアにしてみれば、あんなにも恥ずかしい思いをしているのだ。見えてもらわなければ困る。

そんなわけで、侍女たちが仕入れてきた情報を聞くと、ウィルフレッドは博愛主義だと言われているが、昔はともかくとして今現在、手当たり次第というのではなく、実際には特定の女性としか付き合つていいないようだ。

「ランス公爵夫人」「一デリア様、ソーウェル公爵令嬢ロレイン様、ヴァーノン子爵夫人ビビアンカ様」

一人ずつ指を折りながら告げたのは、一番年若いナタリアだ。若いだけあって彼女は侍女たちの中でもずば抜けて元気だ。

しかし彼女の口から出た敬称にギョツとする。

夫人というのは当然、結婚している人につけるので、三人のうち二人が既婚者ということになる。未婚者はうち一人。

どうみても遊びにしか見えない。いや、遊びだと豪語しているのだから問題はないのか。

くらりと眩暈を感じ、思わず片手で目を覆う。

確かにウイルフレッドがどれだけ女性と遊ぼうが問題はない。だが、本当に女性たちも遊びだと思っているのだろうか。

しかし、その中の一人の名に、リュー・ネリアは記憶に引っかかるものがあつた。

「ねえ、ランス公爵夫人には確かお子様がいらっしゃったわよね？」
目を覆っていた手を除けて、侍女たちを見渡す。自分の覚え間違いでなければ、彼女は。

「はい。四歳になるお嬢様がいらっしゃいます」
口頃は無口なヘレンが静かに肯定した。

お嬢様……ならば、間違いではないはず。

パルミーティアとヴェルセシュカの休戦条件として交わされたのは、お互いの人質交換だ。パルミーティアからはリューネリアが婚姻という形ではあるが、ヴェルセシュカに嫁いできた。では一方、ヴェルセシュカからパルミーティアへはどうなっているかといえば、現在、ヴェルセシュカ王家には人質として出せるような適当な人物はない。唯一当てはまるのが、現国王の姪の子供。ランス公爵夫人がその姪にあたる。つまり彼女の子供こそがパルミーティアへの人質として差し出される最有力候補なのだ。しかし年齢は四つ。それはあまりにも酷である。ここはパルミーティアが譲歩という形で、彼女が十歳になるまで保留という形を取ることとなつた。もちろん、それがパルミーティアには不利だということも考慮した上で、西の大公ルーザエルフェルトの王族から一人、長期留学という形でパルミーティアに留まるという形をとつてくれている。つまり、もしヴェルセシュカがパルミーティアへ宣戦布告をするものなら、ルーザエルフェルトも敵に回るということになるのである。が、これはあくまでも表面的なものであつて、実際に再戦されるものならルーザエルフェルトは傍観することも考えられるのだが。

難しい顔をしてしまつていたのだろう。ダーラが慌てたように言い添えてきた。

「貴さま、別に寵を競おうとしていらっしゃるわけではありませんよ。殿下のご婚約が決まつても変わらずお付き合いをされていますし、同類つて感じではないのでしょうか」「その言葉に、他の侍女たちも頷く。

同類。

愕然とするリューネリアに、傍で話を聞いていた二ーナも信じら

れないといった顔をしている。

パルミディアではあまり褒められるべきではない社交術が、ヴェルセシュカでは華やかに展開していること、もはや一の句が告げられなかつた。

「ですが、殿下がリューネリア様に向ける眼差しは他の女性に向けるものとは別物ですよ」

安心させようと思つたのか、もう一人の最年少の侍女であるバニースが頬を赤くしてつけ加えた。

すると周囲の侍女たちも色めき立つて同意する。

「もう、なんていうのか……、見ていろ」とうが恥ずかしくなるほどですから

「そうそう、思わず叫びたくなりますわ」

口々に言われ、リューネリアは顔が引きつる。

確かに、ウイルフレッドは人目も憚らずに触れてくる。ちょっと待てと言いたくなるほどだ。それを、身の回りの世話をしてくれる侍女たちに見られているのだ。王宮内の情報を網羅している侍女たちの口から、仲がいいという噂をばら撒くためとはい、顔から火が出そうなほど恥ずかしい。

真つ赤になつたリューネリアに、再び侍女たちが恥ずかしげもなく言い始める。

「わたし、もうリューネリア様を尊敬しますわ。ただでさえお美しい殿下に見つめられて平氣でいられる人なんて、そつそついやらないですもの」

「あら、それはもう慣れていらっしゃるのではないのかしら」「そうですわよね。毎日寝起きを共にされているんですけどの」

ほうっとため息をつきながらの発言である。

そうなのだ。

朝、彼女たちが起つて来るのだが、大抵、その時もリューネリアはウイルフレッドの腕の中で眠つているのだ。眠る時から起きる時まで解放されることはない。これは毎日だ。

その状態を毎朝、起こしに来る彼女たちに見られているのだから、もうそれだけで勘弁して欲しいところだ。こんなことを口に出して言われると余計にでも恥ずかしさが増す。

背中にじわりと嫌な汗が浮かぶ。

余裕の笑みでも浮かべていれば上等なのだろうが、真っ赤になつた顔でそんなことをしても意味はない。

そんなリューネリアを二ーナは氣の毒そうに見て、空になつてたカップにお茶を注いでくれた。

どんどん過激になつていきそうな話に、どうにか軌道修正を加えなければ、とリューネリアは考える。

「と、ところで、その三人の方々はどういった方なのかしら？」

もちろん、彼女たちなら知つているだろう。

聞いたところによると、ミレス公爵夫人は三十歳近くの美女で、やはりヴェルセシユカ国王の姪だつた。つまり、ウィルフレッドの従姉になる。ソーウェル侯爵令嬢は騎士団に所属し、銀髪の美しい女性で、同性からも絶大の人気があり、話をしながら侍女たちも頬を赤く染めていた。ヴァーノン子爵夫人はもともと商家の娘で、見初められて子爵家に入つたというだけあって、美しくそして聰明な女性ということだ。

頭の中で、それを記憶に留めておく。

いつか出会う機会があるかもしれない。

その時の対応も考えておかなければならないだろう。

だが、そのいつかは思いのほか、リューネリアが対応を考えるよりも早くに訪れてしまった。

昼食後、侍女と護衛の騎士を伴つて、いつものように執務室へと向かつていると、ちょうど目的の部屋から出てきた女性がいた。侍

女ではない。金の髪を結いあげて、青いドレスに身をつつんだ女性は、リューネリアに気づくとそれは綺麗に微笑した。年のは二十代半ばぐらいだろうか。結いあげた髪にはドレスと共に布で作った飾りがさしてある。

扉の前で侍女と別れた後、彼女は立ちふさがる護衛の騎士を手で制すと、リューネリアの目の前までやって来た。

「「きげんよう、リューネリア様」

軽く膝を折つて挨拶され、リューネリアもそれに答える。
一応、王子妃であるリューネリアの方が身分は上のはずである。
それでも護衛の騎士たちが彼女に従うということは、彼女もそれなりの身分のある者 王族に連なる者であろうか。しかし、ヴェルセシュカの王族の顔は全て覚えているので、はじめてみる彼女は王族ではないはず。

訝しんでいると、青い瞳を煌めかせて彼女は名乗った。

「「コーデリア・エルシー・ランスと申します」

告げられた名に、息をのむ。

ウィルフレッドの恋人の一人で、パルミーティアへの最も有力である人質候補を娘に持つ女性だ。

執務室の扉の前にいる衛兵たちも、ウィルフレッドの恋人たちの噂を聞いているのだろう。引きつた顔をしている。どうやら間違いはないようだ。

護衛の騎士も一応控えてくれてはいるが、彼らの身にまとう空気が冷ややかなのは気のせいではないはず。

それでも彼らに恐れも見せず、「「コーデリアは堂々とした態度を崩さない。

「ずっとお会いしたいと思つておりましたのよ」

ウィルフレッドの恋人と言われているわりに、リューネリアに対して敵愾心を見せてているようには見えない。むしろ青い目を輝かせているのは好奇心のように見える。だからだろう。騎士たちも迂闊に二人の間に割り込める機会を逃してしまっているようだった。

どう答えていいか迷っていると、そつと両手を取られた。

「少し、お時間をいただけません？お茶を」「一緒にしましょう」

近くに寄った彼女からは、花のような良い香りがした。

「あの、ですが今から殿下の手伝いを……」「

彼女の本意がつかめず、湧き上がつてくるのは警戒心だ。遊びだと割り切っているとはいえ、それはやはりウイルフレッドだけかもしれない。

警戒していることが伝わったのか、彼女はニコニと微笑んだ。

「では、お許しをいただきましょう」

そう言うなり、手を握られたまま執務室へと身体の向きを変えた。さすがに制止しようとした騎士たちを留めたのは、今度はリューネリアだった。彼女は一応ノックをして、中からの返事も待たずに扉を開け放つと、慣れたようにつかつかと部屋に押し入った。

「殿下。妃殿下をお借りしますわね」

部屋にはウイルフレッドとエリアスがいた。二人とも、挨拶もなしに用件だけを告げたコーデリアの行動と、彼女の背後で手をつかまれているリューネリアを、時が止まったように固まって見ていた。完全に事態がのみ込めていない顔だ。

「では、失礼しますわ」

許しもなにも、一方的にコーデリアは告げることだけすると、略式の礼をする。

「お、おい。待て！」

ウイルフレッドがさすがに慌てて立ち上がった。

「待ちませんわ。さ、行きましょう」

言い置いて、ぐるりと向きをかえて部屋を出でていこうとするコーデリアに、有無を言わせず連れ出される。無情にも扉は背後で音を立てて閉まつた。

状況がのみ込めていない騎士たちは、付いてこよつとしたがすぐに執務室の扉が勢いよく開き、動きを止めた。

「ちょっと、待て！」

珍しく声を荒げてウイルフレッドが追いかけてくる。

「別に取つて食おうといわけではありませんのよ。すべてお返しますわ」

楽しそうに「コーデリアは笑い、歩むことを止めない。

そんな二人の慣れたような言葉の掛け合こと態度に、やはり彼らは特別な関係なのだと窺つことが出来る。

リュー・ネリアは心を決めると、ウイルフレッドを振り返つてから告げた。

「ちょっと行つてきます」

大丈夫だと思っていた。

軽く頷いて、取りあえず「コーデリアについていく」とした。

残されたウイルフレッドは呆然としたまま見送ることしか出来ず、騎士たちは遅れを取りながらもコーデリアに連れ去られるリューネリアの後を追いかけてきた。

12・直接対決（口を出すつもりはないません）

王宮の来客用の一室に連れて来られたリューネリアは、目の前に座った美女を改めて見た。

確かに、美女と言える。黄金の髪は艶やかで、瞳は澄んだ青。艶やかな唇は自然な弧を描いて、笑みを浮かべている。表面的な美しさではなく、彼女は内側から美しいと思わせる何かがある。それは自信、だろうか。

「リューネリア様……、いえ。ネリア様とお呼びしても？」
故国では親しい者からは、そう呼ばれていた。

「ええ、どうぞ」

懐かしいと同時に複雑な気分だった。ヴェルセシュ力にきて最初にそう呼んでくれるのが、まさか夫の恋人にならうとは。
「では、私のこともコーデと呼んでくださいね」

「どこまでも有無を言わせない。

彼女が公爵家から連れてきた侍女だろうか。王宮の侍女とはあきらかに違うお仕着せを着た女性が運んできたお茶を、コーデリアが口に運ぶ仕草はどこまでも洗練されていて優雅である。確かに、ウイルフレッドと並んで立つとかなりの迫力のある美男美女になるだろう。

護衛の騎士たちは部屋には入れてもらえず、扉のすぐ外で待機している。何かあつた時にすぐに対応できるようにと、これだけは彼らも譲らなかつたのだ。

取りとめもないことをぼんやりと考えていると、カップを皿に戻したコーデリアがやんわりと微笑した。頭の奥で警鐘がなる。この類の笑みは、決して表面と内面が一致しないことをリューネリアは知っていた。

背筋を正し、コーデリアを見つめる。話がしたいと言つたのは彼女の方なのだ。彼女が口を開くのを待つしかない。

「殿下からお聞きしましたわ。ネリア様は私達にとても理解がありだと」

すばり、正面からきた質問に、うつかり口を開くことは出来ないと頭の中で計算する。

「私達……、というのは具体的にお聞きしても？」

「あら、いやですわ。噂でお聞きになつてゐるでしょ？」

「……ええ。聞いてあります」

別に隠すことではないし、ここで肯定しなければ、この手の人間が相手だと話が堂々巡りをする恐れがある。

リューネリアは一步引いて頷いた。

満足げな笑みを浮かべたコーデリアは、ゆつたりとソファにくつろいでいる。

「でしたら、ネリア様は殿下に對して何もお思いにならないのですか？」

顔には笑みを浮かべたまま、こぢらを窺つ瞳は真剣だ。

「思う、とは？」

握りしめた手の指先が冷えていくやうだった。

まるで両側が崖になつた一本道を歩いている心境だ。一步でも間違えたら、何か取り返しのつかないことになりそうな、そんな予感がする。

その為には、一步一步、一つ一つを確認しなければならない。

「……嫉妬なさらない？」

ふふと笑うコーデリアに対し、リューネリアはきつぱつと言ひ切つた。

「ウイルフレッド様の主義に口を出すつもりはありません」

「それは余裕からおっしゃてる？」

「余裕とは何に対してもう？」

内心、怖いと思つ。こんなやりとりを正面切つてやることになるとは。だが、王子妃という立場上、勝ち負けはないにしても、舐められるようなことにだけはなつてはならない。地位と権力を手に入れる為にも、だ。

「あら、それは私達とネリア様では立場が違うではありませんか。それに、殿下もネリア様を大層大切にしていらっしゃると噂されますし？」

「ではお聞きしますけど、あなた方はわたくしに対して何を思つていらっしゃるのですか？」

それは常々聞いてみたかった。

ウィルフレッドは遊びだという。ならば、彼女たちも本当にそうなのだろうか。もし、そつなら彼女達は恋人であるウィルフレッドの本妻のことを見破っているのだろう。

「世間一般でしたら、嫉妬……という言葉が相応しいのかもしれませんけど……」

そこで、ふふっと、彼女は笑つた。

「残念ですけど、噂など信じるつもりはありません」

それは、どういう意味だろう。

ウィルフレッドがリューネリアを大切にしているという事を信じないということか。それほど自分達に自信があるのか、それとも仮面夫婦だということを見破られているのだろうか。内心焦る。

だが、こんなところでつまづくわけにはいかないのだ。

「コーデ様は何があつしやりたいのかしら？」

相手の真意を探らなければ。

嫌な汗がジトリと背中を流れしていく。妙に喉が渴いた。

ピリピリとした緊張感が増すこの場では、それは彼女も同じだつたようで、コーデリアは目をすつと細めると、ふと視線をテーブルの上に漂わす。自らのカップに手を伸ばしかけ そして、視線だけはピタリとリューネリアのカップの上で止めた。

「……ネリア様は、お茶に手を付けられませんのね」

ふと気づいたように「コーデリアは咳いた。一瞬、それが彼女の素の顔になり、カップを手に取らないままソファに座りなおした。

リューネリアは結婚してからは、特に毒に対してだけは気をつけた。決めた場所以外では必要に迫られなければ飲食物は口にしないようにして、食器類も出来るだけ銀食器を用いるようにしている。銀はある種の毒に対してだが反応が分かるのだ。これだけで、多少は予防することが出来る。

「申し訳ありません」

気づかれてしまえば不愉快に思われるのは承知の上だ。その場合は素直に謝罪を口にするようにしている。

すると、今まで彼女から発せられていた刺々しい雰囲気が、まるで嘘のようにフツと消えた。

「ごめんなさい。試させてもらつたの」

田を伏せるように謝る姿も美女は絵になるな、と何気に思つて聞き流すところだった。

「え、試す？」

何を、と呟く。

「あなたがどこまで」自分の立場を理解しているか……を

つまりそれは、単に政略結婚でやつてきたリューネリアが自分の身の危険を理解しているかということか。

「コーデリアは申し訳なさそうに説明をしてくれた。

休戦の条件とはいって、政略結婚でやつてきた王女が、あまりにも安穏と過ごすにはまだヴェルセシュカには危険が潜んでいる。守つてもううのではなく、自らの身ぐらいで守るうと氣をつけるぐらいの危機感をもつている者でなければ王子妃は務まらない。だから、本当ならウイルフレッドの主義など否定して、わずかでも危険と思うものを遠ざけるべきだと考えて欲しかつたらしい。

「つまり……ウイルフレッド様から恋人たちを遠ざけないのが不満なのですか？」

突き詰めて考えればそつなつてしまつるのは気のせいだらうか。

しかし、目の前の人是一体、何を言つてゐるのだろう。その恋人の一人なのではなかつただらうか。

「いやですわ、ネリア様。 嘩など信じるものではござりませんわ」

先ほどと同じ意味合いの言葉を口にしたコーデリアは不敵な笑みを浮かべる。

「あの？」

「ここだけの話ですけど、私達、別に殿下の恋人であると自ら公言してはおりませんのよ？」

「え……、でも……」

「私達の夫や父親が議会の有力者だと言えばおわかりかしら？」
さらりと言い放つた一言に、リューネリアは確かに議会の主要メンバーにウィルフレッドの恋人と言われてゐる人たちの家名があつたことを思い出した。

「……なぜ？」

「戦争なんてしたい女性はどこにもおりませんわ」

王族は戦争を反対してゐる。多くの議員たちは戦争の再開を望んでいる。ならば、どちらを支持するか。分かり切つたことだ。それに、彼女の子供は、パルミディアへの人質候補だ。人質としてパルミディアへ行き、もしも戦争が始まつたらその人質の運命は一つしかない。子供の身を案じない母親などどこにもいないだろう。

「殿下は、『自分に議会と直接渡り合えるだけの力量がないことをご存じでいらっしゃるわ。だから、周囲から攻めることにしたのです』

つまり、議員の家族、それも、女性たちだ。

もともと華やかな女性遍歴をもつっていたウィルフレッドは、その噂の影で議会の家族と連絡を取り合つていたのだ。

「ですけど、もうそろそろ限界ですわ。ですから

」

「一テリアは、極上の笑みを浮かべた。リューネリアさえ見惚れてしまつような。

「私達、王子妃に乗りかえよつと思つてますのよ?」

「はい?」

何を言われたのか分からなかつた。

乗りかえるとは、何を?

「先ほど試させていただいた時も思いましたもの。ネリア様との緊張感のある会話……。とてもゾクゾクして……素敵でしたわ」

うつとりとした顔で言われ、返答に困る。

「ですから、もう殿下の恋人などとは言わせませんわ。私達、ネリア様をお守りするためにも、お側にいることをお許しくださいますよね?」

やはり、どこまでも有無を言わせないようだ。

しかし今、一テリアが言つたように、議員の有力者の家族が側にいると言つことは、確かに危険な目にあつ確率が低くなる可能性はある。その逆も然りだが、ウィルフレッドが側に置いておいた人たちだ。信用できるだろう。

「わかりました。わたくしもこちらのこと学ぶべきことがまだあります。教えて下さると助かります」

「ええ、もちろんですとも」

テーブル越しに手を取られると、ぎゅっと握られた。

本当にこれでよかつたのだろうかと、リューネリアは一抹の不安が胸に残つた。

13・新規事業（気になるところがあつて）

リューネリアがヴェルセシュカにきてもうすぐ三か月、 ウィルフレッドと結婚して二か月が過ぎようとしていた。

その日の午後、 いつものように執務室で書類を分けていたリューネリアは、 ふと一枚の書類に手を止めた。

最近は、 決裁書類と再考書類の量が増えてきた。 それだけ確認を取り書類が減つてきているということなのだが、 いつだつて例外といつものはある。 それに首を傾げつつ、 気になつて取りあえず抜き出しておく。

ウィルフレッドに決裁書類と再考書類を渡し、 エリアスと確認書類を一枚一枚目を通していく。 すべて見終わつて、 再び決裁書類と再考書類をウィルフレッドに渡していると、 先ほどリューネリアが脇にのけていた書類をエリアスが手に取つていた。

「これは？」

「ああ、 それなんですけど、 少し気になるところがあつて」
確認書類とも少し違つような気がして調べてみたいことがあると告げると、 エリアスも頷いた。

「そうですね。 少し確認して参りましょう。 先に休憩をしていて下さい」

エリアスは、 書類を見ながら執務室を出ていった。

その背中を見送つたウィルフレッドは、 一人分からず首をひねる。

「なんだ？」

リューネリアは茶器の準備をしながら説明をした。

要はザクスリュム領の領主から、 今年の納税額を減らして欲しいという嘆願書だったのだが、 理由の一つに昨年の不作を上げていた。 「ザクスリュム領つて、 ヴェルセシュカの北方のヤドヴィガ山脈の

麓にある領ですよね？」

確認を込めて尋ねると、是と返つてくる。

「不作つてことでしたけど、どのような農作物を作つてているのですか？」

「いくらヴ・ルセシュカのことを勉強していても、まだ地方の特産物などまでは手が回らない。これでもウイルフレッドの執務を手伝つているため、そこから学ぶことも多いのですが。

ウイルフレッドは一考し、すぐに口を開いた。

「あの辺りは葡萄だな。はつきり言つて葡萄の木だらけだ。ザクスリュム産の葡萄酒は国内でも高値で取引されているはずだが」

「でしたら、不作つていうのは葡萄が……ということになりますよね？」

「そうだな。……それが何かおかしいのか？」

尋ねられ、リユーネリアは言葉を濁す。

少しだけ気になつただけで、勘違いかかもしれない。

お茶が入つたので、ウイルフレッドもソファの方へと移動してきた。

いつもは三人で休憩をするのだが、ウイルフレッドとリユーネリアが同じソファに腰かけ、向かい側にエリアスが座る。今は一人なのだから向かい合わせに座ればいいものを、当然のようにウイルフレッドはリユーネリアの隣へと腰を下ろした。

「私の記憶違いかもしれないのですけど……」

カップを持ち上げたまま、言つべきか迷う。あまりはつきりしないことを口にして、いらぬ心配をかけたくない。それにまったく関係なく無駄なことかもしれないのだ。

「いいから

軽い感じで促され、リユーネリアはお茶で口の中を濡らすと、隣のウイルフレッドを見上げた。

「昨年はまだヴ・ルセシュカにいなかつたのではつきりとは分からぬのですけど、噂でもとりわけ天候が悪かつたとか害虫が発生し

たとか聞かないんですよね。しかも収穫時期といえど、私達の婚約が発表されて、すでに休戦時期に入っていたと思うんです。それでいくと収穫手が足りないとかそういう問題でもないはずですね」
兵役で借り出されていた男たちも領地に帰っているはずである。

「まあ、そうだな」

ウィルフレッドの返事に、やはり首を捻るしかなかつた。

「だから、確かにことは言えないのですけど、不作の理由が思いつかないのです」

先ほどの書類には、不作の原因となる言葉が何もなかつた。だから、引っかかったと言つた方がいいのかも知れない。

違つたかなと思ひながら隣に座るウィルフレッドを窺うと、驚いたように見つめられていた。

「あの、何かおかしかつたですか？」

やつぱり間違つていたかなと思つてみると、ウィルフレッドはふつと息を吐き出し、肩の力を抜いた。

「いや、あの間でそこまで考へてゐるのか……」

感心した聲音に、リューネリアは慌てて首を横に振る。

「たまたまです。それにエリアスもすぐに気づいたようです」

本当に偶然だつた。普通なら再考書類に回してしたものだらう。

それに、何の説明もなく書類を見たエリアスも調べると言つていた。特別なことではないと思つたのだが、ウィルフレッドは苦笑してカップをテーブルに戻した。

「あいつは特別だ。……だが、妬けるな」

ポツリと漏らした言葉に、首を傾げる。

やける、とは何に対しての言葉だらうか。

むしろ、日頃からリューネリアの方がウィルフレッドとエリアスを羨ましく思つてゐるのに。

二人の間にある信頼関係は、リューネリアと二一ナの関係に近い。でも、リューネリアの仕事には二一ナは関われない。彼女は常に空氣のように寄り添つてはくれるが、彼らのように隣に立つて仕事を

することはない。リューネリアが間違った選択をしても一ーナは従うだけで、エリアスのように諫めることはしないだろう。

それがとても羨ましくあつても、逆に妬かれる必要がどこにあるのだろう。

言葉を待つていると、ウイフルフレッドは唇に微かな笑みを浮かべて手を伸ばしてきた。その手はリューネリアの頬に触れる。

「誰も見ていませんから仲のいいフリは必要ありません」

その手から逃れるように身をそらすと、カップのお茶が零れそうになつて慌てて皿に戻す。だがそれを見計らつていたのか、横から伸びてきた腕が、リューネリアの腰に回され寄せられる。

必要以上の密着は心臓に悪い。上半身だけでもと、腕を突つ張つてウイフルフレッドから遠ざかるうと試みる。

「冷たいな。俺から恋人を奪つておいて……」

突つ張る手の片方を取られると、笑みを浮かべたまま手の甲に唇を落とされる。

はあ、とリューネリアは嘆息する。

そうなのだ。コーデリアと初めて会つた日以降、王宮では新たな噂が上がつた。つまりリューネリアが夫であるウイフルフレッドの恋人を全員奪つたというものだ。不本意ながら、なぜかコーデリア他二人もリューネリアを気にいつてしまつたらしく、よく三人でリューネリアの私室を訪ねてくる。もちろん、今までウイフルフレッドに流していた情報も教えてくれる。だが、単にお茶をしに来ているこの方が多い。

それ以降、ウイフルフレッドは以前にも増してリューネリアに纏わりつくようになつてしまつたのだ。以前は人前で仲のいいフリを見せることと、眠る時にリューネリアを抱き枕代わりに眠るぐらいだったのだが、今は人前であろうがなかろうが関係ないのだ。

ウイフルフレッド曰く、対応に困つて慌てふためくりューネリアを見て楽しむことによつて、恋人たちを取られたことへの逆襲をしているらしいのだが。しかし実は影で、王子とその元恋人達が、王子

妃の取り合いをしているという噂もあつたりもする。

手の甲への長い口づけも、人がいないのをいいことにリューネリアは振り払う。しかしもう片手はしっかりとリューネリアの腰に回されているので、距離的にはまだ近い。

「もうつ、いい加減にして下さい」

赤くなりつつある頬を、これは怒りの為だと誤魔化すために声を荒げる。

「でもやっぱり、今思い出しても不当な扱いだつたと思うよ。夫である俺よりも先に「コーデ達に愛称で呼ばせるなんて」

目を伏せ氣味に、ため息交じりに呟かれる。それは、どこか寂しげに見えなくもない。

そうなのだ。この話を出されると弱い。

「コーデリア達とお茶をしている席に、ウィルフレッドが来たことがあつた。その時、皆がリューネリアのことを愛称で呼んでいるのを聞いて、ウィルフレッドが落ち込んでしまつたのだ。愛称で呼ぶたかつたら呼べばいいのにと言うと、皆と同じ呼び方は真似をしたみたいで嫌だと、さらに落ち込んでしまつたのだ。

あの後、機嫌を取るのが大変だつた。翌日から私室に籠つて執務をしなくなり、エリアスに何があつたのかを問い合わせされ、そんなことを口にするのも恥ずかしく必死でウィルフレッドの機嫌を取つた。あの時ほど、ヴェルセシュカにきて大変な思いをしたことはない。

ちなみに、ウィルフレッドはリューネリアのことをネリーと呼ぶことで納得した。リューネリアにしてみれば、あまりにも甘つたるい呼び方に恥ずかしさはこの上ないのだが。

なおも抱きこもうとするウィルフレッドに、もう一度腕を突つ張つて抵抗を試みる。当然、男の人の力には叶はずなかつたのだが、突如その拘束が解かれたことにより、ウィルフレッドから離れようと力を込めていたリューネリアの身体は、力を込めていた方向とは反対へと向かう。

小さな悲鳴を上げ、ソファに仰向けに倒れたリュー・ネリアが目を開けると、視界にウイルフレッドを認め、冷や汗をかく。

あまり嬉しくない体勢だ。頭の両側にウイルフレッドの両手が付かれているわけで。

「もう逃げないの？」

獲物を食べる前にいたぶる獣のようだ。

笑みを含んだその瞳を、リュー・ネリアは負けじと睨み返す。

「遊びはここまでです」

「じゃ、今からは本気で」

と、口づけが顔中に降ってくる。

「ちがつ、そうじやなくて、ちょっとウイルフレッド様！」

非難の声を上げると、扉がノックをされたのは同時だった。

当然お茶をしているものと思っていたのだろう。ニアスは返事も待たずに扉を開けて……閉めた。

「エリアスっ、助けなさい！」

扉が完全に閉まる直前に何とか呼び止めると、エリアスは入ってくるなりウィルフレッドを引き剥がしてくれた。正確にはウイフルレッドの後頭部を容赦なく叩いたのだが。

「いややつくのは夜にして下さい」

「邪魔をするな」

ウィルフレッドは叩かれた頭を撫でながら、それでもリューネリアから離れてソファに座りなおす。リューネリアも腕を取られ、起こしてもらひながらもエリアスの小言を受け止める。

「妃殿下もきつちりと教育なさることをお勧めします」

「……はい」

乱れかかった髪を直し、小さくなつてどこか納得いかないまま頷く。

もともとウィルフレッドの教育係だったのはエリアスだ。ウィルフレッドが仕事をこなすようになつてからは執務補佐官となつたらしいが、本来ならそのあたりの教育もエリアスの仕事の範疇だったのではないかだろうか。

それにエリアスは、リューネリアとウィルフレッドが仮面夫婦であることを知つている人間だ。どうしていやつくとこつ言葉が出てくるのか不思議だつた。

リューネリアはエリアスにお茶を入れる為に、そそくさと立ち上がり、それで、と促す。

エリアスはいつもの場所に腰を下ろすと、いくつかのメモ書きを見ながら報告を始めた。

「結論から言つと、昨年、市場に出まわつたザクスリューム産の新酒の葡萄酒の数は、平年とそれほど変わらなかつたとのことです。天

候不順もなく、害虫の発生も報告されていませんでした

「では、不作と言つのは偽りか?」

「一概に嘘だと結論づけるのは早計ですが……妃殿下はどうお考えですか?」

新たに入れたお茶をカップに注ぎ、エリアスの前に置く。

こうしてエリアスはリューネリアを試すことがよくあるので気が抜けない。こちらがどこまで理解しているのかを知るためなのだろうが、不意打ちで試験を受けさせられている気分になる。今回もそうだ。

だが、先程の報告からいくつか考えられることはある。エリアスからメモ書きを受け取り、考えをまとめるためにも口を開いた。

「昨年の生産高を平年と比べるわけにはいかないのでは? それ以前は長く戦争が続いていたから収穫は決して豊富ではなかつたでしょうし、昨年は働き手である男性たちが兵役を終えて帰つてきたにては、前年度と比べると確かに生産高は少ないのではないかと思いますけど……」

数字上のことだけで判断するのは難しい。現実は、いくつもの複雑な事情が絡み合つて思いがけないことが起こつている場合がある。こういう場合、本来なら取るべき行動は一つしかない。現地へと調査に行くべきなのだ。だが、リューネリアがそれを言うわけにはいかない。調査に行くにはある程度の人出と資金も必要になつてくる。だがそれに以上に、気づいてしまつたからにはリューネリア自身が赴きたいと口に出してしまつたからにはリューネリア自らフレッドやローネリア達の側を離れるということは、命を狙つて下さいと言つているようなものだ。

喉元まで出かかった言葉をぐつと我慢してウイルフレッドを見る。

「調査に行つた方がいいです」

必要以外の言葉を省く。

「……ザクスリュムへか?」

事が大きくなりそうな話に、ウイルフレッドは難しい顔をした。

一概に調査と言つても、いきなり国の上層部が動くわけにはいかない。まずは官僚でも地方査察を兼ねたものから始めるので、実際にウィルフレッドのところまで調査の結果が来るまでに時間はかかる。それにもし、官僚たちが見落としなどしようものなら再びこの案件がリューネリア達の手に触れることはなくなる可能性も出てくるのだ。

しかし 。

「ま、行かなければならぬでしきうね」

当然のごとくエリアスはいつと、カップを持ち上げてからチラリとリューネリアを見た。

「まあ一般的に考えるなら不作といつのは嘘なのでしきうが……。妃殿下は行きたそうですね」

エリアスには、調べてきたものの結果を見た時点で分かっていたようだつた。リューネリアが調査の必要性を言いだすことも。

無理だと思いながらも頷く。

「行きたいとは思います。けど……」

無理ですよね、と口にしようとした先をエリアスによつて遮られる。

「行かれますか？」

軽く言われ、思わずまじまじとエリアスを見つめる。

そんなに簡単なことではないはずだ。もしリューネリアが行くことになれば警備の面からして、いやそれ以前にザクスリュム領に行くべき正当な理由が見つからない。リューネリアは王子妃であり、王子の執務を手伝つていることでさえ特異なことであり、本来なら調査をするべき人間ではないのだから。

「ちょっと待て。ネリーが行くのは危険だ」

それまで黙つていたウィルフレッドがエリアスを止めた。

「誰が表立つて妃殿下が行くと言いました？」

ウィルフレッドの言をちらつとかわし、ニヤリとリューネリアに

笑つてみせる。

「妃殿下には当然、身分を偽って調査を行つてもらいます。その間の妃殿下の身代わりも必要でしょ。その上、警護もある程度は省きますので危険は承知して頂かなければなりませんが」

エリアスの提案は、リューネリアとつて身に危険が迫るかもしれないという部分を差し引いても魅力的なものだつた。だから答えたど決まつていだ。

「かまいません。行かせて下さい」

身を乗り出すようにして言つていた。

横から危惧の念を混ぜたような視線を感じたが、止める気配はなかつた。だから、引かなかつた。

「この目でヴェルセシュカを見たいのです」

嫁いできてからずつと、王宮から一步も外に出でていない。かつての敵国だつたパルミディアに、身内を殺された者もこのヴェルセシュカには数多きいるのだ。そのパルミディアの王女であるリューネリアが、治安が良いと言われている王都ライルの街にさえ、もしものことがあつてはならないと行かせてもらえなかつたのだ。この機会を逃せば、次はいつ出られるか分からぬ。

それに、ヴェルセシュカという国を見たかつたのは嘘ではない。今現在、リューネリアの手伝つてゐる仕事が直接影響を与えてしまふのはヴェルセシュカの民なのだ。彼らの暮らしへりを直接見てみなければ、細かなところまで気づくことも配慮すること出来ない。その判断一つで彼らの生活は変わつてしまふのだから、その責任の一端をリューネリアも担わなければならぬはずだ。

「殿下、どういたしましょ？」

自らが煽つておきながら、エリアスは当然のように主命を仰ぐ。リューネリアも隣の夫を見つめる。

その湖のような瞳が一瞬揺らいだように見えたが、すぐにウイルフレッドはエリアスを見て首を縦に振つた。

「いいだろ。だが、おまえも行くことが条件だ」

「わかりました。お任せ下さい。……良かつたですね、妃殿下」

エリアスにっこりと微笑して言われ、リューネリアは思わず隣にいたウィルフレッドの手を取ると、両手で握つて感謝を込めて額につけた。

「ありがとう！嬉しい……」

この時、ウィルフレッドがどのような顔をしていたかリューネリアは知らなかつた。当然、エリアスがそんな主君の顔を見て、吹き出しそうになつていることも知らなかつたのだが。

五日の中に全ての準備が整えられた。

査察隊として派遣される人員は、エリ亞スを筆頭としてその補佐官にリューネリア、あと護衛を八名ほどで構成された。ザクスリュム領まで馬車で往復六日。調査日数を七日とし、予備日を一日とつて全十四日の日程で行われる。

リューネリアがザクスリュム領へと行くことを最後まで渋っていたのは侍女の二ーナだった。王子妃であるリューネリアが実は城にいないということを隠すためにも、王子妃付きの侍女である二ーナが留守番であるのは絶対の条件だ。それが一番の不満だつたらしい。だが、ランス侯爵夫人であるコーデリア達の説得もあって、しぶしぶではあつたが納得し、留守の間のことも彼女達に協力してもらうことになった。

査察隊の護衛には騎士団に所属するソーウェル侯爵令嬢も入ることになつていて、これはウイルフレッドの手まわしだ。査察隊に女性一人、しかも実は王子妃ときては何かあつたときに困ることになる。他にもう一人、女性の騎士がついたとも聞いた。

身の回りのことに関して言えば、リューネリアは自分のことは自分で出来る。一国の王女として、普通ならばやつてもらつのが当たり前という育ち方をしていない。というよりも、それもすべて過去にしたある経験のおかげなのだが。

出発を翌日に控えた日の夜、寝台の上でリューネリアは一人で枕を背にして本を読んでいた。

すでに深夜だ。

ウィルフレッドはまだ私室にも戻つてきていらないらしい。査察が決まってからは、査察の準備と日頃の執務で、いつも以上の仕事量になっていた。だが、準備もすでに終わつたはずだし、もしかしたらエリ亞スと最終的な打ち合わせをしているのかもしれない。

今回の査察に行かせてもらつお礼をきちんと言いたかったリュー
ネリアは、明かりを落とさず本を読みながら待つていた。
どれぐらい待つていただろう。ウィルフレッド側の私室への扉が
静かに開き、明かりが灯つていてことまだ起きていることに気づ
いたらしい本人と目が合つた。

「まだ起きていたのか。明日は早いんだね」

「ええ。でもウィルフレッド様にお礼を言つてなかつたから……」

本を閉じて寝台脇のテーブルに置く。

ガウンを脱いだウィルフレッドはリュー・ネリアの頭上に視線を向ける。
くると、ちょっと驚いたようにリュー・ネリアの頭上に視線を向ける。
「染めたのか」

「はい。一ヵ月ぐらいしか持ちませんけど」

胸に垂れたひと房を手にとつてみると、黒かつた髪は明かりを受
けて暗いレンガのような色をしていた。お世辞にも綺麗とは言い難
い色だが、むしろ身を隠すにはいいかもしれない。ウィルフレッド
はよく黒髪を褒めてくれていたので嫌かもしれないが。

ぽんやりと思っていると、リュー・ネリアが手に取つていた髪を、
横から伸びてきた手がさらつた。

「これでネリーの身が守れるなら、かまわない」

そつとその髪の房に口づけられ、胸の奥が温かくなる。嫌がられ
なかつたことがなんとなくだが嬉しい。

その思いをそのまま笑みに浮かべると、リュー・ネリアは素直にお
礼を口にすることが出来た。

「ザクスリュム領へ行かせて下さつてありがとうございます」

「礼を言われるほどのはことはしていない」

「 ウィルフレッドの手からこぼれた髪が、ふわりとリューネリアのもとに戻つてくる。 」

「 でも嬉しかったんです。皆が言つよつに、身の危険を思えば王宮にいることが一番だと分かつても、この国を見てみたかった。それをウィルフレッド様は止めずに逆に送り出してくれた 」

「 そして少しためらつてからリューネリアは口を開いた。最近、常に思い、反省をしていたことだ。 」

「 ……私、この国に来た時は戦争を止めるのはパルミディアの為だと言いました。でも、これは一方的すぎました。ヴェルセシュカの為を思つても、それはする必要のあることだったんですね？」

「 ウィルフレッドの執務を手伝いながら、いつのまにかヴェルセシュカの国を感じていた。紙の上でのことではあつたが、そこにあるのはかつての敵国ではなく、確かにこの国で生活している人がいることを感じていた。そして、どうすれば民の為になつていくのかを考えていた。 」

「 その為に自分は何ができるか。 」

「 知識の上だけでヴェルセシュカを知るのではなく、実際に知らなければならぬのだ。目で見て、彼らと会話をして、触れ合わなければその先には進めない。 」

「 ウィルフレッドを見上げると、その静かな湖面のような瞳と視線が合う。頬を優しく撫でられて、間違つていなことを知らされる。 」

「 ネリー 」

「 名を呼ばれ、自然と笑みが浮かぶ。 」

「 理解してくれることが嬉しい。 」

「 ウィルフレッドはふと、自分の指に嵌つていた指輪を抜き取るとリューネリアに差し出してきた。 」

「 それは、ヴェルセシュカの王位継承権を持つ者のみが与えられる指輪。現在、この国には一人しかその指輪を持つ者はいない。 」

「 金で出来た指輪は部屋の明かりをうけて鈍い光を放つていて、 」

「 リューネリアは手を取られると、それを握られた。 」

「何かあればそれで身を守れ」

それがどれほど重要なものかリューネリアも王族の一人として知っている。ウイルフレッドのその気持ちは嬉しい。だが、それあまりにも庇護が大きすぎる。

たかが査察に行くだけのことなのだ。

「いけません。これを預かることなど出来ません！」

指輪の意味を知らない者はいない。この指輪を持つ者は持ち主と同等の権力を得る。そしてもし過ちを犯しても、裁けるのは本来の持ち主と上位の者のみ。この場合、王と王太子がそれにあたるだろう。

しかし何かあつとしても、この指輪を持つていたところで相手が権力に弱い相手ならいい。リューネリアを守る即効性はある。だが、どうにかしてリューネリアを亡き者にしようとしている人間だとこれは意味がない。むしろそうなった時、無くしてしまう方が恐ろしい。持ち主に与えられる権力は絶大なものだ。

返そうとウイルフレッドの手を取つたが、そのまま手首を取られる。

「無事に帰つてこい」

その声はひどく真剣で。

リューネリアに反論を許さず、頷くことしか出来なかつた。

指輪を握つた方の手首を引き寄せられ、ゆっくりと近づいてくる

ウイルフレッドの口づけを口を閉じて静かに受けた。

慣れとは恐ろしいもので、これぐらいならリューネリアも感謝の気持ちがあつたため油断した。

最初こそ軽く啄ばむよつないつもの口づけだつたが、再び押しつけられた唇はいつもより強く、そして長く、すぐに息苦しさを感じる。やつと解放されたと思うと、今度は角度をかえて今までになく深く……。

「ウイル……っ」

わずかな隙をついて止めようと名を呼ぶ。

だが、いつの間にか片手を背中に回され、お互いの距離がもうないほど密着していた。

口内に感じる自分のものではない存在に、意識」と絡め取られる。ウイルフレッドの身体を押しやるうにも、すでに腕に力が入らない。

ようやく解放され、上がった息で見上げた視線の先は、寝台の天蓋が張られた天井だつた。

心臓が早鐘を打つていて。上がる息つかいが耳に煩い。

その心臓の真上に温かい感触を感じて、ふと視線を下げた。

肌蹴た夜着から白い肌がのぞき、二つの膨らみのちょうど中央辺りに、ウイルフレッドが口付けていた。

「あ、のつ」

息をのみ、慌てて身をよじつてウイルフレッドの下から抜け出すと、肌蹴た夜着の前をかき合す。

「あの……」

何か言わなければと思いつつも、言葉が出てこない。真つ赤になつて口づけると、ウイルフレッドは息を吐くように笑つた。

「それもお守りだ」

それ、と言われ、一瞬なんのことか分からなかつたが、すぐに思い当たり、前をかき抱く腕に力がこもる。

「……」

どうしていいか分からず、かといつて視線を合わせられずに座つていてると、すいっと足を引っ張られて、バランスを崩したりユーネリアはウイルフレッドのいつもの定位置、つまり腕の中に戻つていた。

身を固くし、勇気を振り絞つてそっと視線を上げると、いつものようにに臉に口づけが落とされる。

「おやすみ」

まるで何事もなかつたかのように、欠伸を一つするとウイルフレッドは目を閉じた。

リューネリアはいまだ手の中に握ったままだつた指輪を無くさないよう、少し考えた後枕の下に入れると、ゆっくりと目を閉じた。とても疲れそうになかったが、それでも明日のことを考えているといつの間にか眠りは訪れていた。

馬車は一台用意され、一台にはリューネリアとエリアスが乗り、周囲を騎馬で護衛が固めている。もう一台には荷物と、騎士達の身の回りの世話をお任せつかつたロドニーといつ少年が乗つてゐる。もともと彼は従騎士で、常日頃は騎士団長について騎士になるべく学んでいるのだが、その騎士団長が何故だか八名の護衛のうちの一人として同行している為、大任を仰せつかることになつたらしい。しかも今回やらされることは小姓としての仕事で、いわゆる雑用係だ。

ソーウェル侯爵令嬢のロレインも護衛の中にいた。

馬車の窓から騎乗の彼女の姿が見える。いつして見ると、騎士の紺色の制服に身を包んだ彼女は確かに凜々しく、麗しい。銀の髪を一つにまとめ、その艶やかな髪が馬の動きにあわせて背中で踊つてゐる。侍女たちが嬉しそうに頬を染めて噂話に花を咲かすのも分かる気がした。

「リリア。気分が悪くなるようでしたら我慢せずに言つてくださいね」

目の前に座つてゐるエリアスが書類を見ながら言つた。

リリアといふのは、リュー・ネリアの仮の名だ。

当然、エリアスの補佐官なのだから呼び捨てである。

気づくと胸の上に手を置いてゐる。どうやらそれが気分を悪くしていると思われた要因だと気づき、手を下ろすがすぐに確認してしまつ。

昨夜、ウィルフレッドから預けられた指輪を鎖につなぎ、首から下げてゐるのだ。指に嵌めるには大きすぎ失くす恐れがあつたからだが、無暗に人目に晒すのも良いことにはならないだろう。ちょうど指輪は胸の中央辺りにあり、襟の開いていない服の為、鎖さえ見

えない。

ちなみに、今朝服を着替える時に侍女たちの意味ありげな視線を感じ、思わず見てしまった。今現在指輪がある場所 ちょうど心臓の真上あたりに、ウイルフレッドによつてつけられた赤い痣をお守りといつたが、何に対してもお守りなんか頭を傾げる。服の上から指輪を確認するということは、その痣の上にも手を置いているわけで、その点は複雑な心境だが、それでもウイルフレッドが心配してくれる気持ちを嬉しく思つてしまふ自分もいた。いや、決して胸に付けられた痣が嬉しいわけではないのだが 。

道中、不穏な事はなく、三日後リュー・ネリア達はザクスリュム領エピ村に到着した。

エピ村は周囲を葡萄畠に囲まれた、のどかな田舎の村だ。領主の館からは、四方にまばらに広がる民家を見渡せる。丘陵は次第にヤドヴィガ山脈へと連なる山へと向かい、途中まではその斜面にも葡萄の木が整然と並んでいる。

初夏の葡萄畠は緑が茂り、それだけでも美しい。そして、もともとヴェルセシュカという国の気候自体が、どちらかと言えば夏でも乾燥していく涼しいのだが、このエピ村の気候は王都ライルよりも北に位置するためか、またはヤドヴィガ山脈に近いためか、さらに冷涼だった。遠くに見える峰には夏でも溶けきらないほどの雪が残つてているのだろう。白い輝きを望むことが出来た。

査察の間、リューネリア達は領主の館に滞在することとなつている。

ザクスリュムの領主とは言つても、この度の査察に訪れたのは、ザクスリュム北方の地方領主だ。もともと広大な土地を有する領主は大抵が貴族で一年の大半を王都で過ごしている。なので、代わりに数人の領主に土地を分けて治めさせていることがほとんどだ。本

来ザクスリュムを治めるべき領主であるイーデン侯爵も、地方領主から上がりつて来た嘆願をよく調べもせずにそのまま上に願い出たらしい。だから今回の査察の話には青くなつて、好きに調べてもいいが自分は関係ないとまで言つてきた。その話を聞いたリュー・ネリアたちは呆れてものが言えなかつたが。

地方領主は三十代の半ばほどの瘦身の男だつた。名をコンラッド・アディントンと言つた。

栗色の髪の鋭い目つきをした男で、どこか人を寄せつけない雰囲気をしていた。それはどこか薄ら寒いものを感じさせ、リュー・ネリアの本能に何かを告げる。

しかも出迎えで最初に対面した時、査察官が若いエリアスだと分かること、明らかに態度が高慢なものへと変わつた。エリアスも単に、エリアス・グウィルトとしか名乗つていない。確かに家名から貴族ではないことが知れたが、だからと言つて査察官として来た人間を蔑ろにする貴族はいない。一概には言えないが、大抵の貴族は心づもりのつもりか、査察官を丁寧にもてなすことが多いのだ。

リュー・ネリアもエリアスに紹介された時など、思わず笑顔が凍りつくかと思えるほどじろじろと見られ、補佐官だと分かると話す相手にもならないとばかりにその後は見向きもされなかつた。どうやら女だからだと見下しているようだつた。

一通り挨拶を済ませると、割り当てられた部屋へ一度荷物を置きに行くことにした。

それほど大した荷物はなかつたが、ロドニーが手を貸してくれたので一度に運ぶ。

彼は先月やつと従騎士の地位を賜つたばかりで、十四歳という年齢の割に顔立ちも幼く、身長もリュー・ネリアと同じほどだ。薄茶色の髪と同色の瞳は人懐っこく、他の騎士たちに頼まれた雑用も嫌がらず手際よく片付けていく。これぐらいの少年なら普通、従騎士

の地位を驕つて嫌がりそなもののだが、彼はどつやう苦労性の人間らしい。年も近い分だけあって気軽にあったのだろう。旅の道中もなにかと気づかってくれ、今も部屋へと荷物を運ぶ途中、ため息交じりに話してくれた。

「団長のジエレマイア様は人使いがとつてもひどいんですよ。あ、いや荒いって言った方がいいのかな。僕は小さい頃から団長の実家であるエーメリー家で働かせてもらっていたからそれなりに慣っていますけど」

エーメリー家は男爵家だ。そこで小姓として働いていたが、よく動くロドニーを騎士団長であるジエレマイアが気にいつたらしく。ロドニーも気にいられたのはいいが、こき使われていたと話してくれた。だが、彼からはジエレマイアに対する尊敬が言葉の端々から感じられ、本当に嫌がつてゐるようには聞こえない。

そのジエレマイアは現在、数名の騎士と警備の関係上、館の見取り図の確認と建物の周囲を調べに行つている。

「リリアさんも何か用がある時は言つて下さるよ。僕に出来る事だつたら何でもしますから」

荷物を部屋に入つてすぐのところに下りると、ロドニーは何かんだように笑つた。

「ありがとう。心強いわ」

彼は今から他の騎士たちの荷物もそれぞれの部屋へと運ばなければならぬらしい。今回の査察で、多忙を極めることを予告されている少年に、労いをこめて礼を告げる。

するとパッと頬を赤くして、ロドニーは慌てたように俯き、口早に退出の言葉を告げてから身を翻した。

まるで子犬のような少年を微笑ましく思いながら見送り、リューネリアは部屋へと入つた。

そこは意外にも日当たりのいい部屋で、じぢんまりとしていたが清潔感も漂つっていた。

窓からはヒピ村が一望でき、眺めも上々だった。

リューネリアがくつろぐ間もなく、すぐに部屋の扉がノックされ、返事をするとロレインが姿をあらわした。

「お疲れではありますんか?」

入ってくるなり胸に手を当てて敬礼しそうになるロレインに、慌てて駆け寄りその手を押さえる。誰が見ているか分からなし、何より、今のリューネリアは単なる一官僚といつ役割に過ぎない。

「大丈夫です。それよりも、あなたも少しごらりとゆっくりしても良かったのに」

ずつと騎馬で来ていたロレインは、断然リューネリアよりも疲れているはずだ。それなのに疲れなどひとかけらも見せない涼しい顔をしている。

それにしても、すぐに部屋へとくるとは何か心配ごとでもあるのだろうか。

怪訝に思っていると、ロレインが再び姿勢を正す。

「リリア様。念のため、部屋を調べさせていただきます」

丁寧に頭を下げる彼女に、慌ててそれを止めさせる。そして小声で囁く。

「侯爵令嬢が、単なる査察補佐官などにそのような態度を取られる方がおかしくありませんか?」

「いいえ、あの方より命を賜つてあります。出来る限りのことをする方が騎士としての私の仕事です」

誰からだとはつきり名前を出さないあたりが、ロレインの優秀なところだらう。それにどうやら態度を改めてくれるつもりはないらしい。

思い返せば確かに、コーデリア達とお茶をしていた時も、ロレインはどちらかと言えば無口な方であった。いつも遠慮がちな態度だったが、仕事となると彼女は一歩も引く気はないらしい。

仕方なくため息をつき、どうぞと部屋を調べる許可を出す。

「ロレインたちの部屋はこの近くかしら?」

「はい。おそれながら同じ階に用意をしていただきました。あとで部屋をお教え致しますので、何かあればいつでも声をかけて下さい」寝台の下や絨毯等をめぐりながら、頼もしいことを言ってくれる。確かに、今までどこに行くにも二ーナと一緒にいたのだ。本心を言えば、全く不安がないわけではない。

「ありがとう。心強いわ」

ロドニーには悪いが、ロレインの方が同じ女性と「」と正式な騎士というだけあり、数倍の安心感がある。感謝を込めて心より礼を口にした。

「出来るかぎり、リリア様のいらっしゃる部屋には私がバレンティナが控えます。どうぞ心おきなく仕事をなさつて下さい」

部屋を一通り調べ、不審なところはなかつたらしく一礼して部屋から出ていった。

さて、と再び部屋の中央へと立つ。そして荷物へと目を向ける。今夜は領主が査察官の歓迎の為の宴を用意してくれたらしい。

それなりの格好をしなければならないだろうが、今は単に査察官補佐といつ身分だ。王女のように身を飾らなくていいといつのは意外にも気が楽だった。

しかも染めた髪は茶色で、こつもの雰囲気と違う自分を見るのもなかなか楽しい。

荷物の中からドレスを出す。飾りの少ない簡素なドレスで、いつもリューネリアが日中に来て過ごす部屋着よりも生地の質はある。それでも、今の自由をありがたく思ってしまう。それもこれも、リューネリアを快く送り出してくれたウィルフレッドのおかげだ。リューネリアは胸に手をあてて指輪があることを確認すると、改めてきちんと査察官補佐としての仕事をしようとして、そつと心に誓つた。

17・不安要素（相談にのつてやるから）

翌日より領主の館の一室を貸し切り、エリアスと資料を繰る。

借りた部屋は一階の書斎で、それほど大きな部屋ではなかつたが、入り口を除いた全ての壁が蔵書で埋まつていた。中央に四人掛け程度の机が置いてあり、エリアスと一人で作業をするには充分な広さである。そこに必要な資料を運んでもらい、午前中はお互に必要と思われる箇所を抜きだしいく作業にあてた。

午後からは交代で村へ行き、村人から話を聞くことを予定している。

軽めの昼食を取つた後、リューネリアはロレインとバレンティナを伴つて領主の館から出ようとしたところ、騎士団長のジョレマ・エーメリーに呼び止められた。

今回の査察に、護衛として連れてきた騎士八人と従騎士一人のうち、リューネリアの素性を知つてているのはこのジョレマ・イアとロレン、バレンティナの三人だ。他の騎士は単なる査察官補佐としか思つていなかつた。もし、王子妃としてのリューネリアを王宮で見かけていたとしても、今は暗い茶色の髪に簡素な服なのだ。誰も王子妃だとは気づかないだろう。

「これから村へ行くのか？」

赤みの強い金髪を後ろに撫でつけてはいるものの癖が強いのか、寝ぐせのようにピヨコピヨコとはねていて髪は、いかつい顔をどこか愛嬌のあるものに見せてはいる。歳も三十を超えたぐらいだらうか。背も高く、リューネリアにとつては見上げるほどだが、威圧感はまったく感じさせない。むしろロドニーと同じように人懐っこささえ感じさせる。しかも、この度の査察は身分を隠してるので敬語を使わないでくれと頼むと、ニカリと笑い、仲間と話す時のような態

度で接してくれていた。

「はい。村の方達にお話を聞いてきます。あの、何かありましたか？」

笑顔で尋ねると、ジョレマイアは自分の頭に手をやり、ぐしゃぐしゃと髪をかき乱した。

「いや、用つてほじのことはないが……」

言ひづらそうに言い淀み、ちらりとリューネリアの背後にいる人に視線を送る。だが、一人がその場から動かないことを見て取ると、深々とため息を落としてから口を開いた。

「ちょっと聞くが……あんた、身の回りのことは大丈夫なのか？」
さぞ言ひづらいことなのだろうかと身構えていたリューネリアだつたが、思いがけない問いに自然と笑み崩れる。

「その心配をしてくださいたんですね」

本来、一国の王女として育つてきた姫ならば、身の回りのことはおろか、ボタン一つさえ止めることができなくともおかしくはない。それをジョレマイアは心配していたのだろう。そして後ろの二人を見たのは、きっと彼女たちの手を煩わせているとでも思つたのだろうか。

リューネリアは可笑しくて、思わず声を出して笑つた。

「ありがとうございます。大丈夫ですよ。一人で出来ます」

「そうか……。いや、もし必要ならロドニーを貸そつかと」

そう言いかけたところで、怖いものでも見たかのようにジョレマイアは一步下がる。

「エーメリー団長」

押し殺したような声を発したロレインが、リューネリアの一歩前へと出る。

「馬鹿なことをおつしゃらないで下せ。女性に男の小姓を付けるなど常識外ですよ」
「いや、そういうつもりで言つたんじゃ……、それにロドニーは小姓じゃなくて……」

従騎士 と声が次第に小さくなつていく。

ロレインは踵を返すと、わざと玄関へと向けて歩き出した。

「行きましょう、リリア様。こんなとこりでぐずぐずしていると田
が暮れてしまします」

ちらりと振り返つて、リューネリアを何気に促す。

「ロレイン。団長さんは心配して……」

あまりの態度にいさめかけた言葉を、前のジヒレマイアが止めた。
「いや、いい。……あまり遅くなつないつかりに帰つてもらえる
とありがたい。二人とも、頼んだぞ」

身体の向きを変え片手を上げると、まるで逃げるように去つてい
つた。

どうやら心配して様子を見に来てくれたようだ。多分、身の回り
云々は口実に過ぎなかつたのだろう。

ロレインとバレンティナも不器用なジヒレマイアの配慮に気づい
たのだろうか。リューネリアと視線を合わすと、思わずといったよ
うに苦笑した。

「そ、行きましょ」

リューネリアは今度こそ一人を連れて、館をあとにした。

リューネリア達と別れて報告の為に書齋へと向かつていたジエレ
マイアは、廊下に立ちすくみ俯いている少年を見つけ、慰めるつも
りで肩を叩く。

「まあ、あれだ。ロレインも悪氣があつて言つたわけじゃないんだ。
気にするな」

先程のロレインの声が聞こえていたのだろう。小姓と言われたこ
とに衝撃をつけ、落ち込んでいると思ったのだが。

「僕……リリアさんに小姓だと思われてるんですか？」
「は？」

思ひがけない言葉に、ジヒレマイアはまじまじとロドニーを見下

るす。

この少年がまだ自分の腰ぐらいまでしか背がなかつた頃からよく知つていて、まだまだ子供だと思っていたが、今の言葉から推測するに今頃になつて色気づいたのか。

ここは喜ぶべきなのだろうが、先程ロドニーが言つた名前に素直に喜べないものをおぼえる。

彼女の素性はたとえどんな事情があろうとも明かせるものではない。もしも何かあらうものなら、自分の命一つで償えるようなものでないことも承知している。

だが、ここで少年に初めて芽生えただろう恋心をこきなりほつき折つてしまふのも気が引けて、思わず唸る。

「いや、おまえが従騎士であることは知つてると思ひや?」
小声になりつつ、控え目な慰め方しかできない。

「でも僕は雑用しかまだ出来ないし、それに年下だし……」
言いながら次第に落ち込んでいく少年に、ジョレマイアは天を仰いで片手で顔を覆つた。

そんなことは問題にもならない。

彼女は王族で、雲の上の人間で、しかもなにより人妻だ。
最初からロドニーは失恋決定なのだ。

ジョレマイアの脳裏に、ふと第一王子の顔を浮かぶ。こういう時、あの王子がいればとも思う。この手のことに關しては、まず間違いなく上手く助言してやれる。しかし、今回はその王子の奥方がロドニーの初恋相手となるのか……。

髪をぐしゃぐしゃとかき回し、心中で悪態を吐く。なぜよりもよつて彼女なのか。

そもそも、ウイルフレッドは王族のくせに、エリート意識の高い近衛兵を警護につけたがらなくて 要は女性遊びをいさめられることが多くつたと記憶している 気さくな騎士団との付き合いを好んでいたところがある。パルミディアの王女との婚姻が決まった時でさえ、気楽に考えていたふしがあってジョレマイアでさえ心配

になつたほどだ。が、ここ数ヶ月の噂は一体どうしたものだらう。本当に第一王子自身の噂なのかと疑つてしまつたほどだつた。

その第一王子を骨抜きにした相手が一体どれほどの美女なのかと期待して、好奇心半分で今回の査察の護衛に願い出たのだが。

確かに清楚な雰囲気を持つた人だと思つた。今までの王子の趣味からはかけ離れた勤勉さも持つてゐる。まだ十七だというのに、会話を正確に理解しようとする慎重さも持ち合はせている。正直、あの第二王子には勿体ないほどの女性だ。しかも時々見せる、瞳に宿る強い光にジェレマイアでさえゾクリとするものを感じさせた。それは王族でも一握りの人間が持つ、何か、だ。思わず膝を折りたくなる。

彼女は普通の王侯貴族の女性と同等と考えてはならない。それを、ウイルフレッドが気づいたというのなら、入れ込んでいるという噂が本当だというのも頷けるものがある。あれはまるで稀少な宝石の原石だ。あの時折見せる清廉な輝きに心を絡め取られてしまう。手放すと一度と手に入れることは出来ないだろう。

それを考えると、絶対に相談できないし、してはならない。するべきではない。

深々と溜息をつくと、ジェレマイアは頷く。それでも一つだけ言えることがある。

「何にしろ、おまえが騎士になる努力を人一倍すれば、彼女に認めてもらえるんじやないか？」

これだけは確実だ。

たとえロドニーの恋心を叶えてやることは出来なくとも、騎士として彼女に忠誠を誓うことは出来る。その忠誠を彼女が受け取つてくれれば、ロドニーの望む形とは違えど、騎士としての本望は叶えられるだろう。

「そう、なのでしょうか？」

子犬のような眼差しを向けられ、ジェレマイアの良心が痛む。だが、ここはもう、首を縦に振るしかない。

「そりそり

まるで棒読みのようだった。

「そう、ですよね」

それでも次第に本来の明るさを取り戻していくロドニー、自分の無責任さを心の中で詫びる。

そして忘れてはならないことを一つだけ告げる。

「あまり早まつた真似はするなよ。何かあれば相談にのってやるからな」

自覚したのが昨今なら、まあおかしなことはしないだろうが、念のためだ。釘を差しておかなければならぬだろう。相手は人妻で、王子妃だ。そんな相手に何かしようものなら、知らなかつたで済む話ではない。

ジエレマイアは、もう一度ロドニーの肩を叩くと、今度こそ書斎へと向かった。報告事項が一つ増えたなど思いながら。

村の若い娘たちは、ロレインの風貌を見てみな我を忘れたように仕事の手を止めていた。

確かに太陽の光をあびた銀髪は美しく、澄んだ灰色の瞳もそれを納める顔も凜々しい。背もスラリと高く、男性と並んでも遜色はない。一方、バレンティナは薄茶の髪の柔らかい雰囲気の女性で、取つつきやすさはある。背も女性にしては高い方かもしけないが、それでも女性的な雰囲気は拭えない。一人がヴェルセシュカの王宮に仕えることが許された騎士にしか着ることが出来ない紺色の制服を着用しているものだから、目立つことこの上ない。そんな彼女らをつき従わせるリューネリアも、実はそれなりに注目を浴びていることに本人は気づいていない。染めた髪は太陽の下で、紅に近い茶色に輝き、その双眸は紫だ。日頃、日射しの下に出ることのない肌は抜けるように白い。目立たないはずがない。

村人たちの視線を浴びながら、三人は取りあえず村長の家へと向かうこととした。

昼食を取つたばかりだったのか、村長は庭先にいて古い倒木を椅子がわりにしてお茶を飲んでいるところだった。

天気がよく、確かに外にいるには少し暑い。だが、木陰に入ると山から下りてくる風だろうか。通り抜けていく風が冷たく心地いい。こちらに気づいた村長に、かすかに頭を下げる。

「すみません。査察の者ですがお話をつかがつてもよろしいですか？」

許可をもらつて庭へと足を踏み入れる。

リューネリアの背後から現れた騎士に、村長は何を思ったのかじつと目を向けた。

「そちらは……」

「護衛の者です。お気になさらないで下さい」

「警察官に護衛がつくのはよくある話だ。

知られたくないことがある時、人は一つの行動のうちどちらかを取ることが多い。それは決して褒められた方法ではないことを前提としての話だが、多くの場合が、袖の下を送ることだ。これが一般的で穩便な方法だの一つだ。だが、もう一つの、危ない橋を渡る方を選ぶ者もいる。それは、警察官自体を消すことだ。消息不明にしてしまえば、知られることがなくなると安易にも思っているのだ。その為、大抵の警察官には護衛がつく。だから、リューネリアが警察官補佐として護衛を連れているのも別におかしたことではないのだ。

リューネリアの言葉をどう取ったのか、村長は陰鬱な顔をして家中へと案内してくれた。

明るい日射しの下から、急に暗い屋内に入ったので一瞬目がくらむ。

だが、次第に慣れてくると、広々とした広間が入り口を入れてすぐ左にあり、右は生活空間ともいえる台所や小さなテーブルが置いてあるのが見えた。

「汚いところだが好きなところに座ってくれ」

汚いとは言われたが、古いだけで実際に汚れているわけではない。きちんと掃除も行き届いている。だが、村長宅と言われている割には家屋の痛みが激しいように思えた。大抵、こういう村では祭りとか村での決めごとがある時、集まる場所は村長の家だ。当然、それだけの人間が入れる空間がこの広間なのだろう。常に手入れもされているはずだったが、この家はそのように見えない。

リューネリアたちが広間の方へと向かうと、村長はお茶の準備をしてやってきた。

村長はジョナスと名乗った。歳は五十を過ぎた辺りだろうか。日頃から日にあたっているせいか、もう少し年にも見えなくはない。

「おまえさんがたは……その、王宮から来たのか？」

リューネリアが椅子に腰かけ、その背後に一人の騎士が立つ。

ジョナスは背後の二人が座る気がないのを見ると、声をひそめておもむろに尋ねてきた。

「はい。ウィルフレッド殿下より指示を受け、いひちの査察に来ました」

一介の査察官補佐が直接指示されたのではないにしろ、統括しているのは第一王子だ。今回の査察の責任は、全てウィルフレッドが負うことになる。だから、査察官としてのリューネリアもおかしな真似は出来ないのだが。

「じゃあ、わしの息子とは会つておらんのか？」

思いがけない言葉に、目を瞬く。

何故、ジョナスの息子の話が出るのか分からぬまま取りあえず頷く。ちらりとロレインたちを見たが、彼女たちも小さく首を横に振つた。

すると、ジョナスは見るからに一回り小さくなつたかのようにな垂れた。

「やはり無理だつたか……」

背中を丸め、頭を抱えたジョナスに、リューネリアはただ事ではない何かを悟る。

「何があつたのですか？」

わずかに身を乗り出して聞くと、ジョナスは肩を落としながら、それでもポツリポツリと話しだした。

「……戦争が終わつてからのことだ。大抵の兵士は兵役を終え余程のことがない限り、普通は生まれ故郷へと帰るだろつ。この村にも多くはないが無事だつた者は帰つて來た。だが、中には故郷に帰ろうとしない者もいるのさ。ただ、そのまま街に住みつき職を得るのならばまだいい。だがそうでない者たちの中には、ならず者として辺境の村に住みつくやつもある。やつらは平氣で盗みを働く。荒らす。奪う。……そんなやつらがあの……あの山に住んでるんだ」

「」からでは見えないが、ジョナスは一方向を指さした。その指先は、まっすぐと北に向いている。

リューネリアはこの村に来る時に見た山を思い出した。隣国との境になつてゐる、越すのも難しい山々だ。そこに住んでいるというのだろう。

痛ましげな様子の村長に、それでも聞かなければならぬことがある。リューネリアは躊躇いながら口を開いた。

「領主はそういう者たちを掃討しないのですか？」

当然、それは領主の仕事のはずだ。領民を守る義務があるのでから。

だが、ジョナスは力なく首を横に振った。

「領主もそいつらと結託して、甘い汁を吸つてゐるのさ」やつと身体を起こすと、村長は侮蔑を込めて吐き捨てた。

村長の発言に、一考する。

考えられないことではなかつた。だがそれと同時に、リューネリアの胸に苦いものが込み上げる。

こんなところにまで戦争の爪痕が未だに残つてゐるとは。パルミティアとヴェルセシュカが休戦したのは一年以上も前なのに。お互い自国のことと思つて取り交わされた政略結婚ではあつたが、これで少しほは国民が戦争に追われた生活をしなくとも済むと思つていたのに。国の仕出かした戦争の責任を少しでも負うことができるならと思つていたが、まだまだ現実は贅いきれていないのだろうか。

口から出てしまいそうな謝罪の言葉を胸に押しとどめ、リューネリアはさらに気になつたことを尋ねた。

「……その者たちはいつ頃から村に来るよつになつたのですか？」

「もう一年以上になる」

「それで、あなたの息子さんは何をして王宮へ？」

「直接、訴えに行つた」

最後の方は、すでに諦観がこもつていた。もう村長は分かつてい

るのだ。

地方の村の村長の息子が、王宮に行つたからといって簡単に役人が会つてくれるはずはない。本来なら、領主が仲介をしてくれる役割を持つ。だが、あの領主がそのようなことをするはずがない。もちろん領地の持ち主であるイーデン侯爵も面倒事は避けて通るタイプの人間だ。門前払いをされて終わりだらう。

「息子さんはいつこの村を発つたのですか？」

「もう五日になる」

ざつと逆算してみる。ジョナスの息子がこの村を出たのが五日前。王都に着くまで馬車を利用したとしても最短で三日かかる。ということは今日から三日前の夜か一日前の朝に王宮に着いたことになる。リューネリア達が王宮を出たのが三日前の朝。完全に行き違いだ。だが、仮にリューネリア達が王宮にいたところでジョナスの息子が来たことを知ることが出来ただろうか。

リューネリアは小さく首を横に振った。

きっと無理だろう。門前払いされてしまい会うことはおろか、リューネリア達の耳にも届くことはないだろう。だからきっと、今王宮にいるウィルフレッドへと話が届く可能性は限りなく零に近い。そちらは取りあえず保留し、もう一つの懸念を確認する。

「息子さんが村を出たことを領主は知っていますか？」

「いや、多分まだ知らないはずだ。夜、人目につかないよう出て行つたから」

随分な警戒のしようだ。そのならず者というのは、かなり性質の悪い手合いなのかもしない。

「わかりました。私達も出来る限り力になります。あなたも領主や他の人に息子さんがいなくなつたことを出来るだけ隠して下さい」

あの領主に知られるのはあまりよくない気がする。

ならず者たちと領主が結託しているとすると、村人たちに危険が迫る可能性がある。いや、もうすでにあるのだろう。でなければ、

ジョナスの息子が王宮へ向かうことはなかつたはずだから。

心細げな村長に、リューネリアは力強く頷いて見せる。

「あなたも今までどおりの生活を心がけて下さい。でも、もしあなたの身に何か危険があるようでしたら、今私に話したことを持つて下さつて構いません」

「でもそうすると……」

「大丈夫です」

安心させるように笑い、椅子から立つた。

こうしてはいられない。話は見えてきた。危険だが領主の館に戻つてエリアスに相談しなければならない。

「貴重なお話をありがとうございました」

リューネリアはロレインとバレンティナを伴つて村長の家をあとにした。

だが真つ直ぐに領主の館へは戻らない。

どこに領主の目があるのか分からぬ。道行く村人に声をかけ、本来聞くべきだった葡萄の収穫についての話をする。数人に同じ質問をしたあと、やつと館へと足を向ける。

「ロレイン」

「はい」

背後にいた銀髪の騎士がすぐに返事をする。

「護衛の内、誰かを王宮への使いに頼めるかしら？」

「かまいませんが……領主に気づかれる可能性はあります」

「そうね。どうすればいいのかしら……」

先程から村人に話を聞きながらも、ずっと同じことを考へるがい案が浮かばない。焦燥に似た感情がリューネリアの心中を支配する。

「まずはグウィルト様に相談された方がよろしいかと思います」

「ええ、そうね」

村の中央に建つ領主の館を見つめ、返事をしながらも、館への道のりがやけに遠く感じられ、リューネリアは零れ落ちる溜息を止め

ることができなかつた。

護衛が八名しかいないものを減らすのは得策でないとエリアスに言われた。その場には騎士団長のジョレマイアも呼ばれ、彼の意見も同意見だつた。

領主が減つた護衛の数に何を思うか。ではどうやって王宮との連絡をつければいいのか、エリアスたちと策を巡らす。

朝には綺麗に整頓されていた書斎は、今は乱雑に資料が重ねてある。夕食後、部屋に明かりを灯し、話し合いを続けていた。部屋の前には騎士を配置し、誰もこの部屋に近づけないようにしている。

「一番良いのは、査察四日目に王宮との連絡をつける為に人が来ることになつてゐる。その時に護衛の者を入れ替え、人数を合わせのがいいんだろうが……」

ジョレマイアが顎を撫でながら口を濁したのは、きっとリューネリアが納得しないと思つたのだろう。

だがリューネリアとしても、村に被害を出さないようにするには、事をできるだけ水面下で運ぶようにしたい。王宮へ手紙を届けるといつ案もあつたが、それは絶対に領主の目に留まることになり、街道に出る前に握りつぶされかねない。そうなるとその手紙の内容を知られることになり、それだけは避けたかった。だがそうすると、やはり王宮からの連絡がくるのを待つしかなく、どうしても時間がかかる。

「あと三日も後のことになります」

眉根を寄せて訴えると、横からエリアスは同意ともつかない返事をする。

「まあ、そうですね。騎馬であれば一日もあれば王宮へと着きますが……」

だが、問題はまだある。今のところならず者たちの話は村長からしか聞いていないのだ。村人もならず者たちを恐れてか、エリアス

は昼の調査で何も話を聞いていなじようだった。だから、もつと詳しく確かめなければ何か対策を練るにしても、王宮への使いを出せないとエリアスは渋っているのだ。

そういつするうちに、窓の外は暗闇に闇ざわれていた。

結局、エリアスやジョンレマイアの言ひとおり、三日後にくる王宮からの連絡を待つまでの間に、村長の言つてのこと極秘に調べることになった。

村長の言つていたならず者が、一体どれぐらいいるのか。受けている被害はどのようなものなのか。

「ですが、リリアは明日よりこちらの屋敷で本来の調査を続けてもらいます。村へは私が行きますので」

領主の側にいることが必ずしも安全とは言えないが、もしもリューネリアが村にいる時にならず者たちが来た時のことを考えると、どちらが安全かは目に見えている。リューネリアの側には常に騎士が二人いるのだ。領主も何かをすることなどそう簡単には出来ないだろ。

「……わかりました」

本当は自ら動きたかつたが、このザクスリューム領へ来られただけでも感謝しなければならないことなのだろう。それをわざわざ危険に自ら飛び込んでいくことなど、ロレインやバレンティナのことを考えると出来なかつた。何かあれば彼女たちの責になる。それに、ウイルフレッドからは絶対にエリアスの言つ事を聞けと言われていた。

不満が顔に出ていたのだろうか。

「ご自分の身をご自分で守る自信がおりならなら止めませんが」
加えてリューネリアが自分の身を守る術をもつていないことも確認された。それは遠まわしに本来の立場を考えると言われているとしか思えなかつた。

知らず内に胸の上に手を置いて指輪の存在を確かめる。

先程まで燻つていた苛立ちや焦りが、ゆつくりとだが確實に消え

ていく。

一度、ゆっくりと息を吸つた。

「頼みます」

リューネリアは視線を上げ、正面から一人を見つめる。エリアスは一瞬息をのみ、胸に手を当てるとゆっくりと頭を下げた。ジェレマイアも目を見張り、揺らぐ身体を押しとどめるよう同じく胸に手を当てる。

彼らのその態度に、リューネリアは思わず苦笑した。そのような礼を受けるべき資格はないのに。

ザクスリューム領に来てからリューネリアの胸に生まれた疑念は、本人も気づかぬうちに静かに芽吹き始めていた。

19・暮色蒼然（誰が決めたのですか？）

視察二日目が傾き始めた頃、それは起つた。

領主の館で資料を読みあさっていたリュー・ネリアは、村から響いてきたざわめきにふと視線を上げた。

夕日の赤い光が窓から斜めに差し込み、リュー・ネリアの髪をいつそう紅く燃え立たせる。その一方、影は黒々と長く床に縫いつかれている。

資料を台の上に戻すと、窓に近づき村がある方向を眺めた。だが生憎、この部屋は一階でよく見えない。少し考えたのち書斎を出ると、扉の両脇に控えていたロレインとバレンティナが姿勢を正して問い合わせてくる。

「どうなさいましたか？」

二人は、いつもの時間より早くに出てきたリュー・ネリアに驚いた様子だ。

廊下には外の喧騒がまったくといつていよいよど届いておらず、嘘のように静まり返つていた。

書斎に鍵をかけると、リュー・ネリアは一人についてくるよつと書

つて、自分の部屋へと戻つた。

部屋の扉を開けると、喧騒がわずかにだが聞こえた。窓から村の人々が、道や畠を横切り、慌てふためき走り回つている姿も見える。ロレインとバレンティナもそれに気づき、表情を変えて窓際に寄つて來た。

仕事を終えて家に帰ろうとしていた村人たちが、馬で道を駆けていく数人の男たちに追いすがつている。馬上には馬から落ちそつくなっている女性の姿も見えた。

それは、村の一ヵ所で起きていることではなかつた。

女性を馬上に乗せている者もいれば、袋いっぱいの何らかの

多分、農作物や衣服を詰め込んだ　ものを抱えている者もいる。それは明らかに略奪の現場で。

リューネリアは一時、息をすることさえ出来なかつた。

「　ロレイン、バレンティナ！お願い……。すぐに行つて！　二人を振り返る。

だが、わずかな逡巡を見せたのち、ロレインが首を横に振つた。
「リリア様をお一人にすることは出来ません。どうしてもとおっしゃるならバレンティナを置いていきます」

言うなり、すぐにでも身を翻して出てこいつとするロレインに、
なおも言い募る。

「駄目です！私は大丈夫です。この部屋にいます。絶対に出ません。
だから一人とも他の騎士たちと行つてきて」

「しかし……」

「お願ひ！私の代わりに」

バレンティナを見上げると、彼女はいつも柔軟な笑みではなく
真剣な顔つきで頷いた。

「わかりました。行つて参ります。ですが、絶対に私たちが帰つて
くるまでこの部屋を出ないで下さいね」

それに頷き、それでもロレインはわずかに躊躇つていたが、リュ
ーネリアが急かすと出でいった。彼女たちも騎士だ。困つている人
を助けるのが仕事だ。

リューネリアは窓から村の様子を見守る。
何も出来ない自分が腹立たしい。

こんな気分になつたのは、四年前以来だ。

ヴエルセシュカとの戦争が激化し、一時期、リューネリアは戦場
の後方支援に回つたことがある。王族が戦場にいるだけで、兵士の
士気が上がるという理由からだ。その時もこんな気持ちにさせられ
た。

父親の教育方針は娘に絶対に武器となる物を持たせないことだつ
た。たとえ身を守るための基本的な技術さえ、教えてもらつことは

出来なかつた。だが、その代わりに馬術だけは仕込まれた。どんな危険からも逃げられるようにと、それこそ徹底的に仕込まれた。そのおかげか戦場で戦火が飛んで来た時も、王女であるリューネリアを逃そうとした兵士たちの足手まといになることはなかつたはずだ。だが、目の前で広げられる惨劇を自らの力でどうにかすることはなかつたはずだ。出来ないことは、戦時中も今も変わらない。何も出来ないまま、見ていることしか出来ない。

無意識に手を握りしめていた。きれいに手入れされた爪が、手のひらに食い込む。

その時、背後でカタリと音がして、部屋の扉が少し開く。

「誰？」

思わず声が尖つてしまつた。

今この場に、身を守るものは何もない。

ロレインたちには部屋から出ないと言つたが、部屋に入つてくる者については何も考えていなかつた。

息を潜めて、ゆっくりと扉が開のを見守る。

「リリアさん。ごめんなさい、脅かしてしまつて……」

うなだれるようにして姿を現したのは、ロドニーだつた。

リューネリアは思わず安堵の息を吐き出す。

「どうしました？」

「いえ、僕にはまだ何も出来ることがないので、ジエレマイア様とロレイン様に、こちらでリリアさんを守るように言われて……」

つまり一人が心配して寄こしてくれたのだ。

申し訳ない気持ちで、リューネリアはロドニーに入室を促す。

「どうぞ、入つて」

ロドニーを招き入れ、一応扉の外に誰もいないことを確認する。

「皆は村へ行つたの？」

「はい。馬を出しましたので、すぐに対応できると思います」

ロドニーも窓際に寄つて、村を眺めた。リューネリアも再び視線を村へと向ける。

調査をして分かつたことが何点かあった。

もともとザクスリュム領の地方領主であるコンラッド・アーティントンは、先の戦争で功績を上げ、一年前にこの領地をもらい受けた。それまではエピ村の村人たちも普通に税を納め、男手は少なくとも葡萄酒の生産高もそれなりにあり、戦時中といつにもかかわらず、割りと裕福な暮らしをしていたことが資料からは見て取れた。だが、コンラッド・アーティントンが領主となつてから、休戦となつたにも関わらず、村人の暮らしは悪くなる。一つは、コンラッドの横行。これはすぐに発覚した。お粗末なことに増税分と国に支払うべき領主の税金が一致していなかつたのだ。それともう一点は、村長が言つていたならず者が村人を脅すからだ。おびやか。多分、リューネリアが考えるに、もともとコンラッドとならず者たちには接点があつたのだろう。領主となつたコンラッドのザクスリュム領を、ならず者たちが根城にしたのだ。

絶対に許さないと思つた。

もともと戦争が起きたのは国の上層部の決断だ。運河の通航権を欲したのは商人と、商人の背後にある貴族だ。なにも農民やその他の民は望んで戦争などしたいなど思わなかつただろう。しかし戦争で一番迷惑を被つたのは戦争を望まなかつた民だ。それなのに功績を上げたからと領地を与えられ、拳句に領民を脅かす領主を許すわけにはいかなかつた。領主とは領民を守る義務があるはずなのに。

薄闇に染まる空の下、まだ喧騒は続いている。

と、ぼうつと一角がオレンジ色に染まる。

「まさか……」

思わずロドニーと顔を見合せた。

火をつけたのだろうか。

なんてことを、と呴き口元を押さえる。そして、ぎゅっと目を閉じる。これ以上、見ていられなかつた。

自分があの場に行つて何かができるわけない。足手まといになるだけで、結局は何もできないだろう。だが、何かができるかもしれない

ない。揺れ動く葛藤に、自分の立場が重石になる。

耐えなければロレイン達に迷惑がかかる。そして行く末は夫であるウィルフレッドにも。

だが、耳に届く悲鳴を聞いた瞬間、リューネリアは身を翻していった。

もう耐えられない。

「リリアさん！」

「の腕を掴まれ、引きとめられる。

「どこに行くんですか！？」

「何もできないかもしない！でも、このまま黙って見ていろ」となんて、私にはできないつ！

腕を掴んだ手を振り払おうとしたのと、ロドニーが声を出したのは一緒だった。一瞬、何を言われたのか分からず、動きを止める。「僕が一緒にいきますからつ。何もできないなんてことはありますからつ」

「でも……本当は、行ってなどいけないのに」

混乱して、自分が言っていることと行動が伴わない。二つの相反する思いにさいなまれ、リューネリアは身動きが取れなくなる。

だが、そんなリューネリアの瞳を覗き込むようにロドニーは告げた。

「誰が決めたんですか？人が助けを求めている手を取ってはならないと、誰が決めたんですか！？」

その言葉に、リューネリアは思わず目を見開いた。言葉が、その意味が、全身を強く打つ。

誰も決めたのではない。勝手に自分の立場に雁字搦めになり、勝手にそう思い込んでいた。

「行きましょう！僕がリリアさんを守ります」

リューネリアは、胸に込み上げてきた思いと、熱くなりかけた目を固く瞑り、唇を噛みしめた。

「ありがとう、ロドニー。……ええ、行きましょう」

震える声で礼を告げ、決意を込めて目を開く。

二人同時に身を翻し、扉を開けて勢いよく出ようとした

が、

リューネリアは扉の前にあつた何かにぶつかってよろけてしまった。

まさかもうロレインたちが帰つて来たのだろうか。

そう思つて、ぶつかつたものを一、三歩下がつたところで見上げ

た。

部屋は薄暗い。

だが、相手が明かりを持つていたので、すぐにそれが誰だかわかつた。

「……領主、殿」

白らが呟いた声が、ひどく乾いて耳に届いた。

20・絶体絶命(ゼヒツヒツメイ) (前書き)

暴力的な描写あり。苦手な方はご注意ください。

はつとじてリューネリアは頭を下げた。

「申し訳ございません。急いでおりましたので、ぶつかつた非礼を説び、この忙しい時に何の用だらうと思つたのです。さつさと用件を片付けて村に行かなければならないのに、と焦つてもいた。

部屋が薄暗いことに気づき、背後を振り返るとドロドロドニーが燭台に火を灯したところだつた。

「領主殿、村が大変なのです。すぐに館の兵を村に向かわせて下さい」

入口に立ちふさがつてゐる領主に、せめてもう少し横に避けてくれたら部屋から出ていけるのに気がばかりがせく。だが、リューネリアの言葉をあつさつと無視した領主は、自らの問い合わせた。

「グウィルト・査察官はどうぞ？」

つのる苛立ちを押さえつけ、溜息を誤魔化すように返事をする。

「　査察官でしたら、まだ村に行かれたまま帰つてきておりません」

きつとリリアスのことだ。剣は得意でないと言つていたが無事だろう。それに彼の周囲にもいつも護衛がついてゐるのだ。何かあるはずはない。

先程から自らこぞつて言つて聞かせていた。

「　どうか」

領主はそう言つと、無遠慮にもリューネリアの部屋に入つて來た。その態度に、リューネリアは密かに眉をひそめる。ロドニーも領主の行動に不審なものを感じてゐるのか、じりじりとリューネリアの側に寄つてきた。

普通、女性の部屋に遠慮もなく入ってくる男はいない。まして昼間ではないのだ。なお有り得ない。

しかし、ここは領主の館だ。不快に思いながらもリューネリアは

再度、領主に訴えた。

「領主殿。村に兵を」

「口づるさい補佐官殿だな」

どこまでも見下げた視線を向ける領主に、背筋が強張る。得体の知れない雰囲気に、やはり領主がならず者たちとつながっているのは事実だったのかと不安がよぎる。あの日、村長の家から情報を持つて帰つてからというもの、この件に関してはエリアスもジェレマイアも口を閉ざしたままだ。だから、リューネリアは詳しい話を知らない。

だが、嫌な予感だけはする。

「村人にはこのよつなことなど日常茶飯事だ。ある程度のことになると、瞑れば、やつらも命までは取らない」

軽々しく言い放たれた言葉に、カツとなる。

「でも、攫われた娘もいたわ！」

彼女たちの身を考えると、どうしても命が無事ならいいという考えにはならなかつた。

「数日後には村に戻つてくる」

それがどのような状態なのか、リューネリアも分からぬわけではない。命があればいいという話ではないのだ。

だが、なぜ今領主がエリアスを探しにここへ来たのかを頭の片隅で考える。

可能性として一番有り得るのは、村の現状の口封じだ。だからと言つて、王宮から来た人間を消すことはしないはずだ。もしそうなれば、もっと大掛かりな査察が来るのは知れている。

「今回ることは目をつぶれと？」

領主を見上げて睨むように問つと、満足げに口元を歪めて笑つた。

「なるほど。補佐官殿は話が早いようだ」

どうやら間違いではないようだ。リューネリアは背筋を正すと、正面から領主を見上げる。

「グウィルト査察官がそれを許すとは思いませんが」

「それはいくらでも方法はある」

鼻先で笑い、どこまでも小娘扱いをする領主に腹立ちは最高潮を迎える。

「の方は甘くありません！」

それはリューネリアよりもグウィルフレッドの方がよく知っているだろう。仕事に関して、エリアスは妥協をしない。容赦なく片付けていくのだ。それはこの一ヶ月間、側で仕事を手伝っていたリューネリアも見ていたことだし、周囲にも高く評価されていることだ。だが、領主は突然声を上げて笑った。

「だから方法はいくらもある」

「まさか……」

脳裏に最悪の事態を思い浮かべてしまった。

殺すというのだろうか。だからエリアスを探している。そこまでこの男は愚かなのだろうか。

だが、領主は意外にも否定した。

そして、一步リューネリアに近づく。ざわりとした何かが、リューネリアの本能に何かを告げる。

今まで黙っていたロドニーが、咄嗟にリューネリアと領主の間に立ちふさがった。

「いくら甘くはないと言つても、身近にいる者の頼みなら甘くならざるを得ないだろう」

一步一步近づいてくる領主に、一步一步とリューネリアも下がる。どう考へても対格差から、ロドニーも一緒に下がらざるを得ない。何を言つているのだろう、何をするつもりなのだろうと、リューネリアは前にいるロドニーの背に庇われながら、焦る心の中で必死に考へる。

「何を……

窓際まで追いつめられ、あと少しどうとうじろで領主は止まった。

その時、窓の外の喧騒が、一際激しくなる。

はつと窓の外に氣を取られたその直後、派手な音とともにこうづめき

声が上がった。

視線を戻すと、目の前にいたはずのロドニーが部屋の隅で崩れていた。意識がないのか、ピクリとも動かない。

「ロドニー！」

慌てて駆け寄ろうとしたが、領主の手によつてそれは阻まれた。腕をつかまれ、思わず睨み上げる。

「何をするのつ」

悲鳴に近い声は、得体の知れない恐怖のため、思つた以上にうわずつていた。

領主はそれに気づき冷笑すると、容赦なくリューネリアを床に引き倒した。背中を打ちつけ、一瞬痛みの為に息が止まる。だが、非常にまずい状況であることは頭では理解できていたので、どうにか痛みを我慢すると慌てて起きあがらうとした。

だが領主に、腕を床に押し付けられる。

「お前が査察官に泣きつけばいい。いくら査察官でもこれからおまえに起こることを思えば、黙るしかないだろつ」

リューネリアは出来れば想像したくなかった事態に、言葉を失つた。

結婚前の女性が身を持ち崩すことは禁忌だ。身分が高くなればなるほどそれは絶対といえる。現在、仮の身分で王宮勤めといふことになつてゐるリューネリアにしても、それなりの良家の子女であることには変わりなく、そのような女性が貞操を疑われては結婚できなくなる。だから、リューネリアがエリアスに口止めしろと言つてゐるのだ、この領主は。

なんて卑劣な。

それに本来の王子妃という身分から言つても、これは個人単位の問題ではすまされない事態だ。現実問題として故国であるパルミニテ

イアにも泥を塗ることになるし、夫であるウイルフレッドにも申し開きもできない。

リューネリアは渾身の力で領主の腕を押しのけようとした。だが、びくともせず、その抵抗さえ領主は面白にものでも見るかのように見下ろしている。

領主の片手でリューネリアは両手を拘束され、空いたもう片手に握られたナイフを見て思わず動きを止めた。

冷やりとしたものを心臓に当たられたような気がする。

ナイフが首元に押し当たられ、実際に冷やりとした感触に息さえできない。少しでも動こうものならそのナイフが簡単に皮膚を破り、血管を切り裂いてしまった。

だが、すぐに布の裂ける音と同時にナイフの冷たい感触は遠ざかる。領主はナイフを放ると、その手は容赦なくリューネリアのドレスを引き裂いた。

「いやつ、放して！」

コルセットのおかげで、直接肌を晒されているわけではなかつたが、それでも身体を撫でまわすおぞましい感覚と、首筋に寄せられた領主の唇に嫌悪を通り越して、吐き気を覚える。いくら身をよじつても、拘束は解かない。

助けを求めて視線をさまよわせた先にロドニーがいたが、ピクリとも動かず、領主が放り投げたナイフも当然手にすることができるない。

その時、ふと領主の動きが止まって、首筋をぞらりとした感覚が滑つていつた。そこにあるのは、指輪を通して聞いた鎖だ。リューネリアは思わず抵抗を止め、それが最後の救いとばかりに領主の反応を窺つた。

「この指輪はなんだ？ 恋人にでももらったのか？」

部屋の明かりに翳すように、鼻で笑つて眺めていた領主だったが、ふとその指輪に刻まれた紋章を見たのか、表情が変わった。

指輪にはヴェルセシュカの国章が彫られている。その指輪の内側

には第一王位継承者の地位を示す文字もある。

ヴェルセシュカの国旗には国章が用いられている。まがりなりにも戦争で功績を上げたのなら、少なくともヴェルセシュカの国章ぐらい見覚えがあるはず。この徵が意味することを知っているはずだ。

「これは……おまえは、一体……」

領主の驚きで見開かれた目が、リューネリアを見下ろした。

その時、領主の背後に音もなく忍び寄つた影を田の端に捕らえたが、それはリューネリアが声を上げる間も与えず、領主を殴り飛ばしていた。

「リリア様！」

廊下のどこからかロレインの声が聞こえた。

裂かれたドレスの襟元を、残つた布を寄せるようにして起きあがると、領主を殴つた人物を見上げる。

「あ……」

肩で息をしている金髪の男が、リューネリアを見下ろしていた。そしてすぐに自分の上着を脱ぐと、リューネリアの肩に掛けてくれた。そしてしつかりと前をかき合せる。

「どうして、ここに……」

だが、その問いに彼は答えず、床に蹲つて呻いている領主を無理やり立たせる。

「ロレイン。彼女を頼む」

廊下から入ってきた銀髪の騎士に声をかけると、ウィルフレッドはすぐに部屋から出ていった。

21・血口嫌悪（結局私は役に立たなかつた）

「ネリア様、お怪我はありませんか？すぐに着替えの用意を致します」

床に座り込んだリューネリアの傍らにて膝をつき、ロレインが気づかわしげに眼差しを向けてくる。

まだ部屋の外では喧騒が聞こえていた。

「待つて、ロドニーは？」

視線を巡らせて、部屋の隅に倒れている少年を見つける。まだ意識がないのか、全く動かない。だが微かに胸が上下しているところを見ると、生きていることは確認できる。

ロレインは近寄ると、素早く状態を見た。

「大丈夫です。脳震盪でしょう。あとで誰かを寄こします」
無情にもそのままにしておこうというのだろうか。多少の非難を込めて視線を向けると、ロレインはため息をついた。

「そのようなお姿を他の者に晒すなど、いらぬ噂のもとです」

言われて、状況を思い出す。

「どうして、殿下がここに？」

先程見たのは幻だったのだろうか。だが、今自分がはあつている上着はウイルフレッドのものだ。現実のはず。

しかしロレインは、乱れたリューネリアの髪を手で整えながら首を横に振る。

「その話は後ほど。立てますか？」

「ええ……」

ロレインに支えられて立ち上がるうとしたリューネリアだが、ほつとしたのか思うように足に力が入らない。ロレインの腕をつかんで何度も試みたが無理だった。

見かねたロレインはリューネリアの前に身を屈めると、

「失礼します」

そう言つて、リューネリアを背負つた。

申し訳なさでいっぱいになる。

「村はどうなりました?」

「殿下が騎士団を伴つてこられましたので、なりす者たちほじきに捕らえられるでしょう」

どうやら、先程の気を取られてしまつた外での喧騒はウイルフレッド達が来たからだつたのだろう。

リューネリアは今までいた階とは違つ上階の空いていた一室に連れて行かれた。扉を閉めてしまつと階下の喧騒は全く聞こえず、静まり返つた室内はすでに燭台に明かりが灯され、部屋の用意が整つていた。

ロレインにゆつくりと寝台に下ろされる。

「すぐにバレンティナが来ます。身なりを整えられたら、今日はもうお休み下さい」

「ですが、殿下は……」

はおつている上着を持つ手に力が入る。

「殿下は今からグウィルト様と今回の件の処理に入ります。明日にでもこちらに来て下さるよう伝えておきますので、それまでは部屋から出ないで下さい」

そう言つて、ロレインは部屋から出でていつた。すぐにバレンティナがお湯の入つた桶と着替えを持つてやつてきた。

お湯で浸した布を手渡され、リューネリアは領主の触れた場所を何度も拭つた。どれだけ強く擦つても気持ち悪さが取れなくて、見かねたバレンティナに止められるまで何度も拭つていたため肌が赤くなつてしまつた。

着替えも手伝つてもらつて、ゆつたりとした夜着を着ると、寝台に押し込まれる。

「まだ眠くないし、村がどうなつたのか教えて」

バレンティナは困つたような顔をしたが、このままではリューネ

リアが安心して眠れないと思ったのか、少しだけ教えてくれた。

彼女たちが村に着いた時、もうほとんど略奪は終わりかけていた事。そしてならず者たちの後を騎士団の人間が追つて行つたこと。村の損害はひどく、燃やされた家も数多く上る。

ロドニーのことも教えてくれた。

ロレインの診立て通り、軽い脳震盪だつたらしい。今は意識が戻つて、一応頭を打つたようなので様子見の段階だが大丈夫だろうということだった。

逆に、リューネリアも領主の暴挙を聞かれた。

だから口止めの為にされそうになつたことを話した。

バレンティナはその間ずっと手を握つてくれていて、痛ましげに話を聞いていたが、話が終わるとすぐに廊下へと続く扉に視線を向け一礼した。

「今夜もロレインと控えておりますので、何かありましたらすぐに呼んでくださいね」

そう言って身を翻すと同時に扉が開いてロレインが顔をのぞかせた。

「どうやら報告をしに行くようだ。一人が部屋から消えると、リューネリアはほつと息を吐いた。まだ胸元にある指輪を夜着の上から握りしめる。

あの時、ウイルフレッドはリューネリアを見ても何も言わなかつた。視線さえすぐに逸らした。あんなことがあって呆れられたのだろうか。嫌われてしまつたのだろうか。それはリューネリアをひどく不安にした。

ふとテーブルの上に置んで置かれているウイルフレッドの上着を見た。

寝台から下りると、ゆっくりとそれに手を伸ばす。

瞬間、涙が溢れ出していた。

今更ながらに、あの時の恐怖が蘇ってきた。全力で拒否してもびくともしなかった。両腕には今もなお力ずくで押さえられた痕が赤

く残っている。されるがまま、もしあの時、ウィルフレッドが間に合わなかつたらどうなつていたことか。考えただけでも田の前が暗くなり、足の力が抜けてしまった。

不安にかられウィルフレッドの上着を抱きしめた。涙が止まらない。

先ほどからずっと、どうしよう、といつ言葉が頭の中を駆け回っている。

たとえ何もなかつたとはい、領主に触れられた自分にウィルフレッドはきっと呆れただろう。結婚したからには身を守る義務が生じることぐらいいリューネリアも百も承知だ。だが助けられたとはいえ、あの瞬間だけ見れば抵抗していなかつたように見られていても仕方がない。

それに、もしもこのまま嫌われてしまえば、折角上手くいっていた協力関係もお終いだ。リューネリアの望むものは最悪、永久に手に入れられなくなる可能性だつてある。

渦巻く不安に押しつぶされそうになりながら、どれほどの時間そうしていただろう。

「どうした？」

いつの間にか、背後にウィルフレッドがいた。

驚いて見上げると、逆に驚かれた。

「なにを泣いてるんだ？」

床に座り込んだままのリューネリアの隣に跪き、ウィルフレッドは安心するようにとリューネリアの髪を優しく撫でる。

それが優しすぎて、リューネリアの涙腺はとうとう決壊した。

「最初は、こ、怖かっただんです」

リューネリアは鼻声で言つた。

「でも、結局私は役に立たなかつたと思うと悔しくて

半分、嘘をついた。

ウィルフレッドに嫌われたのではないかといふことは、どうにか言葉をのんで隠した。望んでいたのは協力関係であつて、好きとか

嫌いとかそのような安易な言葉で言い表せる関係ではないと思っていたはずなのに、ウィルフレッドとの距離感は思つてはいた以上に心地よく、だから今の関係が崩れてしまつことが怖かつた。

だが、ウィルフレッドは深く息を吐き出すと、床に座つたままのリューネリアを抱き上げた。その腕は温かくて、リューネリアは寝台に運ばれながらすぐそばに聞こえる声に耳を傾ける。

「役に立たないと思ったことはない。俺はいつもネリーに驚かされ、やらなければならぬことを教えてもらつていい」

「教えて……？」

寝台に下ろされ、布団をかけられる。

背を向けて寝台の端に腰を下ろしたウィルフレッドは頷いた。横顔を見つめたが、説明することはじよつとしなかつた。

「よかつた……」

それでも、どうやら嫌われたわけではないことが分かつた。あの時のウィルフレッドは無表情で怖かつた。だが今はいつも通りだ。気づくと、いつの間にか涙は止まっていた。

ひどい顔をしているに違いないと、涙のあとを拭おうとするとい、気づいたウィルフレッドにその手を止められた。

そのまま近づいてくる唇が、涙のあとをすくい取つていく。それはどこまでも優しくて、いつまでもその優しさに触れていたくなる。不安やあの時の恐怖が、薄れていく。

気づくと、離れていこうとするウィルフレッドに手を伸ばしていった。もう少しその優しさに触れていたくて、そのまま頬に手を添え、自ら彼の唇に自分のそれを重ねていた。

それは、ほんの一瞬。まばたきをするほどの一瞬。

目を開けると、驚いた顔のウィルフレッドが目の前にいて、我に返る。

「あ、あの……」

どうしてそんな事をしてしまつたのか、途端、混乱する。ウィルフレッドの頬から手を放し、顔を反らす。

「ネリー」

名前を呼ばれても振り向けなかつた。背中を向け、恥ずかしくて枕に顔を埋める。

きつと顔は真つ赤になつてゐるだらう。
もう一度名前を呼ばれた。それでも首を横に振ることしかできなかつた。

すると、首にかかつた髪を梳かれた。指先が触れ、無意識にピクリと身体が震えるが、露わになつた首筋に温かい吐息と唇が押しつけられた感触に、悲鳴を上げる。

首筋を押さえて身をよじると、のぞきこむウイルフレッドと視線が絡む。

「ネリー……」

甘さを含んだ声音に、身動きできなくなる。
いつものように顔中に降つてくる口づけに、リュー・ネリアはもう一度良かつたと呟いた。

口づけの合間にその意味を尋ねられ、本当の言葉を吐く。

あの時、ウイルフレッドが怖くて嫌われたのかと思つたこと。領主に触れられた自分が情けなくて、それがすごく不安だつたこと。ボソリボソリ話していると、黙つて聞いていたウイルフレッドが、最後に唇をふさいでその不安に蓋をする。そのまま深くなつていく口づけを受け入れようとした時、扉を叩く音で現実を思い出す。リュー・ネリアはハツとして、ウイルフレッドを押しやつた。

そうだった。ウイルフレッドはまだ仕事中で、自分の様子を見にきたに過ぎないのに。

状況的にまるで自分から誘つてしまつたよつて、無性に恥ずかしく居心地が悪かつた。

布団にもぐりこむと、ウイルフレッドは瞼に口づけを落とした。

「おやすみ」

いつものようにそれは腕の中ではなかつたが、不安はすっかり心の中から消え去つていて、久しぶりに落ち着いて眠れそうだと思つ

た。
せんやつと部屋から出でて、ワイルフレッシュの後の姿を眺めながら、やつじと顔を閉じた。

22・無我夢中（役に立たないと呟つたことはない）（前編）

ワイルフレッシュ視点です。

22・無我夢中（役に立たないと思ったことはない）

「いやつ、放して！」

遠くでリューネリアの悲鳴が聞こえた時、ウィルフレッドの中でのかが外れた。

ロレインやエリアスの制止を振り切つて、一人で駆け出す。腰にある剣を鞘ごと抜いた。

明かりの漏れる一室に音を立てないよう注意して覗きこむと、リューネリアに馬乗りになつた男が片手で彼女を拘束しているのが見えた。しかもドレスは無残にも裂かれている。下着の上にコルセットをつけている為、肌が直接晒されているわけではないのがまだ救いだつたが、ウィルフレッドの中に御しがた感情が膨れ上がる。

それでも気丈に男を睨みつけているリューネリアは、こんな場面であるにもかかわらず、今まで出会つたどの女性よりも気高く美しいと思つてしまつ。だが同時に、そんな目をしては駄目だとも思う。それは男を挑発する目だ。

息を殺して音を立てないよう素早く近づくと、リューネリアは驚いたように目を見張つた。

男に気づかれる間を与えず、鞘で殴りつけた。

我ながら、よく剣を抜かなかつたと息を吐く。

身を起こしたリューネリアは両手で胸元を隠しながら、こちらを見上げてポツリと言つた。

「どうして、ここに……」

信じられないものでも見ているような目で見られ、ウィルフレッドは自らの上着を脱いで彼女の肩に掛ける。しつかりと前を合わせ、他の男の目に触れさせないようにロレインを呼ぶ。

彼女なら、絶対にリューネリアを悪いよつこしないだろう。それだけの信頼はある。

ロレインがリューネリアの側に行つたのを見届け、ウィルフレッドは自分が殴り倒した男を見た。まだ蹲つて呻いている。だが、容赦するつもりは欠片もなかつた。無理やり立たせ、部屋から連れ出す。これ以上、リューネリアを他の男の目にさらさせん気はなかつた。まして、この男は彼女に何をしたのか。何をするつもりだつたのか。それを思つと、今すぐこの男の命を断ちたい欲求が渦巻き、ウィルフレッドは早々に身近にいた騎士に男の身柄を預けた。

エリ亞スが近づいてきたので、伴つて別室に移動する。

ロレインに、もつと静かで使われていない部屋に移動するように言つておいたので、早々と騎士たちの目に留まることはないはずだ。あとで彼女の部屋の周囲は、人払いもしておかなければならぬ。

「あの男は誰だ？」

ところで、とエリ亞スに尋ねると、呆れたよつに答えが返つてきた。

「あれが領主ですよ」

その言葉に、眉をひそめる。

ウィルフレッドたちが騎士団を伴つてこの村に来たのは、実は三日前に村長の息子の『テール』と名乗る男が、ヴァーノン子爵夫人に伴われてウィルフレッドに面通しをしたからである。

リューネリア達がザクスリュム領に行くことになつた時点では、どんな小さなことでもかの領地に関することなら話を通すように伝達していた。だが、王宮の門番はエピ村というのがザクスリュム領にあるということを知らなかつたのだ。また『テール』もザクスリュム領だということを口にしなかつたらしい。それで門前払いをされた『テール』は渋々引き下がり、王都をあてもなくさまよい歩き、どうしようかと途方に暮れていたところ、ある商店にザクスリュム産の葡萄酒を見つけた。嬉しくなつて店の者にその葡萄酒のことを話し、自分たちの村のことを話していた。実はこの商店というのが、とある豪商が営む店の一軒で、その豪商というのがヴァーノン子爵夫人の

実家だつた。ヴァーノン子爵夫人はこの商人たちの情報を頼りに、ザクスリュム領の噂を集めていたため、すぐにデールが引つかつたのだ。

ヴァーノン子爵夫人はデールから話を聞き、すぐに王宮へと連れて行つた。

そしてウィルフレッドの耳に入ることとなつたのだ。

それは、リューネリアたちが王都を発つて、四日目のことだつた。すぐに騎士団を動かし、その日の夕方には王宮を出発した。一日二晩、ろくに休みも取らずに馬を飛ばした。

その間、気が気ではなかつた。デールから聞いた話では、まともな領主ではないことがすぐに知れた。その領主の館にリューネリアはいるのだ。たとえ護衛がいようとも、何があるかわからない。やはり行かせるべきではなかつたと何度も後悔した。

デールがエピ村に起こつている話を持つてくるまでの三日間、ウィルフレッドは広い寝台に一人で眠つていた。隣にあるはずの温もりは無く、甘い香りもない。ピタリと身を寄せてくる彼女は安心しているのか、ウィルフレッドが多少の悪戯をしても目を覚ますことはない。

当初、彼女の命を狙つてくるものを警戒して、彼女を腕の中に包んで眠つていたが、いつの間にかその温かさに逆に安堵している自分がいた。だから、あと十日以上も独り寝なのかと思うと妙に肌寒く感じてしまう。

あの日、リューネリアがザクスリュム領へと出発する前夜、いつもなら必要以上の触れ合いを必ず拒絶していたはずなのに、珍しく抵抗することなく受け入れた。だからついつい調子にのつてしまつたが、もしも彼女があのまま拒否しなければ　いや、無理にでも恥ずかしがる彼女を自分のものにしていれば、と後々思わなかつたわけではない。だが、彼女が嫌がることを無理強いして、嫌われたくないという思いもあつた。

最初は政略結婚など仕事の一いつぐらいとしか思つていなかつたが、彼女を見ていると常に自分にできる最善のことをしようとする努力している。しかも、ヴェルセシュカが彼女にとつてどれほど危険な場所なのかも承知した上でなお、この国のことを考えてくれている。果たして自分は彼女ほどこの国の事を考えているだらうかと密かに自問自答して、何に対してなのか分からぬが負い目さえ感じた。だからこそ、そんな彼女を見ていて学ぶことは多かつた。

それが日常となつてくるのに大した時間は必要なかつた。いつしか目はリューネリアを追い、彼女の興味を引きたいと思い始めた。しかし、彼女の興味は仕事ばかりで、しかもリューネリアはウィルフレッドのことを博愛主義者だと疑わず、少しも嫉妬という感情を見せないことを悔しく思つていた。だから、理由をつけて彼女をからかうことで気持ちを誤魔化していた。その時だけは、自分を見てくれていたから。

だが離れていたわずかな間で、嫌でも思い知つてしまつた。

リューネリアのあの紫の瞳が自分以外の男を見るのが耐えられない。それがたとえエリアスであろうと、誰だろうと、自分だけを見て欲しい。

騎士たちがならず者を掃討してきたのは、ウィルフレッドが領主のもとからリューネリアを助けた後、それほど時間は経つていなかつた。

ロレンインとバレンティナにリューネリアに起こつた詳細を聞いて、いてもたつてもおられず、見かねたエリアスが事後処理を請け負つてくれたおかげで、ウィルフレッドは彼女が休んでいる部屋へと向かえた。

眠つているかもしれないと思い、静かに扉を開く。

すると、床に座り込む小さな背中が見え、そつと扉を潜つた。その背中がかすかに震えている。

「どうした？」

声をかけたのと、リューネリアが泣いているのを知ったのは同時だつた。どうしたものかしたもないだろうと、自らを叱責する。隣に膝をつき、弱々しく震える彼女を思わず抱きしめたくなる衝動を押さえ、伸ばしかけた手を彼女の頭に乗せる。

「なにを泣いているんだ？」

なぜ彼女が自分の上着をかき抱いているのかなどわからないま、すぐに領主のことを思い出して怖かつたのかと思い当たつた。彼女に何があつたのかを思えば、一人にすべきではなかつたのだ。いくら常日頃気丈な振る舞いをしているからといって、怖くないはずはない。

リューネリアはウイルフレッドが出したものと同じ答えを返してきた。しかも、彼女は自らを役立たずだと嘆いている。

なぜそんなことを思うのか。

床に座り込んだリューネリアを腕に抱き上げると、寝台へと向かう。

「役に立たないと思つたことはない。俺はいつもネリーに驚かされ、やらなければならぬことを教えてもらつている」
いつもそうだった。不甲斐ないと思つてゐるのは自分の方なのに。ウイルフレッドはゆっくりと寝台にリューネリアを下ろすと布団をかけた。夜着の姿を明かりの下で直視するには耐えられない。理性を保てる自信がなかつた。

「教えて……？」

彼女は不思議そうな顔をしていた。

じつと見つめられ、まるで理性を試されていふような気になり、背中を向けるよつ寝台の端に腰かけた。

彼女はただ一言、良かつたと呴き、涙のあとをぬぐおうとした。もう泣く様子はない。

ほつとしながらリューネリアの手を止めると、その頬に口づけた。口づけるだけの筈だったのに、涙のあとをぬぐへつと辿る。彼女の涙の一滴でさえ愛しいと思つ。

このままでは理性が焼け切ってしまいそうだと思い、なんとか自制をかけると惜しく思いながらも彼女から離れようとした。

だが、ふと頬に感じた手の感触に動きを止める。

離れたはずなのに、その距離は一気に縮まった。

押しつけられた唇の感触に、ウイルフレッドは呆然とリュー・ネリアを見つめる。

見るまに彼女の頬は赤く染まり、背を向けて枕に顔を隠してしまつた。

「ネリー」

名を呼んでも、彼女は頭を横に振るばかりだ。

だが、どうしても彼女の顔が見たかった。羞恥で赤く染まつた顔を見たい。もっとその瞳に自分を映して欲しい。

気づくと、彼女の髪をかきわけ、露わになつた首筋に唇を落としていた。

彼女が小さな悲鳴を上げて顔を上げる。当然、その隙を逃さない。

「ネリー……」

覆いかぶさるように彼女の額に、頬に、鼻に、瞼に口づけを落とす。

彼女が震えるような声で小さく、良かつたと呟いたのが聞こえた。何に対してものか、彼女の思う不安とは何なのか。先程の役立たず発言とは違う安堵をその言葉の中に感じ、彼女の全てが知りたくて訊ねていた。そして後悔した。彼女はいとも簡単にウイルフレッドの残りわずかな理性をも消し去つてしまつた。

彼女の囁きに近い告白。不安。

聞いた瞬間、その言葉を奪うために唇を塞いだ。そんな不安を与える気は毛頭ない。だが、同時に不安を感じてくれたことに対して仄暗い愉悦も感じる。

たまに遊び心で深く口づけると、彼女は全身を緊張させ拒絶を示す。

だが今は。

夢中になりかけた時、無情にも扉がノックされ「ウイルフレッシュ」を呼ぶ声が聞こえた。

途端、腕の中にいた彼女が全身を緊張させたのが分かった。慌てたように布団にもぐりこんでしまったのを見て、思わず舌打ちしそうになつた。

それでも協力関係を望んでいた彼女の心情に少しでも変化があったことを肯定的にとらえ、彼女の臉にいつものように口づけを落とす。

「おやすみ」

本当なら彼女の側についていてやりたいと思う。だが、領主の件にしても、まだ何一つ報告や村の被害状況など把握しきれておらず、今後の方針さえ決まっていない状態で投げ出そつものなら、彼女はきっと呆れて怒る。そして、仕事を疎かにする者を嫌うだろう。リューネリアに嫌われないためにも仕事をしなければならない。そして早く片付けて、もう少し彼女との関係を近いものにしたいとも思つ。

そう思つて、今は彼女から離れた。

23・事後処理（我儘を言つてゐるみたい）

翌日、馬車で二ーナが到着した。

ロレインたちに止められて出迎えることはできなかつたが、部屋に駆け込んできた二ーナは泣きそうになりながらリューネリアに抱きついてきた。そして着いて早々だというにもかかわらず、甲斐甲斐しく世話を始めた。

領主とならず者たちは、王都へと連行されることになつたと聞いた。本来なら領地を束ねるイーデン侯爵に裁く権利があるのだが、今回の査察の折にその件についても放棄していると見做し、第一王子の名のもとに現在はアディントンの治めていたこの地を差し押さえし、いざれは事が事なだけにこの事態に気づけなかつたイーデン侯爵の責を問い、アディントンが治めていた領地を取り上げる予定らしい。

領主の館にいた召使たちは解雇となり、騎士団が逗留するには人出が足りなかつたが、村人たちが下人の仕事ぐらいならと手伝つてくれている。その指示も二ーナが出さなければならなくなり、泣く泣くリューネリアの側を離れていった。

ロレインとバレンティナは相変わらずリューネリアの側にいる。今は二ーナが持つてきた衣装のため、リューネリアは完全に王子妃の装いだ。髪も、特殊な洗剤を二ーナが持参していたため、せつかく染めていた色は元に戻り、完全に黒髪になつていた。

その状態で丸二日。ウイルフレッドの指示で、リューネリアは一歩も部屋から出ることができなかつた。今まで護衛であったロレンたちが、今では完全に見張り役である。

当然、リューネリアの機嫌は悪かつた。

「どうして部屋から出でてはならないの」

査察は微妙な形で終わつてしまつたが、資料をまとめなければな

らない。これからアーティントンの罪を問つてしてもそれらは必要になつてくるはずだ。

ウィルフレッドもエリアスも、きっと先日の件で忙しいはずだ。ならば、もともと査察に関わっていたリューネリアがその資料を作つてもいいはずである。

「殿下の命です」

「リューネリア様。殿下は心配なさつておいでなのです」
ロレインとバレンティナは宥めるように何度も同じ台詞を口にする。

確かにウィルフレッドが心配するのも分からぬもないが、今この屋敷には騎士団の者たちばかりがいるのだ。なんの危険があるといふのだろう。むしろ、刺客のことを考えれば王宮よりも安全ではないだろうか。

「村の様子を見たいの。この部屋では村を一望できないわ。何も行きたいと言つてているのではないでしょ?」

引く様子を見せないリューネリアに、ロレインは大げさに溜息をついた。

「わかりました。では殿下に聞いてまいります。ですが期待しないで下さいね」

最後の方が、なぜか捨て台詞のように聞こえ、リューネリアは首を傾げる。

部屋からロレインが出ていつてから、バレンティナはもう耐えきれないとばかりに笑いだした。

今更だが、この二人の騎士は見た目もだが、性格も対照的で生真面目なロレインに対して、バレンティナは柔軟だ。あまり表情を変えないロレインに対して、バレンティナは表情豊かである。とつきやすさで言えれば断然バレンティナの方が上である。

しかし今は、バレンティナがなぜ笑っているのか分からぬ。リューネリアもロレインも、眞面目に話していたはずなのだが。

「どうしましたか?」

「いえ、すみません。ロレインがあまりにも過保護すぎるのがおかしくて……」

田じりに浮かんだ涙を拭いながらも、まだ完全に笑いがおさまりきっていないようだ。バレンティナは笑いながら理由を口にした。

「過保護？」

「ええ、リュー・ネリア様に対してもですよ？」

「私？」

どこが過保護なのだろうと首を傾げる。

「ロレインは殿下の気持ちがとてもよく分かるんです」

「……ウィルフレッド様の？」

意味が分からず、今度は逆の方向に首を傾げる。何故、ウィルフレッドの気持ちとロレインの過保護がつながるのだろう。元恋人であるロレインだが、その肩書は情報収集のための偽装であつて、事実でなかつたはずだ。しかしロレインは三人の元恋人の中で唯一の未婚者だ。ウィルフレッドと心を通わせていたと考えてみると、それならばどうしてリュー・ネリアに過保護になる必要があるのだろう。しかもロレインの性格を知れば知るほど、絶対にウィルフレッドの恋人になるような性格には見えない。そういう不誠実なことを一番嫌いそうだからだ。

考えてみるが明確なものは全く見えてこない。

仕方なく白旗を掲げる。

「先程も言いましたけど、殿下はとても心配をしてこちらに駆けつけて来られたんですよ。本来なら護衛も兼ねていた騎士団を差し置いて、騎馬で来られたと聞きました」

それがどれほど異常な事態で緊急を要していたのか、リュー・ネリアにも分かっていた。

王族というものは、そう簡単に王宮から移動できるものではない。行程に危険がないかを確認し、馬車の周囲を騎士か近衛が護衛する。危険は徹底的に排除されてからの移動となる。だが、ウィルフレッドはそれを無視してまで来たのだ。危険を顧みず。

それは本心より心配をしてくれたといつていただらうか。取り繕つた関係を周知させるのではなく。

そう考えると、心の奥底で甘美な疼きをわずかだが感じる。

だが、バレンティナが言うよいつな理由だとは思えなかつた。ウィルフレッドはどちらかといつと懲りで、できることなら面倒事から逃れたいと思つてゐるような面を持つてゐる。確かに最近はそれほどそのような所は見えなくなつてきたが、危険を顧みず駆けつけてくれる事を自分の為にしてくれたと思うほど、リューネリアは自惚れてはいられない。

「百歩譲つて殿下が私の心配をして来てくれたとして、ロレインが過保護だといつのは？」

「同じ理由ですよ。とてもリューネリア様のことが大切だからです」肩をすくめて言つ彼女は、さも当然だといつように見えた。

だがリューネリアには、それをとても居心地悪く感じてしまつ。大切にされるほどの価値は自分にはない。

良くしてくれるのは感謝しているが、期待されるほどのはできない。それが今回の事件で、よく分かつたのだ。

思い出して氣落ちしそうになつてゐると、バレンティナがといつで、と声をかけてきた。

「『百歩譲つて』といつのはどういつ意味ですか？まるで心配されていらないのが当然とつうように聞こえましたけど？」

にこりと笑つて言われ、はたと気づく。

そう言えど、ウィルフレッドとは仲の良いフリをしていたのだった。ここが王宮ではないので、つい気がゆるんでしまつてゐた。

「あ、いえ……、言葉のあやです。殿下に心配をかけてしまつたことを心苦しく思つてゐたので、つい……」

意味の通らない言い訳をしてゐると、ノックの音と同時に扉が開いた。

ウィルフレッドにつき従つよつにロレインも続いて入つてきて、バレンティナはリューネリアに一礼して、ロレインと共に部屋の隅

に控える。

出迎えようとした礼を取るのになると、近づいてきたウィルフレッドに、当然のように腕の中に閉じ込められる。

「ネリー、何を言つてロレインを困らせているんだ?」

「ちょっと、ウィルフレッド様!」

久しぶりの人前でのフリに、リュー・ネリアは思わず悲鳴を上げてしまつ。

そう言えばあの夜以降、事後処理に追われているウィルフレッドとは顔を合わせていなかつた。だから余計にでも自らの取つた行動を思いだし、一段と恥かしくなる。

なんとかして欲しいと思つても、一ーナや王子妃付きの侍女たちならばつかさず助けてくれるのだが、ロレインたちに助けを求めるにもこちらを視界に入れようさえしていない。それが正しい礼儀なののかどうかは別として、自分で何とかしなければならないのかと腹を括る。

「困らせてなど」

どうにかウィルフレッドの腕からのがれられないかと自らの腕をつっぱると、その拘束は簡単に外れた。意外に思つて見上げると、湖面のような瞳とぶつかる。だが、その瞳は真剣な光を湛えている。

「困らせてなどない? ロレインは駄目だと言わなかつた?」

「ですけど、村に行きたいと言つているわけではありません」

どうしてそこまで反対されるのかわからず、目を反らしてつい反論してしまつ。

ふうと吐息が聞こえ横目でちらりと窺うと、ウィルフレッドが部屋の隅に控えていた一人を下がらせたのが分かつた。こちらを見ていないくとも気配で察するのなら、なぜリュー・ネリアの助けに応えてくれなかつたのかと心の中で悪態を吐く。

二人が出ていつて、静かに扉が閉まると、ようやくウィルフレッドは口を開いた。

「村を見れば満足する? 見たら今度は行きたいと言わない? 復興を

手伝いたいと言い出さない？」

顔を覗き込むように言われ、リューネリアはウイルフレッドを見つめ返した。

次々に投げかけられる問いに、ウイルフレッドが何を言いたいのか分かつてしまつた。

人間は一つのことに満足すると、次々と欲望が沸いてくる生き物だ。それはリューネリアの中にも当然ある。

「それではまるで、私が我儘を言つてゐるみたいだわ。心配してはいけないの？」

「村は大丈夫だ」

素つ気なく言われ、まるでリューネリアの心配が無駄だと言われているような気になる。

頬が上氣するのが分かつた。

「だつたら、何も危険なことなどないでしょう！？」

なぜ分かつてくれないのかと、頭に血が上つて言い放つ。

三日前の出来事など、特殊なことだ。同じ建物の中を村が望める部屋へ移動するだけのことを、どうして頭^ごなしに反対されているのか、リューネリアには理解できなかつた。しかも一人ではない。ロレインやバレンティナも一緒にと言つてゐるのだ。

だが、目の前にある顔は傷ついたように歪む。

「……俺が領主の行動を聞いて、どれだけ心配したかわかつてゐるのか」

「助けてもらつたことは感謝してるわ。でも！」

「守らせてほしいと言つても？心配するのは迷惑？」

一瞬、何を言われたのか分からなかつた。

リューネリアが村を心配しているように、ウイルフレッドも自分を心配してくれているというのか。だつたら、なおのこと^氣持ちを理解してくれてもいいようなものだらう。

「なぜ駄目なの？大体、変でしょ。どうしてこの部屋から出でては行けないの？この館には、騎士たちがいるのでしょうか？だつたら危

「危険はないはずよ」

リコーネリアはウイルフレッドに近づくと、首のまわりに手をつと

その腕を押さえた。

村を望める部屋に行くことを除いても、間違ったことを言つてないはずだ。そして、リコーネリア自身を部屋に閉じ込めておくウイルフレッドの真意を聞くべき権利もリコーネリアにはあるはずだった。

じつと見つめると、ウイルフレッドの瞳がかすかに揺れる。

「……分かっている。だが、今は駄目だ」

吐き出す息と共に苦しそうに言われ、もう一度どうして駄目なのかを聞こうとした。だが、再びリコーネリアはウイルフレッドに抱き寄せられた。

背中に回された腕に、かつてないほど強く力を込められ、息苦しくて言葉が出せない。

「どうか分かってくれ。これは俺の我儘だ」

耳元で囁みしめるように吐き出された言葉に、リコーネリアはどうにか首を動かしてウイルフレッドを見上げる。だが、その瞳はきつく閉じられていてそこから何も窺つことができなかつた。

「……すまない」

謝罪の言葉と同時に解放され、思わずふらつく。だが、ウイルフレッドは身をひるがえすと、振り返ろうともせぬ部屋から出していく。あまりにも痛ましげなウイルフレッドの言葉を聞いたからか、リコーネリアはしばらく何も言えず立ちつくしていた。

24・流言飛語（好き勝手妄想中）（前書き）

ジョレマイア視点です。

ウイルフレッドと共にザクスリュム領へやつてきた騎士団の半数は、アデイントンとならず者たちを王都へ連行するのに随行させ、残りの半数 約二十名はエピ村にある領主の館に留まり、そのまま第二王子の警護と村の復興に当たることになった。

今回、アデイントンの行状で一つだけ、査察官補佐への暴行だけは結局伏せられることになったが、ジョレマイアとしてはその件についてではウイルフレッドに対して何の申し開きもするつもりもなかった。

騎士団長の地位を返上し、必要なならばこの命も差し出すつもりさえあつた。その代わり、ロレインとバレンティナへの罰を出来るだけ軽減してもらえるよう頼むつもりだったが、いつまで経ってもウイルフレッドは何も言つてこない。仕方がないのでエリアスから話を通してもらおうとしたが、返ってきた答えは査察官補佐に関しては、一切を口にすることを禁ずるというものだった。言われてみれば、アデイントンたちと王都に随行させた面々は、ジョレマイアとロレイン、バレンティナを除き、最初に査察隊に組み込まれていた者たちが選ばれていた。ロドニーに関しては、雑用係がいなければならないと判断されたのか、二ーナという侍女と一人で慌ただしく働いていて、とてもじやないが無駄口を叩く余裕などない。

そこでようやくウイルフレッドが、ジョレマイアの失態を不問にするという意図に気づいた。

ちょうど食堂で他の騎士たちから少し離れて食事をしていたエリアスを見つけ、ジョレマイアは田の前の椅子に腰を下ろす。

「なんの用ですか？」

いつも冷静沈着な執務補佐官は、地位で言えば騎士団長よりも上ではあるが、平民の出である彼は王宮にいれば悪しそうに言われる

こともあつたのだろう。決して馴れ馴れしく話そうとはしない。

堅苦しくはあるが、いちいち人の事情に口を突つ込む趣味は無い。

ジェレマイアは声を落として食堂を駆けずり回つていの二ーナを顎で示す。

「あれは、どういう設定なんだ？」

査察官補佐の存在を隠すということは、つまり王子妃がこの館にいること自体を隠したいと思つていいのだろう。実際、ロレインやバレンティナからそのような報告を受けている。王子妃のいる館の一角は、騎士団員たちの立ち入り禁止区域になつており、許可のあら人間しか出入りできない。当然、ジェレマイアも許可が無い為立ち入ることは出来ないが、報告だけは受けているので状況だけは把握しているが。

しかし、王子妃がこの館にいないことになつていて、なぜ王子妃付きの侍女がいるのか。その理由が必要だ。

エリアスはちらりと二ーナを見てから、何でもないことのようと言つた。

「妃殿下は、殿下のことを心配して自分の腹心の侍女を一人つかわしたのですよ」

しかしながら結局は侍女どころか下女の仕事までさせているのが現実だ。館にいた召使を全員解雇したのは痛かつたが、信用のない者を側に置く危険を思えば仕方のないことだろう。

だがここ数日、騎士たちの間で噂されていることを耳にして、ジェレマイアはやはりここは王子の耳にも入れておいた方がいいのではないかと心配になつた。判断しかねた場合は、まず執務補佐官の耳に入れておくにがぎるというのが王子に近しい者のやり方だ。

「今、立ち入り禁止区域のことを団員たちが禁断の間と呼んでいるのを知つているか？」

触れてはならない話題と云うのはある。今回の場合、王子妃のことを関してだ。

エリアスの表情がわずかに緊張するが、止める様子は取りあえずない。

「……いえ。それが何か？」

幾分、声の高さを低めたが、周囲から見てもそこまで変わった様子は見せない。

ジェレマイアは続けた。

「その禁断の間に入ることが許されている人間が女性に限られているというのに気づいたやつらがいてだな」

ピクリとエリアスの頬が動く。

そして、ゆっくりと立ち上がる。

「場所を移しましょう。詳しく聞かせて下さい」

言われなくとも、話すつもりである。

ジェレマイアも立ち上がり、エリアスについて外に出る裏口へと向かった。

厩舎へと続く道の途中でエリアスは立ち止まり、側に建つ領主の館の外壁を一度見上げた。

つられてジェレマイアも見上げて気づく。その場所の建物の中部は確かに階段となっている部分だ。嵌め殺しの窓があるだけで、今は人影もない。

さすが王子の執務補佐官という肩書がついているだけあって、機密事項に関する用心深さはジェレマイアが束ねる騎士たちよりも優れている。

ジェレマイアの感心を余所に、エリアスは両腕を組んでその壁に寄りかかった。

「で、その禁断の間がどうしました？」

冷ややかともとれる口調は、先程の噂の続きが王子に対する悪意を感じ取っているからだろうか。実際、ジェレマイアが話そうとしたことは、決して王子に対して気持ちのいい話ではない。しかし事

実を知つてゐるジエレマイアでさえ、完全に否定できない噂だから困つてゐるのだ。

ピエロピエロはねてゝる髪を撫でつけるように頭に手をやり、エリ亞スの直視から避ける。

「まあ、あれだな。うちの団員たゞは、結婚する前までの王子をよく知つてゐるからな。仕方ないだらう」

この執務補佐官は、日頃は第一王子のことを主を主とも思わない発言をしてゐるが、実のところ誰よりも恭順であることをジエレマイアは知つてゐる。この静かな怒りを買って、ただで済んだ者はいない。そして、その瞳が早く話せと促している。

この男はふだん冷静に見えてゐるが、意外と短気だ。

ジエレマイアは覚悟を決めると、仕方なく、言葉を選んで堂々と告げる。

「相手の素性は好き勝手妄想中だ。殿下が妃殿下に内緒で女性を囲つてゐると皆思つてゐる」

今更隠しようもない。

少なくとも、大げさにも言つてはいないし、嘘でもない。第一、ジエレマイアが困つたのは、女性を囲つてゐるといつのが嘘ではないからだ。

エリ亞スの反応を窺うと、先程と全く変わらない表情だった。いや、あえて言つなら、あまりにも強い怒りの為に動けないのだろうか。

辺闊に話しかけることも躊躇われて黙つてゐると、ふうっと息を吐き出し、小さな咳きが聞こえた。

「なるほど……」

夏だというのに、一瞬周囲の気温が下がったような気がしたのは氣のせいではない。

冷汗が額に滲むのも仕方ないだらう。この度の失態で、この命はないものと諦めていたが、今ここで失くすことに恐怖を感じるのは何故だらう。

「そのような愚かなことを考える者など、騎士でいる資格はないでしょう。この際、永久にこの村で復興を手伝つてもらうことにもしましようかね」

妙な脅しを言われても困るのだが、騎士団長としてその愚かなことを考える者が、ほぼこの館にいる騎士全員などとは口が裂けても言えない。二十人を一気に失つては、騎士団が人手不足になつてしまつ。

だがさつとエリアスのことだ。知ると必ず今言つたことを実行するだろ？

「分かつた。団員達にはおかしなことを言わないう、わいつく言っておく」

これ以上、噂話に花を咲かせないよう、対策も立てねばならない。「殿下の耳にも入れないよう、気をつけて下さー」

壁から身を起こしながら、エリアスが注意事項を追加する。しかしそれには、ジェレマイアも一度は頷いたものの、すぐに首を傾げた。

「なんでだ？」

今までの王子なら、そのような噂など一種の名聲だと言つて放つておいたはずだ。エリアスも見向きもしなかつたはずなのだ。

だがエリアスは、一瞬動きを止めると珍しく躊躇いながら口を開く。

「……殿下は現在、あの方のことに関して少し過敏になられているところがあります。しばらく様子を見てみますが……」

ジェレマイアが察するに、エリアスは少しと言つたが、そのことを口にしたこと自体、少しごこごではないことが窺えた。

「何か問題でもあるのか？」

聞いたのは単純な好奇心だ。

「いえ、もしかすると今後、あなたに力を貸してもらうことになるかも知れませんが……」

珍しく歯切れの悪い言い方に、ジェレマイアは興味を覚えた。そ

れと同時に不安も覚える。

「まさか、本当に閉じ込めているのか？」

自分で聞いておきながら、今まで疑っていたのかと自覚する。いくら大切だからだと言つても、それはやりすぎだ。

それにロレンたちからの報告でも、そこまでの話は聞いてない。立ち入り禁止区域を設けているのも、あのようなことがあったため念には念を入れて注意をしてことと、単に、妃殿下には部屋で控えてもらつてているとしか……。

おいおいと、ジョレマイアは唸る。

エリアスも、ウィルフレッドがリュー・ネリアに極度の執着を見せていることを懸念しているが、昔の王子しかしない者ならば現実としては受け入れがたい。しかし、騎士団長の力を借りるかもしれないといふことから、必ずしもそれは誇張されているわけではないのだろう。

自らの思いこみも手伝い、迂闊だつた。

「ああ、分かつた」

頷きながら、まいつたとばかりに、ぱりぱりと頭をかく。

「ですが、この事態はあの方にも責任がありますから。『自分で何とかしていただくつもりですが、長引くようでしたらその時はお願ひします』

エリアスの口ぶりから、本当にしばらく様子を見るようだつた。思わずリュー・ネリアに心の内で声援を送る。エリアスが手出しきないのならば、ジョレマイアも何かすることは出来ない。

話は済んだとばかりに、館内に戻ろうとしているエリアスの足音を聞いていて、ジョレマイアはふと顔を上げた。

「おい。一つ聞きたいことがあつたんだが

呼び止めるごとに、白金髪を揺らして顔だけがこじりて向いた。

「なんですか？」

「あの二ーナとかいう侍女だが、彼女の身元はどいつものなんだ

？」

濃茶色の髪を一つにまとめ、一日中館内を忙しげに駆けずり回っている侍女を思い出す。容赦なくロドニーを手足として使い、使われている本人もここ最近はぶちぶちと文句を言っているほどだ。

ジョレマイアの質問に、一瞬怪訝な顔をしたエリアスだったが、騎士団長としての身元調査と思つたのか、すぐに答えを口にした。「妃殿下がパルミテイアから連れて来られた唯一の侍女ですよ」不審なところはありませんよとだけ告げて、再び背を向けた。遠ざかっていく足音を聞きながら、ジョレマイアはその背に礼を告げ、そうか、と誰ともなしに呟く。

あの侍女が歩いている時、本来ならするべき足音が聞こえないことに気づいているのは、多分、まだジョレマイアだけだ。

それが何を意味するのか。

絶対的に妃殿下の味方ならば、もう少し様子を見ても大丈夫だろう、とジョレマイアはそう結論づけた。

25・沈思黙考（あとは覚悟を決めるだけ）

この地ですべき事後処理もほぼ片づき、明日にでもザクスリュム領から撤退する旨を伝えられたりューネリアは一つだけ心残りがあった。

査察の調査をしていた時に、ふと思い出したのだ。

昔、何かの書物で見た覚えがあったのだが、他国の そちらも 葡萄酒が有名な国で 特殊な条件の下に作られた葡萄酒が、それは稀少な価値のあるものとして、生産数も少ないために国外にも持ち出されることがないと記されていた。それが、その国の葡萄酒の取れる地方とザクスリュム領の気候と酷似していたため、もしかしたらとその可能性を思いついた。しかし具体的なことはよく覚えていない。だが、この村には葡萄酒作りの名人たちがいるのだ。きっと、リューネリアの言つことの意味を汲み取ってくれるに違いない。

ただ、それには何よりもまず重要な問題があった。

村人にそれを伝える術がない。

リューネリアは部屋に誰もいないのをいいことに、ソファの背もたれにすがり、天井を睨むようにして考え込んでいた。

ウィルフレッドとはあの日以来、顔を合わせていない。何か用がある時は必ずロレンツィアを通して伝えられる。多分、忙しいのだろうということは想像つくが、いい加減リューネリアも毎日顔を合わせる人間が二ーナとロレンツィアの三人だけでは退屈にもなってくる。ではせめて部屋から出ない代わりに、村長を呼んで欲しいと言つてみたが却下され、ではロドニーに手紙を届けてもらえるかを問えば、二ーナから彼にそのような時間はないとの返答が返ってきた。それは一体、部屋の外がどのような状態になっているのだろうと、逆にリューネリアの方が心配になる。

それに、一人の時間がこんなにも多くあると、余計なことまで考
えてしまつ。

確かに、ウイルフレッドはリューネリアを心配して駆けつけてき
てくれたのだろう。この村に来るまでの無謀とも言える行程を聞い
て、そこまで心配してくれたのかと心が動かなかつたわけではない
し、それが嬉しくなかつたわけでもない。

だが、こうして心配していると言われながらも、部屋から出して
もらえない生活が続くと、どうしても不安が募る。

もともとリューネリアは人質としてヴェルセシュカに来たのだ。
今更その扱いをされるとは思わないが、ウイルフレッドと協力関係
を築けたのも、王族が戦争反対を掲げているからだ。つまり、リュ
ーネリアはヴェルセシュカの王族にとつて、なくてはならない駒な
のだ。

要するに、そういうこと……なのかもしれない。

だからウイルフレッドも心配してくれるのだろう。こうして閉じ
込めてまで、リューネリアの安全を図ろうとしている。それがリュ
ーネリアの意に染まらないことだとしても、身を守るためにならば仕
方がないと思つていてのかもしれないし、この国の為であると考え
ているのだろう。

だが、本当に仕方がないことなのだろうか。諦めなければならな
いのだろうか。できることが一つでもあるなら試してみたいという
リューネリアの考えは間違つているのだろうか。

ここは腹をくくるしかないのかもしれない。最後の手段とは思つ
ていたが、出来ることならリューネリアの信用に関わる問題だ。こ
の手段は出来ることなら取りたはなかつたが、ゆくゆくはヴェル
セシュカの為になるはずなのだ。それを考えれば、信用の一つや二
つ失うことなど容易いものかもしれないし、いざれ結果が出れば分
かつてもらえるというものだろう。

あとは、覚悟を決めるだけだ。

ひそかに立てた作戦をひとしきり頭の中で再現し、リューネリア

は気合いを込めて立ち上がる。そして廊下への扉に向かうと決心して叩く。部屋の中から扉をノックするというのも奇妙な感覚だつたが、ロレインから無暗に扉を開けないよう言われているため仕がない。多分、これもウイルフレッドの指示なのだろう。何に対してもここまで警戒をしているのか、いつか問い合わせたいと思っているが今はそれどころではない。

すぐに開いた扉の外には、ロレインとバレンティナが控えていた。ちらりと廊下を窺うが、いつもそこに一人以外の姿を見た事はない。「どうかなさいましたか？」

ロレインがスッと前に出てきたので、当然部屋から一歩も出られない。

「二ーナを呼んでもらつてもいいかしら？」
何気ない顔をして依頼する。

「わかりました」

一礼して立ち去るロレインの背中を見送り、ドキドキする心音に気づかれないよう出来るだけ平静を装い、ぐるりとバレンティナに向き直る。二ーナは今この館で最も忙しい人間だ。きっと来るまでにしばらく時間がかかるだろう。

「暇なの。二ーナが来るまでの間、話し相手になつてくれる？」

返事も待たずに身体の向きをかえて部屋に戻ると、バレンティナは素直についてきたようで、背後で静かに扉の閉まる音がした。後ろ暗いことを考えていると必要以上に拳動不審になつてしまつものだ。リューネリアは自らに、まだ何もしていのだからと言い聞かし、いつもどおりの動作を心がけてソファに腰を下ろすと、バレンティナにも向かい側を進めた。

素直に一礼して腰かけるバレンティナの姿を見て、ついクスリと笑つてしまつた。もう一人の騎士とはあまりにもその性質が違います。

「きっとロレインだつたら固辞するわね」

「はい。それが彼女ですから」

二口りと笑つて答えるバレンティナを見て、やはり協力を頼むなら彼女の方が適任だと思う。しかし計画を喋るわけにはいかない。彼女たちには何も報せず、責任を負わすようなことだけは避けなければならない。

「そう言えば、村長さんの息子さんは無事に帰つて来れたのよね？」
「はい。二ーナと一緒に戻つてきたと聞きました」

事のあらましを聞いたリューネリアは、ヴァーノン子爵夫人にすぐ感謝の手紙を書いた。

もし子爵夫人が村長の息子を保護して、ウィルフレッドに報せてくれなければ今頃、リューネリアは絶望の底にいたかも知れない。その後、ヴァーノン子爵夫人からもすぐに返事が届き、王宮に返つてくることをランス侯爵夫人をはじめ皆が心待ちにしていることがつづられていた。それを見て、部屋に閉じ込められ出ることもままならない現状よりはと、リューネリアは一足先に王宮へと帰ることも考えた。しかし というか、やはりウィルフレッドが許可をしてくれなかつたのだ。

一体ウィルフレッドがどうしたいのか分からぬまま、リューネリアの軟禁の日々は続いている。

しかし……。

もはやリューネリアにはそのつもりはない。

二ーナが来るまでの間、バレンティナを相手に取りとめもない話ををする。

騎士たちの日頃の生活をバレンティナは面白おかしく話してくれ、バレンティナ自身やロレインの失敗談を聞いて、退屈ではない時間はあつという間に過ぎていく。部屋に籠つたままの生活は、一日が長くて退屈だ。窓から見える風景も、空を流れしていく雲をぼんやりと眺めることぐらいしか出来ない。だからだろうか。騎士たちの生活がとても楽しそうに聞こえる。

しばらくして、二ーナがやつてくるとバレンティナは話を切り上げて、持ち場に戻つて行った。

「二ーナ、聞いて」

扉が閉まるとき、リューネリアは表情を改める。二ーナを連れて、出来るだけ扉から離れた。

「どうなさいたのです？」

驚きながらも、声を落としてくれたのは何かを察してくれたからだろう。そつと近づき、リューネリアに必要以上に大きな声を出させない。

「私……、どうしても村に行きたいの」

やはりこれは我儘なのだろうかという思いが、この期に及んで頭の隅を過る。すでに村が立ち直り始めている話は聞いている。だから心配をしているのではない。確かに、少しでも復興の手伝いができるればいいと思う。だが、きっとリューネリアができる直接的な手伝いはない。ならば、どうやつたら村の今後の為になるのか。それを考えれば、やはり村に行かなければならなかつた。

真剣に訴えると、二ーナは分かつていていたように仕方がありませんねと言いながらそつと笑つた。

「わかりました。リューネリア様の思つままに

そう言って、頭を下げる。

了承してくれたことに安堵しながら、考えていた計画を話す。無理なところを訂正したり、もつと良い案を出してくれたり情報を提供してくれる二ーナはやはり頼りになる。

部屋の外に控えている一人にも、リューネリアが部屋から出ることを誤魔化さなければ、振り切る自信はある。

それには、先ほど確かめた事で何とかなりそうだった。多少無謀とも取れる方法だが、ほんの少しの間でいいのだ。リューネリアが馬にさえ乗れれば、振り切る自信はある。

「では午後のお茶の時間に」

全てを確認したのち、二ーナは部屋から出て行つた。

彼女を見送つて、リューネリアは再びソファに腰かけて、いつも

のよつて過りすつりを続けた。

三時にお茶のセットを持つて二ーナがやつてきた。お茶とは言つても一揃えを持つてくるには台車が必要だ。様々なお菓子も当然用意されており、リューネリアのその日の気分で選べるようになつてゐる。ここ数日はこれぐらいしか本当に楽しみがなかつたので、二ーナも必然的にお茶の時間には気合が入つてゐる。だからリューネリアも素直に喜んでいたし、いつもと変わらないように見えたはずだ。

扉の外にはロレインとバレンティナが通常通りに控えているのが見えた。二ーナに確認すると、何も異変はないとのことで、やはり中止にする必要はなさそうだった。

二ーナはいつもなら菓子を入れていてるトレーから、ひとつやつて手に入れたのか騎士の制服一式を取り出した。彼女はそのままお茶の準備を始める。リューネリアは服を受け取ると、ドレスの下にズボンと予め用意していた長靴をはく。あとでドレスを脱ぎ、上着をすぐ着替えられるように準備しておく。

お茶の準備が終わると、ソファに座り二ーナに合図を送つた。

「かしこまりました。では探してまいります」

作戦開始の言葉を告げ、二ーナは退室した。

二ーナが部屋を出る一瞬、きちんとリューネリアが部屋にいるかを確認するロレインと田が会つた。いつもと変わらない、大丈夫と言ひ聞かせながらコップに手を伸ばす。

二ーナにはバレンティナを連れて本を探してきてもりつよう頼んだ。ここは一応、領主の館で、査察の為に資料をあさつていた書斎は、かなりの量の蔵書がそろつていた。午前中にも暇だから会話に付き合つて欲しいと頼んだので、そのあたりはバレンティナにも不思議に思われないだろう。しかも、二ーナに頼んだ本は全く有名で

ないものを三冊。数ある蔵書の中から探すとなると、それなりに時間がかかるはずだ。

これで、バレンティナ一人は片づいた。

あとはロレインだ。

こちらは気が重いが仕方がない。

時間を見計らい、手早くドレスを脱ぎ、コルセットも外す。最近は外に出ることもできないものだから、いつもよりゆったりと身につけたコルセットは外すのも簡単だ。騎士の制服に手を通し、やはり少し大きめかと手を伸ばす。しかし作りは女性用のもので、どうやらバレンティナの服ではないだろうかとあたりをつける。あとで謝らなければと思いつつ、それでも始めてしまった計画を今更止めることはできない。

一部を結い上げていた髪もほどき、簡単にまとめる。

よし、と気合を入れると、扉をノックしてロレインを呼びこんだ。

「ネリア様……、その服は？」

開口一番、呆気にとられたロレインの手を、有無を言わせず取る。「実はロレインにお願いがあるの」

訝しげな表情を浮かべたままの彼女のその手を両手で握りこむ。

「これを預かっていてほしいの」

そう言つて押し付けたのは、ウイルフレッドから預けられていた指輪だ。

それがどれほど重要な物か。

きっとそれは、ロレインも知っているはず。

「これは……」

自らの手の中にあるものを見て、目を見開く。完全に彼女の呼吸が一瞬止まった。

その瞬間、素早く身を翻すと扉を開け放つ。

「私が帰つてくるまで預かっておいて」

「ネリア様！」

こわれものを押しつけられたかのように完全に足がすくんで身動

きできないロレインを見て、リューネリアは満足すると同時に申し訳なくも思う。

それが何かを知つていれば、指輪が持つ権力という誘惑と、一方それに伴う重責に挟まれ、身をもつてその恐ろしさを知ることになるだろう。後ろめたくはあつたが、生真面目なロレインの性格上、絶対に容易く扱わぬことを確信している。だからこそ、あえて彼女に預けたのだ。

「ごめんなさい」

心から謝つて、扉を閉める。閉まりきる一瞬、戸惑いを見せるロレインと視線が合つ。

振り切るように視線を逸らすと、そこからは正面だけを見て走った。

「この部屋の周囲は特定に人物以外近づけないよう配慮されていると二ーナから聞いて、ウイルフレッドの所業にあきれながらも、逆になんて都合がいいと思ってしまった。それはつまり抜けだしたあと、人と出会いうことがないということだ。

一階まで駆け下り、二ーナから教えられた裏口から出ようとしたらどこひで見覚えのある人物に出会い、思わず足を止めた。

「ここは滅多に人が通らないと聞いていたのに。

「リリアさん？」

騎士の制服に身を包んだリューネリアを見て、ロドニーは数度目を瞬いた。

「ロドニー……」

じつやつて切り抜けようと思考を巡らす。

今の名前の呼び方からして、ロドニーにはまだリューネリアの本当の身分を知らない。ならば、査察官補佐として堂々と接すればいいだろう。

素早く計算して、親しみを込めて笑みを浮かべた。すると、ロドニーはみるみる顔を赤くした。

「もう怪我はいいの？」

あまり思い出したくはなかつたが、アティントンに突き飛ばされたロドニーは頭を打つていたはずだ。脳震盪とは言つてはいたが、あから何も聞いていなかつたことを思い出す。

「あ、はい。怪我は、その……してないですけど……、リリアさんは大丈夫でしたか？」

聞かれ曖昧に頷く。

「ええ。大丈夫。それよりも、聞いてるわ。騎士たちが逗留していながら忙しいのですってね？」

話をふると、ロドニーは心底疲れた表情を浮かべた。

「はい。——ナさんが、それはもう」を使つてくれますから

あははと力なく笑いながら、リューネリアの行き先と同じ方向へと歩き出す。

まさか、こんなところで時間を取られるとは予想外だつた。だが、——でイラついては不審に思われてしまつ。ぐつと我慢をしながらロドニーと一緒に厩舎の方へと向かう。

「それにしても、どうしたんですか？その格好は。それに髪の色も違いますよね？」

隣を歩きながら騎士の制服に身を包んだリューネリアに怪訝な眼差しを向けてくる。来るだろうと思つていた質問に、予め用意していた答えを口にした。

「今からエピ村に行くの。一人で行かなくてはならないから、万一千ことを考えて見た目だけでも強そうにみせているの。それに髪は、もともと黒かつたのを染めていただけ。『気分転換にね』

あえて明るく言つてみたが、気分転換どころではない。現在、リューネリアの胸中は苛立ちで溢れている。

それに気づかないロドニーは茶色の髪も似合つてましたよと呑氣に告げてくる。

「そなんですか。僕が一緒に行けたらいいんですけど、今は手一杯で」

後半は申し訳なさそうな表情を浮かべるロドニーで、むしろ安心

する。もしもついて来ると言われたら、どうしようかと思つていたのだ。置いて行くのに、言つくるめる時間はない。こつ、ウイルフレッドに気づかれるかひやひやしてこるので。

しかしその安心を余所に、ふとロドニーは何かを思つに出したように首を傾げた。

「でも、リリアさんとは本当に久しぶりですね。僕はつまらあの噂はリリアさんかと心配してたんですよ」

良かつたですと何故だか嬉しそうに笑むロドニーに、今度は逆にリューネリアが訝かしむ番だつた。

まったく部屋から出られない生活をしていた為、どうやら完全に情報不足だつた。ロレイン達にもこちらから聞かなければ、あえて何も教えてくれようとはじなかつた生活が長過ぎたのだ。

「あの噂？」

首を傾げると、ロドニーは田を見開く。

「知らないんですか？騎士たちの間ではかなり噂になつてましたけど」

すでに過去形だ。

ならば、リューネリアが閉じ込められてからすぐに出はじめた噂なのだろうか。

思わず眉をしかめる。

「どんな噂なの？」

「えつと、でも……」

視線が泳ぎ、ロドニーは言つたりひたりに口を開かず。

「どうかしたの？」

「あの、緘口令が出てるんですけど……」

なるほど、と感心する一方、ならばそれだけ重要な噂なのだろうと判断する。リューネリアが足を止めると、一三歩先を行つて、同じく足を止めて振り返つたロドニーを見つめた。

「教えてくれない？ どうして噂が私だと思ったの？」

どのように関係してくるのかは分からなかつたが、ロドニーは先

程確かにわつ口にした。心配していた。

ロドニーは戸惑った様子を見せていたが、リュー・ネリアに近づいてくると周囲を見渡し、声を潜める。

「僕が喋ったのは内緒ですよ？…… ウィルフレッド殿下が女性を囲つているつて噂があるんです。だから僕はつきり

」

姿が見えないリリアさんではないのかと思っていたんですけど、と続けられたが、後半は耳に入つてこなかつた。その代わり、思わず、ロドニーを凝視してしまつた。

今、聞いた言葉は空耳だらうか。一体自分は何を聞いたのだろう。ウィルフレッドが女性を囲つている？

その言葉が意味することを一瞬、脳が拒否をする。だが理解すると同時に、胃の辺りにひやりとしたものが広がつていぐ。そして何故だか心のどこかで納得している自分がいることに気づいた。

「そつ……。そんな噂があつたのね

ゆつくつと足を踏み出し、厩舎へと向かつ。リュー・ネリアは無理やり口元に笑みを浮かべた。

ウィルフレッドとは協力関係だ。もとから博愛主義なのは認めている。だから、別に女性を囲あつと関係ない。だが、そのことを知られないようにと緘口令までき、その上さらにリュー・ネリアまで閉じ込めるとは……。

理不尽極まりない。

「リリアさん？」

「ありがとう、教えてくれて」

後ろをついてくるロドニーに簡単に礼を告げ、急いでいるからと言つて駆け出す。

足音は聞こえない。どうやら付いてはこないようだ。そのこと安心し、厩舎へと駆け込む。

鞍を付けて準備されている馬を引きだし、周囲に誰もいないことを確認すると騎乗する。久々の視線の高さと感覚に、先程の不快な気分を一瞬だけ忘れる。

ヴォルセシュカに来てからは遠乗りもできなかつた。それなりに忙しかつたこともあるが、安全を配慮してくれているウィルフレッドやエリ亞スに悪いと思い我慢もしていたのだ。

手綱をもつて馬に合図を送ると、リューネリアの希望通り動いてくれる。いい馬だ。さすがニーナが選んだ馬だけはある。

ここからは時間との勝負だ。

ロドニーに出会つてしまつたのは予想外だつたが、もしかするともうすでにリューネリアが抜け出したことがウィルフレッドの耳に入つてゐるかもしれない。リューネリアは一瞬だけムツとしたが、馬の腹を蹴つた。途端、馬は速度を上げて走りだした。

領主の館を出る直前、館の門のところで警備に当たる騎士の田の前を通つた。馬を駆けての通過に、何事かと目を見張つていたが、通り過ぎてしばらくしてから何か叫んでいるのが聞こえたが、そのまま突つ走る。

今日は村長のジョナスは葡萄畠に行つてゐるといーナから聞いていた。場所も少し山に向かわなければならぬ。これだけ広く見渡せる葡萄畠が広がつていればリューネリアがどこに向かうかは領主の館からは丸見えだらう。だから急がなければならなかつた。

「ごめん。急いで」

馬の首を軽く叩き、お願いする。

そうして、さらに速度を上げさせ、あつといつ間に領主の屋敷をあとにした。

27・和気藹々（いい人たちばかりだから……）

「一ーナから聞いた話によれば、村長のジョナスはなだらかな丘陵地帯の一角に葡萄畠をもつてているということだった。畠の側に建っている小屋は近くに葡萄畠を持つている村人たちとの共同の小屋なのだろうか。ジョナスはその前で数人の男たちと共に休憩をしていた。

馬で駆けてくるのが見えたのだろう。ジョナスが出迎えてくれた。「おや、あんたは……。あの時の補佐官じゃないか。騎士さんだつたのか？」

「いえ。これにはちょっとした事情があるのですが……。それよりも、本田はお礼を言いに来たのと、実は畠さまにお願いがあつて來たのです」

騎士の制服のことは、話を逸らすことで何とか誤魔化す。まずは礼を言わなければと馬から下り、ジョナスに正面から向かつた。

「あなたの息子さんのおかげで今回の事が公になり感謝しております」

「いや、礼を言うのはこちらの方だ。まさか第一王子自ら来て下さるとは思わなかつた。それもあんたたちがここに査察に來ていたおかげだらう」

そう言いながら、リューネリアから手綱を受け取り、近くの木に結びつけてくれた。そしてリューネリアを小屋の前まで連れて行き、他の村人にも紹介してくれた。

その中にはジョナスの息子のテールもいた。無事な姿を見て思わず胸をなで下ろす。彼の行動でこの村は救われたようなものなのだ。どのような感謝の言葉を述べても言い足りないほどだ。

「それで、何でしょうか？お願いとは……」

小屋の前に思い思い座っている男たちが、リューネリアの為に太い丸太を単に切つただけの簡易的な椅子を小屋から出してくれた。リューネリアは礼を言つて腰かける。多少ぐらつくが、腰かけられないほどではない。

ジョナスに聞かれ、リューネリアは一度皆を見渡し、伝えたかつたことを口早に説明した。「この気候と葡萄が、新しい葡萄酒を作るので適しているかもしれないこと。ヒピ村は夏でも寒冷で、きっと冬は早くやつてくる。葡萄が実をつける時期に、霜が降りることもあるだろう。それをそのまま放置するのだ。冬に凍つたその実で葡萄酒を作ると、それは甘い葡萄酒が出来ると何かで見たことがあったのだ。

最初こそリューネリアの突飛な発言を畠然として聞いていた村人たちだったが、しばらくして真剣な顔になる。

「おもしろいとは思うが……」

「いや、確かにやつてみる可能性はある」

「じゃが、まずは村をどうにかしなければなあ」

「それに新しく来る領主の許可もなければ難しいじゃねりうて」

口々に彼らは言い始める。

しかしどちらかというと、否定的な意見が多い。

しばらく黙つて飛び交う意見を聞いていたが、リューネリアはたまらず口を挟む。

「あの、試験的にやつてみてもうだけでいいんです。葡萄酒作りは私には分からないことですし、可能性があるならばやってみてもらえないでしようか？もちろん、復興の援助は国からもできるだけ手伝わせていただきます」

国政に関わることを安請け合いしてはならないことなど、エリアスに言われるまでもなく承知している。だが、リューネリアは必死だった。ここまで抜けだしてきたのに、村人たちから出来ないと言われてしまつたら、何のために無茶をしたのか。もちろん、安請け合いなどではなく、復興に手を尽くすことは王都に帰つてからも当

然やるべきことではあつたのだが。

唇を噛んで頭を下げる。村人たちは一瞬静まり返つた。だが、

次にはカラリとした笑い声が耳に届く。

「ま、いいじゃねえか。こんな可愛いお嬢さんが頼んでるんだ」

「そうだな。売物じゃねえ自分たち用のを作るぐらいなら、大したことないか」

「そうそう。それで売物になるようなら儲けたものだしな」

ジョナスを始め、日々に言い始める。

どうやら引き受けてくれる気になつたらしい。リューネリアに、取りあえずお茶でもどうかと、木を削つて作ったコップを差し出してくれる。他の者も、奥さんにでも作つてもらつたのだろうか。手作りのお菓子が入つた籠を渡してきた。

あまりにも嬉しくて、ジョナスや村人の気持ちが温かくて胸に迫るものがある。

「ありがとうございます……」

頭を下げて礼を言うと、村人たちは照れたように笑つた。

だが、ふと遠くから聞こえてきた馬の蹄の音に、ぎくりと頭を上げた。

「おや、今日は来客が多いな」

ジョナスは呑気に言いながら、立ち上がる。遠くを見るように目を眇めて、おやあれば、と呴くのが聞こえた。

リューネリアも遠くから馬で駆けてくる人物を目にし、思わずコップを持つ手に力が入る。遅かれ早かれ見つかるものと思つていたが、いざその時が来ると怖いものだ。何を言われるのか。逆らつてばかりいるから愛想を尽かされるのではないかと不安もある。しかし、そんなもの……！

抜け出す直前にロドーから聞いた噂話を思い出し、勢いよく立ち上がる。コップと菓子が入つた籠を村人に返すと、ジョナスが繫いだ馬の側へと向かう。

抜け出したことなど今は後悔していない。ならば正面から迎え撃

つだけだ。

騎馬は全部で五騎いた。

先頭を走る人物の髪が金色に輝いているのを見て、村人たちがざわめく。

「なんで王子さんが来るんじゃ？」

どうやら村人にはその姿が馴染みとなつていいようだ。それでも、彼らにとつて王子という身分は遠いものらしく、この場に来るのが信じられないもののように見えているのだろう。

馬に寄り添つて、リューネリアはウィルフレッドが近くに来るのを見ていた。

村人たちは立ち上がり、当然頭を下げて出迎える。

ウィルフレッドは馬から下りると、彼らには見向きもせず、まっすぐにリューネリアの前まで来た。リューネリアも黙つてそれを見ていた。ウィルフレッドの背後には馬から下りる様子のないエリアスとロレイン、それと他にもう一人騎士がいた。

ウィルフレッドは怒つていても見えた。いや、怒つているのだろう。だが、リューネリアはここで謝つたりなどしたくなかった。悪いことをしたとは思つていないし、むしろ理不尽な扱いを受けたことには腹を立てている。

唇を引き結んで黙つていると、そのまま近づいてきたウィルフレッドは有無を言わせず実力行使に出た。あつと思つた瞬間には視界が揺れ、思わず悲鳴を上げていた。

「ちょっと、下ろして！」

肩に担ぎあげられたリューネリアは、落とされないとは分かつていても思わずウィルフレッドの服を握りしめた。

「うるさい」

静かに一喝され、そこに怒りを感じ取つて思わず口を開いた。

ウィルフレッドはようやく村長に向き直ると口を開いた。

「これが仕事の邪魔をして悪かつた」

「いえ、ちょうど休憩中でしたし、そのようなことはありませんが……。あの、失礼ですが、そちらの方は査察官の補佐では？」

ジョナスは恐る恐るといったように口を開いた。

リューネリアはぎくりと身体を強張らせる。

査察官補佐としては一応名乗つてはいた。

しかし、ジョナスや村人たちが不思議に思つのも当然だろう。王子の肩に担ぎあげられ、文句を言つているのだ。ただの役人とは思えなくとも仕方がない。

「ネリー、名乗つていなかつたのか」

呆れたような声音に、リューネリアも口を尖らす。

「だつて皆さん、いい人たちばかりだから……」

身分を言つてしまえば彼らの態度が変わつてしまつような気がした。現に、彼らの王子に対する態度はリューネリアに接するそれとは明らかに違う。それにリューネリアは元パルミディアの王女だ。敵国人間だつたのだ。彼らの家族を、もしかしたら奪つてしまつたかもしれない國の人間なのだ。だから名乗れなかつた。

ウィルフレッドの盛大な溜息を耳にした後、リューネリアは肩から下ろされた。

そのままウィルフレッドの隣に立たされ、視線だけで名乗れと言われる。

仕方なく村長他、村人の方に向き直ると、ヴェルセシユカ様式の最上礼をとる。ならず者にも屈せず、村の復興を前向きに目指す彼らにはその礼が最適だと思えたのだ。

ドレスではなく騎士服ではあつたが、丈の長い騎士服の上着をスカートのかわりに代用し、膝を折つて頭を垂れた。

「リューネリア・アデル・リイ・ルクレーシャと申します」

滅多に見られない最上礼を目の前でされた村長他村人たちの誰かが、ゴクリと唾を飲み込む音が聞こえた。

第一王子が結婚して一力用。

もともとこの結婚は戦争を休戦に導く為のもので、戦争にかり出されていた民にとつて、まつたくの他人事ではない話しだった。それはエピ村がいくら辺境にあるとはいえ同国民である以上同じのことで、ましてこの度の事件には第一王子自身が赴いているのだ。今までにはない活気が村中に溢れていて、王子に関する噂を知らない村民などおらず、まして先ほど彼の妃となつたパルミディアの王女の名前も知らないはずはなかつた。

「……妃殿下、でいらつしやる?」

ジヨナスに確認のよつて尋ねられ、リューネリアは頭を上げると一つ頷く。

「そうこうになります」

素つ気なく言い放つ。

今は素直に認めたくない心境だ。それが伝わつたのか、隣にいるウイルフレッドに腕をつかまれた。だが、それだけで先程のよつて肩に荷物のように担ぎあげることはされなかつた。

「邪魔をした。帰るぞ」

そのまま有無を言わせず腕を引っ張られ、リューネリアは思わずカツとなつて振り払つた。

もう限界だつた。

なぜ、このよつてに、いかにも心配しているから迎えに来たという素振りをするのだろう。ただ、連れ戻すだけならば、ロレインやバレンティナを迎えて寄こすだけで十分だ。他に女性を困つているのをそんなにも知られたくないのだろうか。そんなこと、リューネリアには関係ないことだし、その為に軟禁されているのではたまつた

ものではない。博愛主義は認めていると、あれほど言つておいたの
に。

「自分で帰れます」

口から出た声は、自分のものとは思えないほど冷ややかだった。
「今度はどこに行こうとしているんだ？」

「ここまで監視すれば気が済むのだろう。そんなに相手の女性のこと
をリューネリアに知られたくないのだろうか。だが、そんなこと
今更知ったことではない。事実、聞いてしまったのだから。

「帰ると言つているでしょ！」

「信用出来ない」

その言葉に、リューネリアの中で何かがブチリと切れた。
「あなたが部屋に閉じ込めたりするからでしょう！ それに何をする
にも駄目だつて！」

さすがに、村人の前であることからロードリーから聞いた噂に關し
てだけは理性で押さえつける。

だが、一度口に出した言葉は止めようと止まらなかつた。
堰を切つたように次々と言葉が溢れ出てくる。

「一人で一日中、部屋にいて何も出来ない私の気持ちが分かつて？
二一ナだって領主の館で大変な仕事をしているのよ？ あなたが少な
からず心配してくれているのは分かつてているわ。でも館には騎士も
沢山いるわ。警備の面でも王宮と変わりないはずよ。館から出ると
言つているわけではなかつたのよ。どうして私に何もさせてくれな
いの！」

言い募るがウイルフレッドは黙つたままだった。

代わりにロレインが駆け寄つてきて、リューネリアを宥めようと
する。

「ネリア様、取りあえず帰りましょう

肩に置かれた手が温かくて、でも彼女は絶対的にウイルフレッド
の味方なのだ。

そう思つとひどく悔しくて、心が冷たく震えた。

ぐつと両手を握りしめると、熱を帯びてきた目に力を入れ、ウィルフレッドを見上げる。

「勝負をしましょ！」

「Jのままでは気がおさまらない。

突然のこと、ウィルフレッドは怪訝そうに眉を顰める。

「勝負？」

「ええ。どちらが先に領主の館に戻るか。負けた方は勝つた方の言うことを聞くということはどうかしら？」

そうすれば、ウィルフレッドもリューネリアが領主の館に帰ることを信用するだろう。勝敗の結果次第で、リューネリアは館内の自由を申し出る気でいるし、ウィルフレッドにしても負けたのだから部屋で大人しくしていると言えるはず。文句のつけようはないはずだ。

それでも黙つているウィルフレッドに、リューネリアはさらに挑発する。

「勝負を受けないというのであれば、不戦勝ということで私の自由にさせてもらいうわ。でも、あなたが勝負を受けて、私が負けたのならあなたの言つことを素直に聞くわ」

悪くないはずだ。

じつとウィルフレッドの瞳を見つめると、その湖面のよつた瞳にゆつくりと決意が現れる。

「分かった。その勝負を受けよう」

勝負に乗るかどうかが、リューネリアにとつて一つの勝負だった。ホッと息を吐き出すと、ウィルフレッドの背後で黙つて成り行きを見ていたエリアスが近づいてきた。

「では、私は先に館に戻つておきましょう。正確に勝負の勝敗を見極める者も必要でしょうし……」

そう言つて、一人の騎士を連れて戻つていった。

ロレインはウィルフレッドの側に行つて、必死に訴えている。

「危険です！お止め下さい。ネリア様に何があつてもよろしいので

すか！」

「黙れ」

なおも食い下がろうとしているロレインとウイルフレッドを放つておいて、遠巻きにこちらを窺っていたジョナスや他の村人たちの近くに行く。

突然始めた口論に、呆気にとられていたようだ。

みつともないとこ見られたと思いながら、リューネリアはジョナスに向き直る。

「あの、お仕事の邪魔をしてしまって申し訳ありませんでした」

「あ、いや、あの、そんなことは」

「」もつて視線を逸らされてしまった。

どうやらリューネリアが心配していた通り、彼らの自分を見る目が変わってしまったようだつた。だが、そこに憎しみのよつた感情が見えなくてホッとする。でも、やはり寂しくも思う。

先程までのあの気さくな態度でもう一度接して欲しいと願うのは、リューネリアの我儘だ。あえて身分を明かさなかつたのも、責められても仕方がない。

黙つて俯いていると、村人たちが遠慮がちに声をかけてきた。

だが、その内容から、どうやら先ほどの言い争いでリューネリアが落ち込んでいると思つてゐるらしい。最初こそ、村人たちは遠慮がちだつたが、次第にそれはいつもの調子に戻つていく。

「ああ、そんなに落ち込まなくて。王子さんは別にあんたのことを怒つてゐるわけじゃないよ」

「そうそう、あれは独占欲じや」

「部屋から出るなつむのはひどいが、姫さんは大切にされどるの」

「それもアレだろ？姫さん、言つてたじやないか。騎士が館に沢山いて警備の面も安心つて……。じゃが、姫さんが可愛いから王子さんは姫さんを他の男に見せたくないんだろ？」

どこまでも確信をついている村人たちの発言だつたが、リューネ

リアにはよく理解できない。しかし、励まそつとしていることだけは分かつた。

それはやはり温かくて、自然と口元に笑みが浮かぶ。

「ありがとうございます」

すると、村人たちも安心したように笑顔になつた。

「ああ、王子さんが羨ましいのう。わしがあと四十歳若かったら」

「馬鹿言つな。誰がおまえなんかを姫さんが相手にしなさるか」

「ゲラゲラと笑う声が、葡萄畑に響く。」

そんな中、ジョナスと田が合つ。彼は笑いをおさめると、ニヤリと笑つた。

「この勝負。わたしらはリュー・ネリア様を応援します」

突然の申し出に、リュー・ネリアは心が浮き立つ。この場で、自分を応援してくれる人など誰もいないと思つていた。

「ありがとうございます！」

「いえ。ここでわたしらとも、もうひと勝負しませんか？」

ジョナスの顔が、悪戯を思いついた子供のような表情をしている。その口元には笑みも浮かんでいた。

「え、どういひ……」

「もし、リュー・ネリア様が勝ちましたら、先ほど話をうかがつた葡萄酒を献上させていただきます」

「おお、それはいい！」

村長の提案に、村人たちの賛成の声が響く。

リュー・ネリアが今度は驚く番だつた。ジョナスたちの応援してくれるその気持ちが伝わってきて、嬉しさが込み上げると同時に、力にもなる。

馬の手綱を取ると力強く頷く。

「必ず勝ちます」

そう宣言し、軽く一礼する。

手綱を持って、出発地点へと向かつた。

すでにウィルフレッドは位置についていた。ロレインは不安そう

にリュー・ネリアを見ている。

「ネリア様、どうかお止め下さい。今ならまだ」

「ロレイン。大丈夫よ」

彼女の手を借りて、馬に乗った。騎士の服はやはりドレスに比べると格段と動きやすい。もう少し大きさが合つていればもっと良かつたのだが仕方がない。だが、ウイルフレッドよりも体重が軽い分、馬の状態はいい。疲れも少ないはず。勝算はあるのだ。

「手加減は無用よ」

「するつもりはない」

きつぱり言い切るあたり、負けたら本当に軟禁どころでは済まなれそうだと思つ。だからこそ絶対に負けられない。

ロレインが合図をしてくれるらしい。出発の合図は、本来なら旗があれば最適なのだろうが、代用に小枝の先に布をつけ、それを振り上げたのを合図とするようだ。

リュー・ネリアは馬の首を軽く叩く。

来る時も思つたのだが、よく手入れがされていて良い馬だ。二一
ナが選んだのだから間違いはないだろう。

正面を向くと、ロレインは少し離れた場所にいて布のついた小枝をこちらに見せていた。リュー・ネリアはぐつと両膝に力を入れる。

風は吹いていない。西に傾きかけた日差しが目の奥に射す。

手綱を握り締めたのとロレインが旗を振り上げたのは同時だつた。リュー・ネリアは馬の腹を力強く蹴つた。隣で、ウイルフレッドの馬が動き出すのも見えた。

リューネリアは幼少の頃から徹底的に馬術を仕込まれていたので、少々のことでは負けるつもりはなかつた。それでも領主の館まではかなりの距離があるし、道中どのような事故があるとも限らない。だから全部の力を出し切るのではなく、余力を残しながら馬で駆つていた。

風景が風をはらんで後方に流れしていく。

すぐ背後に蹄の音が聞こえ、唇を噛む。

どうやらウイルフレッドも相当の腕前らしい。離れずついてきているといふことは、最後で勝負をかけるつもりなのう。思わず唇と噛みしめる。それはリューネリアと同じ考え方だつた。

だがそれよりも、この速度についてこられるだけでも大したものだと思う。

馬自体もいい馬なのだろう。

久々の疾走に、今まで燻つていたイラつきや焦燥がどこかへと消えていくのが分かつた。

体温は徐々に上昇し、心地よい汗をかく。頬や額を撫でていく風は心地よく、傾きかけた夕日は穏やかで、エピ村のどかな田舎風景はどこまでも優しい。これで、所々に見える略奪や放火の痕がなければ、どんなに美しい村だったことだうと、今更ながらに悔やまれる。

すでに家路についている村人たちには、自分たちの勝負の事が伝わっているのだろうか。

疾走する一騎に手を振る子供もいる。リューネリアは笑顔で応え、馬の状態を確認しながら速度を上げた。

体重の軽いリューネリアの馬は疲労がない。まして、馬に負担

をかけるような乗り方をしているつもりもない。

そのまましばらく並走し、領主の館まであと残すところわずかとなつた時、ウイルフレッドが勝負に出たのに気づいた。

背後にいた馬が隣に並ぶ。

ちらりと横を見ると、ウイルフレッドもこちらを見ていた。余裕、とまではいかないが、まだ余力はあるらしい。しかし、馬の状態は思ったほど良くない。

正面を向くと、驚いたことに館の門前に溢れるほどの人だからができていた。遠目で見ても、それが騎士たちであることがわかる。異様な盛り上がりを見せて声援を送っているところを見ると、彼らなりに楽しんでいるように見えなくはない。一体、先に戻ったエリアスたちは何を吹聴したのかと首を傾げる。

驚きながらも、手を緩めるつもりはなかつた。

掛け声と共に、馬に合図を送る。途端、速度を上げた馬に心の中で応援しながらも、リューネリア自身も息が上がつてくる。

身体に伝わる振動と、足に込める力に疲労を感じずにはいられなかつた。久しぶりの乗馬に、腿の筋肉が悲鳴を上げていて。だが、負けるわけにはいかない。村長や村人たちの期待にも応えなければならぬのだから。

ただ真っ直ぐ前を見つめ、屋敷の門をくぐつた。周囲の歓声が遠くに聞こえる。

手綱を引いて馬を止めると、背後を振り返つた。すぐ後ろにはウイルフレッドもいる。

息が上がつて、肺が痛い。胸を押さえながら息を飲み込み、エリアスを探すところを見て、珍しく笑顔を見させてくれた。

「勝者はリューネリア様です」

静かに告げられた声に、空気が揺れた。騎士たちから歓声が上がる。それは悲鳴とも叫びとも分からぬ雄叫びだ。

すぐに近くにいた騎士たちが駆け寄つてきて、リューネリアから手綱を受け取つてくれた。馬から降りようとしたところ、先に下馬

していたウイルフレッドが来て、手を貸してくれた が、その顔はどことなく不満げに見えなくもない。

「約束よ。館の中は自由にしてもいいでしょ?」

明日にはこの地を出発して王宮へと帰るが、それでも部屋に引きこもっていたくなかった。

「ああ、好きにしていい」

ゆつやくリューネリアの満足する返事が聞けて、思わずその胸に飛びつく。途端、周囲の騎士たちから、はやす声や口笛が聞こえる。

「ありがとう」

どのように感謝をしたらいいのか分からず、先程までの苛立ちも忘れ、その背に腕を回す。しかし、その身体がわずかに強張ったのに気づき、リューネリアは顔を上げた。

そこにはいつものウイルフレッドがいた。

勝負に負けたにもかかわらず、思つたよりも涼しい顔をしている。自分を見下ろす眼差しは優しい。

だが、リューネリアはその顔に見覚えがあった。この顔は、王子の顔だ。綺麗に自分の感情を隠してしまえる仮面をつけている。ハツとして、ゆつくりとウイルフレッドから離れる。

何を浮かれていたのだろう。もしかして、彼を酷く傷つけてしまつたのかもしれない。

しかもその上、この館のどこかに女性を囮つて居たのだった。ならば、このような衆人環視の中で抱きつくななど言語道断だ。誤解をされてしまう。

あまりの気まずさに視線を逸らしたまま固まるリューネリアの周囲に、騎士たちが勝者を称えるために集まつてきていた。彼らの高い背に阻まれて、すぐにウイルフレッドの姿が見えなくなる。

人波に押されるように、リューネリアとウイルフレッドはその距離を広げていった。

その日の夕食は、なぜか大広間で騎士たちと席を共にしていた。王宮ならば絶対に有り得ないことだが、日常と違う場所にいると、騎士たちも常識が当てはまらなくなるらしい。ロレインやバレンティナの制止も、彼女らの同僚には右から左に通り抜けていくらしく、リューネリア自身もウィルフレッドの様子にそれどころではなかつたので、言われるがままになつていた。

食事自体は聞くところによると、エピ村の村人たちが協力してくれたおかげで、質素ではあったが日頃から量は充分にあつたようだ。近隣の村からや、ヴァーノン子爵夫人の実家からも何度も差し入れがあつたようで、肉体労働である騎士たちが飢えを知らずにいられたのも、背後にそういう働きがあつたからだ。

「最初からリューネリア様ではないかと見当はついていたんですよ」騎士たちと話しているうちに、ロドニーから聞いた噂の話になり、リューネリアは真相を知ることになった。

リューネリアが領主の館にいるというのは、当初、騎士たちの間でも話題になつていたらしい。恐らく、最初に査察官の警護としてやってきていた騎士と、後からやって来た騎士たちが合流した時点で、予測はついていたのだろう。しかも、立ち入り禁止区域まで設けられているから違いないと思われていたが、その夫であるはずのウィルフレッドが別に部屋を一室確保して休んでいることから、王子妃がいるという話は嘘で、実は別の女性を囮つているという噂が今度は上つた。

それは騎士たちの間では、単に面白がつて言つていたに過ぎなかつたのだが、皮肉にもジョレマイアの緘口令によつて真実味が増してしまつたらしい。騎士たちも最後の方は自分たちがしていした噂に踊らされていたと言つて笑つていた。

確かに、リューネリアはずつと一人で夜を過ごしていた。ウィルフレッドが同じ部屋で休まないのも事後処理が忙しいためだろうと思つていたし、せめて夜ぐらは話し相手になつてくれと我儘を言って手を煩わすのも申し訳なかつた。

しかも、騎士たちから聞いて噂の真相がわかり、リューネリアはドツと疲れた。いるはずもない女性を気にかけていたとは……。感情に任せで、変なことを口走らなくて良かつたと、少しだけ安心する。

だが、気にかかるのはウイルフレッドの先ほどの態度だ。王子の仮面をつけた顔を向けられたのは、まだ協力関係を結ぶ前の頃だ。ざわりと心の中で何かが蠢く。

「リューネリア様？」

怪訝な声に、ハツとする。

気をゆるめると意識がすぐにそちらへと向かってしまう。今は、

騎士たちが祝杯を上げてくれているというのに。

リューネリアは気を取り直して、騎士たちへと向き直る。ここ数日、本当に話す相手が限られていたので、騎士たちとの会話は純粋に嬉しかった。

そして、気づくと夜も更けていた。

ロレインやバレンティナが、苦労してリュー・ネリアから騎士たちを引き剥がし、部屋に戻ると二一ナが入浴の準備をしてくれていた。今日は馬を駆って汗をかいていて、足もそろそろ痛みを訴え始めている。ゆつくりと湯船につかりたいと思っていたのだ。

部屋の外に控える二人を残して、リュー・ネリアは二一ナの手を借りて身体を綺麗にした。髪も綺麗に洗う。

「ねえ、二一ナ」

ぼんやりと立ち上がる湯気を見ながら、リュー・ネリアの髪に香油を丁寧に馴染ませている二一ナを見上げる。

「なんでしょう？」

「私が館に戻ってきてからウィルフレッド様を見た？」

ずっと気になっていたのだ。騎士たちと食事をする時も、何も言つてこなかつた。確かに、館の中でなら自由にしてもいいと言つ約束だつたが、なんだか見放されたみたいで不安だつた。

それに、馬から下りるのを手伝つてくれた時のあの表情。完全に感情を隠した顔は、何を考えているのか分からぬ。

二一ナは髪に布をあて、水気を取りながら頷いた。

「ええ。食事をお運びしましたよ。その時にお見かけしましたが」「どこに？」

「ウィルフレッド殿下のお部屋です」

言われてみれば、確かに騎士たちも言つていた。ウィルフレッドは部屋を一室確保していると。

王宮では、いつも一緒に眠つていたので今では一人で眠ることに多少の違和感があるほどだ。ふと夜中に目を覚ました時に、ウィルフレッドの温もりを探してしまつことがある。そして、ああ、いないのだと思つてしまふのも事実だ。

「その部屋はどこにあるの？」

「……リューネリア様。別に夫婦だから止はしませんが、もう夜も更けております。ウイルフレッド殿下はお休みかもしませんよ？」

言われてみれば、そうである。

食堂から部屋に戻ってきた時点で、もうすぐ日付が変わろうとしていた時刻だったのだ。入浴している間に、かなりの時間は過ぎている。いつもなら、休んでいる時刻だ。

でも、あの時の顔が気になつて仕方がない。

俯いていると、気落ちしてしまったことに気づいたのか、二ーナは大きなタオルで身体を包むと、湯船から出るのに手を貸してくれた。

「仕方ありませんね、リューネリア様は……。取りあえず髪も乾かさなければなりませんし、身支度を整えてしまいましょう。その間に、殿下が起きていらっしゃるかどうか確認していただきましてきぱきと仕事をこなす二ーナになされるがまま、夜着を身につけると髪を乾かされる。その間に、部屋の外で控えている一人に声をかけていた。

本当にじつかりしていて頼りになる。リューネリアにとつて二ーナは、むしろ侍女というより姉という存在に近かつたが。

身支度が整うと、ロレインとバレンティナが部屋に入ってきた。

二ーナは入浴の後片付けのため、リューネリアは一人に託されることとなつた。

「殿下の部屋の周囲は警備上、人払いがされておりません。ですから、ネリア様がこのような時刻に行かれるのは本来お勧めできないのですが」

渋い顔をするロレインとは逆に、バレンティナは何故か嬉しそうに明るい声を出す。深夜だというのに、彼女はいつも陽気だ。

「ガウンをきちんと着て下さいね。一応、私が先に行つて一時的に人払いをしますから」

ウイルフレッドの部屋に行くまでは通常よりも時間がかかると言

われた。

当然、ガウン姿で歩き回ることも普通なら考えられないことだ。臣下にそのような姿を見られるのも褒められたことではないことぐらい分かっている。だから、バレンティナが一時的に配備される騎士を追つ払つと言つているのだ。

「ごめんなさい。でも、どうしても気になつて」

あの時のウイルフレッドの態度を思い出して、ひどく心が痛んだ。きつと氣づかない何かを仕出かして、傷つけてしまつたに違いない。

ロレインが小さく息を吐き出すのが聞こえ、リューネリアは扉の方へと促された。

「確かに殿下は落ち込んでいたようです。きつとネリア様ぐらいか元氣にしてさしあげることはできないでしょ」

「どうやらロレインも氣づいていたようだ。」

先にバレンティナが行つてしまつたのを見て、時間を見計らつてロレインが廊下を進む。

廊下には等間隔で燭台に灯された明かりが揺らいでいた。足元に落とす影を見つめながら物思いに耽る。

先ほど、ロレインがリューネリアにしかウイルフレッドを元氣にすることが出来ないと言つていたが、それを内心で否定する。

それはない。ウイルフレッドがリューネリアの身を心配してくれているのは本心からだというには分かる。その理由もリューネリアがヴェルセシュカにとつてなくてはならない駒だからだということも理解している。だが、なぜウイルフレッドが落ち込んでいるのか、そしてそれを元氣にすることができるのを、リューネリアだけだと限定してしまつことに結びつけるのか分からない。誰か他の人でもできないことはないだろう。むしろウイルフレッドを良く知つてゐるエリアスやロレインの方がいいのではないかと思える。

それに。

もつと違う存在になりたいと思つ。

たとえ駒であろうとも、守られてばかりいる駒にはなりたくはな

い。それでは誰かを ウィルフレッドを盾にして生きているということだ。もしもその盾を失つてしまつたらリューネリアは完全に無防備だ。ヴェルセシュカでは生きてはいけない。自ら動き、きちんとウイルフレッドの隣に立ちたかったのだ。だから今回のことも、ヴェルセシュカの為になるはずだと思つて動いた。きちんとできることを証明したかった。

だが結局は、部屋に閉じ込められていたのも、連れ戻しに来たのも、リューネリアにそれだけの価値が、力がないと思われているからだ。

しかも出来ることといえば。

「私は……ウイルフレッド様に心配をかけることしかできない……」
ポツリと呟いた言葉を、先を行つてロレインは聞いていたのだろう。彼女はピタリと歩みを止めると、顔だけをこちらに向けて小さく首を横に振つた。

「違いますよ、ネリア様。確かに殿下は心配をされています。ですが、何故殿下が心配をされているのかわかりますか？」

言われ、少し考えてから、口を開く。

「……私が無茶をするから？」

今思えば、査察に行かせてくれたことには渋々承知してくれたのだろう。村がならず者たちに襲われている時に、ロレインやバレンティナを側から外したことも、館から抜け出したのも、すべてリューネリアが出した結果だ。それがウイルフレッドの耳から見たら無謀な行動に見えたのかもしない。

だがロレインはゆるく首を横に振つた。

「いいえ。……ですが、それは殿下に直接お聞きになる方がよろしいかと思います」

珍しく柔らかく笑んで、ロレインは再び歩き出した。

無茶をするからではないのだろうか。

最初に、協力者であることを望んだのはリューネリアだ。ウィルフレッドはそれを受けてくれた。だから、地位と権力を手に入れる

ためでできることなら、どんなこともウイルフレッシュドに協力を惜しむつもりはなかつた。執務を手伝うことも、ヴェルセシュカという國を知るには必要なことだつたし、事務的なことは慣れていたので、役に立てたとは思つてゐる。だが、王宮から出てみたら何といふこともない。何ができたのだらう。役に立つどころか足を引っ張つてゐるのではないだらうか。これでは、ヴェルセシュカでのリューネリアの立場を悪くし、さらには協力者であるウイルフレッシュドの立場も同時に悪くするのではないだらうか。だから、ウイルフレッシュドは部屋に閉じ込めていたのだろうか。これ以上、無駄な足掻きをさせないようだ。

氣づくと溜息が出ていた。その息は重く、氣分共々沈んでいく。

結局、堂々巡りだ。

暗澹たる氣分に沈んでいくリューネリアだつたが、氣づくとロレン

インがある一室の前で止まつていた。

見事に誰にも出会うことなく、ウイルフレッシュドの部屋にたどり着いたらしい。

ロレンインが扉をノックした。入室の返事が返つてきたといひで、ロレンインはリューネリアに一礼して下がつて行つた。

そしてリューネリアは扉に向き直ると、ゆっくりと開けた。

3.1・他人行儀（ずっと閉じ込めていたかった）

扉を開けると、部屋の奥の窓辺に佇み、暗闇を見つめるウィルフレッドがいた。窓に映ったその表情はどこか冴えない。

どう声をかけていいものか悩んだ末、結局知らない者の部屋を訪れたかのようになってしまった。

「あの……失礼します」

リューネリアが声をかけると、ふとウィルフレッドが振り返った。

「どうした？」

いつもと変わりのない口調。だが、やはりどこか沈んでいるように見えなくもない。そう聞きたいのはこちらの方だ、と思うものの喉に声が引っかかるて言葉が出ない。

今までなら彼のことだ。こんな時間に部屋から出たら危険だと間違いなく言われると思っていたのに。自分が思っていたこととは違ひ、心配していなその様子に何故だか胸が痛む。

そして気づく。

どのような理由であれ、心配してもらいたかっただけかも知れない。そしてそれを心地よく思つていただけなのかもしれない。それはなんという自惚れなのだろう。心配されるということは、気にかけてもらえる存在ということだ。誰かに　　ウィルフレッドに気にかけてもらえるほど必要とされていると思つたのか。それは今までリューネリアが取つてきた行動は、まるで自己顕示欲の強い子供のようではないか。ヴェルセシュカのためと言いながら、無茶とも言える行動は、全て自分に注目を集めて安心していただたことなのだろうか。

自らの考えに思わず衝撃を受け、あまりのことに自己嫌悪に陥りそうになる。

だが取りあえず、今問題なのはリューネリアの感情ではない。取

りあえずそれは横に置き、ウィルフレッドに近づいた。

その湖面のような瞳を見上げ、そこにある悄然とした色を見て確信する。

「私はあなたを傷つけた?」

何故なのか、理由は分からぬ。でも自分を見下ろすウィルフレッドの表情が、また仮面を付けたように見える。

「何故謝る? 謝らなければならぬのは俺の方だ」

だが、そう言つた途端、仮面が剥がれ落ちた。

何かを堪えるような表情を浮かべ、視線を逸らす。深く溜息を吐くと、耐えられないといったように、ついには身体ごとリューネリアから背けてしまつた。

その態度に胸が痛む。正面から見られないほど気まずく思つてゐるのだろうか。追いつめてしまつたのだろうか。自分は一体、何をしてしまつたというのだろうか。

「すまなかつた。俺の我儘であなたを苦しめてしまつた……」

不意に言われた言葉に首を傾げる。

そう言えば、以前にもその言葉を聞いたような気がした。ウィルフレッドの我儘とは一体……。

それに、先ほどから名前を呼んでくれない。それがどこか一線を引かれたように感じてしまふのは敬称だからだろうか。だがなぜ今になつて敬称で呼ぶのか。それはもしかして、距離を置きたいという意思表示なのだろうか。

何となく息苦しくて胸を押さえる。

分からぬ。ウィルフレッドは心配してくれていたから部屋から出てはいけないとついていたのではないのか。危険から守るために仕方なかつたのではないのか。そうでないなら彼の真意がどこにあるのか分からぬ。

じつと黙つていると、ウィルフレッドがもう一度、今度は小さく息を吐き出した。

「あなたが怒るまで気づかなかつた。俺の我儘がどんなにあなたを

傷つけ、苦しめていたか。……それに、馬を駆つているあなたが、今まで見たどの瞬間よりも生き生きしているようで、俺は……自分のしたことが間違いだつたと気づいた……

淡々と語りれるその言葉はウィルフレッドの苦痛に塗れていたが、その言葉のどれをとっても、リューネリアの事を気づかつてくれていたことが伝わつてくる。

だから、いいえ、と頭を横に振つた。

「部屋から出られなかつたことは確かに退屈だつたけど、ウィルフレッド様は心配してくれていたからでしょう？それはあなたの我儘ではないわ」

だが、瞬時に噛み付くように言われた。

「違う！心配というのは建前だ！」

はつきりと否定され、胸に鋭い痛みが走る。

心配をしていたわけではなかつたのか。ならば、やはり自分は戦争反対を掲げる者にとつてはならない駒だからだろうか。だから命だけは守らなければならぬ。それ故、閉じ込めたていたと？

それは、当初リューネリアがヴェルセシュカに来た時に常に考えていた本来の役割を思い出させた。戦争を止めるため、パルミニディアへの牽制の為の人質。

それを正面切つて言われたら正直つらい。心配しているという、真綿に包まれた言葉の方が何倍もいい。

だが今考えたことはリューネリアの主觀であつて、ウィルフレッドの思惑はまた別にあるのかもしない。もうこれ以上理解できない状況を増やすわけにはいかなかつた。ここではつきりと立場を理解しておかなければ、王宮に帰つてからの身の振り方も考え直さなければならぬかもしれない。いや、本当は……可能性は低いが、できることならリューネリアの考えを否定して欲しかつた。

痛みを押し隠し、静かに尋ねる。答えがたとえリューネリアの望まない結果にならうとも、もう覚悟は出来ていた。

「ではどうしてなの？」この数日間、ずっと、あなたが何を思つてゐるのか考へてた。でもいくら考へても、私にはわからなかつた。心配しているのが建前だと言うのなら、私をどうしたいの？」

聞きたくないような気もした。返答によつては、打ちのめされてしまうかもしれない。

ウィルフレッドはしばらく黙つていた。唇をかみしめ、言いたくないような素振りを見せていた。どれぐらいの時間、そうしていただろうか。リューネリアはひたすらウィルフレッドが言つてくれるのを待つた。まるで死刑の宣告を待つような気分だつたが、それではじつと見つめていると、やがて観念したようにウィルフレッドは口を開いた。

「ずっと……閉じ込めておきたかった」

その声は吐き出された息と共に、諦めを含んでいた。

「……何を？」

決して早とちりするわけにはいかなかつた。考えられることないくつかある。

人質として安全を図るためにリューネリア自身とこ「う」とだらうか、それともウィルフレッドの真意なのか。

ずっと身体に力が入つていたのだろう。ウィルフレッドは長く息を吐き出すと、やつとゆつくりとこちらを向いた。

「あなたの姿を　他の男の目に触れさせたくないなかつた」

返つてきた答えは盲点をついていた。

それは直接的な意味合いとして、見せたくないということだろうか。それとも、ヴェルセシュカのしきたりには考えられないような何かみつともないことをしてしまつていてるといふことだらうか。

「……どうして？」

聞いて、向けられた眼差しに氣圧された。

「言わなければ分からぬ？」

その瞳に、心臓が大きく脈打つ。

本当は知つてゐる。答えを知つてゐる。色々な言い訳をしながら

も、常に頭の片隅にあつたことだ。
だけど、それはリューネリアが最初に否定したものだ。望まない
と、必要ないと、確かに言った。
。

32・唯一無二（嫌わないで）

ウィルフレッドがリューネリアを見つめる視線は、熱に浮かされたように潤んで視線を外すことを許さない。無意識に身体が逃げようとするのと、ウィルフレッドが手を伸ばしてきたのは、ほぼ同時にわずかに彼の方が一步早かつた。

「ネリー」

名前をただ呼ばれただけなのに、動けなくなる。
でも敬称で　あなたと呼ばれた時よりも、心に込み上げるこの感情は何なのだろうか。

腕を滑るように手を取られると、その指先に口づけられる。触れる吐息は熱く、その一連の動作からは田が離せない。
体温が上昇する。

「ネリー……」

どこまでも甘く響く声に、リューネリアは泣きたくなつた。

「好きになつてくれとは言わない。でもどうか嫌わないでくれ」

その一言に、リューネリアは俯く。後半の言葉は、リューネリアが心の底でウィルフレッドに対して願つっていた言葉だつたのだから。「もう一度とネリーの嫌がるようなことはしない。だから守らせてほしい。俺の手を必要ないと言わないでほしい……」

口づけは指先から手首に移動しながら何度も落とされる。ウィルフレッドの伏せられた長い睫毛が微かに揺れる。

リューネリアは、その告白を信じられない思いで聞いていた。

今思えば、ウィルフレッドが取つた行動はすべてリューネリアを想つあまりのことで、本心から守るうとしてくれていたその思いにリューネリアが取つた行動といえば反発して館から抜け出し、怒りを覚えて勝負を挑み、自分の主張ばかりを通していた。

それはつまりウィルフレッドの想いを否定する行動に違ひなく

。

だが、リューネリアはすんなりとその想いを受け取れない慎重な自分が嫌になる。ウィルフレッドが触れている自らの手から視線をそらす。

「あなたは……」

それでも慣れないことに緊張で声がひっくり返ってしまいそうになるのを何とか押さえながら、それでも声を出した。

「私があなたの主義を認める場合、私に独占欲が生じると問題だと言つた私の言葉を否定しなかつたわ」

「あなたはもう知つているだろ？　俺には今、恋人と呼べる者は誰もいないと

「でもこれから

他に恋人ができるかもしれない、と言おうとした先に被せるように言われた。

「ネリー以外は欲しくない

はつきりと告げられ、リューネリアは腰が抜けそうになった。足が震える。

未だに捕らえられた手はウィルフレッドに握られている。いきなり突きつけられた強い想いに、リューネリアの頭の中からすべての事が弾け飛ぶ。

「あの……私は……」

「いいんだ。ネリーが俺のことを嫌つてなければ……。それともこうしているのも迷惑？」

つながれた手を力強く握られて、リューネリアは首を横に振った。「あの、迷惑じゃない、です。……でも、今までこういう可能性を考えた事もなくて、その　混乱してるの。私もあなたに嫌われたくないと思つていたけど、あなたと同じ気持がどうかと言わると分からなくて……」

混乱しながらも、リューネリアも一つ一つ自分の感情を口にする。そして、一番重要だと思うこともどうにか吐き出す。

「でも、私はあなたのことは嫌いじゃないし、まだ先の事は、わからぬけど、多分……好き……になると思うし、その努力もする」

火照る頬を空いている片手で押さえ、自分の言つた言葉がウイルフレッドを傷つけなかつたか反芻する。決して、いい言葉で返せたつもりはなかつたので、ガツカリしているかもしれないと思い、そつと上目づかいに窺い、すぐに白旗を掲げた。

ウイルフレッドはどんな女性をも魅惑してしまつような笑みを浮かべていた。それがただ自分一人に向けられているものだと気づき、カツと身体が熱くなる。

「……するい」

その笑顔は反則だ。

「ネリーが嫌つてないのなら、俺も好きになつてもらえるよう努力するだけだ」

それではリューネリアが落とされるのも時間の問題だ。「コーデリア達も言つていたことがある。ウイルフレッドが落とそうと思つて落とせない女性はいないと。その上、ウイルフレッドにとつて自覚していない人間と自覚している人間ならば、後者の方が圧倒的に有利だといつことにリューネリアは気づいていなかつたが。

「ネリー、今日は一緒に寝よう

手を取られたままさらりと言われ、この直後とつだけあつて、今までと状況が違つだけに過剰に反応してしまつ。

「ええつ！」

「そんなんに驚かなくとも……明日からは強行軍になるし、ネリーに嫌われるようなことは何もしない」

「え、ええ……」

本当にいいのだろうかと思いつつ、手を引かれて寝台へと引っ張られる。先ほどの告白に腰が抜けそつになつていてリューネリアは、その途端転びそつになつた。

あつと思う間もなく、前から素早く差し出された手に身体を支えられ、転倒は免れる。だが、頭上から怪訝な声が降つてくる。

「どうした？」

思いがけず耳元で声がして、リューネリアはウイルフレッドの胸に手をついて身体を支えていたことに気づく。

焦つて立とうとして、いつの間にか足の筋肉が硬直していくことに気づいた。

思い当たる」とは一つ。

「昼間の乗馬で……」

今思えば、あのような勝負などする必要はなかつたのかも知れない。

「痛めたのか？」

問われた途端、視界が反転した。有無を言わせず身体を抱え上げられ、気づいた時はウイルフレッドの腕の中だつた。

「違います！ 久々だつたから筋肉痛になつただけです！ 歩けます！」

慌てて訴えたものの、ウイルフレッドは首を横に振る。

「無理はするな」

そう言つて、下ろされるることはなかつた。

壊れ物でも扱うかのように寝台にそつと下ろされる。それだけで心臓が早鐘を打つ。

「すぐに揉み解さなかつたのか？」

「はい。騎士団の方たちに囲まれてそんな時間が無かつたから……」

久々に乗馬をしたのだから、本当ならその後すぐに筋肉をほぐし、冷却した方が良かつたのかもしれない。だが、勝負の後はそのような間はなかつたし、ウイルフレッドのことが気になつてそれどころではなかつた。

それに、あつという間に騎士たちに囲まれ、押しやられ、気づいた時には広間で食事を前にしていたのだ。

「まったく、あいつらは……」

そう呟くと、一度寝台から離れて もしかして薬でもあるのだろうかと 考えていると、足元に回つたウイルフレッドは、おもむろにリューネリアの夜着の裾を膝まで上げると、ふくらはぎを揉

み始める。

「きやあつ、つて痛いつ！」

悲鳴を上げ、逃げ出そうとしても、ウイルフレッドの手はがつちりと足をつかみ放してくれない。

「今更だが、しないよりはましだらう」

そんなに力を込められているわけではないが、すでに触れられるだけで痛いのだ。

涙を浮かべながら、思わず近くにあつた枕を抱き寄せる。胸元に抱きこみ、痛みを逃すために自然と身体は丸くなる。それでも身体中に力が入ってしまう。

両足の筋肉を解される頃には、逆に肩に力が入りすぎて肩が凝つっていた。

「明日は立てないかもしれないな」

ようやく解放され、リューネリアは座ると田元の涙を拭う。

「馬車だから大丈夫です」

どうせ歩くことはそんなにない。多少歩く姿が無様になるかもしれないが、これは処置を怠つたりューネリアの落ち度だ。仕方がない。それに王宮に着くまでには少しは軽くなつているだらう。

ゆつくりと足をさすつていると、いつまでもウイルフレッドがその場から動く様子がないのに、どうしたものかと見上げた。顔を背け、さらに片手で口元を覆つている。耳がわずかに赤く染まっているように見えるのは氣のせいだらうか。

「ウイルフレッド様？」

何かあつたのだろうかという意味を込めて呼ぶと、ウイルフレッドはゆるく首を横に振ると、深々と息を吐き出した。

「少しほ警戒して欲しいな」

ちらりと向けられた視線の先が、自らの足に注がれ、夜着が膝上までたくし上げられていたことに遅まきながら気づく。

悲鳴を上げながら慌てて隠し、ついでに布団の中に隠れる。ウイルフレッドも気まずそうに視線を外した。

「無防備すぎる……」

そう呟き、息を吐き出す。

しばらく重苦しい空気が流れたが、ウイルフレッドが諦めたように髪をかき上げてリューネリアの隣に入ってきた。

いつものように身体に腕が回される。

それはいつもと同じはずなのに、ウイルフレッドの気持ちを知ってしまったからか身体に力が入る。それに、少しでも間に空間を作りたくなってしまったのは許して欲しい。

「ネリー」

呼ばれて見上げると、瞼に唇が下りてくる。

「おやすみ」

いつもの挨拶に、なぜかホッとする。

俯いてウイルフレッドの胸に額をよせると、ほどなく眠りの波に飲み込まれていった。

33・平穀無事（お願いがあるんです）

王宮はこつもと変わらない日常……となるはずだった。

「リューネリア様、あの……、また花が届いておりますけど」さすがに王宮勤めの長いダーラでさえ、このような事態は想像しないなかったのかもしれない。どこか遠慮がちに口を開く。

王宮に帰ってきた翌日から、リューネリアの私室になぜか多くの騎士たちから花が届けられるようになつた。それは薔薇であつたり百合であつたり、または野に咲く名もないような花であつたりなが、毎日、毎朝届けられる。それも一輪だけ。

「……ありがとうございます。今度はどなたからかしら?」

二一ナに髪を整えてもらいながら、視線だけを花に注ぐ。すでに王宮に帰着して五日。最初のうちこそ花を、それも、たつた一輪という飾るにも迷惑にならない程度の花を貰つことを嬉しく思つていたのだが、多くの騎士たちから毎日届くので、現在その数は数え切れないほどになつていて。それをどうにか侍女たちが見栄え良く生けてくれているが、それでも限度というものがある。だからと云つて、素氣無く捨ててしまうのは気持ちのこもつた贈り物である以上リューネリアにはできなかつた。

「ええつと、騎士団長からです……」

「……つ」

リューネリアは思わず噴き出してしまつた。

あの大きな人が一体どのような顔をして持つてきたのか。

一頃り笑つた後、笑いが収ると今度は溜息がこぼれる。

なぜこんなにも騎士たちから花を貰うことになつてしまつたのか。思い当たることは一つだ。

ザクスリューム領でウイルフレッドと馬での勝負のことを聞き及ん

だのだらう。だがリューネリアが不思議に思えるのは、彼らの仕えるウイルフレッドが負けた事を、なぜ彼らは腹を立てないのだろうか。むしろ調子に乗るなどリューネリアに辛く当つてもおかしくないはずなのに、王宮内で彼らとすれ違おうものなら、大変な目にあう。どこに行くのかを尋ねられ、そこまで護衛と称して付いてくる。それはまだいい方だ。護衛と言いながら嬉しそうに話しかけ、まったく護衛になつていなくていいこともよくあるのだが、少なくともそこにあるのは好意であるのは分かつてゐるので無下に止めできない。

「いざれ彼らも飽きますよ」

髪に飾りをしたところでニーナが鏡をリューネリアの正面に持つてきた。

背後に立つニーナに視線を向け、リューネリアも苦笑する。

「そう願いたいわ」

支度も済み、もう一度寝室へと向かう。

寝室を通り抜けて、ウイルフレッドの私室への扉をノックした。

「どうぞ」

エリアスの声が聞こえ、あら、と思つ。

朝早くから何事だらう。

扉を開けると、朝食の準備がちょうど整い終わつたところらしく、ウイルフレッドがリューネリアのために椅子を引いてくれた。

それが面映ゆい。

王宮に帰つて来てから変わつたことがもう一つある。朝食をウイルフレッドと共に取ることになったのだ。

王宮に帰つてきた翌日の朝、ウイルフレッドの腕の中で目覚めたリューネリアに、朝日よりも眩しい笑顔で朝の挨拶をし、旅の疲れさえ見せず、リューネリアの頬を愛おしげに撫でながら、反対の頬に口づけを落とした。それを侍女たちの目の前でされ、リューネリアは思わず突き飛ばしそうになつてしまつたのだ。寸前で思いとどまつたが……。

こつもならそのまま朝の支度に取りかかるべく、それぞれの部屋

に戻るのだが、ウイルフレッドはリューネリアの手を取つたまま離さず、なおもその手に口づける。侍女たちの溜息とも悲鳴とも言えない声を側で聞きながら、早く離して欲しかつたが羞恥と混乱で固まつてしまつたのだが。

「午後まで会わずにいる自信がないな……」

溜息のような咳きを聞いたニーナが、おそれながら、と口を出す。助けてくれるのかと彼女を見やると、ニーナはあくまでも彼女の仕事に忠実だつた。

「少しでも長く一緒にいたいのであれば、朝餉を一緒に取られてはいかがでしょうか?」

淡々と言つ彼女の提案を聞いたウイルフレッドは、途端喜色を満面にあらわす。

「それがいい

一つ返事で決定され、それからとこうもの毎朝の日課になつてしまつた。

なぜ、そのようなことを言つたのかとニーナにあとになつて尋ねると、笑顔で答えが返ってきた。

「いつまでもあの調子では朝の支度に手間取りますし、朝食を一緒に取られれば、準備も一ヵ所で手間いらずでしょ?」

リューネリアの朝の支度は時間がかかる。その点、ウイルフレッドは簡単だ。だから、ウイルフレッドの支度が済んだ後、朝餉の準備をしてもらつていると、ちょうど二時間になるというのだ。

ということで、朝餉の席についたリューネリアに、ウイルフレッドは満足げに笑みを向ける。

その側に立つリリアスを見ると、いつもと変わらない様子で挨拶をされる。

「おはようございます。妃殿下

「本当に早いですね。何かありましたか?」

給仕をされながら見上ると、エリアスがウイルフレッドを見やつた。

「大したことではありませんが、早いうちに殿下の耳に入れてしまつた方がよいかと思いまして」

意味ありげな視線をリューネリアに向けてくる。どうやら自分に関係のあることらしい。わずかに首を傾げると、エリアスは給仕をしている二ーナに声をかける。

「最近、妃殿下は困つた事があるだそうですね？」

「ええ。ですが大したことではないとおっしゃつてますが」給仕の手を止めて二ーナはエリアスを見、そしてリューネリアに視線を移す。間違つてませんよねと、その瞳は言つてゐる。

軽く頷くと、二ーナは再びエリアスを見た。

「ネリー、何があつたんだ？」

テーブル越しに手を握られ、リューネリアは大したことではないと前置きし、最近、毎朝送られてくる花の話をした。

「誰だ、そんなことをするのは」

話を聞いたウィルフレッドは、怒りもあらわに立ち上ると寝室へと向かう。リューネリアは慌ててウィルフレッドのあとを追つた。私室への扉を開けると、途端、甘い花の香りが立ち込める。ずっと部屋にいると気づかないが、外から入つてくるとその香りはかなり強い。ウィルフレッドもその部屋の状態に一瞬呆気に取られたよう立ち止まつた。

エリアスは寝室へと立ち入るわけにもゆかず、一度部屋を出でから廊下側からリューネリアの部屋へと顔を出した。そのエリアスでさえ、呆れたように部屋を見回した。

「これはまた……、思つていた以上ですね……」

どうやら話は聞いていたらしい。ある程度の想像をしていたようだが、リューネリアの部屋に飾られた花の多さに、さすがに閉口した。

給仕を一時止めてリューネリアのあとを付いてきた二ーナに、ウィルフレッドは鋭く言い放つ。

「すべて処分しろ！ エリアス、騎士団の連中に止めさせろ！」

「待つて、ウイルフレッド様」

それを聞いて、リューネリアは慌てて止める。

「騎士団の方々を止めていただくのはまだしも、折角いたいた花を処分するのは待つて下さい。いずれ枯れてしまうものだし……」

「……俺はあなたが他の男から貰つたものを許せるほど寛大じゃない」

きっぱりと言い切られ、リューネリアは俯く。単純に花は綺麗だつた。均一性がなくとも、見ていると和む。そして騎士団の人たちから受け入れられたようで単純に嬉しかったのだ。

「……すまない。 わかつた。今この部屋にある花はそのままでいい」

落ちた聲音に、リューネリアがハツとして顔を上げると、ウイルフレッドはすれ違うようにして私室へと戻っていく。

ウイルフレッドを傷つけるつもりはなかつたのに。あとを追うにしても、何と言えば良いのか分からずに立ちつくしていると、エリアスが声をかけてきた。

「妃殿下。少しよろしいですか？」

「口りと笑みを向けられ、リューネリアは思わず一步下がつた。この作った笑みが曲者であることを知つてはいる。だが、エリアスが次に言つた言葉はこの時ばかりは違つていた。

「ウイルフレッド様！」

朝餉の席に先に戻つていたウイルフレッドに、リューネリアは駆け寄るよう側に立つ。

落ち込んでいる様子を見せながらも、それでもリューネリアには笑顔を向けようとするウイルフレッドは痛々しい。だから自然と両手は胸の前に組み合わさる。

「あの、私……、お願ひがあるんです」

唐突だろうがなんだろうが、ウイルフレッドを傷つけたのが自分

ならそれを癒すのも自分でなければならない。その方法はエリアスが教えてくれた。

どんな男性も、女性の可愛いおねだりに弱いんですよ、と。

言われてみれば、リューネリアがウィルフレッドに望んだものといえば、地位と権力。これが普通一般の夫婦に適用されるおねだりだろうか。当然、エリアスに聞けば、まったく可憐げがないとのことで、リューネリアもそれは反省すべき点ではあるようだ。

「俺にできることならどんなことでも」

リューネリアの珍しいおねだりに、それはもう全力で全快していく様が見えるようだつたとニーナがあとで教えてくれた。

「あの……、私の部屋にある花はいずれ枯れてしまします。ですから、よろしければ庭園にある花を分けてもらひことはできないでしょうか？」

ウィルフレッドの執務室から見える庭園は、じぶんまりとしているが綺麗に手入れされている。散歩で行つてみたいと常々思つていたのだが、なかなかその機会がなかつたのだ。

リューネリアのお願いを聞いたウィルフレッドは、一瞬戸惑つたようになつた。

「そんな、こと……」

少しだけまた落ち込んだように見えた。

「いいよ」

ぱつりと呟かれた言葉に、リューネリアはさらに言葉を続ける。

「あの、ではウィルフレッド様も一緒に行かれませんか？私、ウィルフレッド様と一緒に摘んだ花を部屋に飾りたいんです」

恥ずかしくはあつたが、一息に言つた。

もう目をそらしたくてたまらなかつたが、それでもじつとウィルフレッドの返事を待つ。

しばらく呆然としていたが、すぐにいつもの優しい笑顔に戻つていぐ。

「いいよ。行こう」

その穏やかな笑みに、リューネリアもほっと息を吐く。
そんな二人のやり取りを、エリアスや二ーナたち侍女も穏やかに
微笑んで見守っていた。

34・白昼堂々（大丈夫）（前書き）

残酷描写あり。苦手な方は「」注意下さい。

午前中の予定を全て取り消したウィルフレッドに、当初行く予定だった執務室から見える中庭ではなく、王宮の裏手に広がる本格的な庭園へと案内された。

そこは見渡す限りの縁で覆われ、所々に同一色の花が植えられ、今が盛りとばかりに咲き乱れてい。まるで一つの絵画を見ているような気分だつた。だが風に乗つて漂つてくる甘い香りが、目の前の風景を現実のものだと教えてくれる。

咲いている花は多種多様ではあつたがその中でも薔薇が多く、見事な大輪の花を付けている。切り花にするには開きすぎているが、見てまわるぶんには華やかで十分、目を楽しませてくれる。

ウィルフレッドに案内されながら庭園へと足を踏み入れた。そこはまるで迷路のような作りをしており、薔薇のアーチの連なつた通路を通り抜けると、身長より高い植木で壁が作られている。そのまま右に左にと曲がりながら進み、あつという間にリューネリアの方に向感覚を狂わせていく。ちょうど両手で数えられるぐらいの回数を曲がつた頃には、帰る道が完全に分からなくなつてしまつた。

緑の壁の方に、遠く王宮の屋根が見え、そちらに行けば多分、帰ることができるのだろうと思う程度だ。だが、きっと曲がりくねつているのでそう簡単にはたどり着けないだろう。

「ウィルフレッド様は戻る道を分かつてらつしやるんですね？」
不安になつて聞くと、からかいを含んだ目がリュー・ネリアに向かられる。

「いや。適当に歩いてるよ

「……」

息をのみこんで見つめると、手を差し出された。

「大丈夫。実はこの庭を抜けるにはコツがある

背後についてくる侍女や騎士たちの目を気にしながら、差し出された手を取るべきか悩む。その躊躇いを見抜かれ、ウイルフレッドは一步戻つてくると、当然のようリューネリアの手を取つて腕に置く。それは夜会でエスコートする位置と同じで、リューネリアは安心して歩を進めた。

「ネリーは花の名前に詳しい?」

「パルミテイアは緑と湖の国ですよ?」

笑いながら答えると、そうだったとウイルフレッドも笑む。

「それなら簡単だ」

そう言って、庭園の秘密を口にする。分かれ道に必ず植えられている花の名前の頭文字を拾つていくとある言葉になる。言葉になるように拾つていかなければ王宮へは帰ることはできない。それは、この庭園の何処からはじめても結果が同じように設計されていることだった。

「その言葉は?」

耳元でこっそりと囁かれ、リューネリアは口元に笑みを浮かべた。

それは子供から大人まで、誰もが知つてゐる物語に關わる言葉。

「この庭園を造つた人は、とても遊び心のある方だったのですね」

「そう。とてもね」

まだ何か秘密があるような口ぶりのウイルフレッドと歩きながら、この時間がとても穏やかでリューネリアの心も安らかな気持ちになる。戦争を終わらせるための結婚だったはずなのに、こんなにも穏やかで、幸せでいいのだろうかとも思ひ。まるで夢のようだとも。このまま何事もなくウイルフレッドと一緒に生を共にすることができれば本当に幸せだと思つ。いずれ子供ができる、穏やかな家庭を作ることはきっとウイルフレッドとなら可能だつ。

添える腕に力を入れると、ウイルフレッドは歩みを止めてくれる。薔薇を指差すと、小型のナイフで切つてくれた。その上、刺を取りリューネリアに渡してくれる。

そうやって庭園を歩きながら何本も薔薇を摘む。

いつまでもこの幸せが続けばいい。そう願っていた。

しばらく行くと突如開けた場所に行きあたつた。そこには小さな噴水があり、周囲にはテーブルと椅子が置いてあった。似たような場所が他にも数ヶ所設けてあると聞き、改めて庭園の広さを実感する。

確かにこれほどの庭園ならば歩き疲れてしまう者は多いだろう。正直、リューネリアも少し休みたいと思っていたところだった。侍女たちもお茶の準備を始める。騎士たちも周囲を警戒しながら、それでもこの和やかな雰囲気を壊さないよう、適度の距離を保つている。

リューネリアは一人で噴水の周囲を一周してみる。今、自分たちがやつて来た方向とは違う方向へと三本、道がまだある。どこに続いているのかウィルフレッドに聞いてみようとしたその時、ふと感じた違和感に、視線を戻す。

何に対する違和感か。すぐに分かった。

その道の一つに人がいた。騎士でも侍女でもない。まして、庭師でもない。

「ネリー！」

ウィルフレッドの逼迫した声と、その者がこちらに向かってきたのはほぼ同時だった。

何かに陽光が反射し、眩しくて思わず手を翳す。それが陽の光を浴びた剣だと気づいた時は、すでに男は目の前にいた。

リューネリアに向かつて大義名分を掲げた台詞を吐き出すと、その男は迷うことなく剣を振りかぶつた。

悲鳴が遠くで聞こえる。

何かが割れたような音もした。

このまま殺されるのかと呆然と見やる。幸せな未来を思い描いていたのは、ほんの少しだけ前のことだったはずなのに、ここで終わ

つてしまつのかと思うと、それを自らも強く望んでいたのだと初めて気づく。だが、足が地面に縫いつけられたように動かず、ただ男の動作を見ているしかできなかつた。

が、振り下ろされたと思つた瞬間、リューネリアの身体は突き飛ばされていた。

甲高い金属音が、地面を目の前にしたリューネリアの耳に届いた。

「逃げろ！」

ウイルフレッドの叫びを背後で聞き、地面をつかんだまま慌てて振り仰ぐ。

知らない男と、ウイルフレッドが抜刀して向き合つていた。

「殿下！」

騎士たちが慌てたように、駆け寄つてくる。

リューネリアもすぐに、駆け寄つてきた騎士たちによつて起こされ、ウイルフレッドから離された。

そこに今度は、今まさにリューネリア達が通つてきた道から剣を持つた男たちが現れた。

侍女たちの悲鳴が上がる。

「リューネリア様！」

数名の騎士が、リューネリアの前に立ち、彼らから守つてくれようとした。だが、当然戻る道は塞がれている。どうやら逃げ場はないらしい。

じりじりと後退しながら、侍女たちの元へと下がるしかなかつた。二ーナがリューネリアを守ろうと側に立つ。その目はとても冷静に、襲つてきた者たちを見つめている。

「大丈夫」

リューネリアは二ーナの腕をつかんで呟いた。

だが視線はウイルフレッドから離れなかつた。幾度か切り結んでいるようだったが、押されているようには見えない。むしろ優勢のよう見える。

「失礼します」

横で二ーナの声が聞こえたと思うと、スッと視界が閉ざされた。

「二ーナ？」

「見てはなりません」

何を、とは聞くまでもなく、その直後、数度の金属音が聞こえたと思うと、うめき声ともつかない悲鳴で分かつてしまつた。王族を襲つた者たちが役目に失敗するどないう結末を迎えるのか、その道は一つだけだ。それは、リューネリアにも分かつていたことだつた。だが、絶命する人間の発する声は想像以上に身の毛がよだち、自然と身体が震えた。

何かが地面に倒れる音がして、続いて剣戟が聞こえていた他の場所でも同様なことが起こつた。警備に必要な最低限の人数で、捕らえることは無理だつたのだろう。彼らの仕事は、ウイルフレッドやリューネリアを守ることが第一なのだ。

「二ーナ……手を外して」

「ですが」

躊躇う彼女に、リューネリアは告げた。

「構いません」

ゆつくりと視界が明るくなり、先ほどまでの穏やかな庭園には似つかわしくない鮮やかな赤が地面に広がつていた。

すでに息をしていない人間が、その中ほどに倒れている。

震える息を吐き出し、ゆつくりと息を飲み込む。

視界に、出来るだけ地面に伏す人物を入れないよう視線を動かしウイルフレッドを探す。

それは容易であると同時に、とても大変なことだつた。もしも怪我をしていたらどうしようという恐怖が、ウイルフレッドを探す動作を躊躇わす。だが、見慣れた姿はすぐに目に入つてくる。

「ウイルフレッド様！」

リューネリアは二ーナの手を振り切つて、ウイルフレッドのともに駆け寄つた。

抜き身の剣にはまだ血が付いていた。だが、彼の身の安全を確か

める」ことがリューネリアにとって最優先だった。

「お怪我はありませんか！？」

「ああ……ネリーは？」

「大丈夫です」

両手を胸の前で握りしめ、ホッと息を吐き出す。

助けてもらった時、ドレスが多少土で汚れてしまつたが、これと
いつた怪我はない。

ウイルフレッドは騎士たちに指示を出した後、リューネリアの肩
を抱き寄せる。

「護衛をつける。部屋に戻つてくれ」

「ウイルフレッド様は……」

「あとで行くから」

そう言つてリューネリアは送り出された。

侍女と護衛の騎士に守られ、この庭園に来た時とは逆の気分を味
わいながら、沈んでゆく気持ちのまま部屋に戻ることしかできなか
つた。

35・表裏一体（これが私の望む生き方）

土で汚れたドレスを着替え、私室のソファに腰を下ろした。

部屋の中は朝と変わらず、花で溢れかえっている。温かな日差しが窓から入り込み、日常どどこも変わらない。見た目だけは。

朝の和やかな雰囲気はどこに行つたのか、張りつめた空気がリューネリアの周りに絡みつき、先程までいた侍女たちも不安そうな面持ちのまま、それでも緊張感が発せられていた。

部屋の外には、ウィルフレッドに言われて来たのだろう。ロレンとバレンティナが控えている。

着替え終わつてすぐに駆け込んできた二人の姿に、思わず目を見張つたが、二人の表情を見て思わず苦笑した。心配して駆けつけてくれた二人には申し訳なかつたが、その心配が心の中に安堵をもたらしたのは事実だ。冷え冷えとしていた心の中が温かくなる。笑みを向けると、一人も落ち着きを取り戻してくれ、先ほどまで側にいてくれたが、仕事を優先してもらつた。

部屋を見渡し、そう言えればウィルフレッドと摘んだ薔薇を庭園に忘れてきてしまつたことを思い出した。

目の前に広がる赤。振りかざされた剣。

向けられた言葉からも、明らかにあれば自分を狙つたものだ。今までも何度か命を狙われたことはあつたが、ここまで白昼堂々と襲つてくることはなかつた。いつもなら襲われたことを秘密裏に処理していたのだが、さすがに今回はそうはいかないだろう。公にすることがどのような影響を周囲に与えることになるのか。

ぐつと唇を噛みしめる。

命を狙う理由は分かる。だが、なぜ今になつてこのような手段に出たのか。そこまで戦争をしたいのか。

「二一ナ」

現在、部屋にただ一人控えている侍女を呼ぶ。他の侍女たちは別

室でエリ亞スから具体的に話を聞かれている。

傍らに立つた彼女を見上げ、リュー・ネリアは決心する。

先ほど、念のためと思ってドレスの隠しに持っていたものを取りだし、二ーナに差し出す。

「これを」

それは小さな短剣だ。

女性でも重量を感じさせないほど軽く、扱いやすい代物だ。護身用としてパルミティアであつらえたものだつたが、リュー・ネリアにこれを扱う技術はない。

「はい」

両手で捧げるよつにして受け取つた二ーナに、申し訳なくて小さく謝罪する。

だが、向けられた殺意に無防備でいられるほどこの命は軽いものではない。二つの国の将来がかかつていてるのだ。ならば守るしかない。それが二ーナに約束させたことを自らが破ることになつたとしても……。

二ーナがリュー・ネリアの侍女となつたのは二ーナが八歳、リュー・ネリアが六歳の頃のことだ。

当時、ヴェルセシュカとの国境沿いで小競り合いが頻発し、いつ開戦をしてもおかしくない状態が続いていた。

今思えば、父であるパルミティアの王はすでに戦争が始まることを予測していたのだろう。その当時、パルミティア王家直系の後継ぎはリュー・ネリア一人。弟のライオネルはまだ産まれてさえいなかつた。当然、王になにかあれば一人娘のリュー・ネリアに国の命運がかかることになる。つまり、失うことのできない存在だつたのだ。そこで、リュー・ネリアに年齢の若い侍女を側に置くということになつた。それは身代わりに他ならなく、髪色も黒に近い少女たちが集められ、その中に二ーナがいた。

彼女はヤドヴィガ山脈の山岳地帯に住む民族の出だつた。身にまとう雰囲気が他の少女たちとは違ひ、どこか一線を引いたところがリューネリアの気にかかつた。

話を聞くと、王宮から出された条件はかなりのよい条件で高額な給金も出ること。山岳地帯の生活は苦しく、家族を養うために、自ら決心して王宮にやつて来たということだった。

わずか八歳といつにもかかわらず、親から離れて暮らすことを選んだ彼女の強さにリューネリアは心を打たれた。

それからというものリューネリアは何かと二ーナを気にかけていたが、彼女たちの役割を知らなかつたわけではない。何かあつた時、犠牲となるのは彼女たちなのだ。適度な距離を取りつつ、いつも二ーナを気にしていた。

だがある時、何を思つたのか、二ーナが侍女の仕事を覚えつつも、王宮の警備をしている兵士達から剣の手ほどきを受けていることを知つた。

侍女の仕事は決して楽なものではない。それでもなお暇な時間を見つけて、剣の扱いを覚えようとしている彼女に理由を問うたが、決してその理由を口にするとはなかつた。しかも彼女は、もともと山岳地帯に住んでいたためか、身体能力が高く、もともとの素質もあつたのだろう。彼女は他の侍女とは違ひ、数年後には城の兵士たちにも引けを取らない腕前になつていた。

そしてリューネリアが戦場へ赴くことが決まつた時に気づいた。他の侍女には危険すぎる場所であるため連れていいくことは無理でも、二ーナならば可能なこと。そのことで初めて二ーナの求めていたものが何であつたのかをリューネリアは知ることになつた。それは、二ーナが自分の側にいることを選んだといつことに違ひなく、リューネリアが侍女たちを身代わりにしたくないと思つていて、彼女が理解していること、さらには彼女に対する信頼を深める結果となつた。

だが、そんな彼女とパルミーディアを出る前に、一つだけ約束をし

た。

本当は国に彼女を置いてきて、すべての役目から解放したかった。家族の元に返してあげたかった。

しかし、はじめてニーナが口に出し、望んだことがリューネリアの側にいることだったのだ。リューネリアもヴェルセシュカに人質として行くことに当然不安がなかつたわけではなく、今となつてはそれが彼女の本意だつたのかどうか、差し出されたその手を思わず掴んでしまつたのは自分の弱さだ。

できることなら自分を守るためとはいえ、ニーナに人を傷つけるようなことをして欲しくはない。ヴェルセシュカに連れて来ておきながら、それがどんなに自分勝手な考えなのかということも承知で、彼女に武器を持つことを禁止した。

せめてこの国では普通の侍女として、普通の女性として過ごす楽しみを見つけて欲しいと思っていたのだ。決してこの地が安穏な地ではないと知りつつも、自分が上手く立ち回つて今度は逆に彼女を守ればいいと思っていた。

しかし、どこにでも予測していないことは起こり得るもので、協力者として申し分ないと思つていた夫は、この結婚を最初こそ仕事と割り切つていたようだが、今では完全に私情と化している。そしてまた、リューネリア自身もそれを心地よいものとして受け入れていた。本當なら、もつと要領よく行動するはずだつたにもかかわらず、このような事態に陥る真似を引き起こしてしまつた。

思うに、今回の白昼の襲撃の一因は、ここ最近の騎士たちのリューネリアに対する態度だ。

それはリューネリアがヴェルセシュカでの地位を向上させたと思つていいだろう。

今まではウイルフレッドが夫という立場だからこそ、パルミニティアの王女を受け入れていたと周囲には思われていた節もある。

だが、騎士たちの態度から確実にリューネリアがヴェルセシュカに受け入れ始めた事に対する懸念だろう。早く危険な芽を摘み取つ

ておぐべきと思つての襲撃なのではないだろうか。

「一ーナにその考えを話すと、彼女は頷いた。
どうやら考えは同じようだ。

だが、リューネリアはやはり申し訳なくて、頭を伏せた。
「ごめんなさい。一ーナにはもつと違う生き方をして貰いたかった
のに……」

「いいえ。私はリューネリア様のお役に立てる」ことが嬉しいのです
「微かな頬笑みさえ浮かべて言う一ーナに、リューネリアは首を横
に振る。それを幸せだと思つてはいけないのだ。

「違うわ。言つたでしょう。あなたはあなたの生きたいように生き
ていいと」

「はい。ですからこれが私の望む生き方です」
リューネリアの側に跪くと、下から見上げてくる。

「リューネリア様の思うままに、お使い下さい」

自分の力不足を痛感しながら、リューネリアは心の中で一ーナに
謝る。まだ彼女の力を借りなければ何も出来ないのだ。

だがいつまでも後悔していくは始まらない。事はすでに起つてしまつたのだ。頭を切り替えなければならない。

「取りあえず、今まで通りに。ウイルフレッド様から話しひを聞いて、
それから動きましょう。少しでも状況が分かつてからの方が無駄も
少ないわ」

頭の中が冷えていくような感覚が蘇る。

かつて戦場に立つた時と同じように。

常に後方について、剣を振るつたわけではない。だが、戦局を見な
がら指示を出すことはできていた。後方支援という隠れ蓑の中で
。

暗い思い出に沈みそうになつた時、扉がノックされると同時に開けられた。

すぐに立ちあがつた二ーナは、当然のよつて部屋の隅に控える。

「ネリー」

立ち上がり出迎えたりューネリアは、ウィルフレッドによつて腕の中に閉じ込められた。

田の前にある服が、今朝とは違つたことに気づき、彼も着替えたのだと気づく。それが指示する意味に気づき、暗澹たる気分で現実なのだと想い知る。

だが背中に回された腕から、ウィルフレッドの心配が伝わってきて、リューネリアは安心させるように彼の背中に手を回した。

「私は大丈夫」

しつかりした声で答えると、ゆっくりと息を吐き出したウィルフレッドが頭上で辛そうに顔を歪めていた。

「また閉じ込めてしまいたい……」

だがそれは希望であつて、本気でそうする意思はないようだつた。リューネリアはそつと手を伸ばし、ウィルフレッドの頬に触れたと表情をゆるめた。

「あなたがずっと側にいてくれるのなら、それもいいかもしれないわ」

そうすれば、無暗に襲われることも少なくなるだろう。だけど、それは絶対に無理だと分かっているからの発言だ。

ウィルフレッドはその言葉に田を見開いて、ふいと視線を逸らす。「できればそうしたい。だが、それではネリーから危険が消えるわけじゃない」

「ええ」

ウイルフレッドの出した答えは、リューネリアを安心させた。危険から逃れるためとはいえ、一生、閉じこめられたまま生きていけるはずはない。不満も出るだらうし、まして閉じこもっていたからといって、必ずしも安全とは言えないだらう。

「閉じ込めはしない。でも、できるだけこの部屋からは出ないで欲しい。すべてが片付くまで警備を強化する。部屋から出る時も、必ず護衛を連れて行ってくれ」

「わかったわ」

「絶対に、危険なことはしないでくれ」

念を押されて言われた意味に気づき、リューネリアは苦笑した。ザクスリューム領で抜け出したことを言つていいのだらう。

「しないわ。約束する」

真っ直ぐ見つめて言つと、再び強く抱きしめられた。

こんなにも誰かにとつて特別な人となることが、強く必要とされることが、リューネリアの心を震えさせる。それは強くあると同時に脆くもある。また逆も言える。この人の為に生きよつといつ力が何処からともなく湧いてくる。

ふと緩んだ腕に、リューネリアも身を離そつとして、結局それは叶わなかつた。

後頭部に回された手によつて上向かされると同時に口づけられ、思わず目の前の胸に縋つた。それは束の間の出来事だったが、その間、すべての憂慮すべき事柄が頭から消え去る。

ようやく離された時、頬を両手ではさまれ、真正面から瞳を覗きこまれた。

「必ず守る」

あまりにも真摯な眼差しに、身体中が熱くなる。

「はい……」

信じないわけがない。向けられる気持ちを。

どうやら入口で控えていたらしいうリアスが、小さく咳払いをし

ながら入ってきたので、場所をソファへと移す。

ずっと見られていたのだろうかと思い恥ずかしくなるが、エリ亞

スは表情をえることなく報告を始めた。

「生憎、身に付けていたものから身元の分かるような物は出てきませんでした。殿下からもお聞きしましたが、相手は剣の扱いにも慣れていたため玄人と思われます」

つまり誰かに雇われたということか。

「しかし、玄人の割には……」

何か思うところがあるのか、ウイルフレッドは言葉を濁した。それに思い当たる節がエリアスにもあったのだろう。頷いた。

「そうですね。少し安易すぎると思われます」

「安易？計画が……ですか？」

話の成り行き上、そういうことだろう。

「少し考えてみれば分かることだと思います。殿下たちが本日、急に予定を変更されたことを知っていたのはどれくらいの人数だと思いますか？」

言われて思い出す。

確かに、リューネリアが庭園に行きたいと言つたのは、今朝の事だ。だとすると、襲撃計画を急遽庭園にしたのであれば安易になるのも頷ける。もしくは王宮内よりも庭園ならば、警備が薄いと急遽行動を起こしたと考へるなら納得できる。

どちらにしても、予定変更されたことを知つていた人間が襲つたことになる。それは極々急に決まつたことなので、知つている人間は限られてはいるはず。

「……つまり身近にいるということ？」

「そうなります。それがまだ黒幕だとは言えないでしょうけど

「手引きをしたということですか？」

「可能性はあります」

きつぱりと言い切つたエリアスをじっと見ると、彼は続けた。

「一ノナと私は除外して考えてみて下さい。あと、あなたたちの予

定を知っていた者はどれほどいますか？

リュー・ネリアには現在、二ーナを除くと侍女が六人付いている。

彼女たちは当然知つていただろう。あとは、庭園についてきた護衛の騎士が六人。当然、指示を出すべき彼らの上官も知つているだろう。

他には……。

考えてみると、本当に限られてくる。

愕然として思わず黙り込んでいると、隣に座るウィルフレッドに手を握られた。

「騎士の方には俺たちがあたる。ネリーと二ーナは侍女たちを注意して見ていてくれ」

「はい。二ーナ」

部屋の隅に控えるようにして立っていた彼女を呼ぶと、すぐに彼女はやってきた。

「話は聞いていたわね？」

「はい」

頷く彼女を見ると、表情は変わらなかつたが、わずかだが怒氣を感じる。どうやら本来ならリュー・ネリアを守るべき同僚の中に、裏切り者がいるかもしれないことに対して怒つているようだ。

ウィルフレッドとエリアスを振り返り、告げる。

「おかしな事がありましたら必ずご報告します」

「では、二ーナには護衛を。他の侍女たちもそれぞれ監視をつけよう」

ウィルフレッドの言葉を、二ーナは首を振つて止めた。

リュー・ネリアもその有り難い申し出を拒否する。

「折角ですが、二ーナに護衛は不要です」

不要というか、むしろ邪魔になるだろ。

彼女は自分の身ぐらいい、本当に自分で守れる。

ウィルフレッドが眉を顰める。どうやらリュー・ネリアたちがまた無茶をするのではないかと疑つてゐるようだ。

「では、二ーナには護衛を。他の侍女たちもそれぞれ監視をつけよう」

先ほど、約束したばかりだというのに。

「大丈夫です。私はできるだけ一人にはなりません」心配をするウィルフレッドに先手を打つて告げる。

「二ーナは優秀な侍女です。ええと、ヴェルセシュカ風に言うなら……私だけの騎士です」

パルミディアでは女性に騎士という位は与えられなかつた。だから、ヴェルセシュカに来た時、ロレインやバレンティナの話を聞いて、二ーナは侍女ではなく騎士だつたのだと初めて思い至つた。

目の前の二人も、リューネリアがあえて、騎士、と言つたその言葉の意味するところに気づかないはずはない。

パルミディアの国王が娘に許した彼女だけの騎士。侍女という身分に身を隠し、本来の役割はリューネリアを守るために剣を持つことを許された者。

「ウィルフレッド様もエリアスも、どうかこのことは内密に。それと二ーナが帯剣することをお許しください」

今更ながら告げることになつてしまつて申し訳なく思つ。一生、言つような事態がなければいいと思つていたのに。

驚いて言葉を発せられない二人を尻目に、二ーナは一度下がることを告げる。その理由は剣を取つてくるとのことだった。

ウィルフレッドは参つたというように片手で顔を覆つてしまつた。エリアスも二ーナが去つた扉を見つめている。

それは仕方がないだろう。侍女として完璧に仕事をこなす彼女のあの細い腕で、どれだけのことが出来るのか。そもそも信じられないことだらう。

「……では、侍女の方はお任せします」

「はい」

先に立ち直つたエリアスが、騎士たちへの尋問に向かうことを告げた。まずは騎士たちの裏付けを確認しなければ、護衛を任せることもできない。当然、部屋の前にいるロレインとバレンティナもその中に入つていいようだつたが、一人の尋問は彼女たちがここに駆け

つけてくる前に済んだらしゃべり、ビツヤリ護衛を任せられたと判断したようだった。

だが、ウィルフレッドは一ノナが戻つてくるまで側にいてくれるらしい。

今、他の侍女たちは部屋に控えていないので当然一人きりだった。

「摘んだ薔薇を、置いてきました……」

本来、花を目的として庭園に行つたはずなのに、折角ウィルフレッドが丁寧に刺まで取つてくれた薔薇を置き忘れてしまうとは残念だった。

あの薔薇を飾つていれば、眺めるたびに庭園を散歩した時に感じた幸福感を思い出せたかもしれないのに。

一瞬にしてかき消えてしまつた思いを寂しく思いながらも、リュネリアはそれでも希望を込めて隣に座るウィルフレッドを眺める。「ウィルフレッド様、あの……」

少し考えてから、口を開く。

自らの考えに頬が上気していくのが分かる。でも。

「どうした？」

「この件が片付いてからでいいのですが、その……またお願ひを聞いて下さいますか？」

「いいよ。でも今度は俺のお願いも聞いて欲しいな」

予想外の返事に、リュネリアは驚きながらも、それもまた悪くないと思う。

「はい。私に出来ることなり」

快く返事をする、ウィルフレッドは柔らかい笑みを返してくれる。

今、このような時であつても、この人が側にいるだけでいくらでも心が穏やかになれるのだと思えた。

事が起こつた時、二ーナを除く六人の侍女の内、二人はリュー・ニアの私室や寝室の片付けの為に残つていたことは把握している。うち一人はランス公爵家の後見で侍女として王宮に上がつたダーラと、残るもう一人の侍女は王太子の婚約者の実家であるクワエル伯爵家の遠縁にあたるマー・シャだ。

残り四人としても、それぞれの後見は確かなものであり、あえて言うならランス公爵家の後見というだけでダーラが一番あやしい。未だに休戦したことに否定的な議員が多い。水面下で動いている者もいるが、それでも極々少人数で、大きな動きは見せていない。取りあえず動きを監視しておくが、放つておいても問題はないと言われている。

だが、ここで問題となるのはランス侯爵だ。

リュー・ニアはウイルフレッドから説明を受けながら、自分がヴエルセシュカに来てから得た情報と矛盾する話に首を傾げた。

公爵は議会での発言権は確かに高いが、ウイルフレッドとリュー・ニアの婚姻を推し進めてきた一派の台頭ではなかつただろうか。つまり、戦争反対派のはず。

確認すると、ウイルフレッドは頷き、苦々しく言葉を続けた。
エリアスの言葉を借りると、一度身内に招いた方が油断させることが出来ること。

極端な言い方をすると、嫁いできたパルミティアの王女が不慮の事故で亡くなろうとも、すべてヴエルセシュカ内の問題として片付けることが出来る。実際問題としてパルミティアが黙つているとは思えないが、全く有り得ないという話でもない。

しかもその可能性を考えるなら、憂慮すべきことは他にもある。パルミティアには現在、王位を継承すべき人間は、リュー・ニア

の弟、ライオネル一人だ。しかもまだ幼く、パルミティアの王子一人いなくなれば、パルミティアは内側から荒れていく。

そういうことを見越してのことなら、ランス公爵も疑うべき一人だろう、と。

「でも、それは公爵が議会でも発言権が高いから疑われているのでしょうか?」「

穿ち過ぎではないかとリューネリアは思う。寝室で、寝台の端に腰かけて話をしていたウイルフレッドに問うと、肯定された。

リューネリアは窓際に置かれたテーブルの側の椅子に腰を下ろしている。

パルミティアを内側から混乱させ、瓦解させようとする考えでいくと、リューネリアを亡き者にした後、なお且つ、ライオネルを狙うことになる。それはあまりにも危険すぎやしないだろうか。

ならばいっそ、ライオネルだけを狙い、次にパルミティアの王位継承権を保持するのは言わずと知れたりューネリア自身だ。ヴェルセシユ力に嫁いできたとは言え、夫は第一王子。共にパルミティアに行くことになるならば、全てはヴェルセシユ力の有利に事が運ぶだろう。

リューネリアならば、この方法を取る。明らかに益が多いではないか。

そう考えるとやはり、ランス公爵は違うのではないか。

だが百歩譲つて今現在、もつとも疑わしい線を考えてみる。

「仮にそうだとしたら、ダーラが情報を流す先はランス公爵家以外、考えられないよね?」

「そうなるな。彼女はランス公爵家寄りの人間であつて血縁ではないから、後見をしてくれているランス公爵の顔に泥を塗ることは絶対にできない。もしも、公爵家を裏切ることがあればこの先、仕事に就くことも、嫁ぐことも、公爵の田の届くところで生活することも出来ないだろうからな」

それは血縁であつても、少なからず言えることだ。ということは、クワエル伯爵家の遠縁にあたる侍女のマーシャも情報を流す先がクワエル伯爵家以外は考えられないということか。だが、クワエル伯爵家の令嬢は王太子に嫁ぐことが決まっている。王家に反旗を翻すはずはない。

とすると、やはりダーラが今のところあやしいのか。

しかしランス公爵を疑うには不確定要素が多くすぎる。行きつく先は先程の件に戻り、これでは堂々巡りだ。

「ネリー」

そのまま考へ込んでいると、ウィルフレッドに不意に呼ばれた。

「はい？」

呼ばれるままに寝台に近づくと、腕を取られ、身体¹と寝台の奥へと押しやりられる。

勢いづいていたため一瞬身体が跳ねたが、どこも痛くはない、そこはいつもリューネリアが横になる場所だつた。

窓に近い方がウィルフレッドの定位置だ。今も寝台に窓際よりで座っている。

その姿勢のまま見上げると、真剣な眼差しが見下ろしてくる。外から覆い隠すように身をかがめると、リューネリアの耳元で囁く。

「あまり長い間、窓辺にいては駄目だ」

「……はい」

話をするには必要以上の近さに、取りあえず寝台の上で座り直し、適度な距離を取る。

心臓を宥めながら、視線をウィルフレッドから外してさつ氣なく話を続ける。

「それで、騎士の方々は？」

「こちらも黒とも白とも言い難い」

憮然として答えたウィルフレッドにリューネリアもやはり、と思

う。

そうなのだ。はつきりと黒とは言えない。

ダーラとマーシャにそれぞれ話を聞いても、二人は朝からリューネリアの私室の片付けをしていて、リューネリア付きの侍女以外の者と話をしていないと言うのだ。侍女たちは仲が良いが、だからと言つて底い合つてているようにも見えなかつた。

はない」

もどもと騎士にならうとする者は貴族の子息でも家督を継げない一男や三男が多い。そんな彼らでも後継ぎとなる貴族の令嬢と縁続きになれば生活は安泰だ。とすれば、議会に連なる貴族に情報を売る者もいなくはないだろう。つまり、騎士に関しては、誰もが疑わしいのだ。

リュー・ネリアは眉間に皺を寄せて唸る。

「さつぱり分からぬわ」

危険を冒してまでリューネリアを狙つたのだ。少しごらい何かが
見えてきてもいいはずなのに、まったく尻尾がつかめない。
ふと嫌な予感が過る。

もしかすると事は簡単なことではないのかもしれない。

考えを遮るように、強引ともいえる行動で寝台に横たわられ、腕の中に閉じ込められた。

「あまり考え込むな。寝不足になると、心身ともに反応が鈍る」

何か見落としていることがあるかも知れない。それは時間が経てば経つほど思い出せなくなる。

それに

「眠れないなり、眠れるよつてよしそうか？」

まるで考へを読んだかのよつに……しかも艶のある声が耳元をかすめ、リュー・ネリアは瞬間に首を横に振つた。思わず腕を押して身体の間に隙間を作る。

「遠慮しなくても」

「別に遠慮はしません。今はそんな場合じゃ」と言いつつ、ウイルフレッドを見上げると、その顔は楽しそうに笑っている。

「……遊びましたね」

ムツとして睨んだが、ウイルフレッドは気も止めず、リューネリアの背中に回していた腕に力を入れ、その距離を一段と縮める。ゆるりと背中を撫でられ、思わず身を固くする。

「遊んではない。俺はこれでもかなり我慢をしている」

何を、と聞くほどリューネリアも鈍くはない。求められていることも分かっている。

だが、本当はそれではいけないことも理解している。リューネリアは義務を果たしていない。我儘を言ってウイルフレッドに我慢を強いている。本当なら夫であるウイルフレッドに義務だと言われれば、拒むことは出来ないのに。

黙り込んでしまったリューネリアの瞼に、いつものように優しい口づけが落とされる。

おやすみと囁かれれば、瞼を閉じるしかない。

温かい腕の中は、どんな不安も溶かしてくれるようだ。ウイルフレッドの胸に、甘えていると思いつつも額をくつつけると、その胸から穏やかな心音が伝わってきて、リューネリアはほどなく眠りの中に落ちていった。

そして、リューネリアの予感は的中する。

38 · 茫然自失（一秒でも早く）（前書き）

痛々しい描寫あり。」注意ください。

午後は通常通り、ウィルフレッドの執務の手伝いをする予定になつていた。

部屋にいるよりも何かをしていた方が気分も紛れるし、警備の面から言つても執務室の方が警護しやすい事と、ウィルフレッドの側にいた方が、リューネリアを狙つている誰かとしても、襲撃していくのでは、ということを考えた上で、特にその行き帰りの道筋さえ気をつければ問題ないだらうことになつた。

ロレインとバレンティナ、他二名の騎士、二ーナと一人の侍女に周りを囲まれての移動に大仰過ぎると言つてみたが、ウィルフレッドに言わせれば、それでも現在の状況を考えるなら、王子妃という立場上少ないとのことだった。

だが、あえてこれだけの人数で押さえてもらつて、何よりも怖気づいていると思われたくなつたし、敵を誘き寄せるにしてもこれ以上の人数だと相手も警戒する。

リューネリアたちの私室は王宮の東棟の一階にあり、ウィルフレッドの執務室は中央棟の一階にある。

歩くだけでも、かなり移動距離があるが、その上、警戒すべき場所もそれだけ多い。

襲撃される危険性を考えると、自ずと人気の少ない場所よりは多い場所の方を選ぶようになり、道行も遠回りすることになる。

まず、東棟と中央棟を一階部分でつなぐ渡り廊下を通る。東棟は人の出入りが制限された区画であり、王族と一部の貴族にのみが立ち入ることが許されている。

比較的そういう理由で、中央棟とつながった辺りは人気が少ない。そのまま一階を突つければ、執務室へは近いのだが、やはり中央棟

の一階も出入りできる人間は限られている。やはり人気が少ないと
いつこことで、遠回りになるが一度すぐに一階に下り、誰でも利用で
きる開放された公共の場である廊下を通つてから、中央棟のまさに
中央にある一階へと続く階段に向かう。

人気が多いということは、つまり出会う人も多くなるということ
で、リューネリアは執務室にたどり着くまでに、数多くの貴族たち
に足止めをくうことになる。

その日最初に声をかけてきた者は珍しくも、中央棟に渡つてすぐ
にある階段を下りようとしている時だった。

執務室には本来、階段を下りることはせず、反対にわずかばかり
上ることにより中央棟の一階に着く。だから、東棟とつながつて
いる場所は、中央棟から言えば本来、踊り場といった方がいいだろ
う。

人気の少ない中央棟二階から呼び止められる声がして、リューネ
リアは一瞬身体を強張らせる。
が

すでに下りる階段に向かつていていたバレンティナが小さな悲鳴を上
げたことに振り返つた。

一瞬、何が起こったのか分からなかつた。

ロレンインや他の騎士たちも瞬間、身構える。

「バレンティナ！」

最も近くにいたリューネリアは思わず手を伸ばした。
しかし。

反対の腕をニーナに引っ張られ、あいだ片手は空をつかむ。
目の前でバレンティナの身体が吸い込まれるように階段の下へと
向かっていく。まるで自ら飛び込んだように。

その光景は、時間が引き延ばされたかのようにゆっくりと流れて
いく。

驚きに見開かれた目。何が起こったのか彼女もきっと理解してい

なかつたに違いない。束ねられた茶色の髪が、ゆっくりと宙に浮く。だが、すぐに次に来る衝撃を受け止めるためか、彼女は目を閉じて 。

長いようだが、実際には一瞬の出来事で勢いよく転がり落ちていくバレンティナを誰も止めることは出来なかつた。

息をすることも忘れて、階下で止まつた彼女を見つめる。

「つ放して！ バレンティナ！」

身体ごと押しとどめられ、すぐに周囲を囮まれたりューネリアは、二ーナを振り返る。視線を向けると、二ーナは腕から手を離してくれたが、ロレインや周りを囮んだ騎士たちは譲つてくれない。

階段下で倒れているバレンティナはピクリとも動かない。瞼も閉ざされているようで、リューネリアの悲鳴のよくな声を聞いても反応がない。

二ーナは階段の最上段手前で、床に膝をついた。

「リューネリア様、これを」

淡々と静かな声音で言われ、リューネリアは訝しむ。それどころではないとは思いつつ、彼女が指し示したものに視線を投げ、目を見張つた。そして、次の瞬間には血の気が引いた。

指し示された場所には、細い、だが頑丈な紐が張られていた。しかも丁寧なことに、階段に敷かれている絨毯と同じ色の紐だ。

そこに悪意を感じて、リューネリアは階段下に倒れているバレンティナを見た。

「 退きなさい」

震える声で、だがどこまでも有無を言わせない声で命じる。

周囲の騎士も一瞬躊躇つたが、リューネリアの表情を見てゆっくりと道を開けた。

「 ネリア様……」

青ざめたロレインを見て、きっと自分も同じような顔をしているに違いないと思う。

だが、リューネリアは覚悟を決めると手すりを握り、張られた紐

を見下ろす。

証拠だから紐を切ることは出来ない。

躊躇いなくドレスを手繩り上げると、出来るだけ紐に当たらないように跨ぐ。そしてすぐに階段下へと向かう。

「バレンティナ！」

再度の呼びかけに、彼女の瞼が微かに動いたように見える。

一秒でも早く側に行きたい気持ちを抑え足を止めると、まだ踊り場に留まっている侍女を振り仰ぎ、素早く指示を出す。

「すぐに医師を呼びなさい！」

リューネリアに声をかけてきた者は、騎士の一人によつて拘束されている。だが、彼が声をかけてこなければ、リューネリアも同じ運命だつたのだろうか。

だが今はそんなことを考えている余裕などなかつた。

横たわるバレンティナの側に跪き、震える手をそつと彼女の口元にかざす。息があることにホッとする。

力なく無造作に投げ出されている手を取ると、バレンティナは痛みに耐えるように呻き声を上げた。

「つ、バレンティナ！　バレンティナ！」

頭を打つてゐる可能性がある為、むやみに動かせない。

せめて意識だけでも戻ればと、リューネリアは必死に呼びかけた。人気の少ない場所とはいえ、リューネリアの声に次第に人が集まり始める。ロレインがすでに側に来ていたが、リューネリアの警護をするには人が少なすぎる。

「ネリア様、あなたは階上へ」

「馬鹿なことを言わないで」

自分の身代わりとも言えるかたちでバレンティナの身に起こつたことに少なからず罪悪感があつた。先ほど、手を取つた時にうめき声を上げられたため、リューネリアはただ側にいることしか出来ない。それが腹立たしい。

「どうか、ネリア様」

ロレインが懇願の眼差しを向けてくる。

分かつていい。むしろバレンティナが身代わりになつたのだから、むやみに命を狙われやすい状態にいることが得策ではないことぐらい。

一度、ぎゅっと目を閉じると、ロレインと場所を代わる。そして、階段を上る。

途中までニーナが迎えに来てくれていたが、気持ちは階下に向かう。

何度も立ち止まつてしまつリューネリアにニーナが痺れを切らしたのか、腕を引っ張るようにして階段を上り始めた。今は安全が第一だと思っての行動だから、誰もニーナを咎めない。リューネリアも促され、ゆっくりと階段を上る。だが、その足は重石をつけたように重たかった。

39・意味深長（落ち込んでいるわけにはいかない）

執務室の扉をノックすると、返事も待たずに関け放つた。駆け込んだと言つた方がいいかもしない。

背後で二ーナが外を警戒し、そしてゆっくりと閉ざす。仕事をしていたウイルフレッドとエリアスは、パシと顔を上げると驚いたようにこちらを見た。

だが、すぐにウイルフレッドは顔を引き締めると、執務机から離れて側に来てくれた。そんなに酷い顔をしているのだろうか。リュー・ネリアは執務室に駆け込んだはいいものの、もうその場から動けなかつた。

「バレンティナが……」

つい先程の出来事だ。当然ウイルフレッドには話が伝わつていないだろう。報告をしなければならないとは思うものの、言葉が続かない。それほど、精神的に受けた衝撃が大きかつた。

差し出された腕に縋りつくように身を寄せた。促されるままソファに腰を下ろすと、肩を抱き寄せられた。

「妃殿下。護衛は彼女だけですか？」

部屋の隅に控える二ーナを見やり、エリアスに尋ねられたが首を横に振ることしか出来ない。

他の者は現場となつた場所に留めている。侍女にも医師の手伝いと、バレンティナを休ませるための部屋の準備をお願いした。それから二ーナだけを伴つて、中央棟の一階を突つ切つてきたのだ。

「何があつたんだ」

宥めるように背中を撫でられ、ウイルフレッドを見上げ、それからエリアスに視線を向ける。

その様子を見越したのだろう。二ーナが側にきて口を開く。

「説明は私から致します」

簡単ではあつたが二ーナから事情を聴いたエリアスは、すぐに動く。二ーナにも同行を求め、執務室から出していく時に、衛兵に人数を増やすように指示を出していくのが聞こえた。

「ネリー」

隣に座っていたウイルフレッドにぎゅっと抱きしめられて、その温かい腕の中で次第に落ち着きを取り戻していく。自分の意思に反して小刻みに震える手を握りしめてみるが、それでも震えは治まらない。

しばらく経つて、ようやく何があつたのかを細かく報告した。まだ混乱が残る頭では順序を追つて上手く話せた自信はない。だが全てを説明し終わつて、精神的に落ち着きを取り戻せてきた頃、ちょうどエリアスと二ーナが戻ってきた。

一人ともその顔は冴えない。

ウイルフレッドの腕の中からゆっくりと身を起こし、エリアスに向き直る。二ーナはやはり部屋の入口に控えた。

「バレンティナは？」

最悪の事態が頭に浮かぶ。

「意識がまだ戻つてはおりませんのではつきりとしたことは言えませんが、左腕と、多分肋骨を何本か骨折している様子です。頭を打つているかどうかは意識が戻らないと何とも言えないとのことでした」

状態は予断を許さないらしい。意識が戻るまでは医師が付き添つてくれると言われたが、安心できる状態ではない以上、リューネリアの胸中は締め付けられるように痛む。

だが、さらにエリアスは続けた。

「バレンティナのことは取りあえず様子を見ましょ。ですが、妃殿下」

エリアスは少し考えながら口を開く。

「現場を見てきましたが、あれはおかしくありませんか？」

言われて、何がどうおかしかったのかと考える。あまりにも混乱

してしまって周囲を見渡せる余裕はなかつたのだ。

「どういふことだ？」

ウイルフレッドが説明を求める。

それにエリアスも現場の状態を、あつたことも含めて説明した。
「東棟から中央棟に渡つてすぐの踊り場から、一階へと下りる階段の最上段の膝下あたりに絨毯と同色の紐が結んでありました。あれでは気づく者の方が少ないでしょう。ですが、妃殿下は運よく階上から呼び止められて立ち止まつた」

「一ナから聞いたのだろうか。確認を込めて聞かれて頷く。
そこで気づいた。

エリアスも一つ頷いて見せ、ウイルフレッドに説明をする。

「普通、殿下や妃殿下を護衛する時、護衛は前と後ろに必ず付きます。それでいくと階段に紐を張ると妃殿下よりも先に衛兵が引つかるはずなんです」

それでバレンティナが引つかかつてしまつたのだ。

「悪戯にしては悪質です」

怒りを込めて言つと、ウイルフレッドはもぢりんの」とHリアスも同意する。

「そうですね。わざわざ紐の色を絨毯の色に合わせていたことも考えて、妃殿下を狙つたことに違ひないと思います」

断定して言うエリアスに、リュー・ニアはぎゅっと手を握りしめる。治まつていた震えが、再び起こりそうだった。

「あの通路を現在使われている方は限られています。まして、一階に下りようとされる方は多分、妃殿下を除いてはいなでしよう」

東棟は王族及び一部の貴族のみが出入りできる場所だ。そういう限られた者が中央棟の一階 それも誰でも自由に出入りできるような場所に用があるはずはない。

「だが、それでも護衛の者がかかるだけだろ？」

「はい。ですが運よく妃殿下がかかつたら？からなくとも精神的な痛手を与えることが出来たなら？」

仮定ではあるが、それは当たっていた。

だが、ここで怖がつていては何も変わらない」とぐらりリューニアは分かつっていた。だから震える手を押さえつけてでも、背筋を伸ばす必要があった。

「ネリー……」

「ウィルフレッドが苦しげな顔をしているのを見て、無理やり笑みを向ける。

この人は、守ると言つてくれた。それに頼らないことに傷ついていることぐらいい分かつっていた。でも、頼つていられない。こうして心配してくれる人がいるから頑張れるのだ。

「相手がそう思つているのなら、私が落ち込んでいるわけにはいかない。日常と変わらない生活を続けるだけよ」

強く言つかる。

「ウィルフレッド様。護衛の者を貸して下さい。バレンティナの様子を見て参ります」

ソファから立ち上がり一礼する。するとウィルフレッドも立ち上がりつた。

「俺も行こう」

「いいえ」

きつぱりと言い切ると、エリアスが言い添える。

「妃殿下。ロレインが執務室の外に控えております。あと何人かいると思いますので、護衛のことに関してはロレインの手筈に従つて下さい」

「ありがとうございます」

手際の鮮やかさに思わず苦笑する。

笑つて氣づく。まだ笑えるだけの余裕がある」と。

「ウィルフレッド様」

まだ心配そうな顔をしているウィルフレッドに、リューニアは背伸びをしてその頬に口づける。驚いたよつて田を見張るウィルフレッドに笑顔で告げる。

「おかげで落ち着けました。また一頑張りしてきます
軽く礼をして扉へと向かう。

エリ亞スに、リューネリアを呼びとめた人物について後ほど報告
してもらうようお願ひして、二ーナを伴い扉を開けた。

リューネリアを呼び止めた者は、最終的に疑いを消され無罪放免となつた。

身分や役職等を検分し、背後関係を洗い出し、間違いなく挨拶をする為だけに呼び止めたことが実証されたからだ。

しかも、幸か不幸か、その者が呼び止めなければ、リューネリアもバレンティナと同様に階段から落ちていた可能性を考えると、逆に呼び止めたことに対し感謝するべきなのだろう。

リューネリアが頭を下げ謝辞を述べると、酷く驚いた様子を見せていた。

しかし、バレンティナの身に起につた出来事で、憂慮すべき変化もあつた。

侍女たちの態度だ。

彼女たちの気持ちも分からなくてはいけない。自分の側にいるだけで、同じような目に合つとも限らないのだ。

今までは明るく陽気におしゃべりをしながら、それでもテキパキと仕事をこなしていた彼女たちが、話することもせず、わずかな物音にまでビクつくような反応を見せるその態度に、リューネリアの方がいたたまれなくなる。

ただ、彼女たちは巻き込まれただけなのに。

考えた末、侍女たちにはバレンティナの看病を交代で行つてもらうことにした。

本當なら、少しでも早く異変に気付けるよう彼女たちを側に置いておく方がいいのは分かっている。だが、だからと言つて彼女たちが傷つくこともリューネリアの本意ではない。

見えない相手は、リューネリアに精神的な打撃を与えることが狙いだとエリ亞スは言つていたが、それ以上の効果もあつたようだ。

周囲から削られていく。

守りを失つた目標へと、徐々に近づいていく。

「二ーナ」

何があつても動じないのは彼女しかいなかつた。

呼ぶとすぐに来てくれる。

「お茶でござりますか？」

「ええ。お願ひ」

本当は違うのだが、彼女も分かつていて言つてこゐるのだ。心に巢食うのは薄ら寒い孤独だ。だが、それは二ーナにもびひつすることができない。

バレンティナは意識も取り戻し、酷い怪我をしたものの幸運にも後遺症が残るようなものではなかつた。もうしばらく寝台から離れることを禁止されているため、今はこの東棟の一室で休んでもらつている。

騎士といわれてゐるだけあつて日頃から身体を鍛えているおかげか、咄嗟に受け身を取ることができたのだろう。あれが侍女であつたらとと思うと、彼女たちが怖がつてしまふのも確かに頷ける。リューネリアでさえ恐ろしく思うのだから。

お茶をいれようとしていた二ーナが、浮かない顔で戻つてきた。

「申し訳ありません、リューネリア様」

「どうしたの？」

伏し目がちな二ーナは、茶筒をその手に持つてゐる。

視線をそれに向けると、二ーナは音と立てて蓋を開けた。ふわりと、お茶の香りが周囲に漂う。

「いつもと香りが少し違つのです

言われても、微妙な変化はリューネリアには分からぬ。首を傾げて彼女の言いたいことを促す。

二ーナは筒を傾け、手のひらに少しだけ茶葉を取ると、少し握るよにして乾燥したそれを細かく碎いた。その匂いを嗅いで何かを

確かめている。

「……調べてみないと断定できませんが、おそらく毒草を乾燥させたものが混ぜられていると思います」

「毒?」

「はい。あまり強い毒ではありませんが、飲み続けるとそのうち体調を崩すことになつていていたでしょう」

告げられた内容に、冷たい何かが足元から這い上がりくるような感覚がした。

本当に、追いつめられている。

ここはリューネリアの私室だ。入室できる者も限られている。まして、最初の襲撃以来、入口の扉の側には常に護衛の騎士が見張り、入室の際は持ち物を入念に検査しているのだ。その警備の目をかいぐぐつて、茶筒に毒を入れるなど容易いことではない。

最初こそ稚拙な計画だと思って、すぐにでも犯人が見つかるものと思っていたが、気づいてみれば足場さえないとことになりかねない。

もしかしたら、もう時間は残されていないのかもしない。

知らずつちに呼吸が浅くなる。

脳裏に甦るのは、三年前のあの時のこと。

リューネリアが後方支援と称して戦場にいた時、実際には軍を陰ながら動かしていた時期があつた。あの当時、それがどれほど重大な多くの兵の命を背負うことになるとも気づかず、言われるがまま、戦局もパルミディアが優勢で、知識を持っていたばかりに、いい気になつっていたのかもしれない。一時期は、勝機が見えていたこともあつたために。

実際、国境となるセレン＝アーリーナ運河を越え、ヴェルセシユ力の地にも足をつけた事がある。

だがある時、急にヴェルセシユの動きが見えなくなつたのだ。一体、何が起こっているのか分からなかつた。大至急、情報を収集

し、状況を把握した時にはすでに遅かった。そのほんのわずかな間に、見事に戦局を引き返されたと言つた方がいい。

結局、相手の動きをつかんだ時には、再び運河を挟んだ地に軍を引き上げざるを得ない状況になつており、その後リューネリアは王宮へと連れ戻されることになった。

その時、初めて、どれだけの民が亡くなつたのかを知つた。引き上げる道筋に重なる遺体。傷ついた人々。乞われるがまま机上で展開していた軍を動かした責任。王宮へと戻される意味。利用された立場。

そして、パルミディアが負けていたかも知れない現実。

「なんだか、あの時みたいね」

あの時も、二ーナは側にいてくれた。だから、いつと断定しなくても彼女には伝わつたのだろう。手に持つていた茶筒を弄びながら頷いた。

でも、あの時はまだ逃げ道はあつた。それでもまだ戦える余力が残されているほどの味方がいたのだ。

だが、冷静になつて考えてみる。

果たして、今回はどうだろう。

逃げ場は用意されていない。

敵の手の中で、確実に足場を崩されていつている。状況は、あの時よりも格段に悪い。

「撤退はなさらないのですか？」

二ーナは策があると思つてゐるのだろうか。いつもと変わらない冷静な表情で聞いてくる。

そんな彼女を見上げ、申し訳なく思いながら笑みを向けた。

「ごめんなさい。結局あなたを危険な目にあわせてしまつのね」あまりにも不甲斐なかつた。

だが、気を落とすリューネリアとは逆に、二ーナは穏やかな笑みを浮かべる。

「謝る必要はございません。ですが最後までリューネリア様と共にいることをお許しください」

ゆつくりと頭を下げた二一ナに、新しい生活の場所を用意できなかつたと後悔が残る。それならば、彼女の望むようにするのもいいのかかもしれないと頷いた。

「ええ。……でも、諦めたわけではないの」

まだ生きている。

それに守ってくれようとしている人もいるし、守りたい人もいる。諦めてしまつたら敵の思うつぼだ。

それも癪に障る。

死んでしまえばパルミニティアがどうなつてしまつのか、残される弟も心配だつた。

ソファから立ち上がると、二一ナを振り返る。

「服の用意とウイルフレッド様に伝言を。少し頭を冷やしてくるわたとえ周囲から見て不用心だと言われようと、リューネリアは怯えて部屋に閉じこもつているようなことはしたくなかった。強がりだと言われようと、胸を張つていいだ。

追いつめられている、今だからこそ。

二一ナは一礼すると、言われたことを実行する為に下がつていつた。

リューネリアは窓の外を見て、そこにいるかもしない敵に精々不敵に見えるように笑つて見せた。

41・千思万考（自分が自分である為に）

王宮の隣には小さな森がある。

その人工的な森は貴族たちの散策の場にもなつており、季節によつては狩猟の場にもなるとのこと。

そこを抜けると広い平原が広がり、馬を駆けさせるには絶好の場所があつた。

リューネリアは乗馬服に身を包み、護衛の騎士たちに構わず馬を駆けさせる。最初こそ背後から騎士たちの制止の声が聞こえていたが、それもしばらくすると聞こえなくなつた。

別に振り切つたわけではない。事実、二ーナはついて来られたのだから。

単に全力で馬を駆けさせただけだ。あえて言つなら、付いてこれない騎士たちの腕に問題があるのだろう。

しばらく丘を進み、ようやく馬を止める。

二ーナは少し離れたところで周囲を何気なく見回している。彼女を包む空気はピンと張りつめているが、決してリューネリアの気に障ることはない。

空はどこまでも青く澄み、風は火照った頬に心地よい。

肺が新鮮な空気を求めて自然と早くなつていた呼吸もようやく落ち着いてくる。

これだけ見晴らしが良いと狙われていてもすぐに分かるというのも。まして、動物は敏感だ。リューネリアが気づくよりも先に気づいてくれるだらう。

はるか遠くに騎士たちの姿が見える。リューネリアが止まつたことでゆっくりと、だがその姿は大きくなる。

最初の襲撃を受けてから、ずっと心の奥底で思つていたことがあら。

彼らが仕えているのは、本当は誰なのか。

リューネリアは婚姻という形ではあるが、ヴェルセシュカ王家へと籍を入れた身だ。つまりヴェルセシュカ王家の人間ではあるのだが、それでもこの身に流れる血はパルミディアのものだ。護衛である騎士はヴェルセシュカ王家に仕えているのであって、王家の血を引かないリューネリアに仕えているわけではない。

しかし、今護衛をしているのはウィルフレッドの指示あつてのことだ。ザクスリュム領でも考えていたことだが、リューネリアはウィルフレッドという後ろ盾がなければヴェルセシュカで身を守ることなど出来ないのだ。

今、こうして一人でいると、途轍もない不安に襲われそうになる。王女といえども一人の人間だ。生きたいと思って何が悪い。たが、王族というだけで政略結婚の駒にされ、敵国に身を置き、あまつさえ命を狙われる。どこに「リューネリア」という人間がいるのだろう。いるのは「パルミディアの王女」だ。決してヴェルセシュカに嫁いできた第二王子の妃以外にはなり得ない。

だから、夫となるウィルフレッドに絶対的な権力と地位を望んだ。自分が自分である為に。決して駒で終わるのではなく、自らの意思で生きていると思いたかった。

でも結局は。

「独りよがりなのよね……」

呟いた声は風が攫い、誰の耳にも届かない。

一人では何も出来ない。守られることしか出来ない。結局、駒でしかない。

耳は馬の蹄の音を拾つてくる。もうすぐ騎士たちが追いつくのだろう。

彼らにしても、駒でしかない。命令を聞き、それを忠実に守るだけだ。護衛をしているが、もしその反対の指示が出ていたとしたら、彼らは簡単にリューネリアの命を奪うだろう。そしてそれが仕事だと割り切るのだ。

馬の嘶きに現実に戻され、背後を振り返る。

騎士たちの先頭にいた彼女は、銀色の髪を太陽の光に反射させ、同色の瞳をこちらに向けていた。苛立ちを隠そともしないロレンに、リューネリアは今まで考えていたことを打ち消した。

「ネリア様！」

その本気の怒声に、首を竦める。だが、恐ろしさよりも嬉しさが込み上げてくる。

彼女の本気がそこに見えて。

心配が伝わってきて。

「何かあつたらどうなさるおつもりですかっ！殿下を再起不能にするつもりですか！？」

「大げさよ。つい気持ちはよくて調子に乗ってしまったのよ

「ネリア様っ」

一層、ロレインの声が高くなる。

心配を嬉しいと思つてしまつ。単純にただの駒ではないのだと思える。いや、替えのきかない駒だと思われているのだとして、彼女の言葉が、自分がウイルフレッドにとつてどれほど重要な場所にいるのかを再確認させてくれる。

周囲の騎士たちも、ロレインの台詞に苦笑しながらもあながち嘘ではないと頷いている。

なんて愚かなことを考えていたのだろう。彼らは単純に命令にだけ従つてているのではない。彼らも自らの意思を持つて考え、動いているというのに。

その思いも込め、謝罪を口にする。

「ごめんなさい。でも、すつきりしたわ。戻りましょっ」

「こじ最近の出来事で暗く激んでいた心が、嘘のように晴れ渡つていた。

空に向かつて息を吐く。

まだ心配をしてくれる人がいる。完全に一人きりになつたわけではないのだと言い聞かせ、馬の腹を蹴つた。今度はゆっくりと騎士を従えて今来た道を引き返した。

42・本末転倒（離縁して）

リューネリアは仰向けに寝転んだまま、なぜこんなことになってしまったのだろうと頭の片隅で考えた。

視線を目の前に固定し、取りあえず奉制はしているが。

場所は寝室。時刻は深夜である。

当然、目の前にいるのは夫であるウィルフレッドだ。
なぜこのような事になったのか。

もとを糺せばすべて己に非があるのだが、あえて言つなら、昼間の遠乗りで護衛である騎士たちを撒いたことだ。

いつもなら寝室に入るのは大抵リューネリアの方が先だ。ウィルフレッドが仕事で遅くなる時は、先に休むように言われている。それでも目覚めは必ず彼の腕の中なのが。

しかし今日は違っていた。寝る支度をして寝室への扉を開けると、いつものあの優しげな雰囲気などどこに行ってしまったのか、まるでザクスリューム領の領主の館にいた時のウィルフレッドが、まるで待ち構えるかのように、いや、事実待ち構えていたのだろう。開けた扉の先に立っていた。

瞬間に、これは逃げた方がいいと思った。
思わず一步下がって、扉を閉めようとした。

が、当然力で敵うことなく、扉を閉める直前に押し開けられた。そのまま腕を引っ張られ、背後で無情にも扉の閉まる音が聞こえる。侍女たちも当然、誰も何も言つてこない。

二一ナに關しては呼べば来てくれるのだろうが、これぐらいのことで彼女の手を煩わせるわけにはいかない。

「ウイ、ウィルフレッド様？」

多分、昼間の件だろうと予測はついた。

一応、ロレインには何もなかつたのだから報告はしなくてもいいと言つておいたのだが、彼女も相当怒つていていたようだ。この調子だと残念ながら、聞き入れてもらえなかつたらしい。しかも、最悪、口止めしたことまで聞き及んでいるのかも知れない。

有無を言わさず、寝台に座らされる。

……非常に居心地が悪い。

そつと上目づかいで見上げると、じろりと見下ろされる。こうして見ると、顔立ちが綺麗な分、かなり迫力がある。それに、もともと王族だ。人の上に立つ風格もそれなりに備わっている。リューネリアが一瞬怯んだ隙に、お説教が始まつてしまつた。

「ロレインから聞いた。どうして無茶をするんだ」

「無茶はしません」

「だつたら、心配をかけさせないでくれ」

「『めんなさい』

直視できなくて、両手を膝の上に揃えて身を縮める。取りあえず、謝つておいた方がいい。そんな気がする。

「大体、どうして今この時期に遠乗りなんかするんだ」

「……気分が塞いでたから」

正直に言つてみた。それに加えて、運が良ければ敵も出てくるかもしれないと思つていたことは、黙つておく。だが、リューネリアの本心を分かつているのがどうか、疑い深い眼差しを向けられる。

「だからつて急に決めないでくれ。警備上の問題も」

「でも、急な方が相手も襲撃の用意ができるかもと……」

不意をつくなら味方も騙すぐらいの方がちょうどいいし、実際、何もなかつたのは出来なかつたからではないかと思っている。リューネリアの言い分に、深々と溜息をついたウイルフレッドは呆れたように再確認してきた。

「命を狙われている自覚はある?」

「それは、十分にあります。茶葉にまで毒草を入れられましたから、昼間の出来事を思い出し、リューネリアも深々と溜息をついた。

いくら考へても、どうやつて私室にまで入り込んだのか、未だに分からぬ。

だがウイルフレッドの息を飲む音に、思考を遮られる。

「……なんだ、それは？」

驚き、眉を顰める彼に、逆にリューネリアの方が首を傾げた。もしかして二一ナは報告をしていなかつたのだろうか。

「聞いてませんか？」

密かに二一ナは気を利かせてくれたのだろうか。自分がこれ以上、ウイルフレッドに心配をかけないようにしていることを知つて。

だが、すでに話してしまつたからには言わなければならぬ。失敗したなと思いながら件のことを口にした。

すると、ウイルフレッドは目を吊り上げた。

「そこまで狙われているのを知つていて、どうして大人しくしていないんだ！？」

「大人しく震えているのは趣味ではないです」

もしも、大人しくしていてすべてが解決するならそつすることも考えただろう。だけど。

「趣味ではない……」

あきれた様にウイルフレッドは閉口してしまつた。

言いながら、なんて反抗的なのだろうと思つ。こんな可愛げのない女なんか放つておけばいいのにと思う。

ずっと不思議に思つていたことがある。

今まで、剣で襲われたことも、階段に紐が張つてあつたことも、リューネリアを狙つてのことだ。

だが、今日の昼間、茶葉に混ぜられた毒草を見て思つたのだ。

二一ナから毒は強いものではないと言われた。一度や二度、口にしたからとつて身体にすぐに影響が出るようなものではない、と。だとしたら、確かにそのお茶を口にする頻度は自分が一番高くなるだろう。しかし、いつも側にいるウイルフレッドが口にする機会も次いで高い。つまり、敵はリューネリアを守ろうとしているウイル

フレッドも邪魔だと思い始めているのかも知れない。

それだけは駄目だ。

一瞬で心は決まる。

だとしたら、取るべき道は一つしかない。

自らが離れるしかない。守られている場所から出るのは怖い。地位も権力もない。まして敵地にただの小娘一人でどうやって身を守ればいいのか分からぬ。

だが、駄目だつた。自分のせいでウイルフレッドが敵の手に落ちてしまふのは考えただけで目の前が暗くなる。震えがくる。味方のいない場所に一人でいるよりも、なお恐ろしかつた。

スッと息を吸うと、田の前の夫を見上げる。

「お話は終わりですか？」

背筋を伸ばしてウイルフレッドを見上げた。そして告げる。

「私もお話があります」

胡乱な眼差しを向けられ、リューネリアはそれでも湖のような瞳をひたりと見つめる。

「しばらく別室で休ませていただきます」

「寝室を別にすると？」

確認を取るように聞かれ、素直に頷く。

「はい」

寝室だけではない。近いうちに私室も移動させてもらわなければ。ウイルフレッドから離れなければ。そう思つと心は逸はずる。

「必要ない」

あつさりと言い捨てられ、リューネリアは食らつすべ。引くわけにはいかないのだ。

「必要はあります」

「なぜ？」

「では聞きますが、どうして寝室を同じにする必要がありますか？」

「それは夫婦だから当然だろ？」

面食らつたように告げられ、リューネリアは笑つた。心の中に苦

いものが広がる。傷つけると分かつていながら、口にすべきでない言葉を勢いに任せて口にした。

「私達は書面上では夫婦ですが、実際の夫婦ではありません」

本来、必要ないでしようと続ける。

感情と理性を遮断して、頭だけで考える。ウイルフレッドを守ることを考えれば必要なことなのだ。

もともと協力関係だったのだ。人前で仲のいいフリをすればいいだけで、なにも寝室まで同じにする必要は本来ないのだ。

それだけを告げ、寝台から立ち上がった。

そして、言い忘れていたことを添える。

「明日の朝から、朝食も別々にしましょう」

二人で食事をするなどもっての外だ。同じ器から取り分けられるのだから、毒を入れられたらそれこそウイルフレッドの命に関わることだ。

部屋に戻つたら一ーナに早速別室の準備をしてもうひとつ、考えながら寝室の扉を開けようとした時だった。

取つ手に伸ばした手が空をつかむ。

何が起こつたのか一瞬分からなかつた。

身体が宙に浮いたと思ったら、目の前にウイルフレッドの整つた顔が見え、彼に抱えられていることに気づく。その瞳はすぐ真剣で、怒つているようにも見える。

いや、事実怒つているのだろう。

何かを言つ間も与えられず、寝台の上にやや乱暴に下ろされ、驚いて見上げるウイルフレッドに肩を押さえつけられ起き上がれなくなる。そのことに、心臓が一つ大きく脈打つた。

「ウイルフレッド様、何をつ」

漸く非難を口にし、肩を押さえる腕を除けようと試みたが、突如激しく唇を塞がれ、リューネリアは悲鳴を飲み込んだ。

そこには思いやりも何もなかつた。

ただ、想いだけをぶつけられ、リューネリアは困惑する。

わずかな隙をついて抵抗するが、ウイルフレッドの怒りは消えない。そればかりか余計に油を注いだとリューネリアは気づもしない。

「本当の夫婦なら、寝室を別にする必要はないんだろう?」

言われてリューネリアは眉を顰めた。

上げ足を取られる形でこの状態に持ち込まれるとは。しかも、ウイルフレッドの為を思つて寝室を別にと言つたのに、これでは言い含められてしまう。

「駄目よ」

震えそうになる声をかろいじて強く出した。意思を貫く強さが伝わるようだ。

これ以上はウイルフレッドも自分自身も傷ついてしまう。想つている自覚も想われている自覚もある。だから無理矢理奪つたことをウイルフレッドは後悔するだろつ。そしてリューネリアも一方的な行為は望んでいない。

「駄目……」

牽制の意味を込めて見つめ、ゆっくりとウイルフレッドの頬に手を伸ばす。

これ以上、衝動的な行動をしないよう、視線だけで押し留める。

「どうして」

苦しげに吐き出すウイルフレッドに、リューネリアも泣きたくなる。

「あなたを死なせたくないの」

頬に伸ばした手で、そろりとその頬を撫でる。これ以上にないという愛しさを込めて。分かつて欲しいという願いも込めて。

「私の側にいると、いずれあなたの命も脅かされてしまうかもしないの」

「だからと書つて、一人になつてどうするつていうんだ?」

問われ、ゆるく首を横に振る。

「出来る限り、やれることはやつてみるつもりよ

そうなつたら、なりふりなどかまつてゐるつもりはない。どんなに醜かうとも足搔いて、敵の尻尾をつかんで、田の前に引きずり出してやる。せめて、相打ちぐらうにでも持ち込めれば上等だらう。

「でもそれは」

「 そうね。先は見えているわ」

多分、もう時間は無い。それさえ出来るだけの時間が本当にあるのか分からぬ。

「 だつたら駄目だ」

すぐに拒絶の言葉を口に乗せたウィルフレッドに、ためらい、胸が切り裂かれるような痛みを感じながら一つだけ、と告げる。

「 本当は、一つだけ方法があるの」

おそらく、一番いい方法なのだらう。最後に残された唯一の逃げ道。

だがリューネリアはこの方法だけは取りたくなかつた。たとえどんなことがあつても、口にしたくなかったし、ウィルフレッドも同じ気持ちであればいいと思う。

だから、次の言葉がなかなか出なかつた。

「 どんな方法なんだ？」

驚いたように問われ、困つてしまつた。彼は、思いつかなかつたのだ。エリアスあたりは考えていたかもしれないが、ウィルフレッドには言えなかつたのだろう。

苦笑して、一息に告げる。

「 離縁して、私がパルミディアに帰るのよ

事実上、逃げるのだ。

逃げたくはない。だが、ウィルフレッドも狙われるのであれば問題外だ。そのような矜持など捨ててしまえる。

それに死にたくないが、逃げるしかない。それによつて再び開戦される可能性もある。もしかしたら二大国であるルーヴェルフェルトとゴードヴェルクの顔に泥を塗つたとして、戦争の規模 자체が大きくなるかもしれない。

懸念をすべてウイルフレッドに伝えた。

それほどのことと、たかがヴェルセシュカの第一王子の王子妃ごときの命の一つを比べることが出来るだろうか。

「ネリー……。離縁は出来ない」

しばらぐしてウイルフレッドは応えた。

リューネリアの肩に顔を埋めて何かに耐えるようにしている。

「もちろんよ」

その金色の髪を梳きながら、安堵する。

戦争で失われるかもしれない多くの命と、リューネリアの命一つなら、断然後者だ。だから、自分はヴェルセシュカに残る。そしてウイルフレッドの命も守る。それだけだつた。

しかし、ウイルフレッドは首を横に振る。その柔らかい髪が頬を撫で、くすぐつた。

「違う。俺には何よりもネリーが大切だ。だから離縁などもっての他だ。離れるなんて我慢ならない」

その気持ちだけで十分だつた。

「でも」

「俺は守ると言つた」

強く言われ、リューネリは口を噤む。

その真剣な眼差しを見つめる。

「絶対に守るから……。側にいてくれ」

縋りつくようにされ、血を吐くような悲痛の中に延ばされた手を果たして振り払えるだろうか。

リューネリアはウイルフレッドの頭を胸に抱きしめると頷いた。

理由が正しいとはどうしても思えなかつたが、答えが同じなら結果も同じだ。

「守つて……」

呴いた言葉は、願いだつたのだろうか。祈りだつたのだろうか。

それはリューネリアにも分からなかつた。

43・急転直下（その指示を出したのは……）

「申し訳ありませんでしたわ、ネリア様」

熱烈な抱擁を受け、いつもと変わらない態度で接してくれるコーデリアに心のどこかでほつとしていた。

ミレス公爵夫人であるコーデリアは、リューネリアが最初に受けた襲撃の時、公爵家が後見についているダーラに情報を漏洩された疑いがかかるた為に、王宮へ来ることを自粛していた。

「本当はずつとネリア様とおしゃべりをしたいと思ってましたのよ。ずいぶんとご無沙汰でしたもの」

嫣然と笑ったコーデリアはやはりどこまでも美しい。

言われて、久しく彼女と会つていなかつたことを思いだす。

ザクスリューム領への査察から帰つてきてほどなく、リューネリアが襲撃されるという事件が起こつてしまつた為に、今度は彼女の方が王宮から遠のかなくなつたのだ。

しかし、リューネリアの気分が塞いでいることを気にしたウイルフレッドが、わざわざ呼んでくれたのだ。

黄色のドレスを着たコーデリアは、その見た目の華やかさからも周囲の雰囲気を明るく、華やかにする。ただでさえ彼女の全身からは生命力が溢れていて、その場にいるだけでも元気を分け与えられた気になる。

「わたくしも、お会いしたかつたですわ」

ダーラに疑いがかけられても、リューネリアには彼女が何かをするようには、どうしても思えなかつたのだ。

コーデリアにしても、今までの付き合いを思えば期間こそ短くはあるが、彼女はいつも自分の気持ちに正直で、真っ向から勝負を挑んでくる。その裏表のない性格は、この王宮においてとても貴重なものだわつ。

それに、ロレインが彼女に寄せる信頼を信用もしている。

「あら、ネリア様。私もいますのよ？」

コーデリアの背後から、ヴァーノン子爵夫人も現れる。

彼女もまた美しい人で、燃えるような色の艶やかな赤毛を結い上げ、その情熱的な色合いからは想像できないほど優しさを湛えた茶色の瞳をリューネリアに向けてくる。彼女もまた華やかな人だ。

「ビアンカ様。ザクスリュム領の件では本当にお世話になりましたわ。お礼が遅くなってしまってごめんなさい」

「そのようなこと気になさらいで。ネリア様のお役に立てたのですもの。光榮なことです」

「人にソファを勧め、二一ナにお茶を入れてもらつ。

茶葉は新たに用意され、お菓子はビアンカが持つて来たものだ。

今、市場に出回っている人気のあるお菓子らしい。宫廷の職人が作る凝つたお菓子も美味しいが、こういう菓子も物珍しくて、たまにビアンカが持つてくるものをリューネリアもコーデリアも楽しみにしている。

「今日はロレイン様はいらっしゃらないの？」

ビアンカが扉を見やつて言つ。今通つてきた扉の外に、現在、彼女はない。

「ええ。声をかけたのですが、手が空き次第来てくれるようです」通常なら扉の外に控えているが、今は騎士団長のジョンマイアに何かを頼まれて執務室に行つている。

そう返事をすると、コーデリアもビアンカも少しだけ不満気に頬を膨らました。

「ロレイン様ばかりお側に置いてずるいですわ」

「そうですね。わたくしたちも騎士になれば良かつたと話しておりましたのよ」

どうやらロレインがいないことに対する不満ではないらしい。

おかしな方向に嫉妬している一人にリューネリアは微笑む。

「ですけど、ロレインは仕事重視でわたくしは叱られてばかりいる

のですよ。お一人のよつに他愛もないおしゃべりをしてはくれないの」

「そう不満を漏らすと、コーデリアは苦笑し、ビアンカは目を見張つた。

「ロレインらしいわ」

「ネリア様をお叱りになるの?」

「コーデリアはロレインと幼少の頃からの付き合いだと聞いたことがある。だからなのか、彼女の性格をよく理解している。一方、ビアンカは妃殿下を叱る騎士がいることに純粋に驚いているようだつた。

「それはそつと、ネリア様。少しお瘦せになつたのではありますか?」

「コーデリアの視線がリューネリアのお腹あたりに向けられる。

リューネリアは慌てて否定した。

確かに最近、ドレスの腰回りが緩くなつている。顔はそんなに変わらないと思っていたが、もしかしたらやつれて見えるのかもしない。

食事にも毒が入つているかもしれないといつ心配もあつて、最近ではあまり食が進まないもの原因だろう。

気をつけなければ、と内心思いながらも曖昧に微笑する。

「あのようなことがあつては心労も相当なものでしょ? まったく、殿下は何をされているのかしら」

「コーデリアはプリプリと怒りながら、二ーナの入れた紅茶に口をつける。

「ですが今回のこと。議会は動いていないよつではありませんか?」

「ビアンカが声を潜めてコーデリアに確認する。

彼女は横目でチラリとビアンカを見てから、一つ溜息を落とした。その態度にリューネリアは確信する。彼女が何かを知っていることを。そして、それがとても嫌な予感を誘つてくる。

「コーデリアは物憂げに、だがしつかりとこちらを見据えると口を

開いた。

「ええ。実はそのこともお伝えしたかったのです」

カツプを受け皿に戻した彼女は、視線を下げる、ゆるく首を横に振る。

「今回の襲撃やその他のこと、議会が関わっている可能性は限りなく低いと思われます」

彼女の青い瞳が暗く沈んでいる。先を続けることが苦痛だとでもいう様に、その口調も重い。

視線で先を促すと、コーデリアはビアンカに視線を向けて一つ頷く。ビアンカも思い当たる節があるようで、そつと俯いた。

「議会には動かないようになると、どこからか指示が出ていくようなのです」

「どこからか？」

おうむ返しに確認すると、一人は頷く。

「ええ。もしかしたら議員の中に、その指示に反して動いている者もいるかもしません。しかし、多くの議員には動くなという指示と、それに対する口止めがなされ、それに従っていると思われるのです」

といふことは、議員は王子妃が命を狙われていることを知つて黙つて見ているだけなのか。便乗して襲撃してこないだけ、まだましとも言えるが、それはそれで気分は悪い。

やはり、ヴエルセシュカの国の半分を担う議会には受け入れてもらえていないのか。分かり切っていた事なのに、ずしりと胸の奥に鈍い痛みを感じる。

「ですが、どこからそのような指示が出ているのでしょうか」

ビアンカも気味が悪いとでも言つ様に呟く。彼女の情報網には引つかかっていないらしい。

一方、コーデリアは何か思い当たる節があるのか、一度口を噤んだ。

「コーデ様？」

「コーデリア様はご存知なの？」

その問いに、彼女は視線を逸らせ、深く息を吐き出した。その中に、鬱々としたものが見えるようで、リューネリアの嫌な予感は増していく。

えてしてそういう予感とは当たるもので、コーデリアの覚悟を決めたような視線を受けると、思わず息を飲み込んだ。

聞く前から、なぜか分かってしまった。

「もしかして その指示を出したのは……」

出した声がわずかに震える。

「コーデリアはゆっくりと頷いた。

「はい。」推察のとおり おそれく、王族の誰かだと思われます

44・最終結論（どんなことがあっても味方です）

告げられた言葉に、衝撃を受けずにはいられなかった。

再び戦争をする為に、リュー・ネリアを邪魔に思っていたのは議会ではなかつたのか。王族は戦争を反対していて、自分をその駒として受け入れたのではなかつたのか。

音を立てて血の氣の失せる感覚を味わう。一瞬にして、目の前が暗くなる。

ふと気づいた時はニーナが傍らにいて、ソファに横たえられていた。

視線を動かすと、コーデリアとビアンカも側で心配そうにこちらを見ていた。

口早に大丈夫と呟いて、ニーナの手を借りて座りなおす。

「申し訳ございませんでしたわ、ネリア様」

落ち込んだようにコーデリアは俯いた。

くらくらする頭に片手を添え、コーデリアの行動を押し留めた。彼女が悪いのではない。むしろ、そのような情報を教えてくれたことに感謝こそすれ、謝罪を受ける謂ではない。

それよりも聞きたいことがある。

「その……誰かはご存知ですか？」

本音としたら聞きたくはない。

だが、逃げるわけにはいかない。目を逸らすわけにはいかない。王族の誰かによって、自分が今後取るべき道が決定するのだから。しかし、コーデリアはわずかに青ざめたまま首を横に振る。

紅を刷いた唇は閉ざされ、言葉を紡げない。

「わたくしは大丈夫です。知っていることを教えて下さい」

身を乗り出してコーデリアを見つめたが、彼女はゆるく首を振るばかり。

「本当に知らないのです」

いつもはまっすぐに見つめてくるその青い瞳は逸らされ、揺れているような気がした。

もしかしたら彼女には予想がついているのかもしれない。だが、きっと再度尋ねたところで彼女のその頑なな態度から、きっと答えは得られないだろうと判断する。

これだけでも収穫はあったのだ。

今の話から、その情報をこの場で話すだけでも危険が伴うかもしれないのに、これ以上迷惑をかけるわけにはいかない。

「報せてくれたこと 感謝します」

追求をしないと告げるかわりに、謝辞を述べる。

「ネリア様。どうかお気をしつかり持つて下さい」

「私たちはどんなことがあってもネリア様の味方ですから」

痛ましげな表情を浮かべる二人に、どうにか笑顔を向ける。

彼女たちの劳わりは、ほんの一瞬でも慰められる。実際に、リューネリアを狙う者がヴェルセシュカという国となつた場合、その言葉は彼女たちには重荷にしかならないだろう。だが、嘘を言つつもりではなかつたことぐらいリューネリアにも分かる。

「もう、戦争などこりごりですのに……」

ビアンカが吐き捨てるように言つ。

どうやら相当嫌な思い出があるようだ。

彼女は豪商の娘で、ヴァーノン子爵に見初められて輿入れした身だ。ならば年若いビアンカは、結婚する前は商家にいたわけで、戦時中には国に供給を強いられていたと考えられる。そこで嫌な思いをしたと考へてもおかしくはない。

「私たちにはやはり戦争を止めることなど出来ないのかしら」

「コーデリアも力不足を嘆くように咳ぐ。

彼女の一人娘は、パルミディアへの人質候補だ。他人事ではないのだ。

それに、子供を持つ親なら誰だつて戦争などという悲惨な状況を

子供に見せたくないだろう。勝つても負けても、犠牲はどこかに潜んで、影で悲しんでいる人が必ずいるのだから。

それを思うと胸の奥が疼く。他人事ではないのだ。

「戦争など無くなってしまえばいいのに……」

つづづくと呟くと、ビアンカは頷いて、申し訳ございましたと一つ謝つてから続けた。

「実は私、四年前に、パルミディアが国境を越えた時、あの運河沿いの街、アクセリナにいたのです」

パルミディアにしてみれば完全な敗北、ヴェルセシュカにしてみれば完全な勝利を治めた戦いのことだ。

まだ嫁いでもおらず、家業を手伝っていたビアンカは食糧をヴェルセシュカの軍へと運んで来ていたらしい。

そこで見た悲惨な光景を今でも忘れないという。

それはまたリューネリアにも言えたことだった。後方支援とは言え、一年以上戦場にいたのだ。幾度となくそういう光景を目にしてきて、なお且つパルミディアの勝利の為に自らの知識をもつて、ヴェルセシュカの軍を迎撃つていたのだ。

それが王族の責任だと思つて。

「パルミディアの軍勢が押し寄せてきた時、もう駄目だと思いましたわ」

その時の恐怖を思い出したのか、ビアンカはふるつと身体を震わせた。

今なら思う。

王族であつたからこそ戦争を止めることが出来たのではないだろうか。誰かの疑惑であれ、それに乗せられて自ら軍配を振つてしまつた自分に責任がないとは言い切れない。あの時、乗せられず、どうして止めることに頭が回らなかつたのだろうか。

「ですが、王太子殿下のおかげで今があるのですけど

ビアンカは、目を伏せてふと呟いた。

だが、リューネリアはビアンカの言葉に首を傾げる。

「王太子殿下？」

「ええ。パルミニティア軍を追い返したのは王太子殿下の采配です」
コーデリアがリューネリアの疑問を察して、答えてくれた。

「ですが、王太子殿下は……」

「ええ。殿下はお身体の丈夫な方ではありませんわ。戦場におられた時も当初、状況を見て実際に指揮を取っていた者に助言される程度で……ですが、あの時だけは無理を押して直接指揮を取られたと聞いてあります」

だから、議会も王太子殿下には一日置いているところがあるのです、と続けたコーデリアの言葉が耳を素通りする。

リューネリアは目を見張った。

あの時 アクセリナの戦いの時、ヴエルセシュカの軍を指揮している者を探つたが、知ることは出来なかつた。といつよりも、探る間も与えられず追い返されたのだが。

その後、どんなに探つてもあの場で指揮をとつていた者を知ることは出来なかつた。

まさか、こんな時に知ることになるとは。

「そう……」

頭の中が目まぐるしく計算していく。
そして全てが一つに収束する。

「ネリア様？」

急に黙り込んだリューネリアを訝しむように、二人の女性にジッ
と見つめられる。

「いえ、大丈夫です」

そう言つて、今思つたことを胸の奥にしまつ。

それ以降は、その話を完全に打ち切り、しばらくは他愛のない会話をしてお茶会をお開きにした。

二人を見送つた後、二一ナを呼ぶ。

「二一ナ。少し確認して来て欲しいことがあるの
声をかけると、二一ナは一礼した。

一つの事を告げると、彼女は身を翻して部屋から出ていく。

彼女が戻つてくるまでの間、静寂が耳に痛かつた。息苦しくなるほど沈黙が部屋を満たす。

だが、扉が開いてニーナが姿を現した時、彼女の顔を見て苦笑した。するしかなかった。

彼女からの報告を受け、結論から言つと、自分の考えに間違いはなかつた。

「では今回の首謀者のところに連絡を そうね、お見舞いに伺いたいと伝えて」

そう告げたリューネリアに、ニーナはゆつくりと頷いた。

4.5・内部事情（一人しかいないでしょう）（前書き）

ジョレマイア視点です。

45・内部事情（一人しかいないでしょう）

バレンティナが負傷した後、ウイルフレッドからリュー・ネリアに信頼されている人間を、と言われ、ジェレマイアは自らが護衛に付くことを即断した。

周囲からは反対されたが、というか、若い騎士たちからは職権乱用だと散々罵られ、副団長からも余計な仕事を押しつけないで下さいと睨まれたが、むしろ騎士たちが、王子妃に見惚れてまともに仕事が出来ないようでは話にならないし、王子の嫉妬も馬鹿にならない。

最近は、あのザクスリューム領の一件を片付けた為か、ウイルフレッドの評判も上がってきていた。仕事量も増えてきていると聞く。その為、夜遅くまで執務室に籠つていると報告が上がってくる程だ。だからなのか、必然的にジェレマイアが護衛にあたるリュー・ネリアと過ごす時間が、ウイルフレッドが彼女と過ごす時間よりも長いことに気づいたのかどうか、王子の視線がたまに痛い。

朝に一通り、王子妃の当日の予定に関わる警備上の打ち合わせをすることにしていたが、午後の予定に、王子の元恋人たちとのお茶会が入っていると聞いた時には、思わず渋面をその元恋人の一人であるロレインに向けてしまった。

彼女の冷ややかな一瞥と共に、開きかけた口は凍りついてしまったが。

しかしながら、午後になつてロレインは、王子やエリアスに用事ができ、一旦護衛から外れることとなつた。

その間に、ランス公爵夫人コーデリアと、ヴァーノン子爵夫人ビアンカの、揃つての訪問を受けた。

二人のその艶やかさと華やかさは、ヴェルセシュカの貴族内でも

有名だ。噂では、ここにロレインも入るというのが、騎士服姿しか想像できない為、艶やか、とか、華やか、とかいう言葉が彼女に合つか甚だ疑問なのが。

この場にロレインがいない為、彼女たちの所持品検査がどうしても甘くなってしまうのは仕方がないだろう。

「ローデリアとは何度か対面したことがあつたが、いつも思うことはその整つた顔に嫣然とした笑みを浮かべながらも、昂然たる態度を崩さない彼女にどこか男性的な潔さを感じるのだ。その性格がつてこそ彼女なのだが、もしもそれがなければ鼻持ちならない態度に苦手意識の方が先に立つただろうことが容易に想像できた。

持ち物に特に不審な点は見当たらなかつたので一人を通したが、王子の元恋人と本妻とのお茶会に恐怖を感じたことは言つまでもない。

どれぐらいの時間が経つたのか。

お茶会は無事に終了したのか扉の内側から声が近づいて来た。二人が部屋から出てきたが、前もつてリューネリアには迂闊に廊下に出ないよう忠告をしておいたので、姿を現すことがなく安堵する。しかし。

目の前の二人の美女の表情はそれぞれ別の意味で物憂げだった。ビアンカは心配を隠せない様子で、私室の扉を振り返つていたが、ローデリアに関しては何を考えているのか。その眼差しは廊下に敷かれた絨毯に向けたまま、険しさを孕んでいる。

「何か気にかかることでもあつたのですか？」

王子妃に対しての気がかりならば、是非とも耳に入れておかなければならぬ。どんな小さなことからでも、思いもがけない警備上のミスは起こりかねないのだ。

「いいえ。何でもございませんわ」

スッと顎を持ち上げ、こちらに向ける視線はまっすぐに、逸らさ

れることはない。口調は冷ややかだが、決して逃げようとはしない。誤魔化そうとしない意志がそこに見えて、ロレインといい「コーデリア」とい、女にしておくのは惜しい存在だと思わずにはいられない。

近頃の若い騎士の中には、彼女たちのように強い精神をもつ者は数えるほどしかいない。他人の意見に流される者も多く、疑いたくはなかつたが、最初の襲撃の件にしても、もしかしたら、という思いが全くなかつたかというと否定できない。

「コーデリアの態度に感心しながらも、逆にそれが返つて、彼女が何かを隠していることを匂わせた。

ふと横を見ると、未だ心配げな様子を隠さないビアンカが、実は、と呟いた。

「先程、御気分を悪くなさつたようで、少しの間意識を失くされましたの」

その内容に、眉を顰める。

確かにここ数日というのも、リューネリアの身にまとう雰囲気は見ていて痛々しいほどだった。それは顔色が悪いとか、急に瘦せたとか、そういう見た目的な変化ではない。

おそらく、ザクスリュム領での査察に赴いた時の彼女を、ジェレマイアは知っているからこそ、そう感じてしまうのだろう。

王子に馬での勝負を挑むほど、気丈で、生き生きとしていたあの王子妃が、だ。

だが、倒れたとなると、看過できない。すでにそれほどまでに精神が追いつめられていることになる。

「一体、なんでそんなことになつたんだ？」

思わず敬語も忘れて問い合わせる。

ビアンカは困ったように「コーデリアを見た。自らの迂闊な発言に気づいたのか、口元に手を当ててている。見るからに彼女も動搖しているようだ。

一方、「コーデリアは一つ溜息を吐くと、まるで仕方がないという

ようにな……だが挑むような眼差しを向けてきた。

「少し、お時間はよろしいかしら。騎士団長様」

その眼差しは有無を言わせないものだった。

自分の代わりに警備にあたる騎士を呼び寄せ、喜び勇むその姿に一抹の不安を覚えながら、コーデリアについて王宮の客室へと案内された。

王宮を我が家のように使えるのも彼女が元王族で、ランス公爵夫人と言う立場だからだ。

日頃、客として使うことのない部屋に、どうにも居心地が悪く、そわそわと落ち着かなくなるのは大目に見て欲しい。

ビアンカはと、コーデリアに促されるように王宮を後にした。彼女も何かを察しているのだろう。素直に頷くと、去り際に一言だけ、あれでよろしかったのですかと、コーデリアに聞いていた。あれ、とは何だったのか。

ソファに落ち着くと、コーデリアは侍女にお茶を出させてから人払いをした。

そして单刀直入に、切り込むような眼差しを向けてきた。

「ネリア様を狙っている人物について、貴方たちはどこまで分かっているのです？」

明らかに非難めいた発言に、ジェレマイアはいい気はしなかつたが、その件に關しては自分と直接情報を集めているエリアスの不手際であることに違いなく、口調は重くなる。

しかも、彼女はランス公爵夫人だ。

黒に近い人物の一人でもあるのだ。

「いや、これと言った収穫は

「わたくしを疑うのはお門違いですわ。貴方もエーメリー家の者ならば、あの話は知つていらつしやるでしょう」

彼女の言つてることに思い当たり、思わず口を噤む。

確かに知っている。議会が王子妃を狙った件について、傍観者でしかないことを。

だが、この情報はつい先刻まで不確かなものだったのだ。裏付けをとり、ロレインが今現在ウイルフレッドのところに行っているのも、この件についての報告なのだ。

つまり、そこから考えられることは一つしかない。

「首謀者が王族の誰かだということか」

「……まさか、まだわたくしを疑つてはいらっしゃらないでしようね？」

元王族の彼女は美しく整えられた眉をはね上げる。

ジョレマイアは慌てて首を横に振つた。美人を怒らすとおつかないと肝を冷やす。

「あまり考えたくはない事態だな……」

髪をかき混ぜながら咳く。

「呑気なことをおっしゃらないで。このようなことをする人が誰かを考えてみなさい」

思いがけない台詞に、さすがにジョレマイアもあからさまな非難を向ける。

「おいおい……。王族のことに騎士団長」ときが口を出せる問題じゃないだろ？

事実、面白くはない。ここまできて蚊帳の外に放り出されるとになりかねないのだ。少なくとも、騎士団は王族の命令で動いているのだ。命じられた「背く」とは出来ない。

「だったら、ネリア様がどうなろうとあなたは責任がないとおっしゃるのね？」

「いや、そうは言つて」

「だったら、このようなことが出来る人が、一人しかいない」とぐらい早く呑気なさい！」

ぴしゃりと言い放ち、コーデリアはすくっと立ち上がった。

「すでにネリア様はお呑気のはずですわ。貴方がたがどのような

対処を取るのか。あとはウイルフレッド殿下にお任せするわ。ついでに、わたくしをがっかりさせないでと殿下には伝えておいて、上から冷ややかな眼差しを受け、ジョレマイアは思わず息を止めた。

彼女の瞳にあるのは、覚悟だ。この先何が起るのか、彼女は予測がついている。

しかし、リューネリアが気づいていることはあり得ない。まだ確實性に欠ける為、エリアスとも話しあって耳に入れることはまだ先にしようと決めていたのだ。

いや。

先程ビアンカが言っていた、あれ、のことなのか？
問おうとして、扉の閉まる音にハツとする。
顔を上げたそこには、すでにコーデリアの姿はなかつた。

報せるべきなのか、報せないでおくべきなのか。リューネリアは王太子殿下の私室へと向かいながら、なおも悩んでいた。

夕刻、王太子殿下に面会を申し込んだ返事が来た。もしかしたら拒否されるかもしれないと思っていたが、思いの外すんなりと許可が下り、今、北棟へと続く回廊を歩いている。

国王及び王太子 つまり王族の生活は基本的に、北棟で近衛兵による厳重な警備をしかれた上に成り立っている。しかも王太子は病弱ときていて、面会するとしても本人の許可はおろか、医師の許可まで必要になってしまったのだ。だがつい先程、その両方の許可が下りたのだ。

今から会うべき理由は、単なる見舞いだ。

強い理由を思いつかなかつたということもある。が、多分、どのような理由にしろ、四年前のアクセリナ戦を指揮していたのが王太子だというのなら、どのような誤魔化しも嘘だと見抜くはずだつた。しかも、リューネリアは本音を問い合わせに行くのだ。命を狙いましたか、と。その上、確実な証拠は無いのだ。不敬と言われずとも、発狂したと思われても仕方がないことをしに行くのだ。

もう、ここまで追いつめられたのだ。

殺されるよりも発狂したと思われた方がいい。

前後に護衛の騎士を従え、侍女は二一ナのみを連れてきた。北棟に入る前に、護衛の騎士たちとは別れる。北棟専属の近衛兵による護衛に代わるのだ。二一ナはそのまま付き従う。

やはり考えた末、戻る護衛の騎士の一人に伝言を頼む。リューネリアに声をかけられ、彼は頬を上気させ敬礼した。

伝言先は夫であるウィルフレッド。

ただ、王太子と面会する旨のみを伝えてもらつことにした。詳しいことは、伝言など出来るような内容ではない。

北棟は静かだった。

夕暮れ時と言つこともあり、斜陽が長く影を引く。

いくつもの角を曲がり、重厚な扉の前にたどり着く。その扉の前にはまた護衛が立つており、リューネリアに敬礼した。

扉をくぐると、取次の間で少しの間待たされる。ここから先は、二一ナは入ることは出来ない。

通された先の部屋では、ソファでくつろいでいる王太子 カールがいた。

夕暮れの日差しが部屋に入り込み、ウイルフレッドによく似た、だが線の細い頬りなさを見せる男性がゆつたりと立ち上がった。わざわざ出迎えてくれようとしている相手に、リューネリアは部屋の入り口でドレスをつまみ、礼をした。

「王太子殿下におかれましては、この度の面会をお許し下さり感謝しております」

床に落とした視線の先に、カールの靴先が見えた。

「堅苦しいのは止めよう。さあ、こちらに来て座つてくれ

ソファを示され、頷きを返す。

「お身体の調子はいかがですか？」

ソファに向かい合つて座り、他愛もない会話で繋ぐ。一応、見舞いと称してやつてきたのだ。それぐらい聞かなければおかしいだろう。

カールはウイルフレッドによく似た顔立ちで瞳の色も同じ色だつた。だが、ウイルフレッドの瞳が波の立たない穏やかな湖だとすれば、カールの瞳は底の見えない深い湖を思わせる。

その瞳がリューネリアを捕らえる。

「ここ最近は調子いいよ」

ゆるく笑みを浮かべてはいるが、瞳が笑つていなかつた。

「さて。見舞いとは表向きで、本当は私に話があるんだがう

どうやって話を切り出そうかと迷っていたが、まさかカールの方から話を振ってくれるとは思わなかつた為、逆に不意をつかれた形になる。

だが、やはり、とも思つ。

リューネリアがここに何をしに来たのか、彼は知つてゐる。分かつてゐるのだ。

「王太子殿下にお聞きしたいことが」

意を決して口を開く。が、ふと手を上げて遮られる。

「その、殿下、というのは止してくれないかな」

「では何とお呼びすれば？」

わずかに緊張して問うと、口の端を上げてカールは笑みを浮かべる。

「名前で……といふのはさすがにまずいか。兄で構わないよ。きみは弟の妻。私にとつて義理の妹になるのだからね」

思いの外、親近感を漂わせるカールに、リューネリアは戸惑いを覚える。

本当に、今、田の前に座つてゐる人物が、自分の命を狙つていたのか不安になる。もしかして、全く思い違いをしていたのではないかだろうか。

侍女がお茶を運んできて、テーブルの上に置いた。

いつも飲むお茶とは違う香りが漂い、リューネリアは微かに首を傾げた。わずかだが、薬のような匂いがする。

「お気に召さないかな。身体にいいお茶だよ」

それをカールから言われても、あまり嬉しくはない。いつぞやは毒草を茶筒に入れて贈つてくれたではないか。

奇妙な眼差しでお茶を眺めていたからだろうか。カールはふと笑つた。

「毒は入つていない」

その笑い方がウィルフレッドに似ていて、慌てて視線を逸らす。

そしてカップを手に取る。

やりづらい。

そう思いながらお茶を口に含む。そして視線を彼に向けたまま囁く下した。

「お義兄さま」と呼んでみる。

まさか本当に呼ばれるとは思つていなかつたのだろう。皿をわざかに壁り、だが、すぐに寂しげな笑みを浮かべる。

「なかなかいい響きだね。ウイルフレッドはもう兄とは呼んでくれないから」

「そうですか……」

実の弟から兄と呼ばれないからと、その嫁に呼ばせるとほびつこいつもりなのだろう。

カップを受け皿に戻すと、息を一つ吐く。そして、視線をカールに向けた。

「なぜ、わたくしの命を狙つたのでしょうか？」
このままいけば、うかつかとかわされそうだと思い、リューネリアは直球でいくことにした。

底の深い湖のような瞳を見つめていると、そこに興味深いものを見るような色が浮かぶ。

どれぐらいの時間が経つただろうか。カールはゆっくりと口を開いた。

「きみが四年前、パルミニティアの軍勢を率いていたと知つたから……かな」

否定もせず、正直に認めたことにリューネリアは壁りした。

「ですが、ならば何故、すぐにわたくしを狙わなかつたのです？」
「ヴェルセシュカに来てつてことかな？それはきみにも時間をあげようと思つたからだよ。味方を作るだけのね」

あくまでも穏やかな口調を保つたまま、その内容は恐ろしいことを言つ。つまり、はじめから仕掛けようとしていたのだ。

カールがリューネリアの命を狙つたことを、どうやって知ることが出来たのか。

最初に感じたのは違和感だった。

命を狙うならもつと直接的に来てもいいはずだ。確かに最初の襲撃以来、警備も厳しくなったが、リューネリアたちもわざと警備の手を抜いたり、相手を誘い出そうと罠を張つたりしていたのだ。しかし、結局直接的だったのは最初の一回だけで、警備を厳しくしたそれ以降は手のひらを返すように、徐々に周囲を削つて逃げ場を失くしていく方法に変わつた。

その方法が、四年前のアクセリナでの戦いに似ていることに気づいた。精神的にじわじわと追い詰められていく。その上、確実に弱点をついてくる。こちらの考え方などお見通しとでも言つよつに。

そしてコーデリアたちから聞いた、議会は動いていない、ということ。王族が関わっていること。王族なら、侍女たちも疑いなく話してしまうだろう。警戒対象は議員だったのだから。騎士たちも同じことが言える。報告は義務だ。

バレンティナが階段から落ちた時の件もそうだ。コーデリア達とのお茶会が終了した後、二一ナに確認を取つてもらつたのだが、呼び止めた者が不審に思われなかつたのは、彼がクワエル伯爵……つまりカール側から情報を得ていたからだ。あの時、王族を疑つてもいなかつたのだから。

極めつけは茶筒に入った毒草だ。あの後、調べて分かつたのだが、その毒草は本来、薬として使用される。薬に関わる機会の多いカールなら、製法など知つてもおかしくはないだろう。

最後に、ビアンカから聞いた四年前の戦の指揮を執つたのがカールであつたということ。すべてが一本の線で結ばれ、結果、王太子

にたどり着く。

カールは組んだ足の上に両手の指を組み、ソファの背にゅつたりともたれ掛かっている。

底の見えない深い湖のような瞳をこちらにむけたまま、笑んでいるのは口元だけ。

「四年前は、私が勝利した。しかしその時、きみはまだ十三の子供だった。子供に勝てるのは当然だらう。だが、四年が経つた今、きみはどれだけ成長したかな？」

「そのためだけに私の命を？」

それはあまりにも悪趣味だ。

「ちょっとした賭けをしてみただけだ。きみが生きているうちに私に気づくと私の負け。当然、きみが命を落とした時には私の勝ち」
軽々しい口調とは裏腹に、言っている内容は空恐ろしい。
その上、カールが絶対的な安全圏にいる上での賭けだ。

割が合わない。

しかも、人の命を何だと思つてゐるのか。そのような軽々しいものであつてはならないはずだ。

冷静にならなければ思いつつも、込み上げてくる怒りを押さえこむよう、腿の上に置いた手を握りしめる。

それに気づいているのか、いないのか。カールはなおもゆつたりと告げた。

「だから時間をあげた。誰を味方につけれるのか。それによつてきみの運命は変わる」

「でもつ、だからと言つて私の周囲の人まで巻き込んでいいはずないでしょー！」

あまりの暴言に、我慢ならず声を荒げていた。

バレンティナは大怪我を負つたのだ。もしかすると、命を失つていたかもしれないのだ。

「そうだね。あれは悪いことをしたと思つてゐる。だけど、戦争で何万という人を殺したきみがそれを言つの？」

まっすぐに向けられた言葉に、息を止める。

それは……。

上気していた頬から熱が失われていくのが分かった。

「ああ、ずるい言い方だつたね」

相変わらず瞳は笑わないまま、口元だけに笑みを浮かべ、カールは手を横に振り払った。まるで、今の言葉を取り消すように。

「だけど、きみが味方につけた者たちは、いい選択だつたと思う。こうして私にたどり着けたのだからね」

冷ややかな笑みを浮かべるカールは、ウィルフレッドとは似ても似つかない。冷めた眼差しで、こちらを静観している様子は、次にどのようにリューネリアが出るのか待つているのだろう。

だけど、どうして冷静でいられようか。

その上、先程の不意をつく反撃に、じわりと湧き出てきたのは恐怖だ。やはり彼は、こちらの弱点が何か、いつそれを使えば効果を発揮するのかを知っている。

先程とはうつて変わつて、この場から逃げ出したい恐怖を、怒りで何とかすげ替え、リューネリアは背筋を伸ばした。

緊張の為か、喉が渴く。唇を湿らせて、ゆっくりと息を吐く。

まだ、話は終わつてはいない。

「……もしも」

無理に感情を押さえ込んでいるためか、声が震える。

上げた視線の先にある、底の見えない湖が恐ろしいと心底思う。

「もしも、私が四年前、アクセリナにいなかつたら貴方はこんなことをしなかつたの？」

先程、ふと思ひ浮かんだのだ。

戦地に赴いていなかつたら、このようなことにならなかつたというのだろうか。バレンティナも怪我をすることはなかつたのだろうか。

その言葉に、つとカールは目を細めた。

「きみはウィルフレッドが以前「戦争をする必要があつたのだろう

か」と言つたことに、どう返した?」

「どこから情報を得ているのか。カールは随分前のこと思い出すせる。

まだ、あれはウィルフレッドと結婚する前。お互のことを探り合つていた頃のことだ。

あの時、自分は何と言つただろう。

リューネリアが脳裏に浮かび上がってきた言葉を口ににするよりも早く、カールは口を開いた。

「それを今更言つて何になる」

冷酷とも取れる口調で告げた。

そうだ。確かにあの時、そう言つた。

実際あつたことを今更なかつたことには出来ない。それは十分承知していたはずなのに、大切な人ができるだけ、心の揺れも大きくなる。

「過去は過去だ。消すことは出来ない。ならばそこから最良の選択をするべきだと思わないかい?」

カールの言つていることはヴェルセシュカに来た当時のリューネリアの考え方と非常に似ていた。

だから分からなくていい。それが王族として、民をまとめるものとしての必要な考え方なのだろう。

だけど。

「これが貴方の言つ最良の選択だつたと言つのですか?」

違うと思つた。

今回のこととは、王太子の娯楽にしか見えない。最良の選択が、人の命を軽々しく扱うものであつていいはずがない。

「そうだね。きみは今、とても感情的になつていて。だから納得がいかないみたいだけど、きみになら見えるはずだよ。 ああ、時間切れみたいだね」

そう言つて、リューネリアの背後の扉を見やる。

あまりに衝撃的のことばかりに、言葉を失つてしまい、背後の物

音にまで気を留めていなかつた。

途端、激しい音と共に扉が開く。

「ネリー！」

呼び声と共にウィルフレッドが駆け込んでくる。

振り返つて、思わずソファから立ち上がる。それと同時に、ウィルフレッドの背後から近衛兵が数名部屋になだれ込んできた。

ウィルフレッドの様子から、ただならぬものを感じたのだろう。王太子の部屋に飛び込んでくるなど無茶をする。たとえ兄弟であつても、不審極まりない。近衛兵が腰のものに手をやつていなければまだ安心できたが。

「ネリー？」

先程のカールの発言に、ひどい顔をしていたのかもしれない。両腕をつかまれると、引き寄せられた。

カールや近衛兵の目の前で、抱き寄せられて思わず身を固くする。と、その耳にカールの感心したような声が届いた。

「噂は本当だつたんだね。……なるほど、仲は良いようだね」

恥ずかしさのあまり突き飛ばしそうになるのを何とか我慢し、ウィルフレッドの腕を宥めるように押された。

すると、ウィルフレッドがリューネリアの視線の先からカールを隠す。

「あの、ウィルフレッド様。まだお義兄さまとの話は」

背中に向かつて言つと、ウィルフレッドはそれさえも遮るよつこ、ソファにくつろいでいるカールに向けて口を開いた。

「王太子殿下。一体、どういうつもりです。私の妻に何をするつもりだったのですか？」

その態度は、弟といつよりも臣下のそれに近くて、リューネリアは先程カールが見せた寂しげな笑みを思い出した。

「どうしてそんなに他人行儀なのかな。たつた一人の弟にまでそんな態度を取られるとは」

不本意そうに言い放ち、そして諦めたように溜息を落とした。

「リューネリア殿。この場は引いてくれないかな」

そう言って近衛兵を呼ぶ。

すりと周囲を取り囲まれ、彼らに腕を取られると、丁寧ではあるが否応なしに部屋から連れ出される。

しかし部屋から出る直前、カールは告げる。

「あ、そうそう。賭けは私の負けということで」

振り返ったリューネリアにカールは笑顔を向けてきた。

「賭け？」

ウィルフレッドは訝しげに眉を顰める。だが、リューネリアは首を横に振るとウィルフレッドを促して部屋を出た。

言えるような内容ではない。今はまだ、心の整理が間に合わない。

「ネリー？」

カールの部屋から出されると、近衛兵から自由を取り戻す。

周囲はすっかり薄暗くなり、空気がひやりと頬を撫でる。

「戻りましょう。終わつたわ……。ニーナも」

ずっと控えの間で会話を聞いていたはずだ。ニーナは頷くとリューネリアに従つた。ウィルフレッドも無理に問い合わせすことばしなかつたが、こちらを気にしながらも、リューネリアと共に中央棟へと足を向けた。

執務室に行くと、そこには顔に心配という文字を貼り付けたロレンと、落ち着き払つたエリアスが待つていた。
すでに夜の帳は下り、窓の外の庭園も闇に閉ざされ、見ることは出来ない。

ソファにそれぞれが腰を下ろし、一人居心地悪そうにしているロレンが、躊躇いがちにエリアスの横に座る。

二一ナは四人分のお茶を入れると、部屋の隅に控えてしまった。事の次第を話すべきなのか、本当は迷つていた。

話は遡つて四年前の事から話さなければならなかつたし、何より、ウイルフレッドがこの度の件の首謀者であるカールを慕つてゐることを知つていたからだ。

真実を知つたウイルフレッドは、きっと傷ついてしまうだろう。彼は優しい人だから、カールがリューネリアに対して行つた事に、負い目を感じてしまうかもしれない。そのようなことなど、四年前に自分がこの国に対してしたことに比べれば些細な事なのに。

本当は四年前のことも、ずっと心に秘めたままでいようと思つていた。自らの罪は一生をかけて贖つていくつもりであつたし、いや、この国の人間に、自分が人殺しであることを知られることが、折角得た信頼を失つてしまつことが、単純に怖かつたのだ。

だが、結局はここまで事が大きくなつてしまい、彼らも巻き込んでしまつたからには何も話さないでいるわけにはいかない。それに、これも自らが招いた罪の一端なのだとすると、罰を受けないわけにはいかないことぐらいいリューネリアにも分かつていた。

だから四年前のことはすべて話した。

自らが戦争で軍を動かしていた事も、ヴェルセシュカの民を殺してしまつた過去も。

あの当時、この国に嫁ぐことになるとは考えもしていなかつたのだから、躊躇いはなかつた。だが、今は自国民となつた、ヴェルセシユカの民を傷つけてしまつたことは謝罪をしても、簡単に償えるものだとは思つていない。

彼らから冷たい視線を向けられるのが怖くて、話す間中ずっと、握りしめた両手だけをじつと見つめていた。

その告白を黙つて聞いていた三者から言葉はなかつた。

誰も何も発しない。

その沈黙は、まさに針のむしろで、息苦しさを感じてしまう。顔を伏せるように身を堅くして誰かが何かを言つのを待つた。

「四年前と言えど、妃殿下は十三ですか？」

最初に沈黙を破つたのはエリアスだつた。いつもの口調に少しだけ安心しながら、小さく頷く。

「ですが、ネリア様は剣を扱えなかつたのでは？」

ロレインもいつもと変わらない。

「はい。ですから後方支援という形で従事していました」

身を縮めて、何度も目かの謝罪を口にする。

先程からずっと黙つていたウィルフレッドが、隣で身じろぐのを視界の端に捉え、息を詰めた。

「戦争は誰が悪いと言えるものじゃない。ネリーが心を痛める必要はないんだ」

握りしめた手を上から覆つように握られ、振り仰ぐ。そこにはいつもと変わらない……いや、少し沈んだ瞳をしたウィルフレッドがいた。

「ですが……」

「それよりも、今回ることはそれが根底にあるのだろう？」

話を促され、リューネリアは躊躇いがちに頷いた。

カールから新たに聞いた話をつけ加え、最後までウィルフレッドに彼の兄が自分の命を狙つたと言つていいものかと悩んだ。

だが、アクセリナ戦のことを話した時点では、しかもウィルフレッド

ドがカールの部屋に乗り込んできた時点で、今回のこととに王太子が関わっていることに気づいていると判断した。中途半端に誤魔化すよりも、すべて話してしまった方がいいように思えた。

彼の瞳が沈んでいるのは、すべてを知らなくても何か予感しているのだろう。ウィルフレッドの顔を見ていられなくなつて、再び俯いて一息に説明した。

話し終わつても、ウィルフレッドは口を閉ざしたままだつた。暗い眼差しは、じつと絨毯に注がれ、瞬きの一つもしない。やはり、ひどく傷つけてしまつたのだ。

「ウィルフレッド様……」

なんて声をかけたらいいのか分からなかつた。だが、それでもすつかり消沈した面差になんとか笑みを浮かべ、心配をかけないようしているウィルフレッドに胸が痛んだ。どうしようもない後悔が胸に込み上げる。

もしかしたら最初からすべて、間違いだつたのかもしない。休戦の為の条約で、パルミディアの王女である自分が嫁ぐことが条件に掲示された時点で、断つておけば良かつたのかもしない。ヴェルセシュカに刃を向けていた王女など、本来この国に相応しくなどなかつたのだ。

そうすればこのようなことなど起きなかつたかもしない。ウィルフレッドを傷つけずに済んだのかもしない。バレンティナも怪我などしなくて済んだのかもしない。

奥歯を噛みしめる。と、前方から声がかかつた。

「妃殿下はご存知でしたか？」

エリアスからの突然の質問に、わずかに首を傾げる。

「何をですか？」

「本来、妃殿下との御婚約は王太子殿下がなさるはずだつたことです」

「え……」

思いがけないことに、目を見開く。

そんなこと知らない。

「ですが表向きは王太子殿下の病弱を理由にウイルフレッド殿下にその話は移行したのです。今分かりました。王太子殿下は今回の事をすでにその当時から考えていらっしゃったのでしょうか」

冷めた口調でエリアスは言い放つ。

どうやらかなり気にくわないようだ。

エリアスは主であるウイルフレッドを一見したところ見下しているように見えなくもないが、仕事はきちんと補佐し、やるべきことはやっている。しかも、見えにくくはあるが、敬愛もしている。自分の主人を貶めるような真似をされ、怒らない家臣はいようか。だが、それよりも自分の婚約する相手が王太子殿下だつたというのは初耳だ。

すぐに平常に戻ったエリアスは、顎に手を当てて首を傾げた。

「しかし御婚約の話が出て、王太子殿下が今回の事を思いついたのだとしたら……これは陛下も一枚噛んでいる可能性が高いですね」

その言葉に、リューネリアは息を止めた。

そうだ。考えられないことではない。

つまり、ヴェルセシュカにとつてリューネリアの存在はいなくてもいいほど軽いのだ。騎士たちには受け入れられたと思つていただけに、その反動は大きかった。

「エリアス！」

青ざめたリューネリアを見て、ウイルフレッドが声を荒げた。

「申し訳ございません」

強い叱責に、エリアスは軽く頭を下げるにどどまる。

エリアスの言つたことは真実だ。

そうなると、自分がこの場にいる意味はないのだ。

確かに、カールは賭けと言つた。

カールがなぜこのような賭けをしたのか、その理由はリューネリアになら見えると言つていた。だが、分からぬ。分かるのは、本気で自分の命を奪おうとし、それを見て見ぬふりをした国王もいた

のだ。

理由はどうであれ、いらないと言われた事実の方に打ちのめされる。

責めたりユーネリアの側に、それまで部屋の片隅に控えていた二ーナが近寄ってきた。床に膝をつき、何も言わずそっとユーネリアの手を取る。

彼女の言いたいことが伝わってくる。

その眼差しがもう十分でしょうと言っている。

確かに、自分に出来る限りのことをしてきたつもりだった。しかしそれは、ヴェルセシュカの王族も戦争に反対していると思つた上で、協力し合えると思つていたからだ。だが、もう。

二ーナの手をぎゅっと握り返し、一度息を深く吸い込む。そして決意を込めて顔を上げる。

「私はパルミディアに帰つた方がいいのでしょうかね」

不要とされるならここにいる意味はない。休戦の約定を、まさか自らが破る様になるとは思わなかつた。

「ネリー！」

横から慌てたように、腕をつかまれる。

「ウィルフレッド様。所詮、私たちは政略結婚です。この結婚がなにも利益を生まないのなら、私はここにいる必要はないのです」

全ての感情に蓋をして、ウィルフレッドを見た。そして視線をエリオスに向ける。

「このような事態を招いてしまい、私が帰国したとしても誰もウィルフレッド様を責めはしないでしょ。色々と手続きをしなければならないでしょから、準備だけでもしておいていただけますか？」

それに一瞬躊躇い、何かを言いたげに口を開きかけたが、結局は頷いたエリオスを見て、ユーネリアは二ーナに促されるよつ手を取られてソファから立ち上がつた。

ぐつと喉の奥に力を入れる。

でなければ今にも泣き崩れそつた。

ロレインも一緒に立ち上がった姿を田の端に捉え振り向くと、苦々しげな表情をした彼女が微かに頭を下げる。

「お部屋まで」一緒にします

「ありがと。ロレイン

「どこまでも仕事に忠実な彼女に、心から礼を言つ。

もう護衛をする必要などない。賭けは終わったのだから。

執務室から出るまで、リューネリアは振り返らなかつた。ウイル

フレッドからも呼び止められることはなかつた。

夜。

リューネリアは別室を用意してもらい、そちらへと移動した。他の侍女たちも何かを察しているのか、黙々と仕事をこなしている。

だが、二ーナにはさりげなく探りを入れているようで、時折そういう姿を見かけたが、彼女の口が誰よりも固いことをリューネリアは知っている。申し訳ないとは思いつつも、他の侍女たちへの対応を二ーナに任せ、夕食も取りらずに湯浴みだけを済ますと、早々に寝室へと引き上げた。

見慣れた部屋とは違い、どこか寒々しい。ここは日頃使われていない客室か何かなのだろう。白いシーツの敷かれた寝台に横たわると、あまりの冷たさに身を丸める。

一人になると気がゆるんでしまい、目頭が熱くなる。ぎゅっと目を開じると、ゆっくりと息を吐く。

文句は言つてはいけない。あの温もりを求めてはいけないのだと自らに言い聞かせる。だが、カーテンも閉め切り、夜の静寂がありを囲む頃になると、必死に押し込めようとしていた感情が溢れ、それに伴い涙腺がゆるむ。

布団を頭から被り、嗚咽が漏れないようにして、シーツで目を押さえた。

ぐるしくて痛くて、どうしようもない虚しさが心を穿つ。今までいつでも手の届くところにいてくれたのに、もう縋りつくことさえ出来ない。

手を放したのは、自分だ。決めたのは自分。だから、泣くのは間違っている。

政略結婚で嫁いだ先から拒絶されたのでは、帰るしかないではない

いか。間違つてはいない。

エリアスの話しからするとウィルフレッドは、本来リューネリアが嫁ぐ相手であった王太子のカールから自分を押しつけられたことになる。それなのに、これ以上は無いというぐらい大切にしてくれて、想つてくれたというのに、想いを返す時間さえ許されないとは。国の思惑に振り回させたのはリューネリアだけではない。ウィルフレッドもだ。彼こそ体のいい駒だ。

なんて、残酷なのだろう。

駒にだつて感情はあるのに。

その時、扉をノックする音がして、グッと息を詰める。

「二一ナ？」

布団から頭だけを出し、扉に向かつて問いかける。彼女なら、一言何か言つてから扉を開けそうだが、今扉の向こうは無言だ。

涙で鼻声になりながらも、リューネリアは告げた。

「ごめんなさい。一人にして……」

どうか放つておいて、と願いを込めて言つ。

だが、その願いはかなわず、すぐに小さな音を立てて扉は開いた。隣室から差し込んできた明かりに、慌ててリューネリアは布団に潜りこむ。泣き顔など見られるわけにはいかない。

絨毯の上を歩く音がかすかに聞こえ、そつと布団の上に手を載せられた重みを身体に感じる。

「ネリー……」

その声に、自然と身体が震える。

どうして。

どうしてここに来るのだろう。どうして二一ナは彼を通したのだ

る。

ぐるぐると様々な思いがぶつかりあって混乱し、咄嗟に返事ができなかつた。

「パルミディアに帰るつもりなのか？」

布団の上から感じる圧力は、優しく撫でられているようだつた。

問にも責めているわけでもなく、単に確認しているような軽さを感じて、ウイルフレッドにはもう自分は必要ではなくなったのだと思った。

「……帰ります」

ぐぐもつた声で応えると、布団を撫でる手が止まる。

「そうか」

静かな、諦観のこもつた声が耳に届き、途端、先程まで止まっていた涙腺がゆるんだ。

ずっと考えないようこしていたのこ、この胸に溢れる気持ちは今まで止まっていたものとは逆のものだ。

息を殺して涙をこらえようとした。

だが、かすかに息を吐いた次の瞬間、ばさりと布団をまくり上げられ、冷たい空気が顔に触れたと思った時には、攫つよつてウイルフレッドに抱きしめられていて、気づくとその胸に顔を埋めていた。

「泣くくらいなら帰ると言つた」

先程まで縋りつくことなど一度と出来ないと思っていた温かさを頬に感じ、いけないと思いながらも自らの腕をその背中に回す。離れたくないときゅっと力を込めるが、それ以上の力でもつて抱きしめられる。

「私はいらな」と……

「誰がいらないと言つても、俺には必要だ」

髪をやさしく梳かれ、背中をなだめるように撫でられる。

ずっとこの国に必要であるとした。必死に努力をして、必要であると思つこもつとした。だが、結局は捨て駒同然の扱いを受け、失意に沈んでいたというのに、何も知らされずにいた、やはり駒同然の扱いを受けていた人だけが必要だと言つてくれる。

泣いて熱を持った瞳で見上げると、ウイルフレッドの湖面のよつた瞳と視線が合わさる。

悔しかつた。今この時にそのよつたことを言わわれては、折角決心したことが揺らいでしまつ。

「優しく、しないで」

悲鳴を上げ続けている心を自ら抉り、ウィルフレッドの胸を押す。一度縋りついておいて、矛盾しているとは思つ。

でも駄目なのだ。縋つては駄目。

だが、背中に回された腕にわずかに力を入れられただけで、リューネリアはすぐに元いた場所に戻された。

お願い、と小さく呟く。

拒絶の意味を込めて首を横に振ると、それが気に食わないのか、ウィルフレッドはなおも背中を抱く腕に力を込める。

「ネリー」

「 もう」

まるで心臓がどうにかなってしまったのだろうかと懸つほど、痛かつた。

リューネリアの言葉に、わずかにウィルフレッドの腕の力が弱まる。

「何をすればいいのか思いつかない。どんなに頑張つても何が出来るのか分からぬ。もう 疲れたの……」

言葉を吐き出しながら、視線を逸らす。

それは逃げる為の口実だ。

本当は、たとえ死ぬことになろうとも、この国にいてもいいなら、ウィルフレッドの側にいたい。どんなことにつづて立ち向かっていく。だけど。

「ネリー、聞いてくれ。あれから考えた」

耳元で聞こえるウィルフレッドの低い声音に、身体も心も逃げようとする。これ以上彼の側にいては離れられなくなる。

胸を押す手に力を込めたり、身体を捩つたりしてみたが、身体に回された腕はびくともせず、むしろ拘束を強める。無駄なあがきだと思いつつも、それでもじたばたしていると、耳に寄せられた唇が告げた台詞に身体が固まった。

「俺は、王族としての権利を放棄しようと思つ

予想外のことを告げられ、目を見張つてウィルフレッドを見上げた。どうして、そこまでのことを。

「本当のことを言つと、どうして兄上がネリーの命を狙つたのか…賭けだと軽々しく口にしたのか、俺には分からぬ。昔から優しかった兄上が、個人的な理由で戦争の時のことを持ち出してきて、このような非道な真似をするとは、どうしても俺には信じられないんだ」

揺らぐ湖面のような瞳の中に葛藤を見つけて、リュー・ネリアは思わず目を逸らした。

彼に無用な痛みを与えたのは自分だ。そのような顔をさせてしまつたことが申し訳なくて、直視できなかつた。

俯き、目を伏せたが、頬を挟まれると、無理に顔を向き合われる。まだ話は終わつていないと、こちらの心の中を見とおすよつて。胸が塞がるように苦しかつたが、彼が聞けと言つなら聞かなければにはいかない。

伏せていた目を上げると、ウィルフレッドは続けた。

「俺の中には未だ兄上を信用している部分がある。兄上を側で支えていきたいという思いもある。だが、ネリーが側にいることが許されないと、ううのであれば、俺は

「額をこつりと合わせると、間近に目を閉じたウィルフレッドが見える。それはとても辛そうに見えて、彼に何を捨てさせよつとしているのかを思い知る。

「……はじめからこつしておけば良かつたんだ。俺にはこの国よりもネリーが大切だ。それは俺の立場であれば抱いてはならない感情だと言うことは分かつてゐる。だが、ネリーをパルミディアに帰すことなど出来ない。何をおいてもできないんだ。だとしたら、俺に

はここにいる意味はない。だからネリー。どうか、帰るとは言わな
いくれ。ずっと俺の側にいてくれ」

頬に添えられた手がするりと背中にまわり抱きしめられ、リュー
ネリアは目を瞬き、こぼれ落ちそうになる滴を堪える。

「ウィルフレッドはなおも続ける。

「明日にでも陛下に願い出よう。幸いにも、ネリーとの婚姻の折に
賜つた領地がある。そこで静かに暮らそう」

それは、淡い夢のような話だった。

現実問題として、何も解決はしていない。

だけど、悪くないかもしない。離縁するのではないのなら、休
戦の約定を破ることにもならない。それで彼の側にいられるなら、
何もかも考えずに側にいていいなら。いつか思つた願いが叶うかも
しない。

「ウィルフレッド様……」

彼はいつも、リュー・ネリアにとつて欲しいものをくれる。自分の
犠牲を厭わずに守ろうとしてくれる。

彼を守りたいと思う。せめて、彼が生まれた国を守りたいと思つ
ていたが、今はそんな大それたことなど言えるような身ではない。
だから、この人の心だけでも守りたいと思った。望まれているの
なら、この心」とすべてを差し出してもいい。

こぼれ落ちる涙と共に、胸の中の闇が溶け出ていくようだった。
リュー・ネリアはそつとウィルフレッドから身を離すと、決意を込
めて見上げる。

「はい。ずっとあなたの側に……」

手を伸ばし、ウィルフレッドの頬にそつと触れた。
そして告げる。湖のような瞳をひたりと見つめて。
「私のすべてをあなたに。あなたの望むままに」
すべてが上手いくとは思わない。

でも、いつか時間をかければ、もつといい解決方法が見つかるの
かもしれない。だけど、今は。

そつと頬を撫でられ、顎を持ち上げられる。リュー・ネリアはその手の持ち主を見つめる。

「ネリー……」

「 ウィルフレッドに名前を呼ばれるのは好きだった。その声が心地いい。そう言えば、いつから照れなくなつたのだろう、と思いながら瞼を閉じた。

優しく唇を啄ばまる。

「ネリー、いつか言つていたお願いを聞いてくれるか？」

一度、口を開けてからゆっくりと頷く。笑みを浮かべたウィルフレッドの手に頬をすり寄せる。

「名前を呼んでくれ」

何を言われたのか分からず、田で問う。最初から名前で呼ばせてもらつていたはずなのに、と思つているとウィルフレッドは苦笑した。

「 様を付けずに…… 様をつけられると、距離を取られているみたいで嫌なんだ」

今更だけど、と付け加えられて、リュー・ネリアは思い出した。リュー・ネリアの愛称を最初に「コーデリア」が呼んだ為に、ウィルフレッドが拗ねてしまったことがあった。その為、彼は仕事を放り出し、宥めるのが大変だったのだが、今では彼だけがリュー・ネリアのことをネリーと呼ぶ。それは誰よりも甘く、心に響く。

「 ウィルフレッド」

名前を呼び、自ら身を近づける。

唇を軽く合わせると、後頭部を支えられ、次第にお互いの息さえ欲するよつ深く深く口づける。吐く息は熱く、意識を混濁させる。求めているのか、求められているのか。

ウィルフレッドの手が、身体の線を夜着の上からたどつていいく。寝台に仰向けにされ、首筋や鎖骨に、柔らかく熱いものが幾度も押しつけられる。

肌蹴た夜着から肩はむき出しになり、ウィルフレッドはそこにも

口づけを落とす。

「ウイールフレッシュ……」

名を呼べば、唇を求められる。手を伸ばせば、手を握ってくれる。息が上がってきた時、いつかされたように心臓の上に、口づけが落とされた。

軽い痛みと共に鮮やかさを取り戻した赤い痣に、リュー・ネリアは頬を赤くする。

その痣に手を当てたウイールフレッシュは告げる。

「この痣は決して消さない。もちろん俺以外に付けさせることも許さない」

ゆるぎのない強い眼差しに、息をのみ、ビームでも強い独占欲に心が震える。必要だと、求められていると思い知る。だが、浮かんでくるのは嬉しさだ。

手を伸ばして返事の代わりに再び口づけようとした時、あり得ない勢いで扉が叩かれた。

思わず一人とも見つめ合ひて固まる。

「殿下！ 大変です！ 出てきて下さい！ 殿下！」

それはエリアスの声だった。

叫びながらもなおも扉を破らんばかりに叩いている。

思いがけない邪魔に、止まっていた時はウイールフレッシュによって破られた。眉根を寄せ、深々と息を吐き出す。そして、リュー・ネリアの肌蹴た夜着を直すと、扉に向かつて告げた。

「何事だ！」

「いいから出てきて下さい！ 階下がいらっしゃいます！」

陛下、の言葉にリュー・ネリアは寝台から身を起こした。

どうやらエリアスは先触れで来たらしく。

しかし、どうしたことだらう。用があるなら国王はウイールフレッシュを呼べばいいだけなのに、わざわざ北棟から東棟まで自ら足を運ぶなど、どういう魂胆なのか。

「ネリーはここにいる。大丈夫だ」

そう言つて頬に口づけを落とす。

「私も一緒に緒します」

「いいと言つても無駄なんだろうな。……わかつた。ニーナに支度を手伝つてもらつて、間に合えば来てくれ」

「はい」

ウイルフレッドを見送ると、入れ違いにドレスや化粧道具一式を持つて侍女たちが入つてくる。ヒリアスの騒ぎに、急遽用意したのだろう。

「ニーナは水を張つた盥を持ってやつてきた。

どうやら泣いていた事はニーナには分かつていたらしい。素直に顔を洗うと、侍女たちに寄つてたかつて身支度を整えられた。彼女たちの腕前の確かさ日頃から知つていたが、急いでもその腕は落ちない。むしろ磨きがかかると言つた方がいい。

そうして、リュー・ネリアの支度が整つたのは王がやつてきて間もなくのことだった。

5.1・君子豹変（承知していた）（前書き）

ウイルフレッド視点です。

51・君子豹変（承知していた）

「一体、何の用なんだ？」

王と向かい合つてソファに腰を下ろしたウイルフレッドは、不機嫌も顯わに、本来なら取るべき礼も無視して冷ややかな視線を送つた。

王からしてみれば、足を組み、斜に構えて対面するその態度は、反抗期の少年そのものなのだが、まさかリューネリアとの時間を邪魔されたことに対する逆恨みも混じつているとは思ひ至らないのだろう。ウイルフレッドの態度を鼻であしらつた。

現在、部屋の中には三人しかいない。

王には通常なら付かず離れず周囲を固めている近衛兵がいるが、どうやら部屋の外にでも待機させられているのだろう。

残る一人はと言うと、侍女たち全員がリューネリアの支度のため寝室に行つてしまつた為、エリアスが先程から部屋の隅で四苦八苦しながらお茶を入れている。

ソファの中央にウイルフレッド同様ふんぞり返つた王は、息子の態度などお構いなしに口を開いた。

「何でおまえたちは自分たちの部屋にいないんだ？」

もしかしたら、一度は私室の方に連絡が来たのかもしれない。だが、このような時間に訪ねてくること自体非常識だ。

そもそも、そのような質問に答える氣にもならない。原因を作つたのは一体誰なのか。

ふいっと視線を逸らし、口を閉ざす。

だが国王は物珍しそうに周囲を見渡していたが、一向に口を開こうとしないウイルフレッドに何を思つたのか人の悪い笑みを浮かべた。

「喧嘩でもしたのか？」

どこまでも嬉々としている父親に、白い皿を向ける。

本当に誰のせいだと思っているのか。カールと共に謀しておかしな真似をした為に、リューネリアがどれほど傷ついたと思っているのか。追い詰め、パルミーティアに帰ることまで彼女に考えさせたことを彼らは気づいているのだろうか。

「ほれ落ちそうになる溜息をからうじて飲み込み、素っ気なく言い放つた。そうしないと、恨み事が口から出てしまつた。」「あなたには関係ないだろ?」

果たしてどのような反応が返つてくるものかと、耳だけで様子を窺うと、思ったよりも真剣な声が返ってきた。

「いや、ある」

声の真剣さに思わず顔を向けると、態度は相変わらずだった。ソファの背もたれに両腕を乗せ、肩でも凝つているのか首を鳴らしている。

その態度に思わずムッとして、再度否定する。

「ない」

「ある」

「ない」

「……本当にあるんだが」

何度もかの問答の後、漸くソファの背もたれから両腕を下ろす。そこには王どころよりも、父親としての顔しかなく、眉をひそめる。

「だったら、どう関係あるのか言つてくれ」

よく考えれば、このような時間に来ること自体、異常なのだ。警戒するに越したことはないだろ?。

しかし王は面白くなさげに一瞥する。

「本当に喧嘩じゃないのか?」

「違う」

「では、愛想をつかされたのか?」

「違うと言つてるだろ?」

あまりのしつこさに、いい加減腹が立つてつい声を荒げると、王はふむと頷いた。

「で、義娘殿はどこに？」

初めから予測がついていたのか、リューネリアがいるだろつ寝室に目を向け、早く出て来ないかとそわそわしている父親を前に、ウイルフレッドは今度こそ深々と溜息をついた。

結局、最初の質問は見事かわされてしまった。

本当に何の用があつて、このような時間に訪ねてきたのか。

目の前に座る父親は、少なくとも機嫌は悪そうに見えない。同じ王宮内で暮らしているとはいえ、親子といえど滅多に会うことはないので、単純にリューネリアに会えることを心待ちにしているように見える。

思い返せば、初めて王とリューネリアが対面した時、この父親はそれはもう一目でリューネリアを気にいつたらしく、ウイルフレッドとの結婚を自分以上に喜んでいたように思える。それなのに、本当にこの父親は王太子のしたことを黙認していたのだろうか。エリオスはああ言つたが、気づいていなかつたといつことはないのだろうか。

いや、それはないな、と自らの甘い考えを否定し、視線を目の前の王に向ける。

「まだ支度に時間がかかる。それよりも

「カールの件なら承知していたぞ」

聞く前に返ってきた言葉に、一瞬、何を言われたのか分からなかつた。

数度頭の中で反芻して、漸く理解すると同時に、ウイルフレッドはソファから立ち上がつていた。そして平然としている王を見下ろす。

「何だ？言いたいことがあるならはつきり言え」

促されたものの、頭に血が上り、瞬間に言葉に詰まる。

言いたいことなど山ほどある。

だが、第一に聞くべきことは決まっていた。

「なぜ彼女を狙つた？」

田の前にいるのは父親ではない。今はもう王の顔をした男が、余裕を湛えた笑みを唇の端に浮かべている。

「危険に晒すことは了承したが、命まで取ることは認めていない。それにおまえが守らないようなら不要な存在だ。さっさと切り捨てるべきだろ？」「ひう

「もしも、ということだつてあるだろ？！それに彼女を精神的に追いつめて何がしたかっただんだ！」

「彼女も王族の生まれだ。これぐらいのことでは挫けるほど軟弱ではないだろ？！それにおまえがついていたんだろ？！支えてやれば問題ない」

「では、何のために兄上は 王太子殿下はこんなことをした！」怒りに任せて問い続けたが、その質問に関してはふと王は口と襟を瞑りだ。

「それは義娘が来てから的话しだ。いいから、座れ」

問うこと全てに淀むことなく答えられ、ウィルフレッドは怒りに手を握りしめる。

まだ何か言つてやらなければ腹の虫が治まらない。だが口を開こうとした時、寝室の扉が開いた。

「遅くなりまして申し訳ございません、陛下」

髪を結い上げ、落ち着いた色のドレスに身を包んだリューネリアは、もう憂いの色は見えなかつた。しかし、まだどこか緊張した面持ちをしている。

スカートをつまんで軽く礼を取ると、王は嬉しそうにリューネリアに近づいた。

「いやいや、気にしなくていい。こんな時間に来てしまつたこちらが悪い。それよりも、少し痩せたのではないか？」

ウィルフレッドと対峙していた時とはまるで別人のようだ。目尻を下げる父親に、ウィルフレッドはリューネリアに近づこうとしている。

る父親から離すべく彼女を引き寄せる。

リュー・ネリアに怪訝な眼差しを向けられたが、彼女はすぐに王を振り返り、笑みを浮かべた。

「恐れ入ります。ですがどにも異常はございませんので心配にはおよびません」

ふわりと笑んだリュー・ネリアは、ウィルフレッドの父親に対する親しみを見せる。

そのような気づかいをさせているのに、この父親が彼女にした仕打ちはあまりにも酷薄すぎるものではないだろうか。

ウィルフレッドの隣に腰を下ろしたリュー・ネリアを見て、王は満足そうに笑んでいる。

「それで、話があつて来たんじゃないのか？」

王もソファに腰を下ろしたのを見て、ウィルフレッドは当初の質問を再度した。

お茶を入れるのに手間取つていたエリアスに代わり、侍女たちが手際よくテーブルの上にカップを置いて部屋の隅に控えるのを見て、王が彼女たちを一瞥すると、軽く手を拝つた。彼女たちは心得たようの一礼すると部屋から出て行く。

部屋に残つたのは、王とウィルフレッド、リュー・ネリアとエリアスだけだった。

「人払いまでして何なんだ……」

ウィルフレッドもさすがに居心地が悪かつた。それほど重要な話なのだろうか。

王はリュー・ネリアにまっすぐに向き合い、姿勢を正した。それだけで、隣のリュー・ネリアから緊張が伝わってくる。

じわりと滲み出す張り詰めた空気を破つたのは王だった。

「この度のこと、すまなかつた」

そう言って、深々と頭を下げた。

ウィルフレッドは驚きのあまり、息をするのも忘れて父親を見入つた。リュー・ネリアも身動き一つしない。どうやら驚いているらし

く、瞠目している。

頭を下げたまま、さらに王は続けた。

「どうしてもとカールに頼まれてな。だが、必要な事だと思ったから私も認めた」

「必要な、こと、とは？」

我に返つたリューネリアの声は震えていた。無理もない。痩せ細るほど食事も出来ず、どれほど怖い思いをしたことだろう。なかなか寝付けなかったこともウイルフレッドは知っている。

ゆっくりと身を起こした王は、真剣な顔をしてから口を開いた。

52・一陽來復（やつてみるか）（前書き）

カール視点 リューネリア視点です。

時は夕刻に遡る。

リューネリア
義妹の訪問からしばらく経つてのこと。

残光に暗く沈む室内に、侍女が来客を告げる。だが返事も返す間もなく、客は遠慮なく部屋に入つて来た。

「身体の調子はどうだ？」

珍しく息子の部屋を訪ねてきた王を、ソファに力なく座つていたカールはゆっくりと見上げた。

「ええ、おかげさまで」

最近、身体の調子が良かつたのは単に賭けのことで気が張つていつからだ。だが、先程すべては終わってしまった。いつもの単調な生活に戻るだけで、明日辺りから体調を崩すかもしれない。いや、すでに身体はだるくなりつつある。

報告をすべく、王を見上げる。わずかに口元に笑みが浮かぶのは、こちらの望む通りに決着がついたからだ。

「賭けは終わりました」

「そうか。おまえの負けか？」

「ええ。当然でしょう」

今回の事は、王も無論、知つてのことだ。

パルミティアと休戦が決まり、その条件に彼女との結婚が決まつた時に今回の事を思いついたのだ。

当初、リューネリアは自分に嫁ぐことになつており、休戦の約定にもそれが明記されてあつた。

戦争で国自体が弱つているとはい、このまま休戦してもヴェルセシュカの議会は未だ力を持つたままだ。このままでは戦争が再開とこう事も有り得ない話ではなく、ならばざのようにして国力を衰

えさすことなく、彼らの力を削ぐことが出来るのか、取りこむこと
が出来るのかを考えた。

当時、カールが議会に対して持つていた切り札はいくつかあつた。
アクセリナ戦での評価もその内の一つだつた。

だがもう一つ。リューネリアが戦争で密かに指揮を取つていた事
実だ。そのこと自体は決して大きなことではないかも知れないが、
議会が知らないのであれば彼女の存在価値を低く見ている彼らは痛
い目を見ることになる。

それが議会への抑制になるならば、リューネリアを利用しない手
はないと思った。

しかし、そうなると妻となる娘とこの賭けが出来るはずもない。
だから王に無理を言ってパルミティアの王女を弟に嫁がせたのだ。
懸念すべきことはまだあつた。議会が直接彼女の命を狙うことも
有り得る。そのような愚かな者たちを牽制するためにも、自らが動
くことを通達し、彼女自身の保全を計り、なお且つ手心も加えたつ
もりだ。

怪我人が出たのは予定外だつたが、あの事故のおかげで議会が完
全に傍観を決めたと言つてもいい。

「おまえはあの娘をどう見た?」

王はおもしろげに問う。

そこに含まれる意味に苦笑し、答える。父親には自分の根底にあ
る考え方までお見通しだつたようだ。

「度胸と责任感、あれは普通の貴族の娘にはないものを持っている。
生まれながらの王族でしよう。人の上に立つべき資質を備えている
と思います。しかも運も味方に付けている」

「……本来ならおまえに嫁ぐはずだつたのを、変えたのはおまえだ
惜しくなつたかと問われ、それには首を横に振つた。

「私では荷が重い。それに……そんなことを思うとウイルフレッド
に殺されかねない」

天寿は全うしたいんですけど付け加える。

それには国王も笑う。そして最後に問う。

「では、いいのか？」

「ええ。お任せします」

これが自分の我儘のせいで義妹になつた彼女への謝罪と、余計な御世話かもしれないがちょっとしたお節介だ。

そう言って、ソファに身を沈めた。やつと重責から解き放たれる。これで良かつたのだと思った。

国王の真剣な顔に、告げられる言葉を待つ。

「義娘殿の気質を見る為に。かつての敵国パルミティアから嫁いできて、ヴェルセシュカの王族としてどれほどこの国を考えてくれているのか。そして夫であるこいつをどれだけ支えることが出来るのか。また、こいつがどれほど義娘殿を大切にしているのか」

その言葉に、目を閉じた。

つまり、試したのか。

内容ははつきり言って、酷いものだ。人の心をいたぶる様な、まして実際に怪我人までを出している。だが、そこまでして試さなければならなかつた理由を漠然と思い当たる。

カールの言つていた、見える、の意味。

頭が働きだす。

リューネリアは深々と息を吐き出し、そして 龍の両端をかすかに持ち上げた。

「それで、わたくしは合格でしょうか？」

もう、答えなど聞かなくても分かつている。

自分の考えが正しいなら、いや、カールが言つたように、彼にたどり着いた時点で勝ちだつたのだ。

それと同じことを国王は口にする。

「ああ。カールにまでたどり着く可能性は半々だと思っていたからな」

国王は微かに笑つた。

そして、今度は視線をウイルフレッドに向ける。

「カールは、王太子の地位をおまえに譲るそつだ」

「は？」

「いづれ、国王になるお前を支えるのに必要な資質を義姫殿に認め
たようだ」

つまり今までのことは、国王やカールに、リューネリアが王妃に
なる素地があるかを試されていたのだ。

しかもカールが賭けていた相手は、リューネリアではない。議会
だ。

すべてが繋がると、カールの賭けがいかに綱渡りだったのかが窺
い知れる。

自らが安全圏にいると思っていたが、一步間違えたら つまり
リューネリアが賭けに負け、ましてカール自身の身にも何かあれば、
この国は本当にどうなつていたのか。

確かに賭け自体、内容は酷いもので理解しがたい扱いもされたと
思う。人のことをなんど思つてているのかという怒りもある。

だが、彼らも結局はこの国を思つてしたことなのだ。

国を存続させ、民を守ることが上に立つ者の義務だ。もつと、他
に方法があつたのではないかと思わなくはない。しかし、それはき
つと時間をかけねば、の話しだ。カールが早く王太子の位をウイル
フレッドに渡したかつたのならば、リューネリアの命を馬鹿な考え
を持つ議会から守るためにだつたと考えるならば、この方法が確かに
手つ取り早かつたのかもしれない。

そう思つと、仕方がないと思うしかないではないか。

それに、国王から伝えられたカールからの謝罪の言葉と、お節介
だと言われた贈り物。それはリューネリアが最初に望んだものだ。
絶対的な地位と権力。

このような形を望んでいたわけではないが、この地で生きる足場
が約束されたようなものだ。

だが、ウイルフレッドは怒りを顕わに国王に食い下がる。

「何、寝言を言つてゐるんだ。今まで散々ネリーの命を脅かすようなことをしておいて王妃になれといふのか？ それに俺が国王？ 王太子にさえなれるわけないだろ？ 議会が反対する

しかし、国王はもう決めたばかりに話を続けた。

「いや、明日の議会で承認を取る。そうすれば、もつ義娘殿に手出しあれどん！」

「むしろ、もつと悪質になるだろ？……」

「お前はもう少し頭を使え。カールと渡り合ひつまどいの娘だ。それに、近々ゴードヴェルクから使者がくることになっている」

初耳のことにつららりとエリアスに視線を送ると、微かに頷いた。ゴードヴェルクはヴェルセシュカの隣国だ。パルミディアとヴェルセシュカの休戦には手を貸してくれたが、もともと好戦的な国家だ。

そのゴードヴェルクからの使者とは、あまり嬉しい報せではない。今までは王太子であるカールがいるからこそ牽制できていたのだが、最近ますます体調を崩している王太子に、ゴードヴェルクが何を思ったのか。

つまり、議会にとつてカールが王太子の地位から引くなれば、代わりにゴードヴェルクを牽制できる者が必要になる。その代わりがリューネリアだ。ならば、リューネリアをどうにかしようと馬鹿な考えを起こす者は、逆にヴェルセシュカに反逆したと思われることになる。つまり、ウイルフレッドが王太子の地位につければ、リューネリアの立場も盤石になるということ。

どこまでも彼らの手の上でいいように転がされていると知りつつも、望まれるように動いてしまう自分がいる。

リューネリアは顔を上げた。

「わかりました。ウイルフレッド様と私が、その使者にお会いします」

「ハリと笑つて告げた。

まだ、この国でできることがあるならば、出来る事をするだけだ。
確かに、彼らの思い通りになるのは癪だと思つ気持ちはある。だが、ならば期待以上のことをして見返してやる。やつはいづれいつが許されるだらう。

「よし。では任せよう」

パンツと王は自分の足を叩くと、ソファから立ち上がった。

「もうこうわけで、近づいておまえは王太子だ。覚悟してくんなな」

話が勝手に進んでいくことに呆然としているウィルフレッドを尻

目で、王は反論する間も口えず、笑いながら扉に向かう。

「おい……」

我に返ったウィルフレッドが父親に向かつて伸ばした手は、扉が閉ざされることによって止まる。

確かに、王の突然の発言に驚いているのはウィルフレッドだけだ。エリ亞スを見れば、彼も途中から予想がついていたのかいや、もしかしたらリューネリアがパルミディアに帰るという発言をした時点で、あの時、躊躇を見せたエリ亞スはある程度の予測がついていたのかもしれない。

エリ亞スは気味が悪いほどにいやかに笑つてゐる。

「とりあえず、おめでとうござります」

本気なのか、嫌味なのか。

エリ亞スの告げる言葉に、ウィルフレッドは嫌そうに顔を顰めた。リューネリアはウィルフレッドの側に寄ると、見上げてから言つ。「ウィルフレッド様。静かに暮らすのは、もう少し先……もつと歳を取つてからになりそうですね」

王宮から離れて領地で暮らすのも悪くなかった。少しだけ残念だという気持ちもないわけではない。

だが、心の中は思いの外すつきりしていた。今まで散々役に立たないと思つられてきたが、これからやらなければならぬことが待ち受けていると思つと、気が引き締まる。

だが、隣でウィルフレッドは逆に沈んだ顔で首を横に振る。

「俺には無理だろ？」「ひ

もともと執務が好きではない彼のことだ。

それなりの教育もほどほどに受けているだろ？、「、」、
ドはカールが王になると思つていた節がある。それに、王位に何の
魅力も感じていなかつたことはリューネリアにも手に取るように分
かっていた。

それなのに今更王太子になれと言われて、どうしていいのか戸惑
つてしているのだろう。

エリアスもそれは十分に分かつてはいるのだろう。肩を竦めている。
ウィルフレッドとは彼の方が付き合いは長いのだ。だが彼のその様
子を見る限り、決して無理だとは思えない。

「大丈夫ですよ、殿下。妃殿下がいらっしゃいますから」「

エリアスの言葉に、リューネリアもウィルフレッドの腕にそつと
手を乗せ頷く。

「はい。私も一緒に勉強しますから、お手伝いさせて下さる」「

出来ることを頑張つてみましょうと告げる。

その言葉に、ウィルフレッドは深々と息を吐く。

そう 今はまだ、リューネリアにも先のことは分からぬ。
出会つた当初、彼が王位につく可能性があることは確かに聞いて
いた。だが、あの頃はそれを思えば不安の方がはるかに勝つていた。
しかしウィルフレッドは少なくとも、カールほど切り捨てるこ
も必要だという冷酷さを持つていない。それが人の上に立つ者にと
つて適しているのかどうかなど分からぬ。だけど 。

「 そうだな。まずは、出来る事これからやってみるか」「

最後の言葉は、まるでリューネリアの心情そのままにウィルフレ
ッドは呟いた。

噴水の吹き上げる水飛沫に、陽光が煌めき青い空はどこまでも澄み渡っている。

どこからともなく聞こえる鳥の声に耳を傾けながら、テーブルに置かれたカップに手を伸ばす。

今日はあの日のやり直しだ。とは言つても、同じ庭園内でも場所は先日とは違う休憩場所だ。

ここは噴水から幾分か離れた場所に作られた東屋で、夏の乾いた風が吹き抜けていくので日差しさえなければ涼しく心地良い。テーブルの端に先程摘まれたばかりの薔薇を置き、円形のテーブルを囲むように置かれた椅子に腰かけ、隣にはウィルフレッドが座っている。

今日は刺客が現れることもなく、穏やかな時間が流れていく。たが多分、もう少ししたらこの平穏な時間も破られてしまうのだろう。議会は昼前には終わると聞く。きっと王宮中の者たちがウィルフレッドを探しにやってくるに違いない。

「今日は逃げてこられたのですね」

朝食時、突然ウィルフレッドに庭園に誘われた。

「どうか、問答無用に決定され、支度が出来次第連れ出されたと言つてもいい。」

お茶を飲んでいたウィルフレッドは穏やかに笑う。

「しばらくは落ち着けないだらう。じつして庭園に散歩に出ることも難しくなるかもしねないし……」

「はい。ありがとうございます」

笑顔で答えると、ふとウィルフレッドはその穏やかな笑みを消し、わずかに躊躇つたのち声を潜める。

「ネリーには無理をさせたか？」

それが何を指しているのか理解した途端、顔が熱くなる。

「……え、大丈夫です」

確かに、違和感はある。でも歩けないほどでもないし、むしろ何かをしていないと昨夜のことを思い出してしまって恥ずかしくなる。赤くなっているだらう頬に片手をあて、一口お茶を飲む。

「そう言えば、以前ネリーが言っていたお願いといつのは何だ?」

「あ、それは」

言われて、あの日、この庭園で言つたことを思い出す。

あの時ならば、きっと叶うはずだつた願いだ。だが、今では少し内容が変わってしまった。それを口にするのは、また躊躇われるような気がして困つてしまつ。

「言いにくいこと?」

「いえ、あの……」

どう言つべきか悩む。

カップを取りあえず皿に戻し、周囲にいる侍女たちを見渡す。

聞いていない素振りで聞いているのが彼女たちだ。先程、ウィルフレッドがリューネリアの身体を気づかつた言葉も、彼女たちは理解したはずだ。朝の着替えを手伝うのも彼女たちなのだから。

今はドレスで隠れているが、実はその下にはウィルフレッドが付けた痕が身体中に残っている。彼女たちの眼差しが、今朝の着替えの時ほどいたたまれなかつたことはない。

しかし、もう彼女たちには知られているのなら、逆に開き直つてしまつのもいいのかも知れない。

「……あなたと家族を持ちたいなど」

口にするのは恥ずかしかつたが、一度口にしたら引っ込みはつかない。

あの時は、まだ単に第一王子の妃で、後継ぎなど考へることなどなく単に、家族、だつたのだ。だが、これから王太子となるウィルフレッドとその妃であるリューネリアにはもう一つ仕事が課せられる。それがリューネリアにとつて最も重要な仕事になるはずだ。

「ウイルフレッドはそのお願いに、一瞬目を瞬いたが、すぐに先ほどよりもより一層深い穏やかな笑みを浮かべると、リューネリアの手を握った。

「それは、そんなに遠くないうちに叶えよ！」
それにはリューネリアも頷く。

それにはリュー・ネリアも頷く。

庭園の外が賑やかになりつつある。どうやら議会は予定よりも早く終わつたらしい。これで穏やかな時間も終了となる。

ウイルフレッドと顔を見合わせると小さく笑い合つ。

これから忙しくなるが、きっとこの人が側にいればどんな困難なことにだって立ち向かっていくことが出来るだろう。もちろん、どれだけのことが出来るのか分からぬ。だが、これからは周囲に振り回されるのではなく、自らの足でこの地を踏みしめ、自らの手で、きっと遠くない未来、幸せを手に入れることが出来る。

そう思いながら、ウィルフレッドの手を握り返した。

53・未来永劫（後書き）

皆さま、最後までお付き合いいただき本当にありがとうございました。少しでも楽しんでいただけましたでしょうか。

これにて本編は終了です。

約5ヶ月間の連載でしたが、完結までたどり着くことができたのも、みなさまの優しい励ましがあってのことです。本当にありがとうございました。

番外編にて数話ほど彼らの今後などを投稿する予定ですので、もし宜しかつたらお付き合いいただけると幸いです。

では、ここまで読んで下さったすべての皆さまに感謝を！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2401p/>

この結婚は政治的策略

2011年11月13日00時20分発行